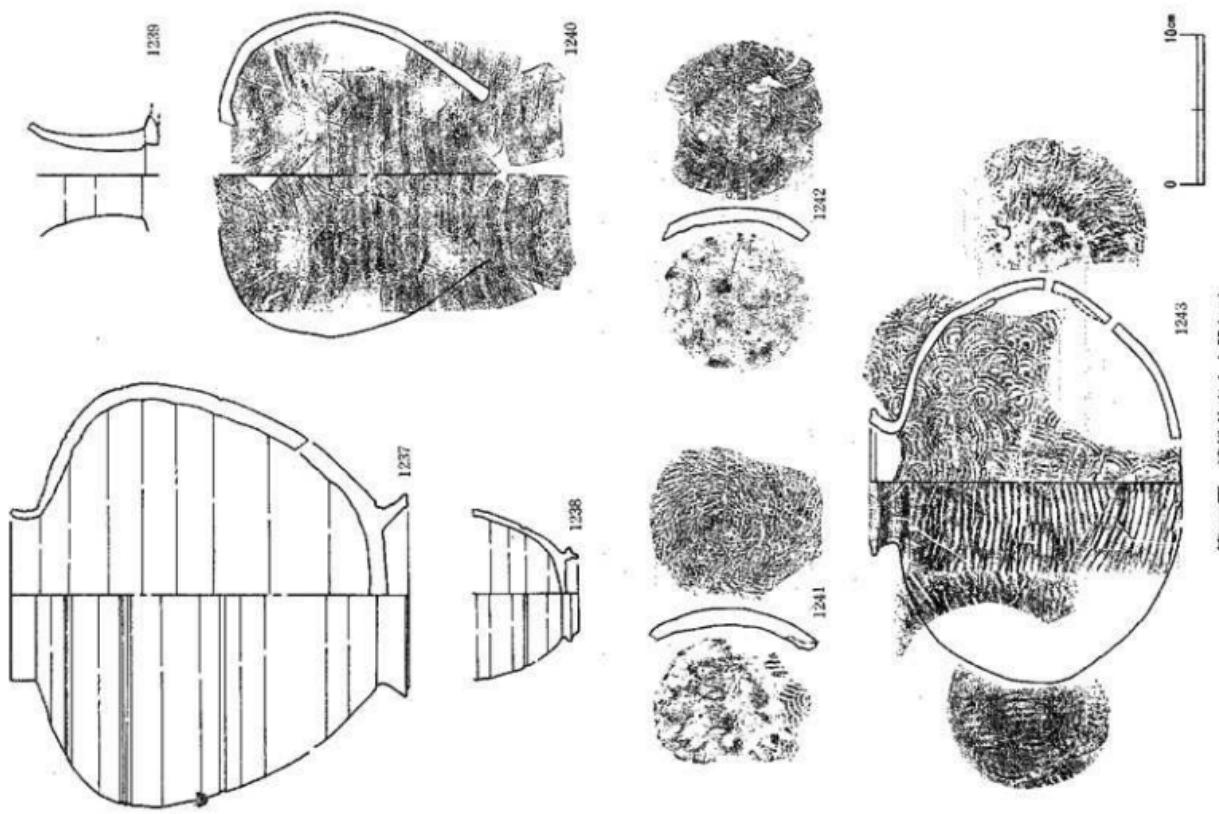
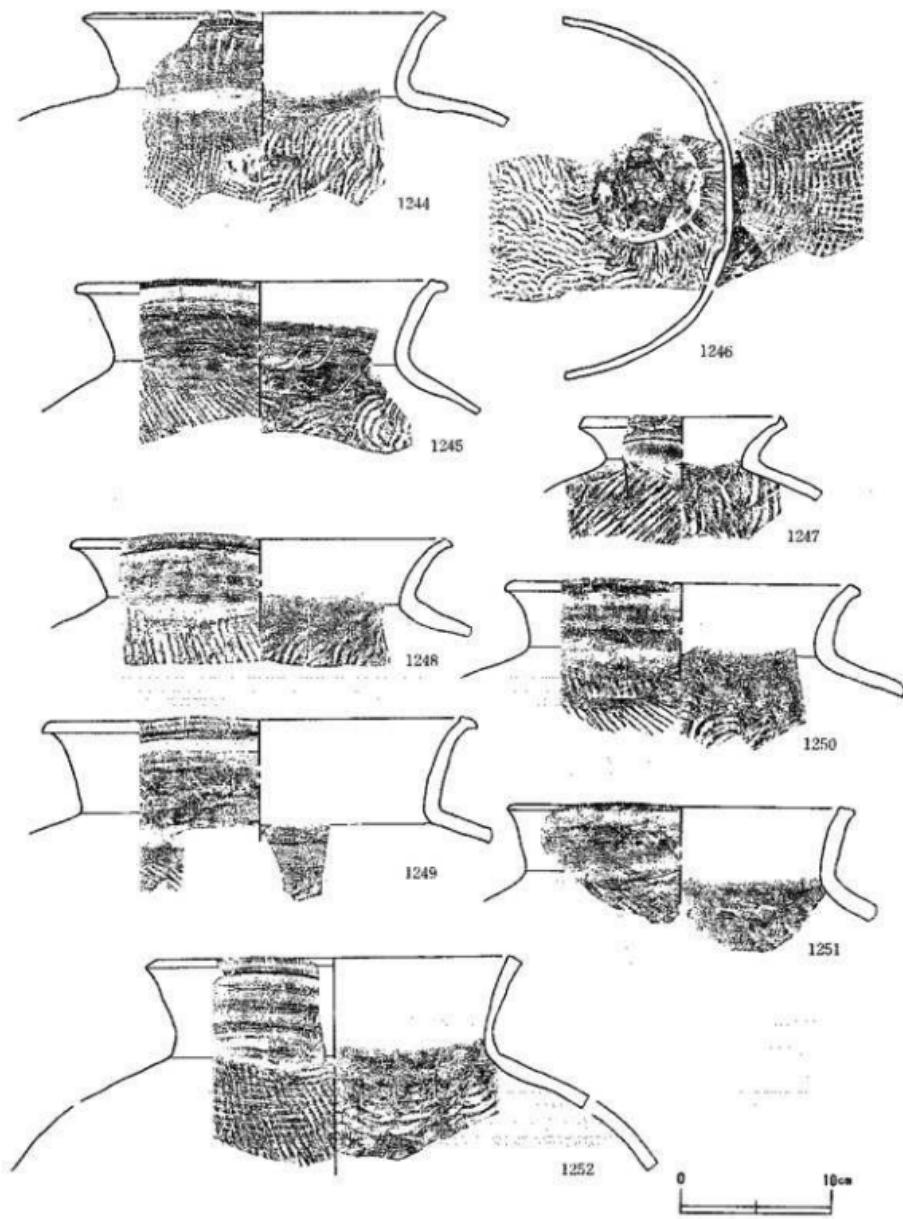


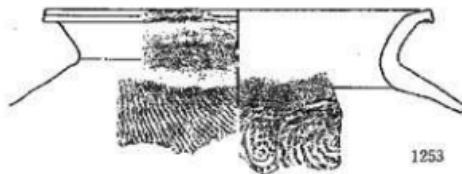
第101図 遺構外出土土器(9)



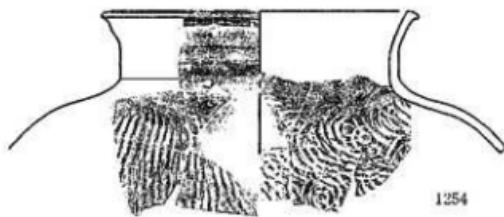
第102図 遺跡外出土土器(10)



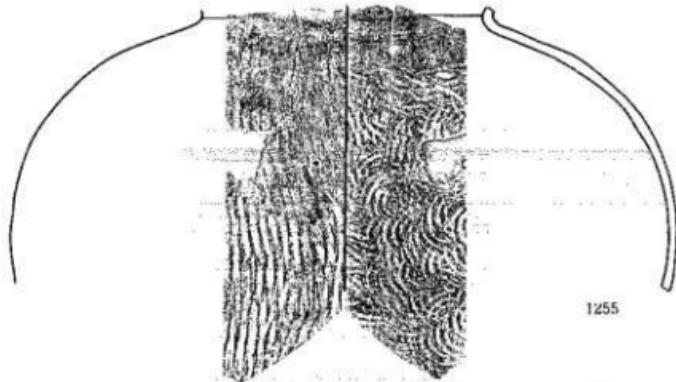
第103図 遺構外出土土器(11)



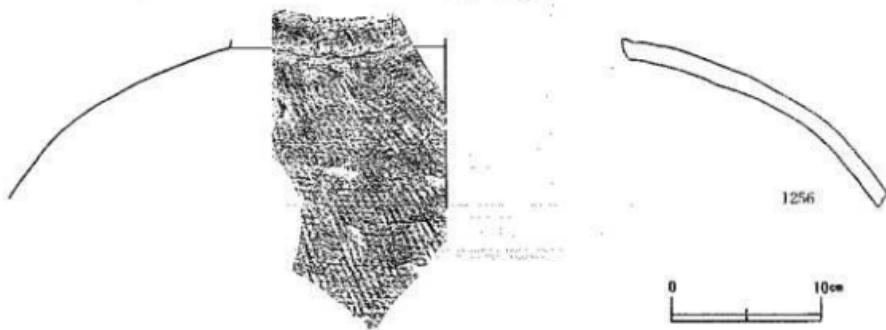
1253



1254



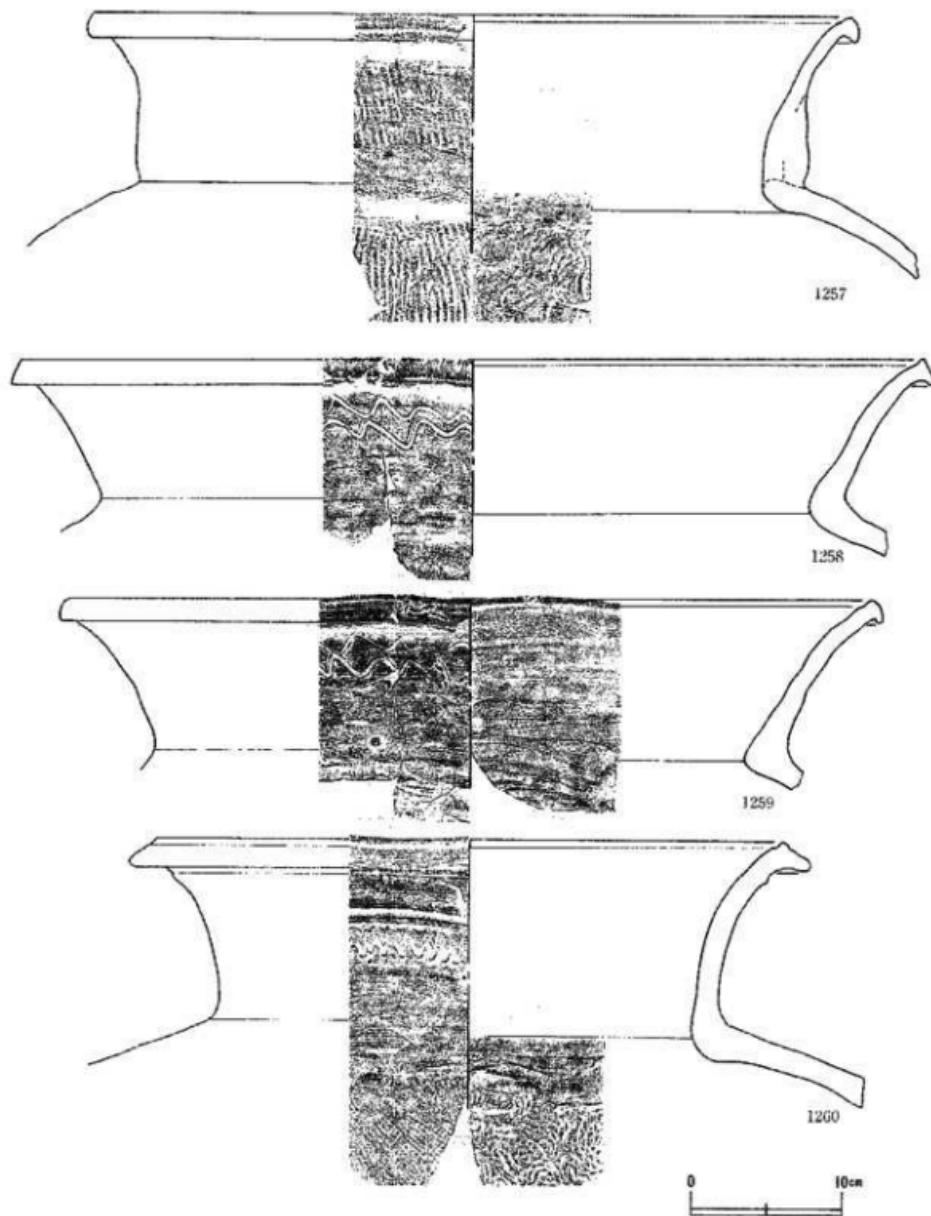
1255



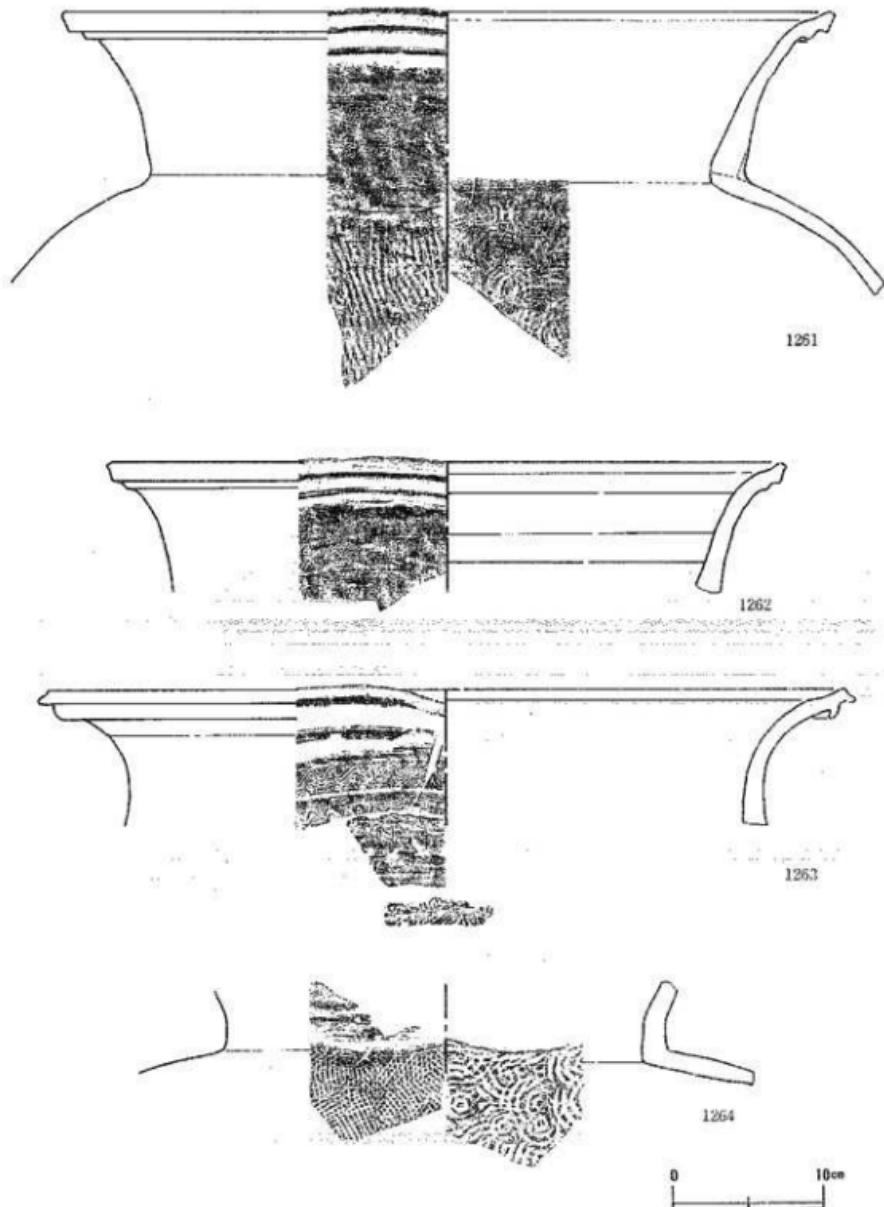
1256



第104図 遺構出土土器(12)

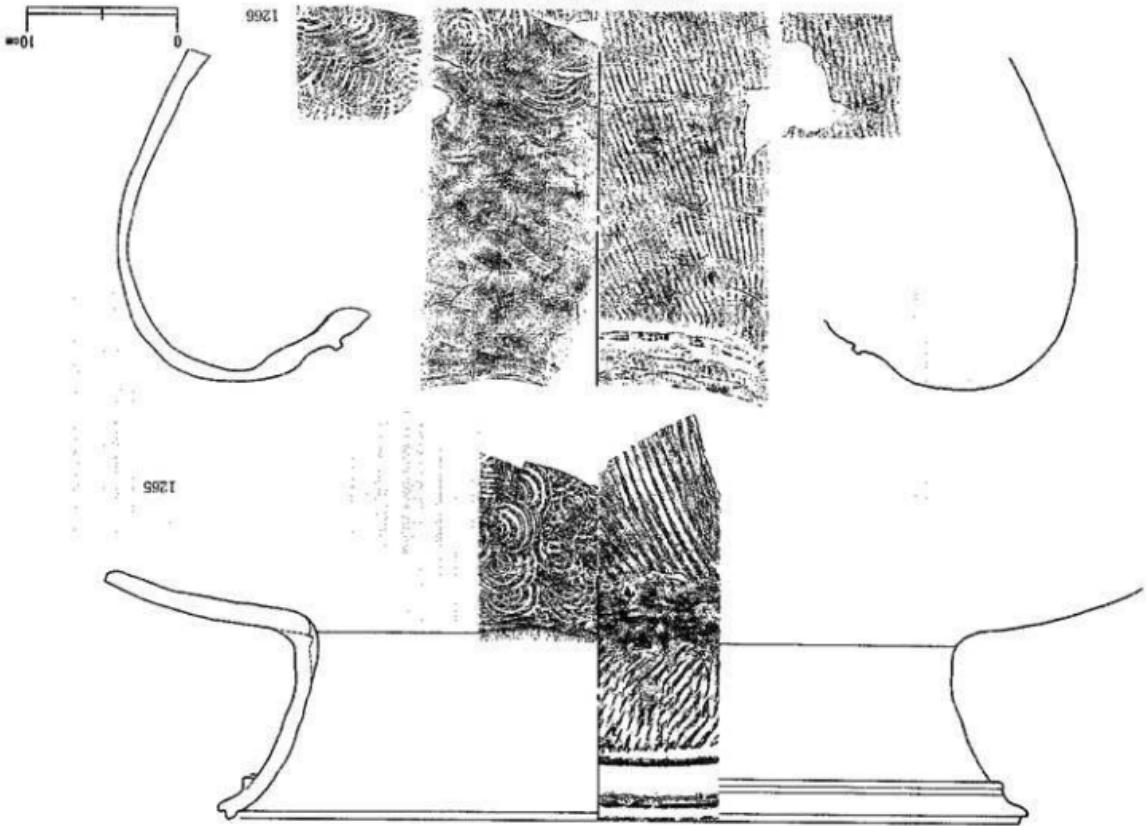


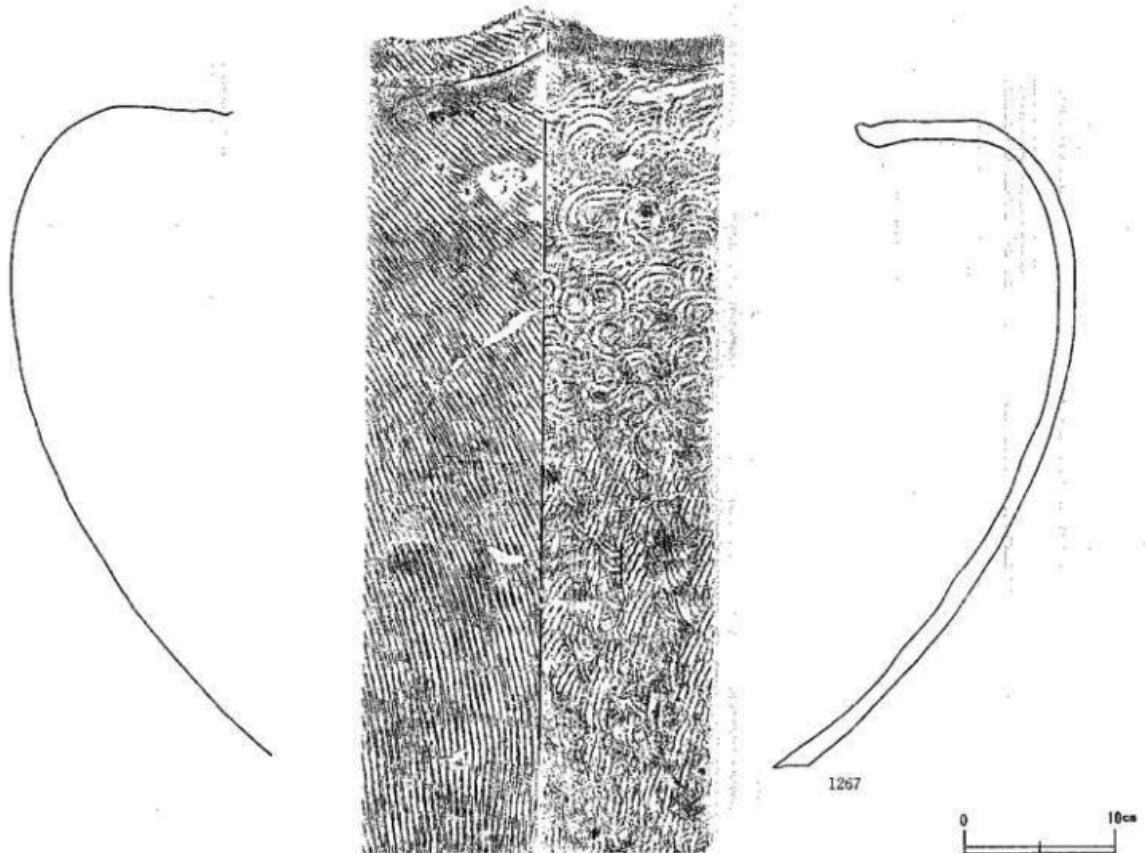
第105図 遺構外出土土器(13)



第106図 遺構外出土土器(14)

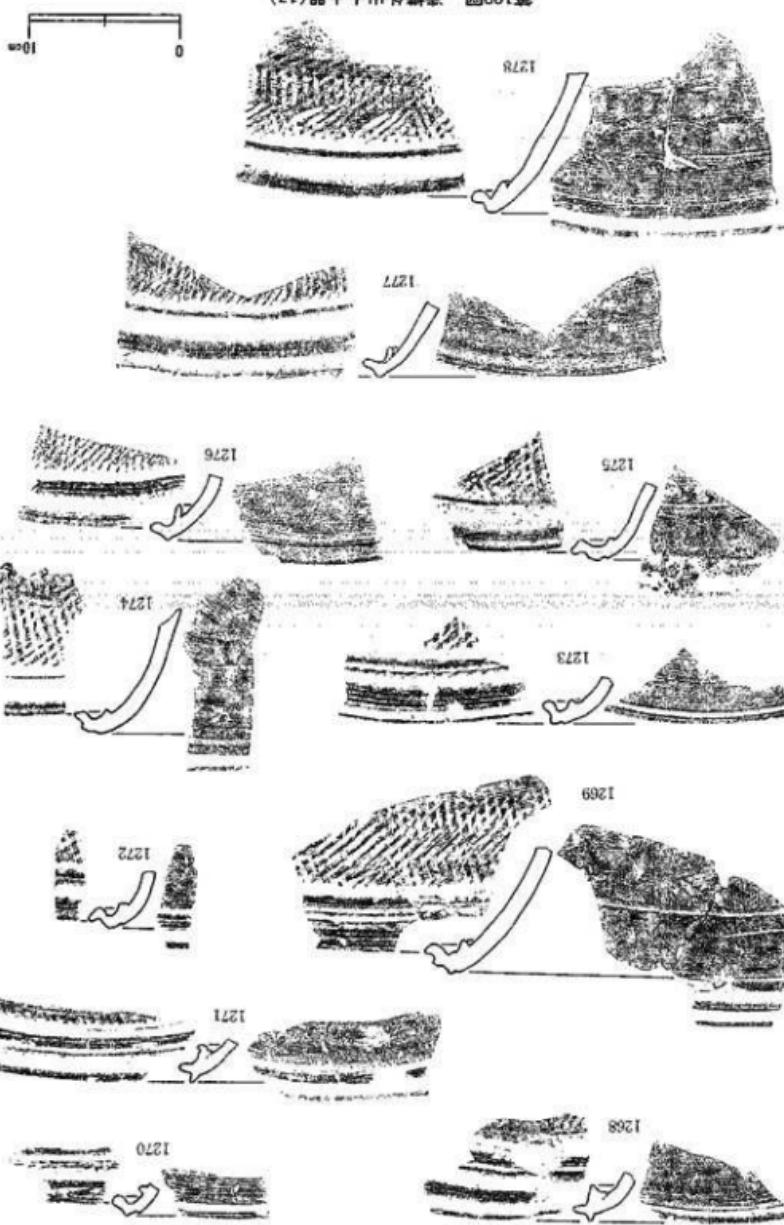
第107図 遠藤井出土土器(15)

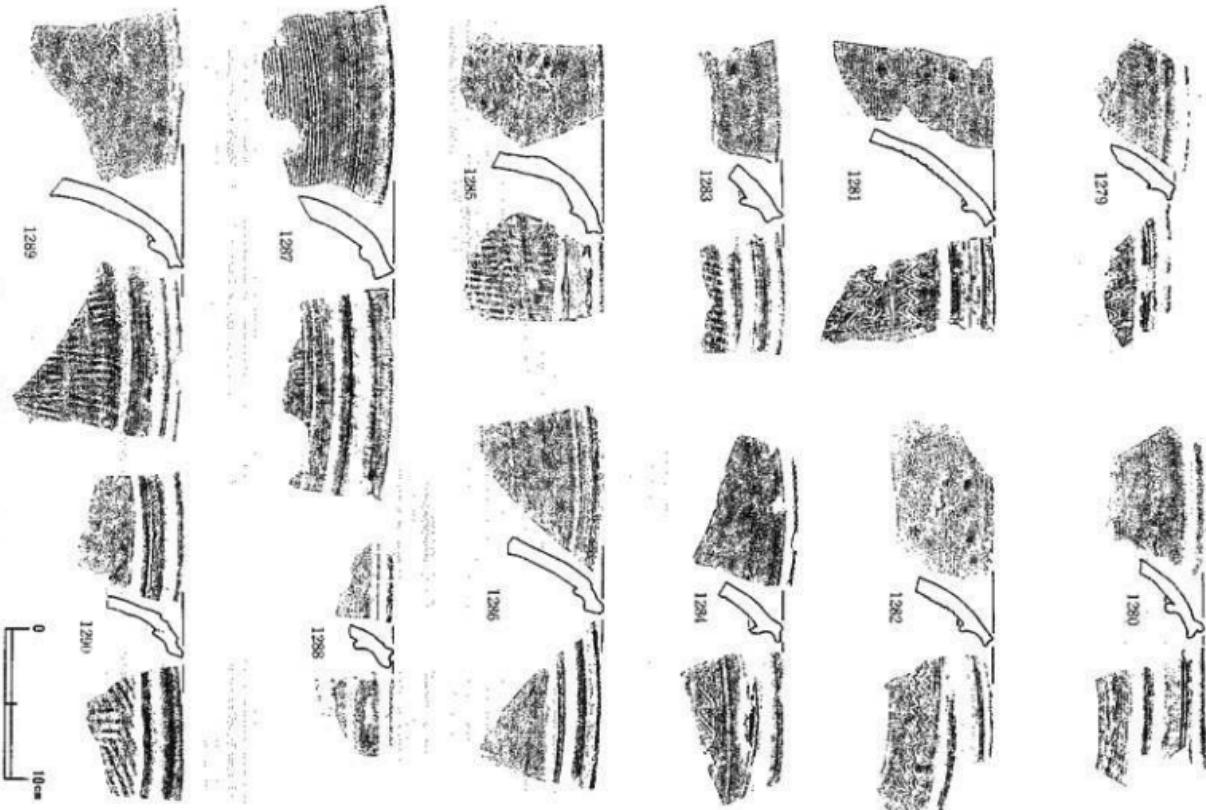




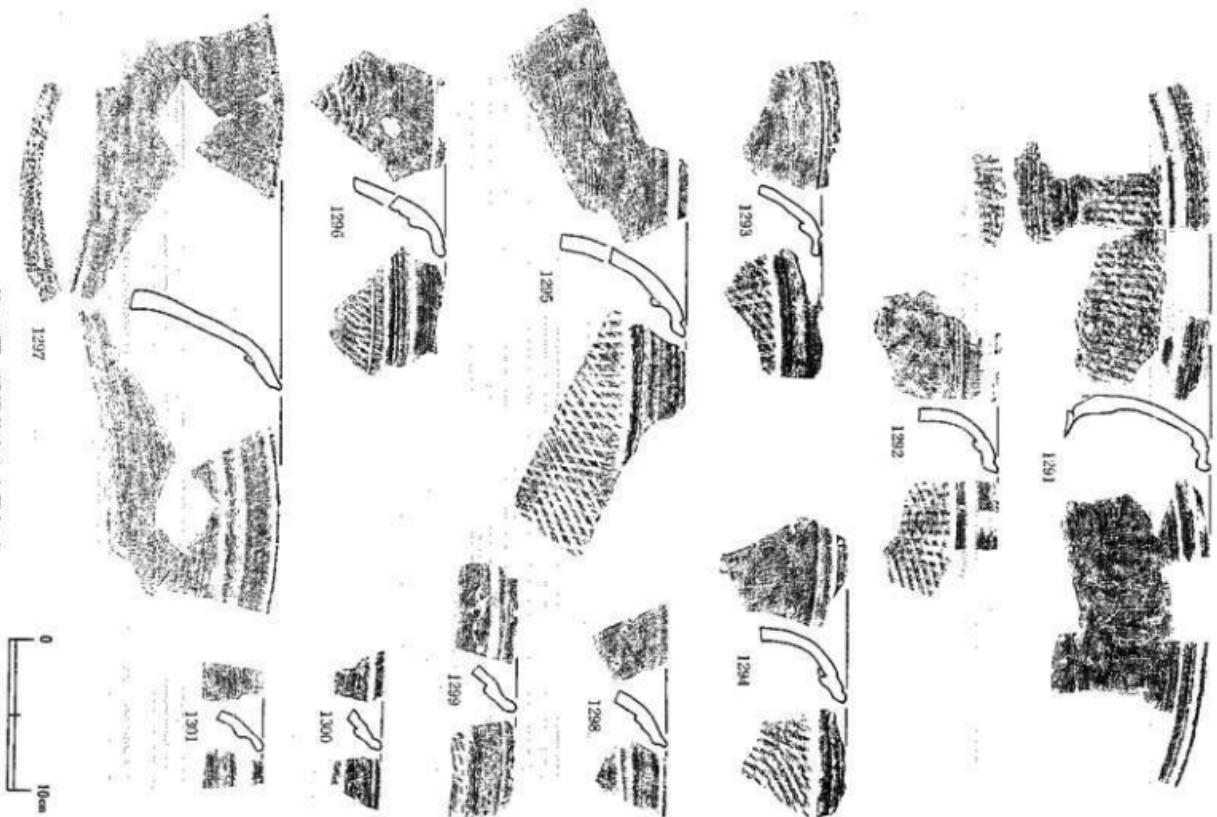
第108図 遺構外出土土器(16)

第109圖 鎏金外出土器(17)

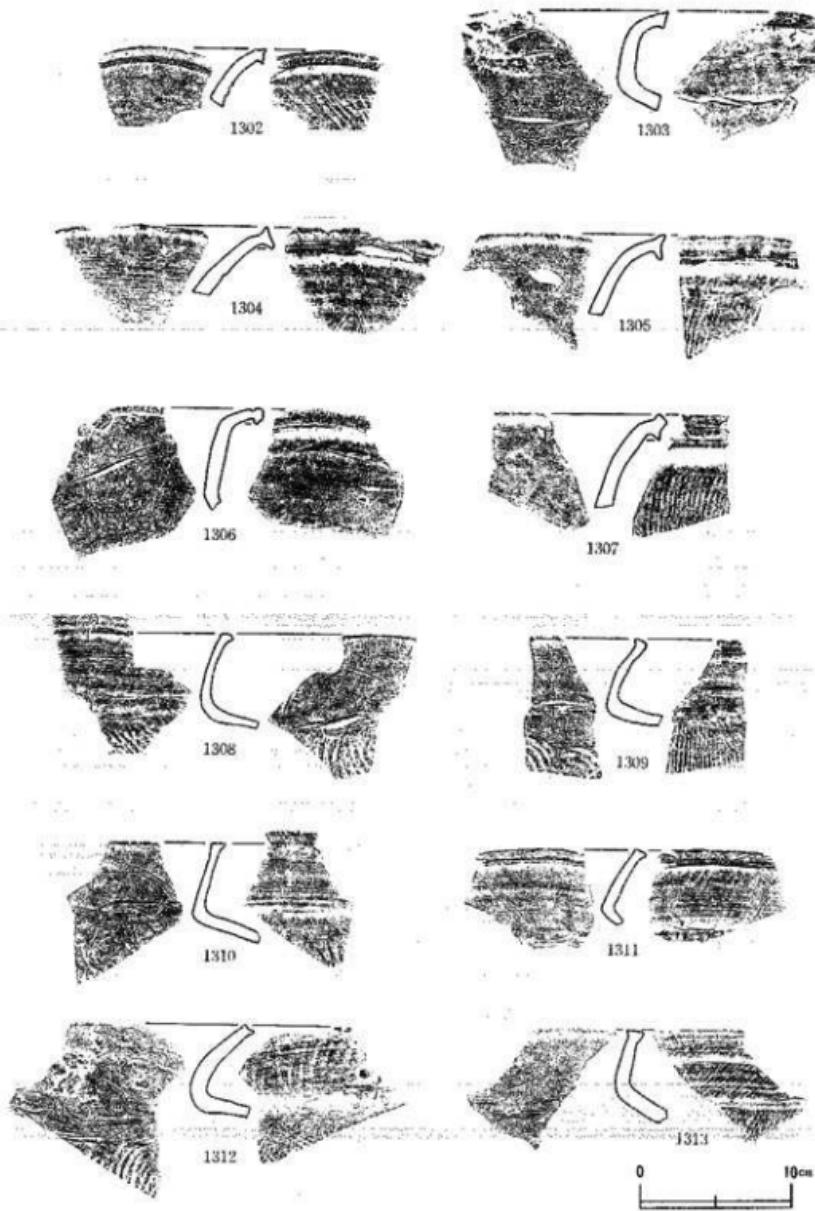




第110図 遺構外出土土器(18)

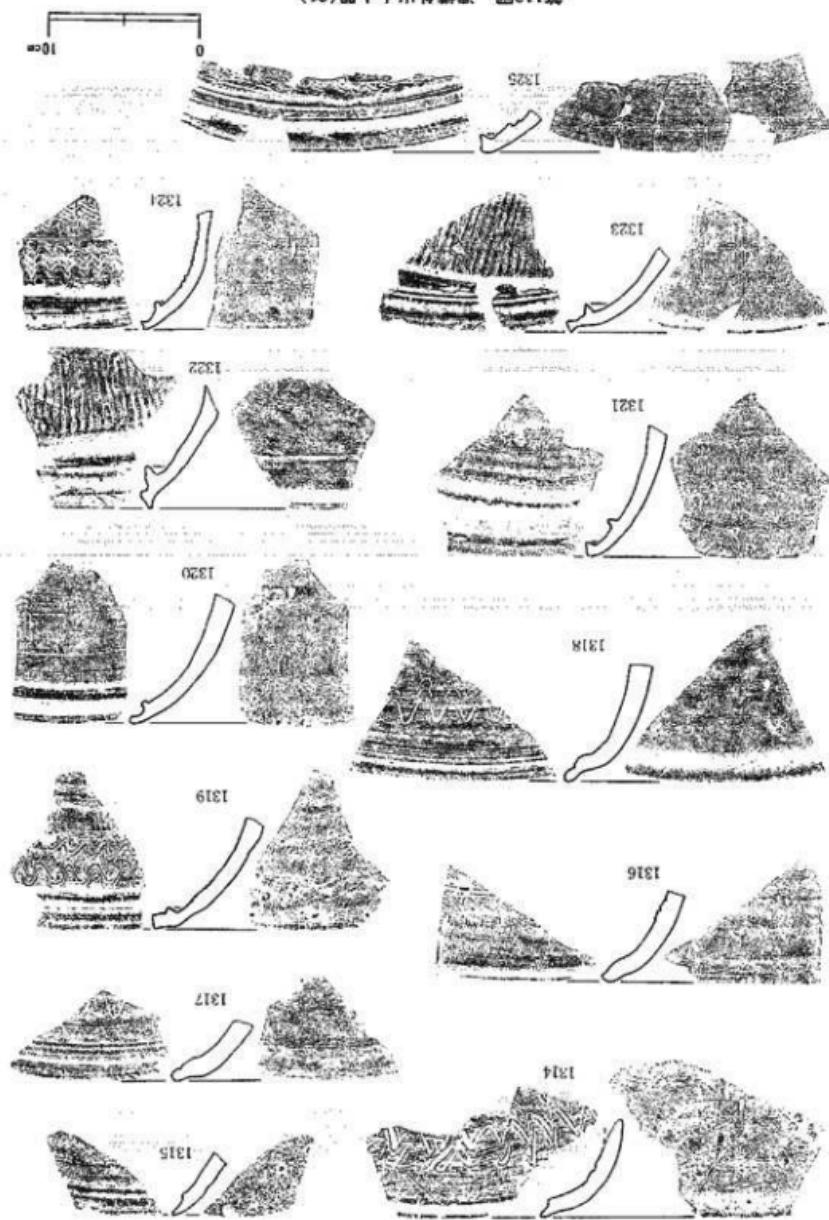


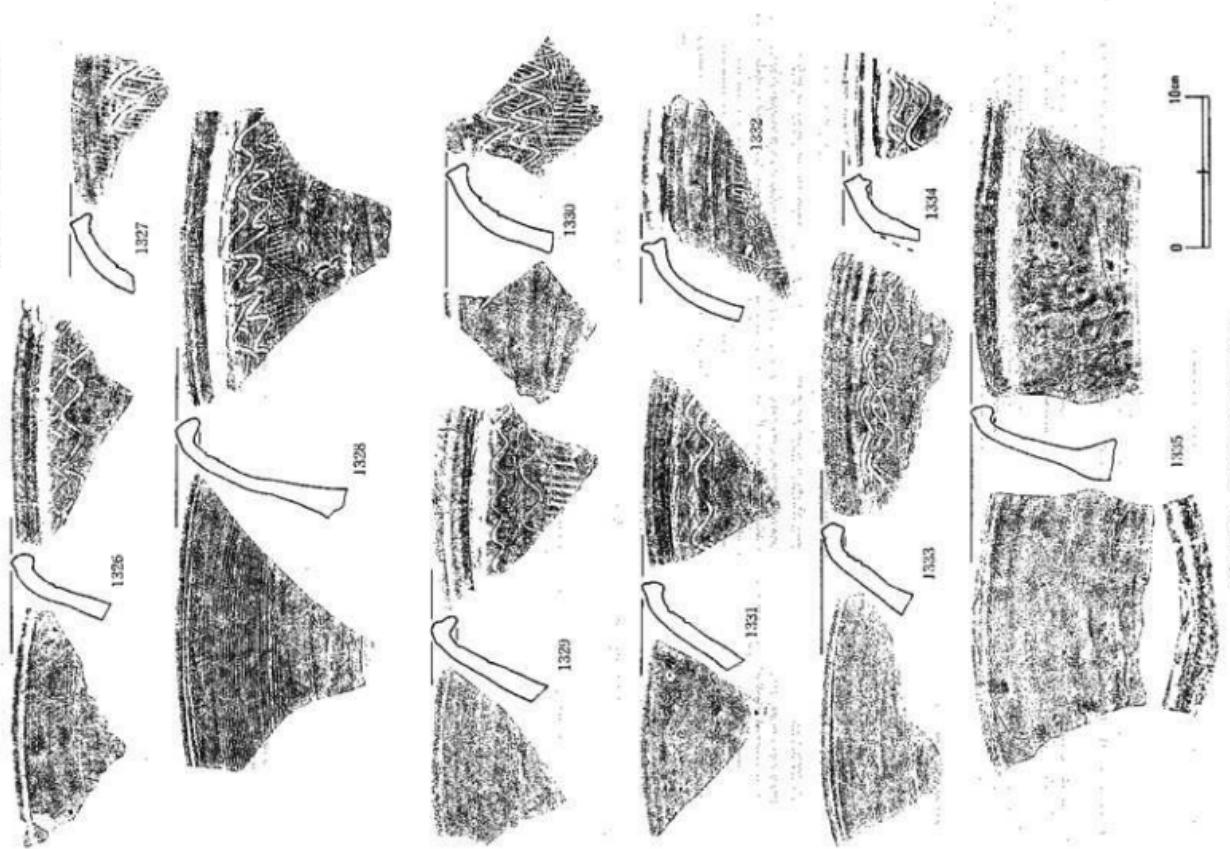
第111図 遺構外出土土器(19)



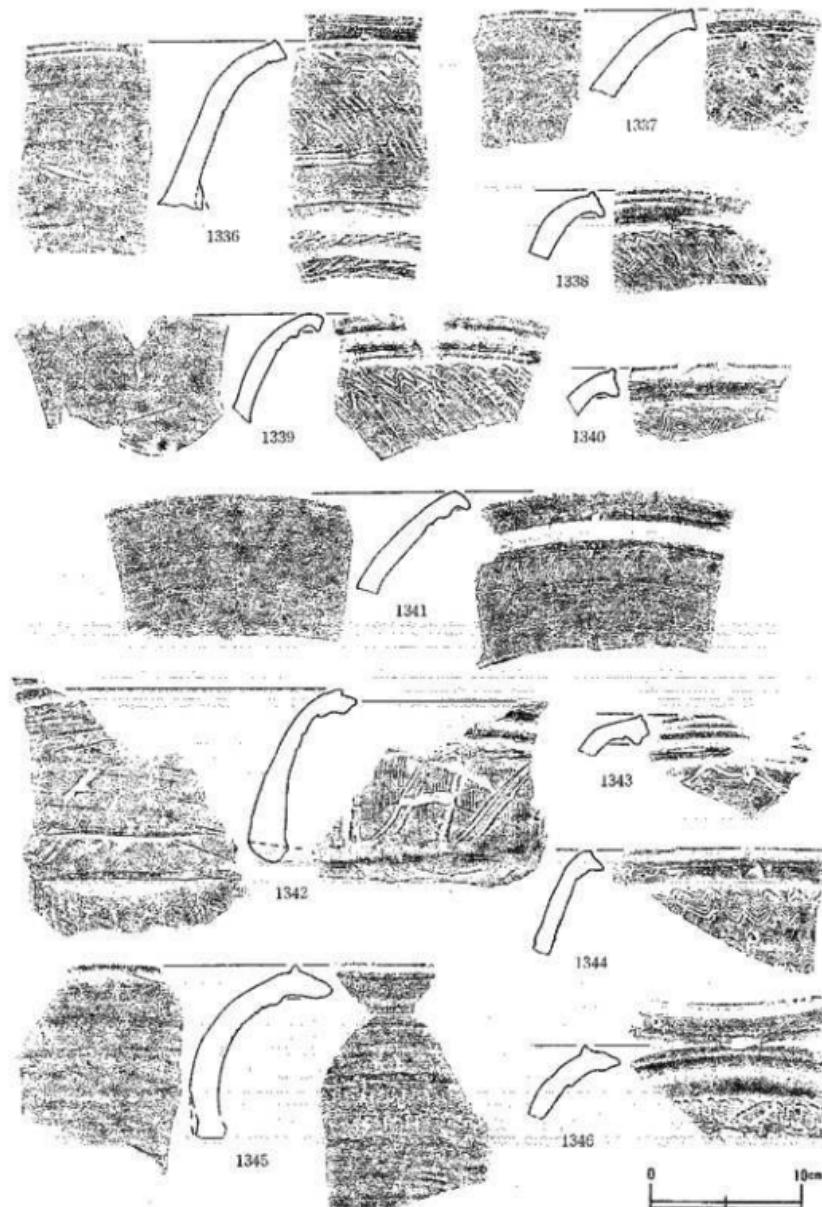
第112図 遺構外出土土器(20)

第113图 通模外出土土器(21)



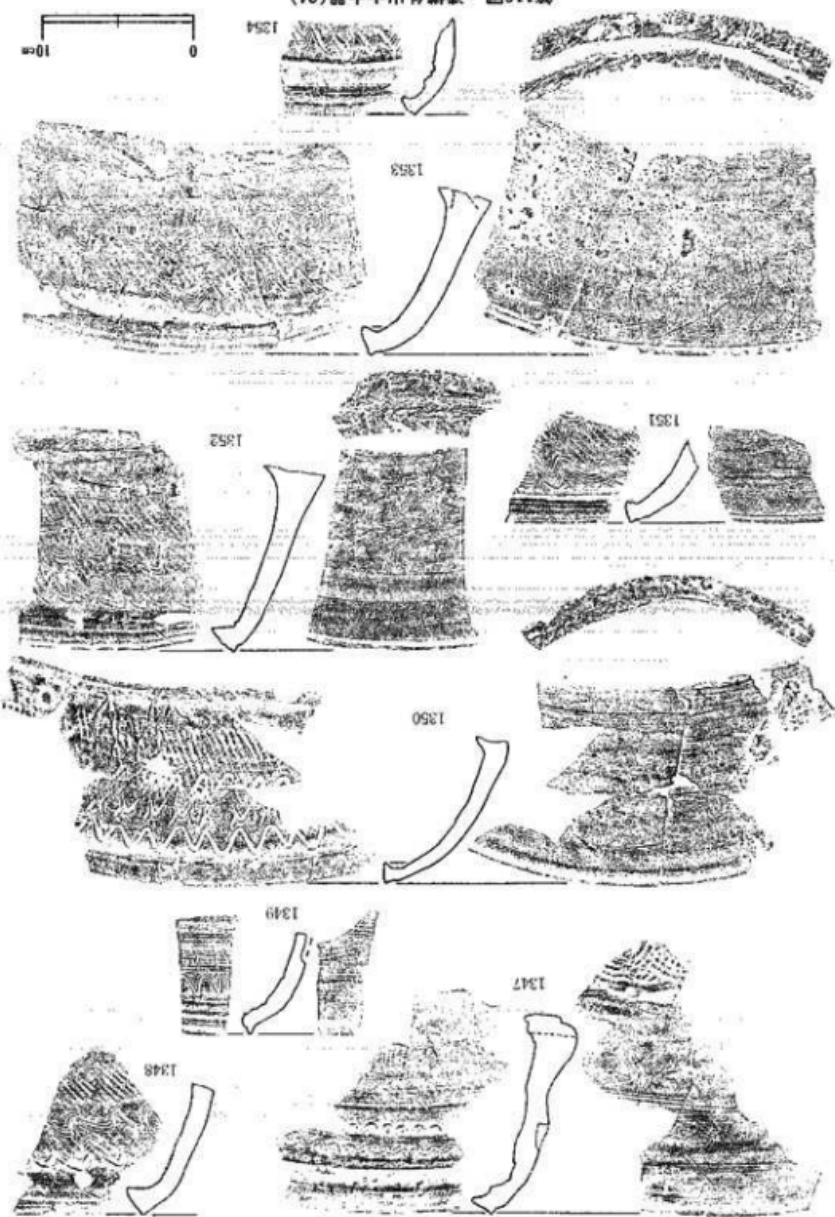


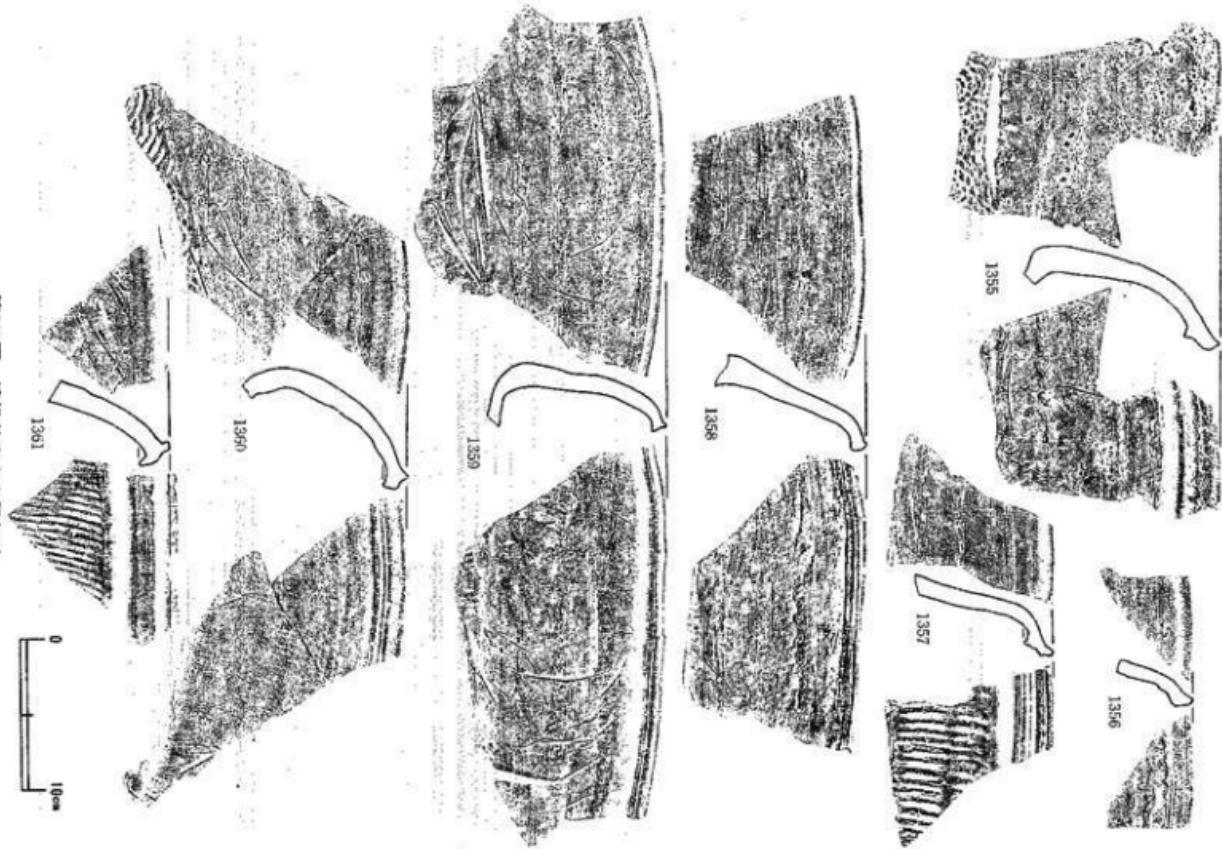
第114図 遺構外出土土器(22)



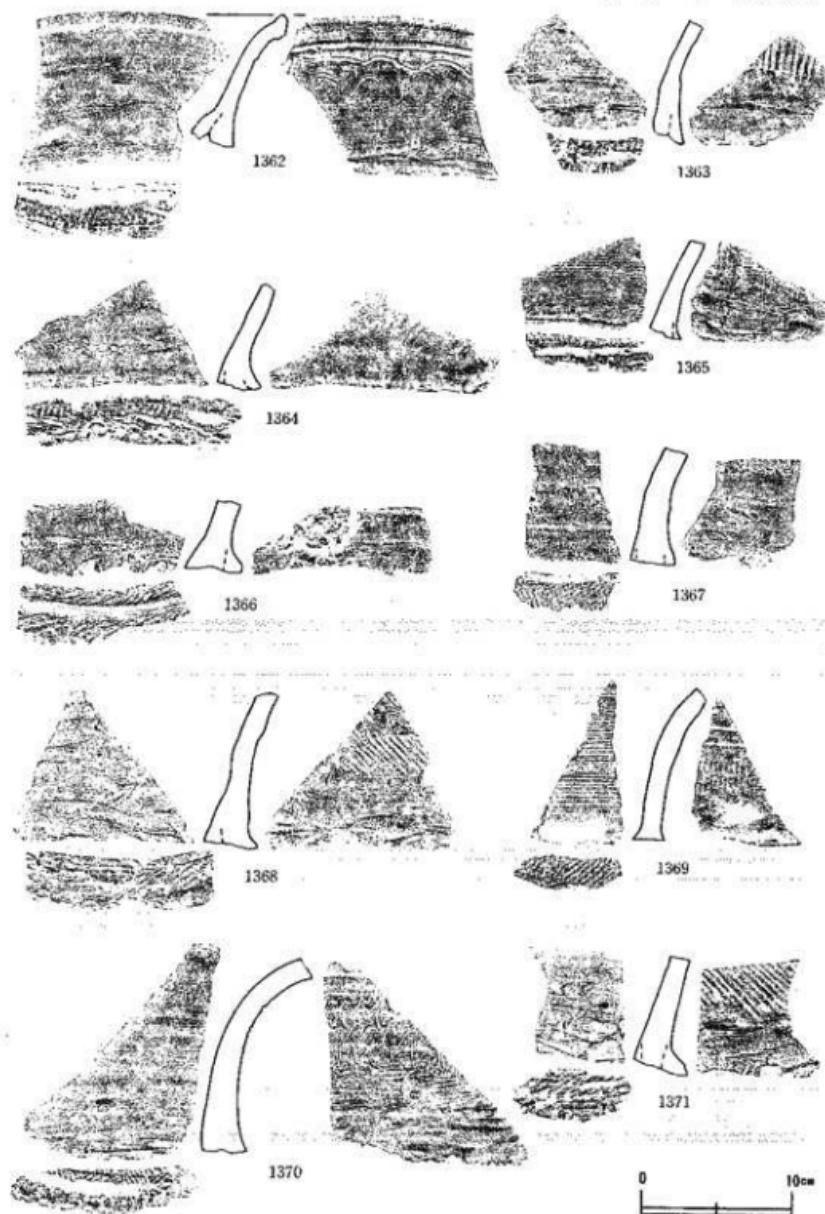
第115図 遺構外出土土器(23)

第116圖 遷都外出土土器(24)

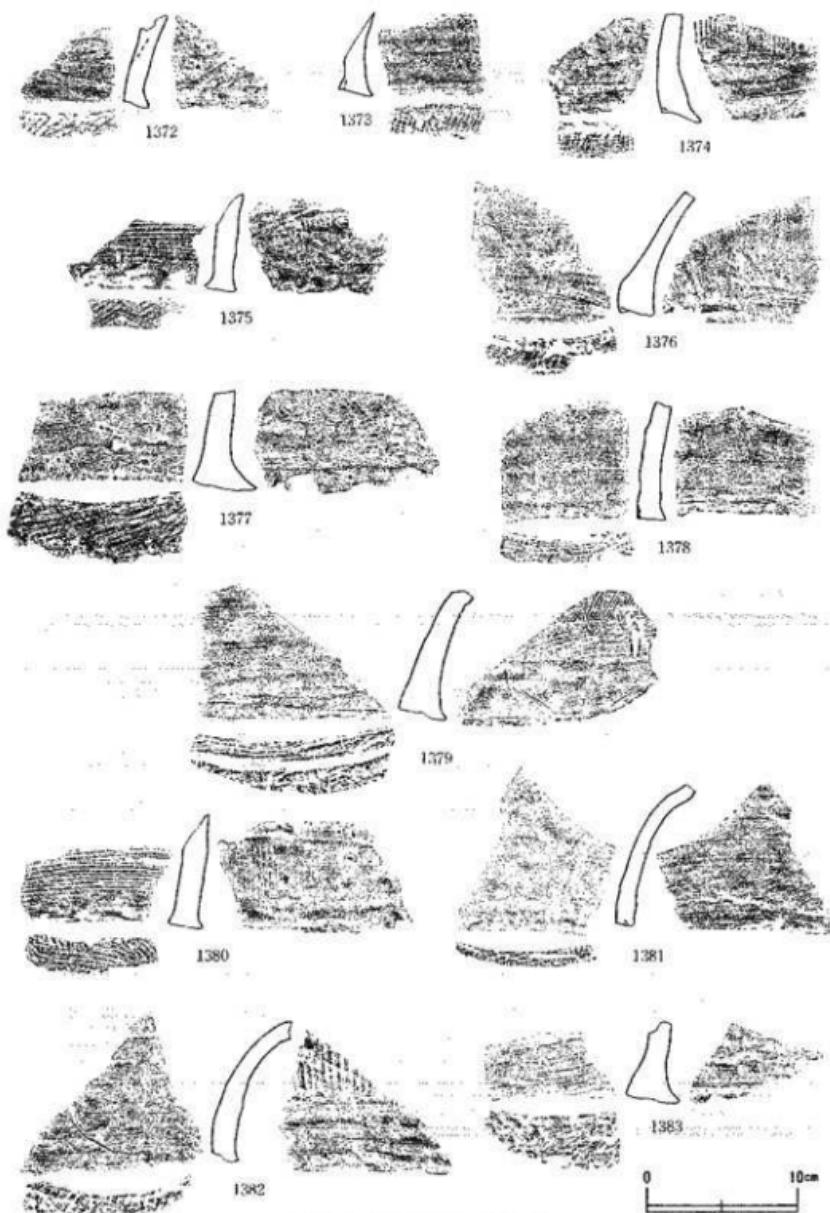




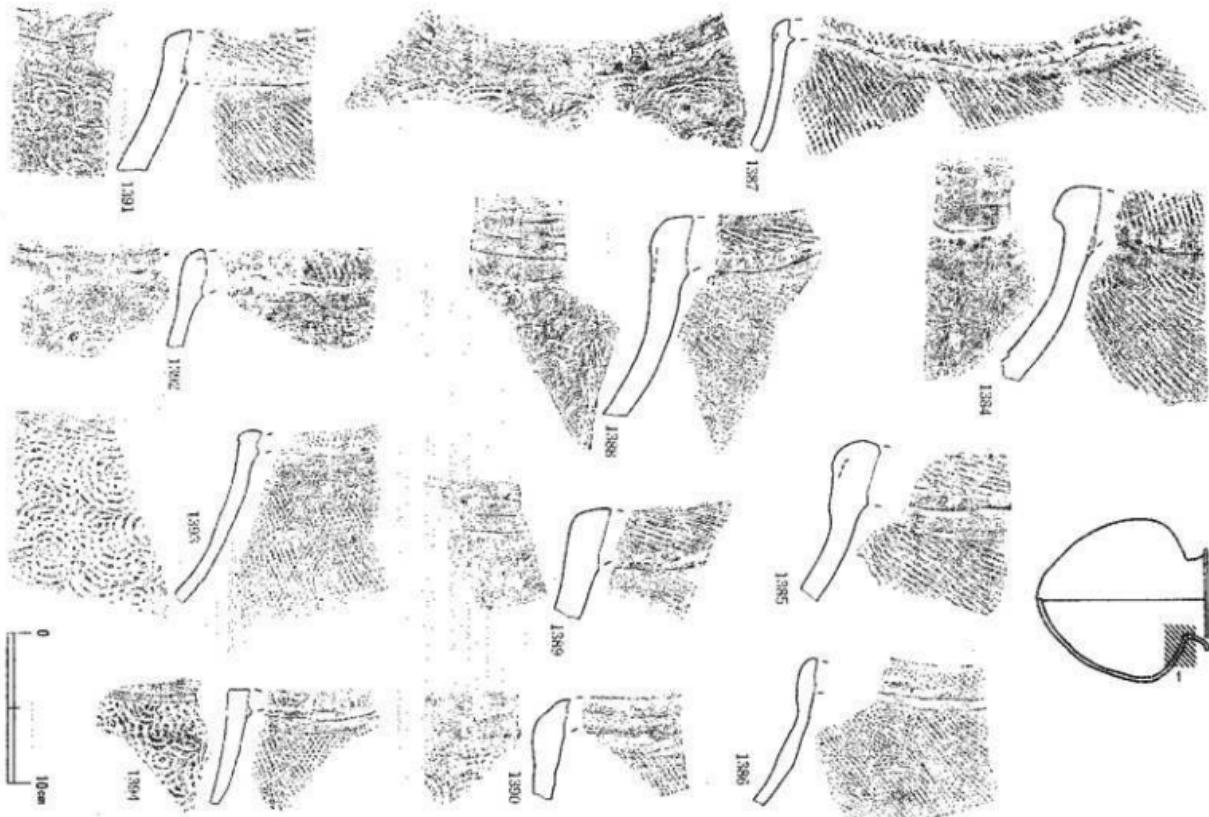
第117図 通構出土土器(25)



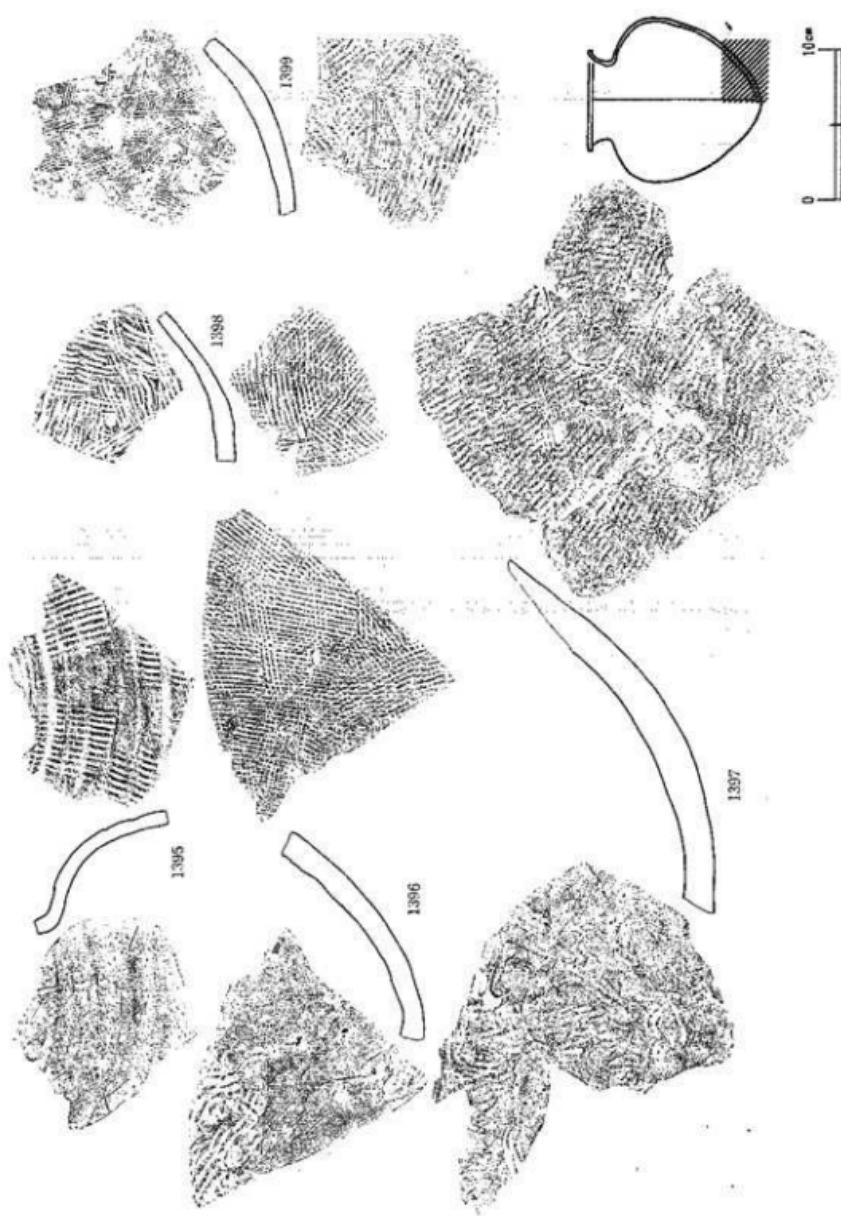
第118図 遺構出土土器(26)



第119図 遺構外出土土器(27)



第120図 遺跡出土土器(28)



第121圖 遺構外出土土器(29)

(1184・1221～1226)がある。1237は表面が黒く、S T17に関係があると思われる。1204の底部には「#」の墨書きがある。

硯(1227～1231)(第101図、第68表、図版58-3・4)

円面硯(1228～1230)、風字硯(1231)、坏形を伏せたような特殊な硯(1277)がある。透は縦長の長方形が多い(1227・1229・1230)。1227の外面は黒色を呈しており、S T17出土のものに類似している。

瓶(1234)(第101図、第68表)

口縁部が二重になる、瓶と推定される。

鉢(1232・1233・1235)(第101図、第68表、図版58-6)

1232と1233は鉢である。1233は体部に平行な搔目を施し、表面が黒い。1235は頸部がくの字状で口縁が外反する。

横瓶(1241～1243・1246)(第102・103図、第69表、図版59-5・4、84-4、66-6)

1243の口唇部は窪んでいる。

長頸瓶(1238)(第102図、第68表、図版58-7)

長頸瓶と推定される。体部下位に沈線があり高台に特徴がある。

甕(1236・1244・1245・1247～1399)(第101・103～121図、第68～74表、図版68-9・10、69、70-1・2、64-6、71-2、72、73、74、75、76、77、82、83-1・7、84-1～3・7)

中型、大型(1257～1267)などがあり、口縁端部の形態にはさまざまなものがある。1362～1383は口縁部側の頸部接合資料、1384～1394は体部側の資料である。1396～1399は底部資料である。

器種不明土器(1200)(第100図、第67表)

口唇部と思われる部分の下に突出部分があり、全体は坏形を呈している。

第3節 C地区の遺構と遺物

C区では、斜面が張り出して急傾斜を示すMO-N Aラインに、須恵器を焼成した窯跡S J 20とこの灰原S T 26を中心としてS K21・23・24・25の各土坑がある。また、調査区北側の緩斜面には、窯状遺構S N22が位置している。これら性格の異なる遺構が、3地点に分かれて存在している(第122図)。

1 窯跡

S J 20(第123～125図、図版31・32)

S J 20は標高60mの等高線にはば直交して構築された半地下室式と考えられる無階無段窯で

ある。窯は煙道部が削平を受けているが、現状の規模は長さ11.65m、煙道部付近の幅が90cm、中央やや下方の最大幅が1.2mで、中央が膨らみ焚口部と煙道部に向けて徐々にすぼまる形状を呈する。焚口手前には袋状の作業面をもつ。中軸方向はN-80°-Eを指す。床面は焚口から燃焼部にかけてほぼ水平で、焼成部への変化は明瞭である。床面の勾配は最も急な所で25°あり、焼成状態は非常に良好である。構造は苟のあることと、窯体が地山面から深くない点を考慮すると半地下式の窯と考えられる。また断面形は、側面の立つ半梢円形状を呈すると思われる。壁面には、掘削時の手斧の跡が明瞭に認められる。また焚口付近の覆土上面からは、窯体埋没後に堆積した灰白色の火山灰が10cmの厚さで存在していた。遺物は床面や覆土から坏・甕などの破片が比較的まとまって出土した。これらの遺物は操業面が1つのS J 20の製品として一括性の強い土器であり、これらをS J 20窯跡土器群(一括土器群I)として捉えることができる。

出土遺物

S J 20からは坏蓋・高台付坏・坏・横瓶・甕(1400~1414)が出土している。これらのすべては、一括土器群Iとして捉えることができる。

坏蓋(1400~1404)(第126図、第74表、図版45-16)

天井は低く平坦で、端部は水平から屈折してやや内傾気味に立つ。天井の切り離しは、不明瞭な1402を除くと回転糸切りである。1404はゆがんだ部分を作図してある。

高台付坏(1405~1408)(第126図、第74表、図版50-11)

1405・1406・1408はやや浅い形態のものであるが、1407は壺形に近い形態である。底部には回転糸切り痕をもつ。また高台は高くやや外傾し、接地部は窪んでいる(1405~1407)。

坏(1409)(第126図、第74表)

底部の切り離しは回転糸切り技法である。

横瓶(1410)(第126図、第74表、図版59-6)

口唇部には明瞭な窪みをもち、肩部の短い特徴をもつ。

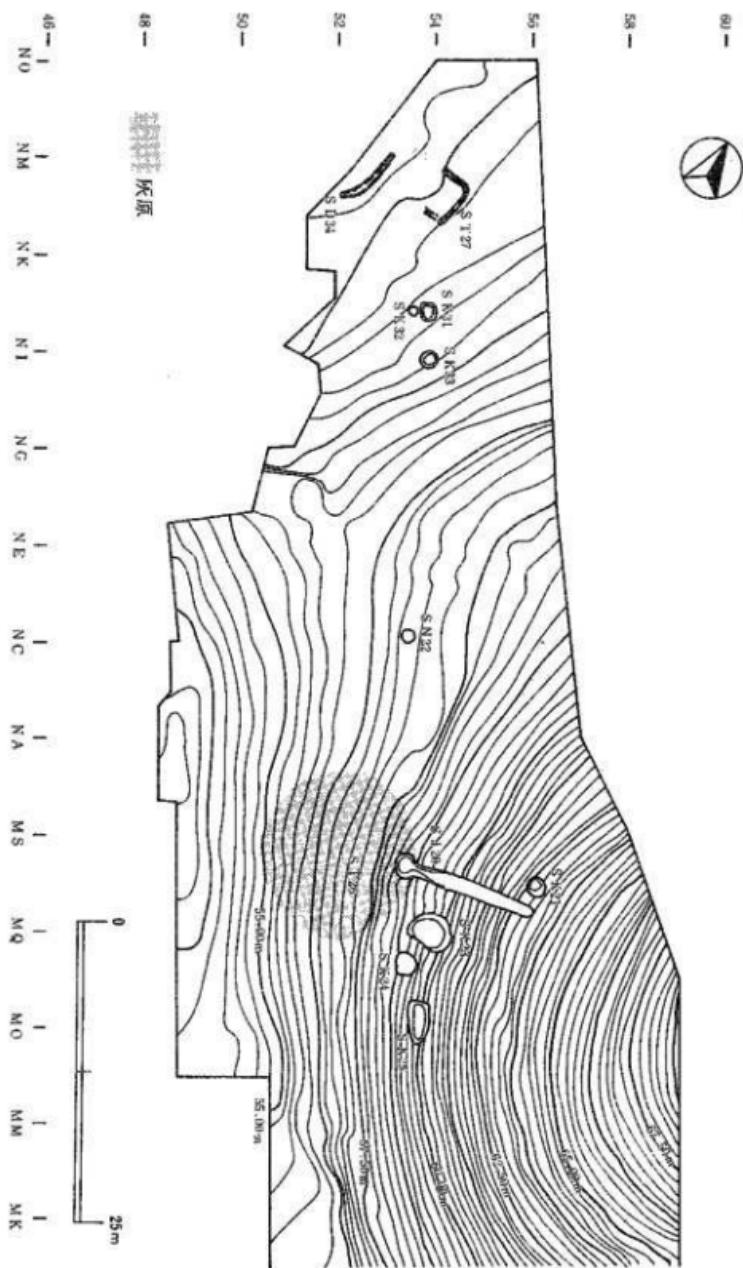
甕(1411~1414)(第126~128図、第74・75表、図版70-3, 65-1~3)

中型(1411)と大型(1412~1414)があり、口唇部はやや低い。内外には強い継ぎをもつ。

S T 26(第122図、図版32-1)

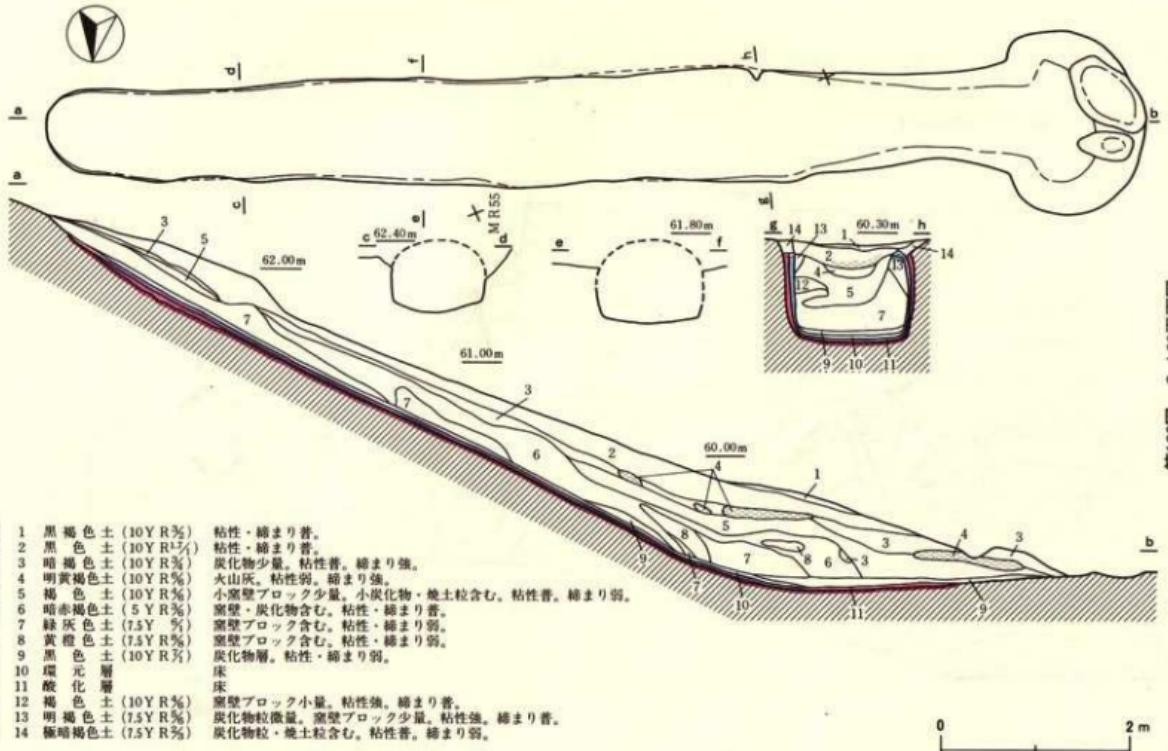
S T 26はMQ51~53・MR50~53・MS51~53区と広範な広がりをもつが、その中心はMR51から52区にまたがる区域である。灰原は約20~30cmと比較的浅い在り方を示している。また出土土器には坏・蓋などの小型品も含むが、甕の破片が特に目立っている。このことから本窯跡では、甕などでの大型品を主として焼成していた可能性がある。

出土遺物

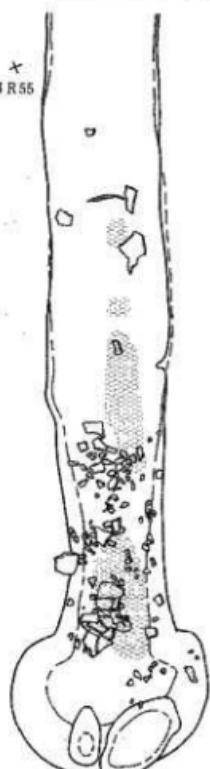
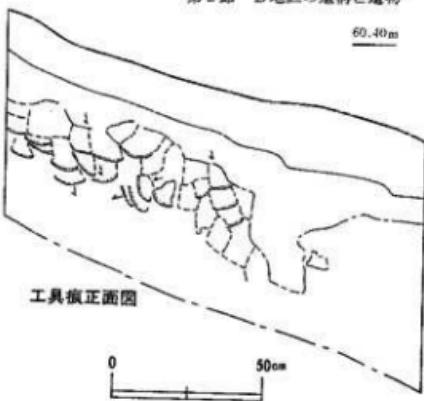
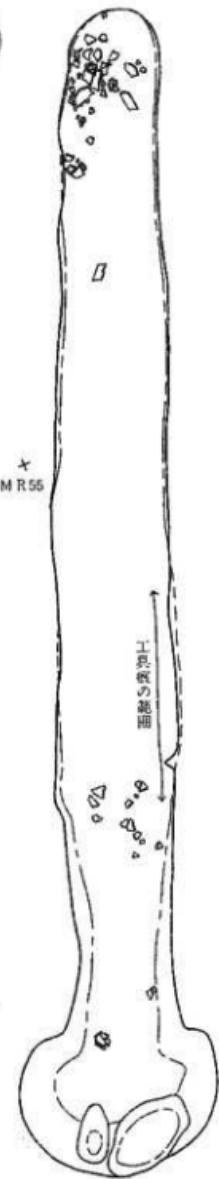


第122図 C地区遺構配置図

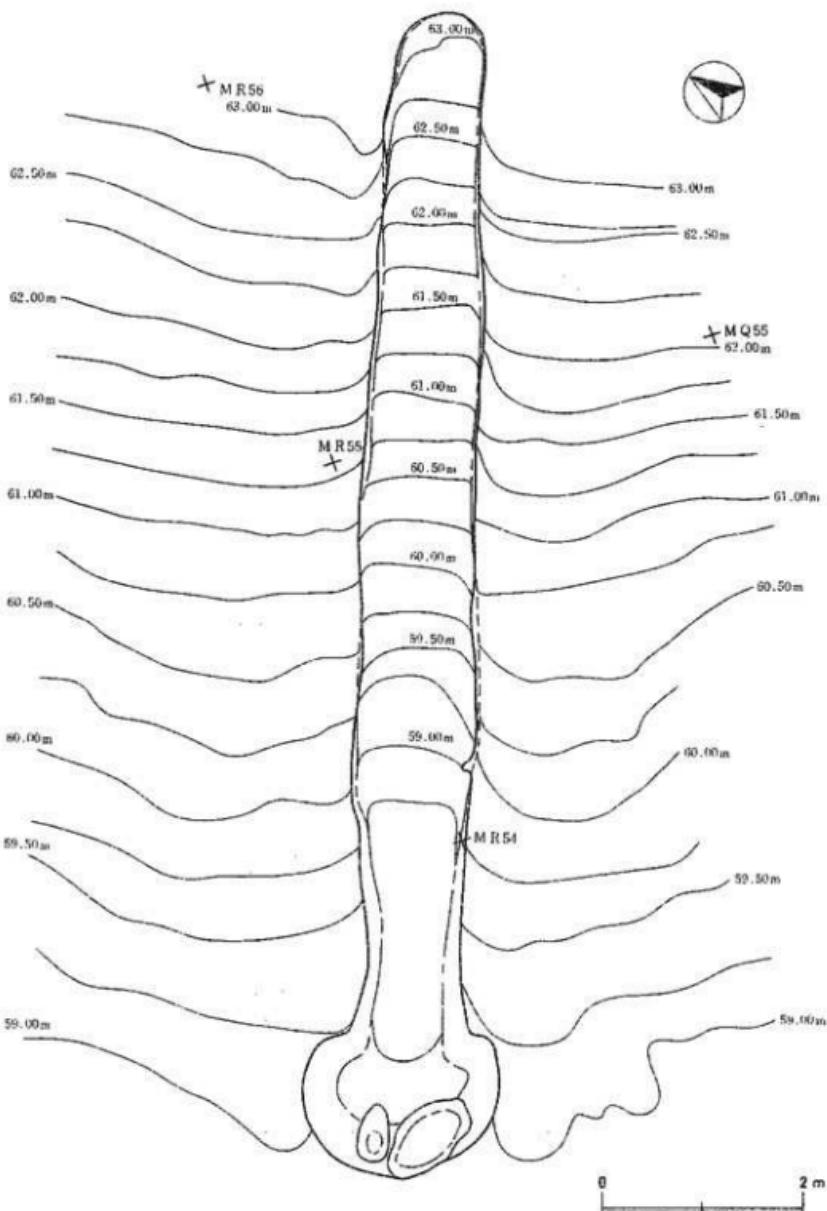
第123図 S-J20平面図



60-40m

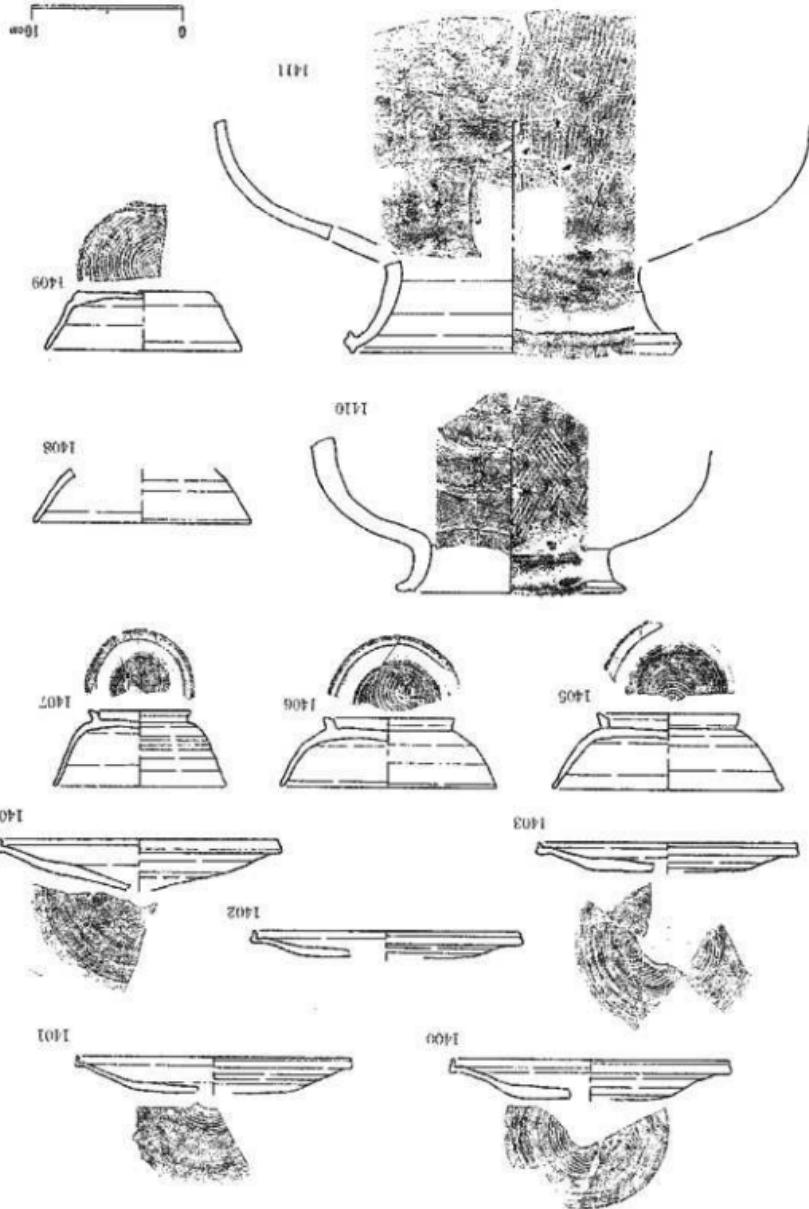


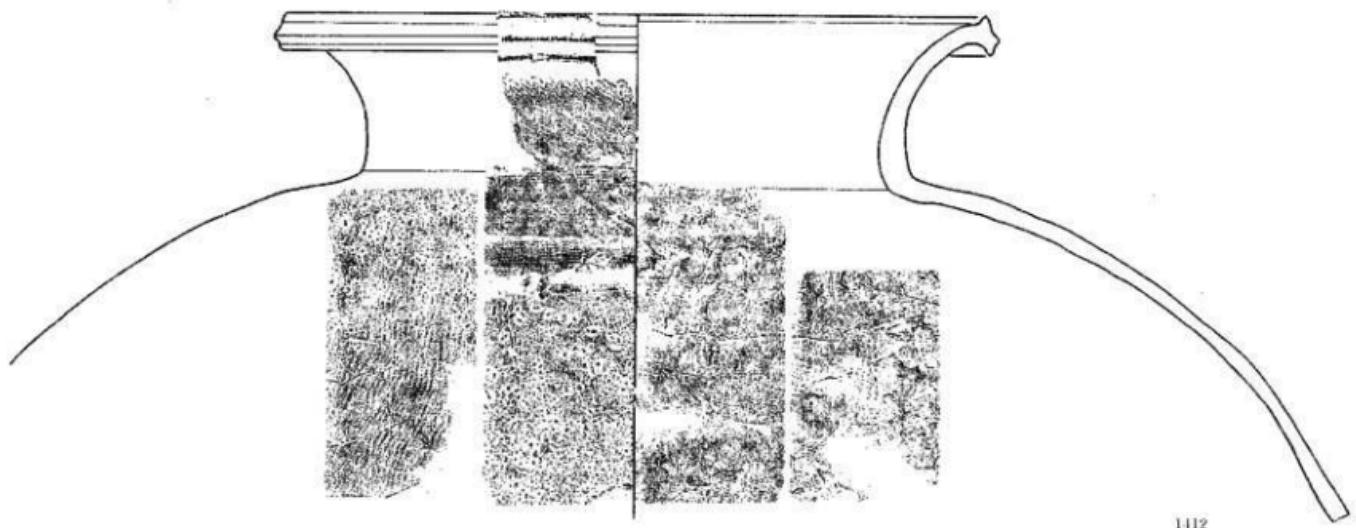
第124図 S J 20遺物出土状況図および工具痕正面図



第125図 S J 20等高線図

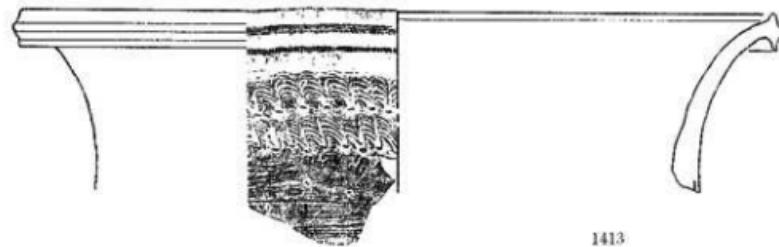
第126圖 遷都內出土玉器(57) S J 20





1412

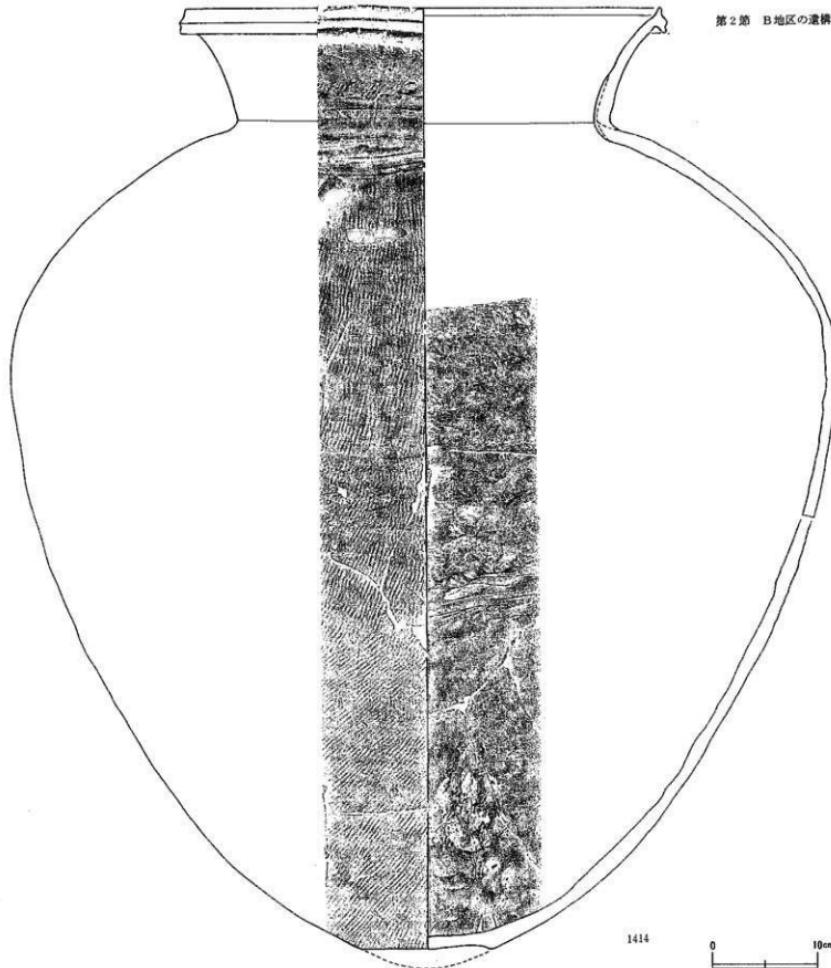
-170-



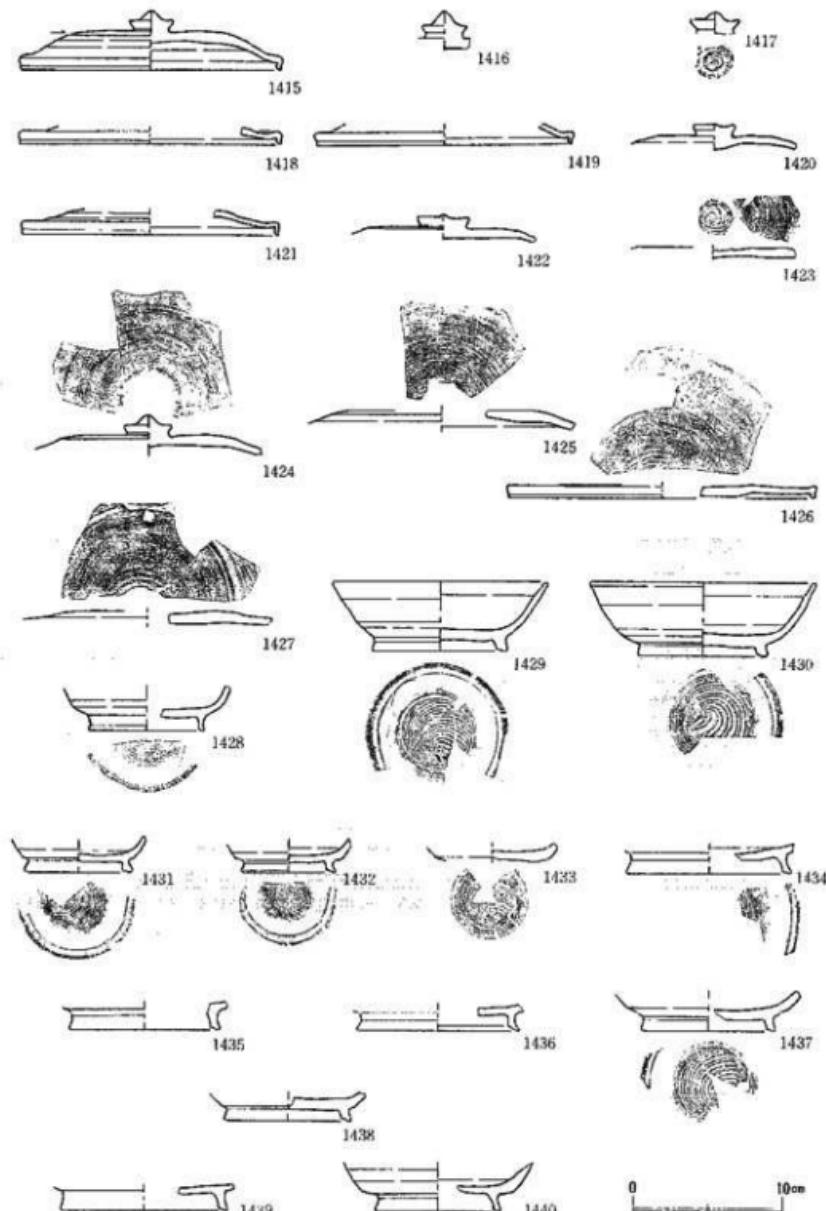
1413



第127図 遺構内出土土器(58) S J 20

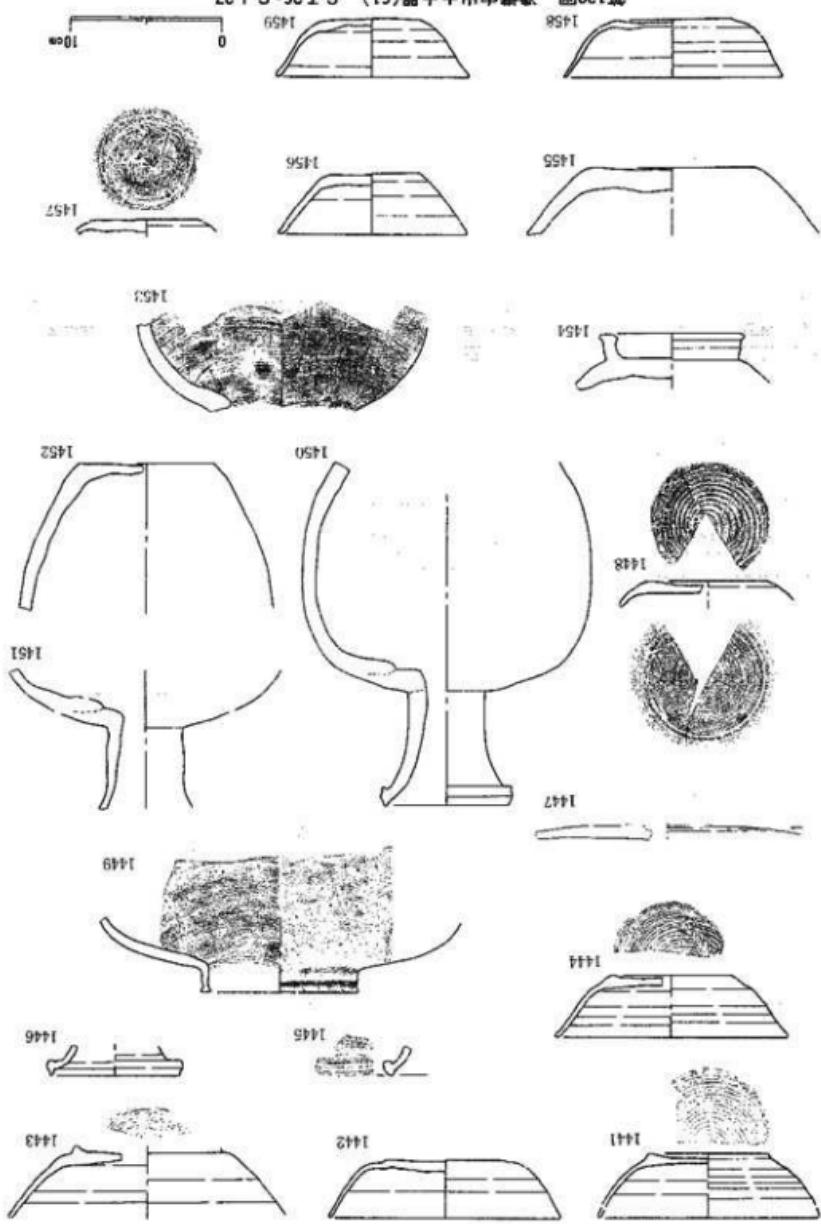


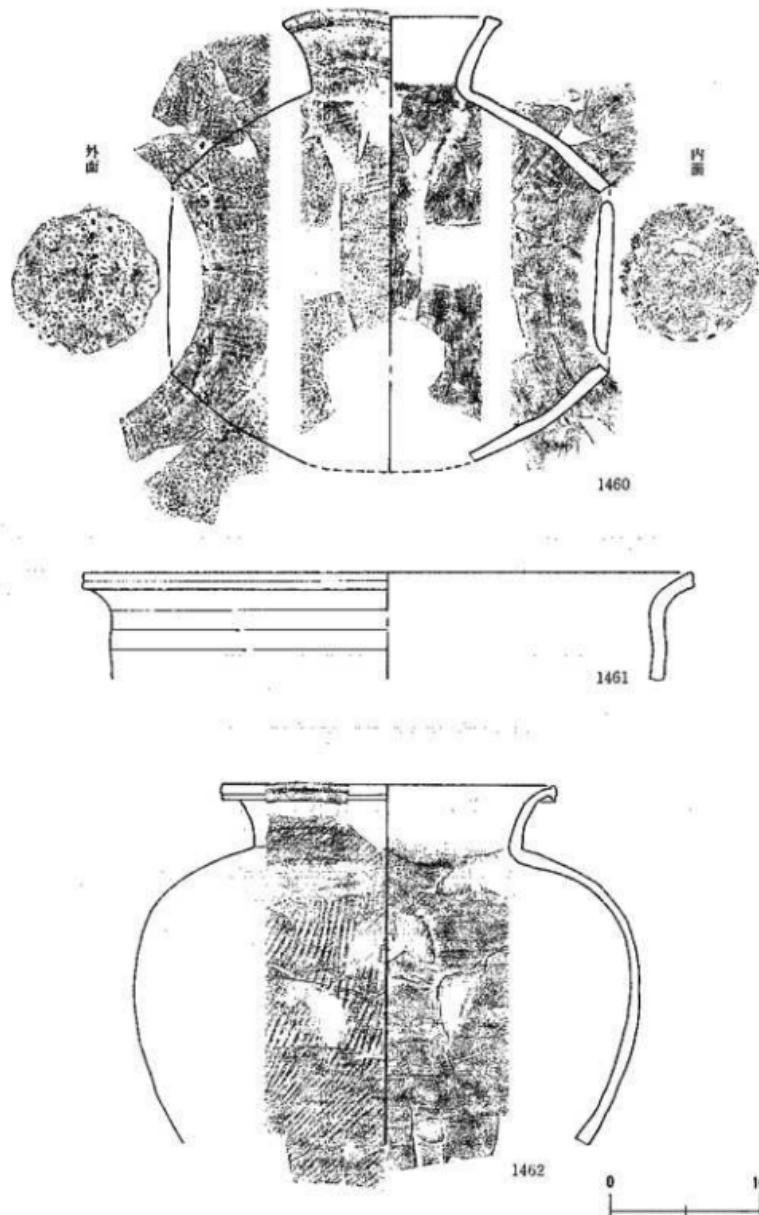
第128図 遺構内出土土器(59) S J 20



第129図 遺構内出土土器(60) S T 26

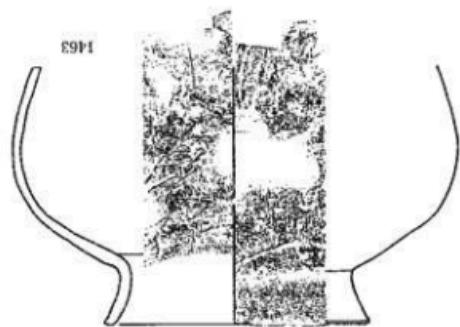
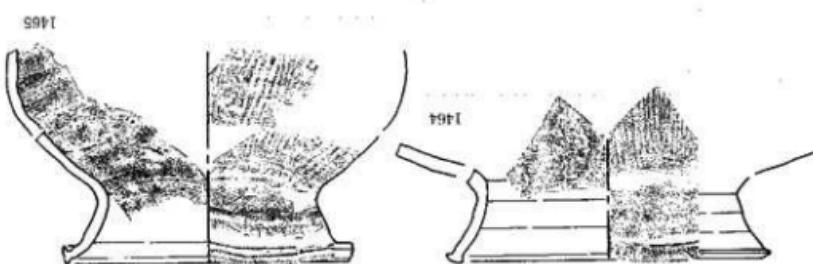
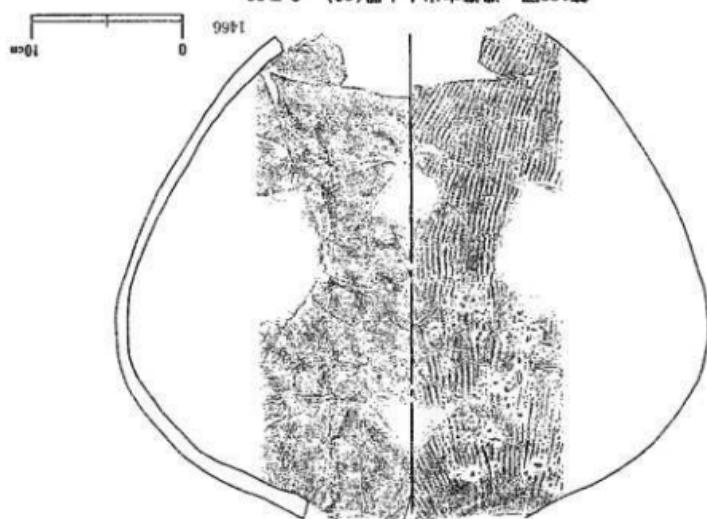
第130圖 遷縣內出土土器(61) S T26·S 127

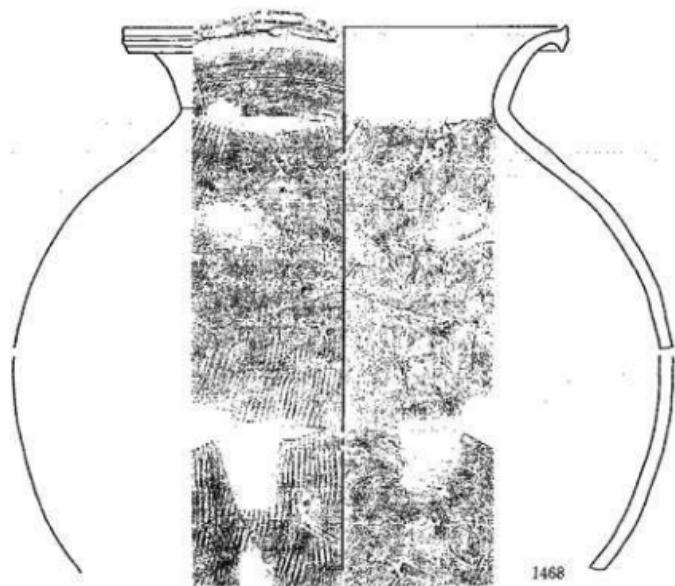
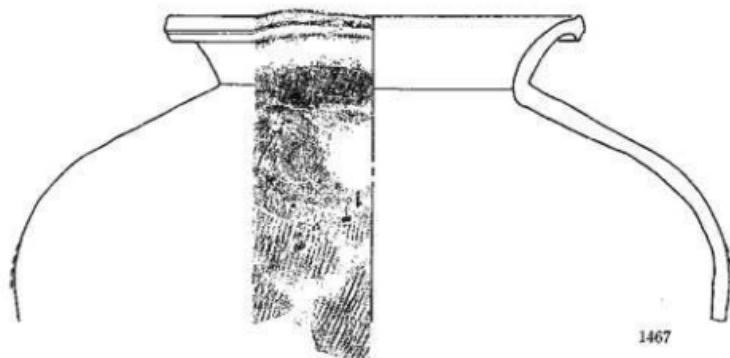




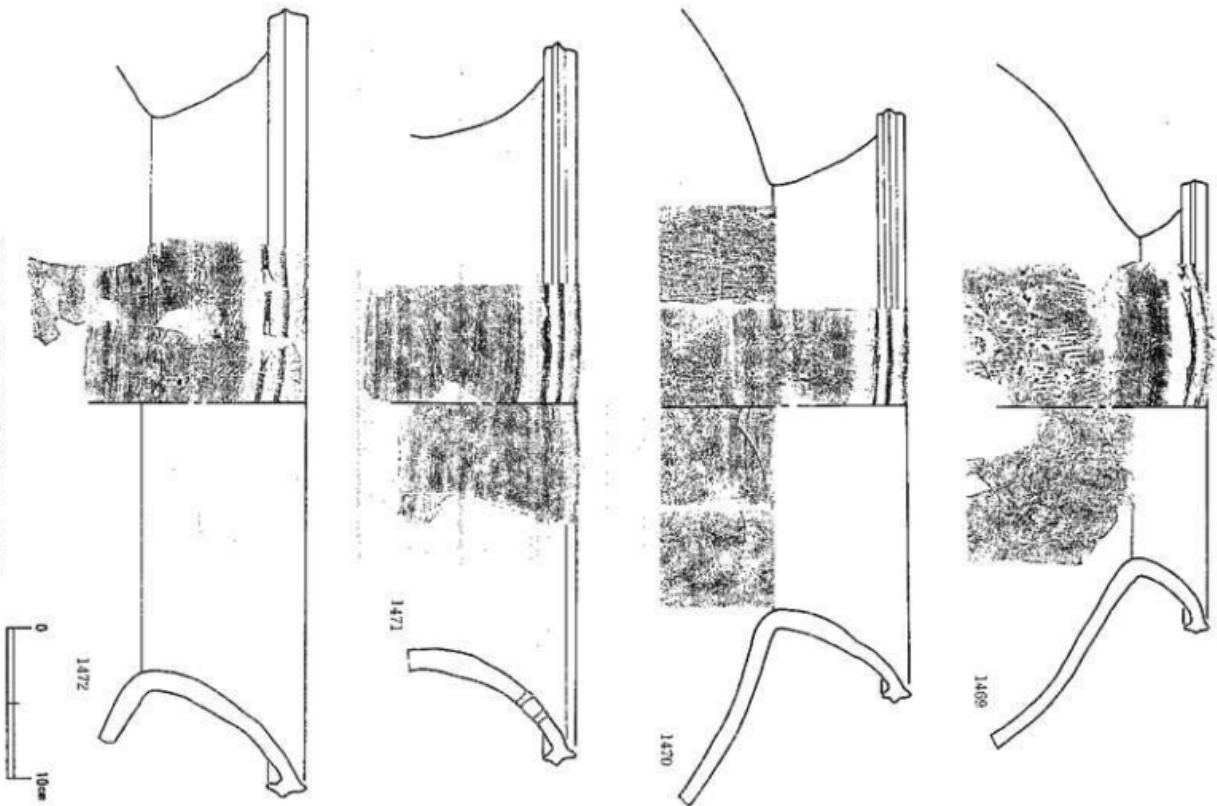
第131図 遺構内出土土器(62) S T 26

第132図 遺構内出土土器(63) S T26





第133図 遺構内出土土器(64) ST 26



第134図 通構内出土器(65) S T 26

S T26からは、杯蓋・高台付杯・杯・壺・高环・鉢・横瓶・甕(1415~1455・1460~1472)が出土している。

杯蓋(1415~1427)(第129図、第75表)

天井が低く平坦なもの(1415・1418~1425)、扁平なもの(1426~1427)がある。端部はどちらも水平から屈折して、直立もしくは内傾する。天井部の切り離しは回転糸切りのものが多い(1415・1423~1427)。

高台付杯(1428~1440・1443)(第129・130図、第75・76表、図版50-12、78-6)

高台は幅が太くやや外傾するもの(1429・1430)、狭く直立するもの(1428)、狭くやや外傾するもの(1439・1440)などがある。高台接地部は窪んで外側だけが接地する形態が多い。切り離しには回転糸切りの認められるものが多い(1428~1434・1437)。1443は大ぶりのもので、塊形になる可能性がある。

杯(1441・1442・1444・1448)(第130図、第76表、図版80-4)

口縁が内湾気味のもの(1441)、外反するもの(1442・1444)がある。切り離しは、回転糸切りのもの(1441・1444・1448)、回転笠切りのもの(1442)がある。

壺(1446・1449~1454)(第130図、第76表、図版58-9・10、84-8)

1449は短頸壺、1450~1454は長頸壺である。1450・1451・1453は成形時の三段構成資料である。

高杯(1447)(第130図、第76表)

盤状を呈するものであるが、剝落部分の大きさを見ると杯蓋などのつまみがはずれたものとは考え難い。したがって高杯脚下端部と考えられる。

鉢(1455・1461)(第130・131図、第76・77表)

1455は鉢と考えられる。1461は頸部がくの字状に緩く屈曲し、口唇部は浅く窪んでいる。

横瓶(1460)(第131図、第77表、図版59-7)

口唇部は窪み、肩部の傾斜が強い例である。全体に自然釉が掛かっている。

甕(1445・1462~1472)(第130~134図、第76・77表、図版65-4~6、70-4~8、66-1)

1445は口唇部が丸く仕上がり、縦・横に交差する寛書き沈線を口縁部にもつめずらしいものである。他には、中型と考えられるもの(1462・1466~1469)、大型と考えられるもの(1470~1472)がある。1463を除くすべての口唇部中央と内外には稜をもつ特徴がある。中央の稜は中型では低く、大型では強調されている。1471の口唇部直下には2つの穿孔をもつ。

2 壓穴住居跡

S I 27(第135図、図版33)

S I 27はN L53区を中心とした緩斜面に位置し、西側半分は深い覆土のためトレンチで削平された状態である。この住居跡は全面が深い削平を受け、覆土は10cm前後をとどめるのみで

ある。形態は残存する一辺が3.7mの四角形で、幅20~30cm深さ10cmの全周する周溝をもつ。西辺隅寄りのカマドは周溝の上に構築されている。このカマドの中軸線上で住居壁に当たる部分よりやや内側には、伏せて重ねた2点の須恵器坏(第130図、1456・1459)が支脚に転用されていた。また住居跡の底面は西側にかけて緩く傾斜している。遺物は須恵器坏2点のほかに、土師器の細片が数点出土している。

出土遺物

S I 27のカマドからは1456と1459の坏が1456を上にして出土した。

坏(1456・1459)(第130図、第76・77表)

口縁はどちらもやや外反し、切り離しは箒切りである。1459の底面には墨書きが認められる。

3 烟状造構

S N 22(第25図、図版34)

S N 22はN C 53区を中心とした緩斜面に位置し、標高は57mである。規模は一辺が80~85cm、深さが約40cmで、隅丸方形形状を呈している。底面はやや凹凸をもつがほぼ水平で、壁は僅に傾きしっかりしている。南側壁上端の中央には、25cm×15cmの半円形状のピットがある。ピットは深さが15cmあり、その底面と壁は僅に焼けている。この覆土の上位には灰白色の火山灰が約10cmの厚さで堆積していた。遺物は出土していない。

4 土坑

S K 21(第136図、図版35-1)

S K 21はMR 56杭を中心にした急斜面に位置し、標高は62.5mである。規模は長軸1.55m×短軸1.4m深さが25cmを測り、長軸方向がS-50°-Eを指す略円形を呈している。斜面上方で一旦斜面に沿った浅い窪みとなり、さらに摺鉢状に緩く弯曲している。底面付近には、甕の破片がやまとまって出土した。

S K 23(第93図、図版36)

S K 23はMQ 54杭を中心に位置しており、標高は59.5mである。規模は長軸3.5m×短軸2.7m深さ約50cmを測り、長軸方向が東西方向を指す半月形を呈している。壁から底面にかけては摺鉢状に極く弯曲するが、斜面上方の底面がやや高い。覆土の底面付近には灰白色の火山灰が約15cmの厚さで堆積し、底面には須恵器を主体にした破片がまとめて出土した。

出土遺物

S K 23からは坏・甕(1458・1473)が出土している。

坏(1458)(第130図、第77表、図版80-7)

甕(1473)(第138図、第77表、図版66-2)

中型と考えられる甕である。口唇部は中央と内外に強い稜をもつ。

S K24(第136図、図版37)

S K24はM P 53区に位置し、標高は59mである。長軸1.75m×短軸1.65mで、深さは約15cmである。形態は斜面下方の一辺が直線的になり、それを軸に半円形状を呈する不整形である。底面は斜面に沿った傾斜をもち、下方でやや窪む。覆土上位には灰白色の火山灰が薄く堆積し、底面には甕の破片が少量出土した。

出土遺物

S K24からは甕(1474)が出土している。

甕(1474)(第138図、第77表)

中型と考えられる甕である。口唇部は中央と内外に強い稜をもつ。

S K25(第136図、図版35-2)

S K25はMD 53区に位置し、標高は59.7mである。規模は長軸2.9m×短軸55~85cm深さ25cmを測り、長軸方向がN-30°-Wを指す溝状を呈している。この長軸は等高線に沿い斜面上方と下方は50cm~1mの幅で浅く窪んでいた。しかし、周囲の窪みは直接関係ないので溝状の土坑にしてある。底面は横断面で緩く弯曲し長軸方向はほぼ水平である。覆土上位には灰白色の火山灰が約20cmの厚さで堆積している。遺物は出土していない。

5 遺構外出土土器

遺構外からは坏蓋・高台付坏・坏・壺(1475~1492)の土器が出土している。

坏蓋(1475~1480)(第139図、第77・78図、図版78-4)

天井が平坦なものだけである。ボタン状のつまみの付くもの(1476・1477)がある。1477と1478は同じ焼成状態であるが、内面が黒色処理されている。1476の切り離しは不明瞭な回転糸切りで1478には、つまみをつける時の溝が見える。これらは土師器と考えられる。

高台付坏(1490~1492)(第139図、第78表)

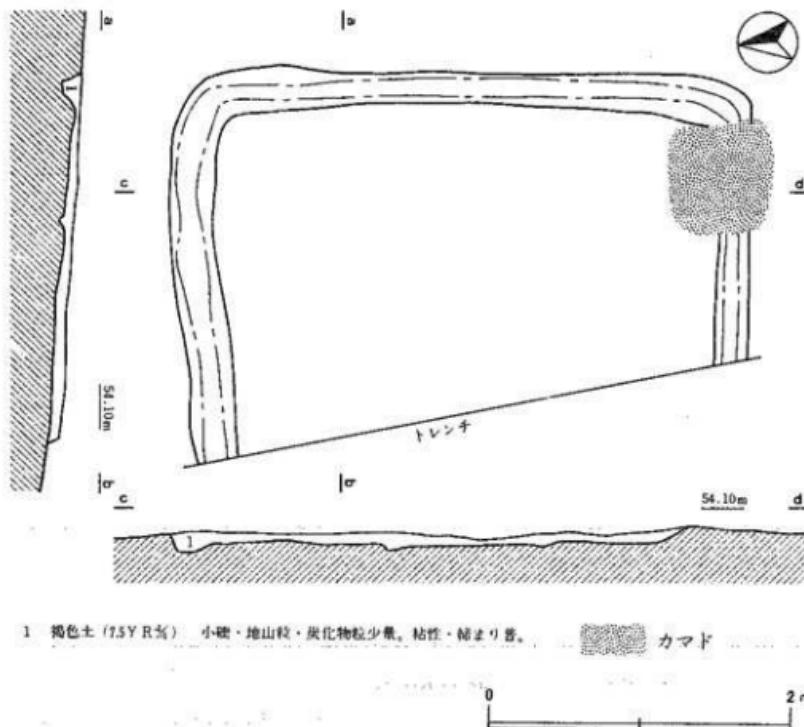
高台が短く角張るもの(1490)と長く外反するもの(1491・1492)がある。1491は内外に1492は内面に黒色処理した部分がある。これらは土師器と考えられる。

坏(1481~1488)(第139図、第78表)

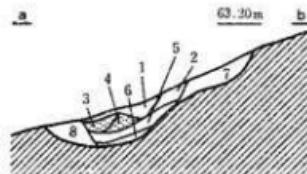
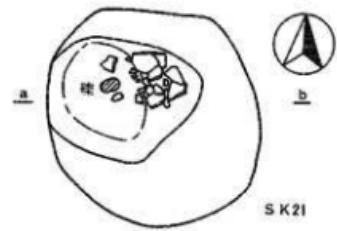
1481の切り離しは範切りで範書きの「エ」が認められる。1482~1488の底面には回転糸切り痕が認められる。

壺(1480~1489)(第139図、第78表)

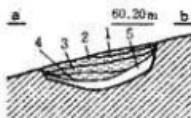
1480は成形時の三段構成で長頸壺と思われる。1489は壺の資料である。



第135図 S 127平面図



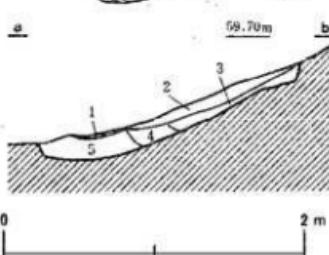
- S K21
- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色土 (10Y R 5%) | 粘性・縮まり普通。 |
| 2 暗褐色土 (10Y R 5%) | 粘性普通。縮まり強。 |
| 3 黄褐色土 (10Y R 5%) | 火山灰。粘性弱。縮まり普通。 |
| 4 明黄褐色土 (25Y R 5%) | 火山灰。粘性弱。縮まりややある。 |
| 5 黄褐色土 (10Y R 5%) | ブロック状に火山灰含む。粘性・縮まり普通。 |
| 6 黄褐色土 (10Y R 5%) | 粘性・縮まり強。 |
| 7 にふい黄褐色土 (10Y R 5%) | 地山粒少量。粘性普通。縮まり強。 |
| 8 純色土 (10Y R 5%) | 粘性・縮まり普通。 |



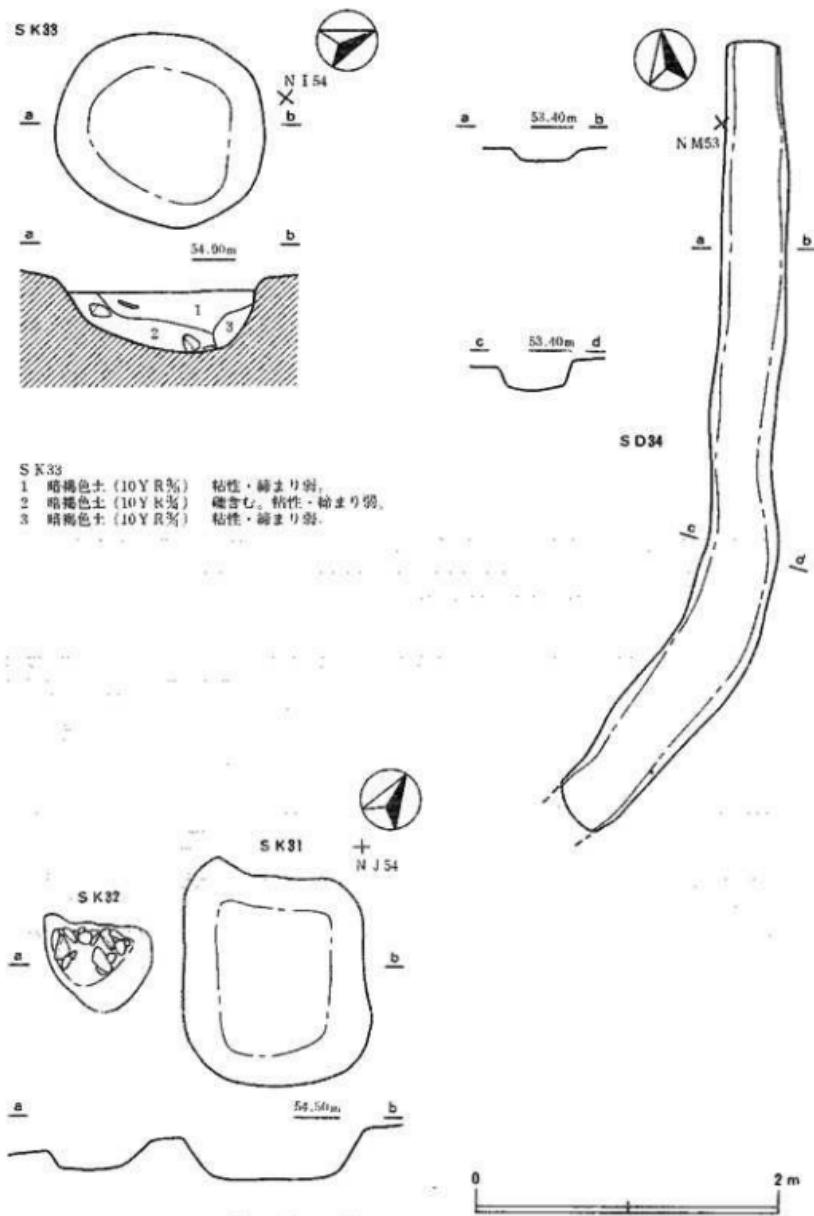
- S K25
- | | |
|----------------------|------------------|
| 1 にふい黄褐色土 (10Y R 5%) | 火山灰。粘性弱。縮まりややある。 |
| 2 にふい黄褐色土 (10Y R 5%) | 火山灰。粘性弱。縮まりややある。 |
| 3 黑褐色土 (10Y R 5%) | 火山灰。粘性弱。縮まり普通。 |
| 4 にふい黄褐色土 (10Y R 5%) | 火山灰。粘性弱。縮まり普通。 |



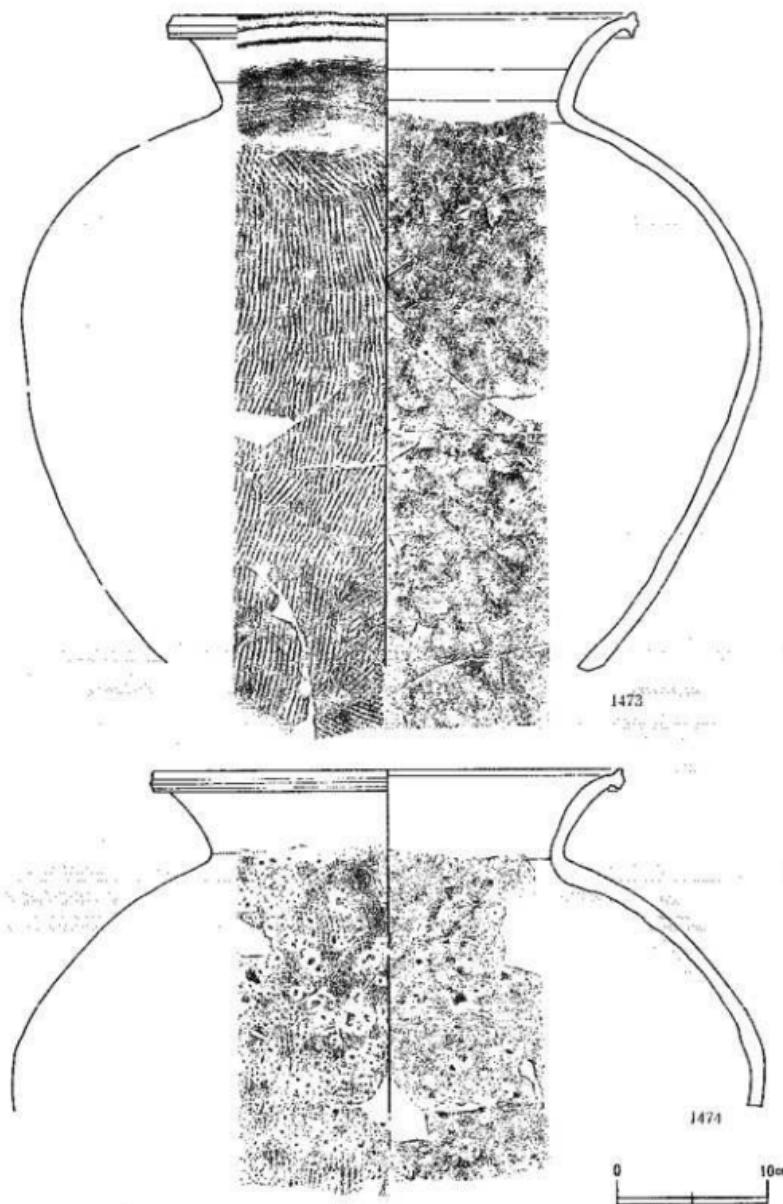
- S K24
- | | |
|----------------------|------------------|
| 1 にふい黄褐色土 (10Y R 5%) | 火山灰。粘性弱。縮まり普通。 |
| 2 黑褐色土 (10Y R 5%) | 小石少量。粘性強・縮まり普通。 |
| 3 純色土 (7.5Y R 5%) | 地土粒微細。粘性普通。縮まり強。 |
| 4 黄褐色土 (10Y R 5%) | 砂・堆多量。粘性・縮まり普通。 |
| 5 黄褐色土 (7.5Y R 5%) | 堆多量。粘性・縮まり普通。 |



第136図 土坑平面図(2)

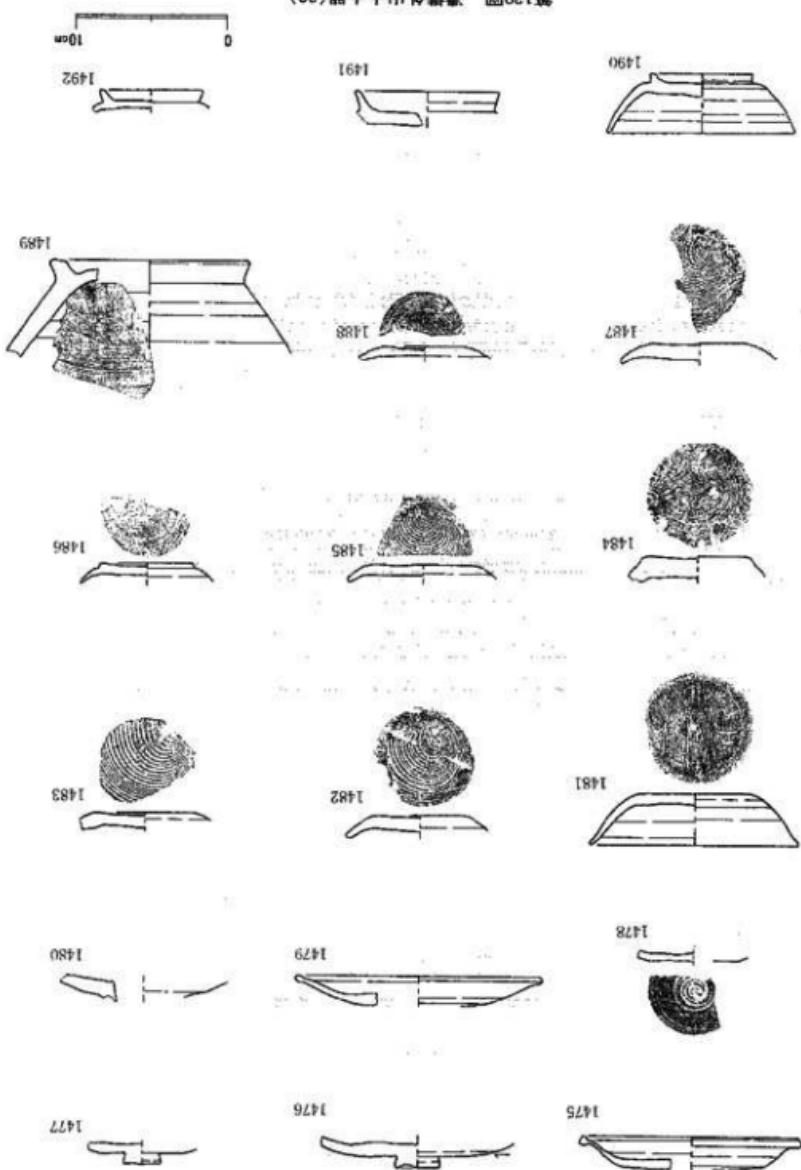


第137図 土坑平面図(3)およびSD34



第138図 遺構内出土土器(66) SK23-24

第139圖 遷縣外出土土器(30)



第2表 土器観察表(1)

単位cm

博物館・団体	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
9-1	S J 0 1	杯蓋 高 2.7	天井は低く平坦 体部は緩く傾く 端部は正三角形 つまみはボタン状	切削は荒切→削 端部は鋸歯状	0.1前後の白色 砂粒顯著 塗装	灰
41-1		口15.3 天 1.9				
9-2	S J 0 1	杯蓋 (口15.7) 天 2.1	天井は低く平坦 体部は緩く傾む 端部は唇が突出し三角形状	+	0.1以下の砂粒 顯著 塗装	褐灰
9-3	S J 0 1	杯蓋 高 2.4	天井は丸く低い 体部は緩く膨む 端部は唇が丸く盛る つまみはボタン状	切削は荒切?→削 削量	0.1以下の砂粒 良好	灰白
41-2		(口14.7) 天 1.7				
9-4	S J 0 1	杯蓋 高 2.2	天井は低く平坦 体部は緩く傾く 端部は逆5字で立つ つまみはボタン状	+	+	灰褐
41-3		口13.2 天 1.6				
9-5	S J 0 1	杯蓋 (口13.2) 天 1.6	天井は低く平坦 体部は緩く傾む 端部は逆5字で外に傾く	+	+	+
9-6	S J 0 1	杯蓋 高(1.8)	天井は低く平坦 つまみはボタン状	+	+	堅板 灰褐・同
9-7	S J 0 1	杯蓋 (口14.6) 天 2.1	天井は丸く低い 体部は緩く傾く 端部は唇に逆5字で軽く立つ	+	0.1以下の砂粒 削量 良好	灰白
9-8	S J 0 1	杯蓋 (口13.9) 天 2.2	天井は低く平坦 体部は緩く膨む 端部は逆5字で唇部がやや盛る	+	0.1以下の砂粒 削量 良好	+
9-9	S J 0 1	杯蓋 高 3.6	天井は高く平坦 体部は緩く反る 端部は逆5字で内傾 つまみはボタン状	切削は荒切→荒削 削量	0.1~0.2の砂粒 堅板	オリーブ'灰
		(口13.1) 天 2.7				
9-10	S J 0 1	杯蓋 高(1.6)	天井は丸い つまみはボタン状	+	細砂微量 良好	灰白・同
9-11	S J 0 1	杯蓋 高(1.8)	+	+	細砂顯著 堅板	灰・灰オリーブ
9-12	S J 0 1	杯蓋 高(1.2)	天井は平坦 つまみはボタン状	+	細砂微量 堅板	灰・同
9-13	S J 0 1	杯蓋 高(1.2)	天井は平坦で広い	切削は少切→荒削	細砂微量 堅板	灰白・同
9-14	S J 0 1	高台付杯 高(2.5) (底 8.0)	底部はやや丸い 高台は方形状で外に張る	切削は荒切?→削 体下端荒削	0.1以下の砂粒 削著	灰
9-15	S J 0 1	高台付杯 高(3.1)	底部は緩く膨む 底部は平坦 高台は方形状で立つ 横地部は凹む	切削は荒切 削量	0.1以下の砂粒 堅板	灰褐
9-16	S J 0 1	高台付杯 高(2.0) (底 7.4)	底部は緩く膨む 底部は平坦 高台はやや丸み有り 高台は方形状で外に張る	+	+	+
78-5		(底 7.7)				
9-17	S J 0 1	高台付杯 高(1.7)	底部は平坦 高台は方形状で外に張る	+	+	+
		(底 7.7)				
9-18	S J 0 1	高台付杯 高(1.7)	底部はやや丸み有り 高台は方形状でやや外に張る 横地部は底に回む	+	+	灰
		底 8.3				
9-19	S J 0 1	高台付杯 高(1.4)	高台は方形状でやや外傾 横地部は張る 底に回む	+	+	灰白
		底 7.4				

第3表 土器観察表(2)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
9-20 51-1 79-5-6	SJ 01	环 高 3.2 (口13.8 底 8.0)	口縁は内凹気泡 体部は緩く膨む 底部は中央で高く端は丸い	切離は荒切→撫 滑削痕 内に筋痕 細密	0.1前後の砂粒 不良	灰
9-21	SJ 01	环 高 2.9 (口14.3) (底 8.5)		切離は荒切→撫 内にコテ痕有	少 壓密	灰
9-22	SJ 01	环 高 3.1 (口14.0) (底 9.2)	口縁は内凹 体部は直線的 底部は緩く横削し端は丸い	切離は荒切→撫 内に平行な筋痕	少 壓密	灰
9-23	SJ 01	环 高 3.2 (口13.1) (底 8.2)	口縁は内凹気泡 体部は緩く膨む 底部は中央でやや高く端は丸い	少	良好	灰色
9-24	SJ 01	环 高 3.0 (口13.4) (底 9.0)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部はほぼ平坦で端は丸い	切離は荒切→撫 内にコテ痕有	少 壓密	灰
9-25	SJ 01	环 高 3.1 (口13.7) (底 8.5)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は中央で高く端は丸い	切離は荒切→撫 内に平行な筋痕	少 壓密	灰白
9-26	SJ 01	环 高 2.9 (口14.2) (底 8.8)	口縁体部とも直線的 底部は平坦で端は丸い	少	少 壓密	灰
9-27	SJ 01	环 高 3.1 (口13.2) (底 8.0)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は中央で高く端は丸い	切離は荒切→撫 内に平行な筋痕	少 壓密	明オリーブ灰 オリーブ灰
10-28	SJ 01	环 高 2.9 (口12.5) 底 7.6	口縁は直線 体部は緩く膨む 底部は中央でやや高く端は丸い	切離は荒切→撫 滑削痕	少 壓密	灰白
10-29	SJ 01	环 高 3.1 (口13.6) (底 9.0)	口縁は内反気泡 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	切離は荒切→撫	少 不良	少
10-30	SJ 01	环 高 3.0 (口13.5) (底 7.7)		少	少 良好	灰黄褐色
10-31	SJ 01	环 高 3.2 (口12.9) (底 8.0)		切離は荒切→撫 滑削痕	0.1以下砂粒 少量 壓密	灰白
10-32	SJ 01	环 高 3.1 (口12.5) (底 7.0)	口縁は内凹 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	切離は荒切→撫	0.1前後の砂粒 不良	少
10-33	SJ 01	环 高 3.2 (口12.2) (底 7.1)	口縁は内凹 体部は緩く膨む 底部は中央部が盛り上り端は張る	切離は荒切→撫 体下端荒削り	0.1前後の砂粒 敷量 良好	にぶい黄褐色
10-34	SJ 01	环 高 3.1 (口13.2) (底 9.3)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	切離は荒切→撫 滑削痕	0.1以下砂粒 不良 壓密	灰白
10-35	SJ 01	环 高 3.0 (口13.6) (底 8.8)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は中央側がやや盛る	切離は荒切→撫	少 良好	灰色

第4表 土器観察表(3)

単位cm

測定・開版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
10-36	SJ 01	环 高 3.1 (口13.0) (底 8.5)	口縁は直線的 体部も直線的 底部は平坦で端は丸い	切削は直切→撫	0.1以下の砂粒 頗る 良好	灰白
10-37	SJ 01	环 高 2.9 (口12.1) (底 8.2)	口縁は外反気味 体部は直線的 底部はやや丸味をもつ	撫削	少々 堅硬	にぶい黄 灰黄
10-38	SJ 01	环 高 2.9 (口12.9) (底 7.2)	口縁は外反気味 体部は直線的 底部の端は僅に凹む	切削は直切→撫	0.1の砂粒少量 堅硬	灰白
10-39	SJ 01	环 高 3.1 (口13.1) (底 8.5)	口縁は内反気味 体部は直線的 底部は端で丸い	切削は直切→撫	0.1以下の砂粒 微量 堅硬	墨灰 明褐色
10-40	SJ 01	环 高 2.8 (口13.7) (底 7.4)	口縁はやや外反 体部は最も膨み大きくなる く開く 底部は合状で端は底上る	切削は直切→撫	0.1前後の砂粒 頗る 堅硬	灰 灰白
10-41	SJ 01	环 高 3.0 (口12.9) (底 8.3)	口縁は外反気味 体部は直線的 底部はほぼ平坦で端は丸い	切削は直切→撫	0.1以下の砂粒	墨灰
51-2				撫削	少々 堅硬	
10-42	SJ 01	环 高 2.5 (口13.0) (底 8.3)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部はほぼ平坦で端は丸い	切削は直切→撫	0.1前後の砂粒 頗る 堅硬	灰白 灰
10-43	SJ 01	环 高 3.0 (口12.8) (底 8.3)	口縁は直線的 体部は最も膨む 底部は中央がやや高く端は丸い	切削は直切→撫	0.1前後の砂粒 微量 堅硬	灰白
10-44	SJ 01	环 高 3.1 (口12.7) (底 8.0)	口縁は直線的 体部は最も膨む 底部は中央でやや高く端は丸い	切削は直切→撫	0.1以下の細砂 頗る 良好	灰 灰白
10-45	SJ 01	环 高 2.8 (口13.2) (底 8.5)	口縁は外反気味 体部は最も膨む 底部は中央でやや高く端は丸い	切削は直切→撫	0.1以下の砂粒 微量 良好	
10-46	SJ 01	环 高 2.8 (口13.3) (底 8.5)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は中央で直場に高く端は丸い	撫削	0.1前後の砂粒 微量 良好	灰白
10-47	SJ 01	环 高 3.0 (口12.9) (底 8.2)	口縁はやや外反 体部は最も膨む 底部は平坦で端は丸い	切削は直切→撫	0.1以下の細砂 少々 堅硬	オーリーブ灰
10-48	SJ 01	环 高 3.2 (口12.5) (底 7.6)	口縁は直線的 体部は最も膨む 底部は平場で端は丸い	切削は直切→撫	0.1の砂粒微量 堅硬	灰白
10-49	SJ 01	环 高 3.0 (口12.9) (底 7.7)	口縁は強く外反 体部は最も膨む 底部は平坦	切削は直切→撫	0.1以下の砂粒 微量 良好	墨灰
10-50	SJ 01	环 高 2.8 (口12.6) (底 8.2)	口縁は外反 体部は直線的 底部は中央がやや高く端は丸い	撫削	0.1以下の砂粒 頗る 堅硬	灰白 オーリーブ灰
10-51	SJ 01	环 高 3.4 (口12.5) (底 6.4)	口縁は外反 体部は直線的 底部は平場で端が凹む	切削は直切→撫	少々 堅硬	黒褐色 灰

第5表 土器観察表(4)

単位cm

擇図・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
10-52	S J 01	环 高 3.2 (口13.0) (底 7.2)	口縁は外反 体部は膨む 底部は平坦	切離は荒切→無 底円盤状	0.1以下の砂粒 微量 良好	灰白 *
10-53	S J 01	环 高 3.2 (口12.0) (底 6.8)	体縁から口縁にかけて外反 体底下位 は膨む 底部は平坦で端は壘に因る	切離は荒切→無 透明感	0.1以下の砂粒 少量 堅穢	オリーブ灰 *
10-54	S J 01	环 高 3.2 (口12.8) (底 7.7)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は 平坦で端は丸い	切離は荒切→無 底円盤状	0.1~0.2の砂粒 顯著 良好	灰白 *
10-55	S J 01	环 高 3.0 (口12.2) (底 7.4)	口縁は内凹気味 体部は直線的 底部 は平坦で端は丸い	*	0.1前後の砂粒 顯著 良好	オリーブ灰
10-56	S J 01	环 高 3.4 (口11.7) (底 6.4)	口縁は内凹 体部は緩く膨む	切離は荒切→無 体部下端鋸削	0.1以下の砂粒 微量 堅穢	灰白 *
10-57	S J 01	环 高 3.7 (口13.2) (底 8.5)	体縁から口縁にかけて直線的 底部は 平坦で端は丸い	切離は荒切→無 微量 不良	0.1以下の砂粒 不良	灰白 *
10-58	S J 01	环 高 3.3 (口10.7) (底 7.2)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部 は平坦でやや厚く端は丸い	切離は荒切 透明感	*	褐色
11-59	S J 01	环 高 3.9 (口13.0) (底 7.8)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部 は平坦で端は角張る	切離は荒切→無 体部最下端削	0.1以下の砂粒 不良	褐色
11-60	S J 01	环 高 3.4 (口12.3) (底 6.1)	口縁は外反気味 体部は直線的 底部 は平坦で端は角張る	切離は荒切→無 体部下端鋸削	0.1前後の砂粒 顯著 良好	灰白
11-61	S J 01	环 高 3.9 (口13.8) (底 7.2)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は 中央で厚く端は角張る	切離は荒切→無 体部下端鋸削	0.1以下の砂粒 顯著 不良	灰白
11-62	S J 01	环 高 3.3 (口13.1) (底 7.7)	口縁はやや外反 体部は緩く膨む 底 部はほぼ平坦で端は角張る	切離は荒切→無 体部下端鋸削	0.1前後の砂粒 顯著 不良	オリーブ灰 *
11-63	S J 01	环 高 3.2 (口12.4) (底 5.3)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部 は中央がやや高く端は角張る	切離は荒切→無 切	0.1以下の砂粒 微量 良好	灰白 *
11-64	S J 01	环 高 3.5 (口12.4) (底 5.4)	口縁はやや外反 体部は緩く膨む 底 部は中央が高く端は角張る	*	0.1の砂粒微量 堅穢	灰 *
11-65	S J 01	环 高 (3.3) (底 5.8)	体部は大きく膨む 底部中央はやや高 く端は角張る	体部下端鋸削→余 切	0.1以下の砂粒 微量 不良	灰白 *
11-66	S J 01	环 底 5.8	底部は中央がやや高く端は角張る	体部下端鋸削→余切	0.1前後の砂粒 微量	褐色・灰
11-67	S J 01	环 (底 5.9)	*	*	0.1以下の砂粒 微量 不良	灰白・同
11-68	S J 01	环 底 5.5	*	*	*	不良 *
11-69	S J 01	环 底 5.8	*	*	*	堅穢 黄灰・同
11-70	S J 01	环 底 5.5	*	*	*	良好 淡黄・同

第6表 土器観察表(5)

単位cm

博物・国版	出土地点	器種・伝承	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
11-71	SJ01	环 底 6.1	底部は中央がやや高く端は角張る	体下端鋸削→手切	0.1以下砂粒 微量 不良	灰白・同
11-72	SJ01	环 底 6.2	〃	〃	0.1程度砂粒 微量 良好	灰白・同
11-73	SJ01	环 底 5.5	〃	〃	0.1以下砂粒 微量 良好	灰・同
11-74	SJ01	环 底 5.5	〃	〃	〃 良好	灰白・同
11-75	SJ01	环 高(2.5) 底 5.7	体部は大きく膨む 底部は中央がやや 高く端は角張る	〃	〃	灰白 良好 〃
11-76	SJ01	环 (底 6.0)	〃	〃	〃 良好	灰白
11-77	SJ01	环 底 5.0	底部は中央がやや高く端は角張る	切離は手切	0.1以下の砂粒 微量	オリーブ灰・ 同
11-78	SJ01	环 底 5.1	〃	〃	〃 硬板	灰黄・灰白
11-79	SJ01	环 底 6.0	〃	〃	〃 不良	灰白・同
11-80	SJ01	环 底 5.2	〃	〃	〃 良好	灰黄・オリーブ 灰
12-81	SJ01	环 (底 6.0)	〃	〃	細砂少量 微量	灰白・浅黄
12-82	SJ01	环 底 6.3	〃	〃	〃	端灰黄・同
12-83	SJ01	环 底 5.7	〃	〃	0.1以下の砂粒 微量	にじみ緑・同
12-84	SJ01	环 底 5.8	〃	〃	〃 良好	灰白・同
12-85	SJ01	环 底 5.5	底部は平坦で端は角張る	〃	〃 良好	灰黄・同
12-86	SJ01	环 底 5.4	底部は中央がやや高く端は角張る	〃	〃 良好	灰白・淡黄
12-87	SJ01	环 底 5.9	〃	〃	〃 良好	灰黄褐・灰オ リーブ
12-88	SJ01	环 底 5.3	〃	〃	〃 硬板	オリーブ灰・ 同
12-89	SJ01	环 底 6.3	底部は中央がやや高く端はやや丸い	〃	0.1の砂粒微量 良好	灰白・灰オリーブ
12-90	SJ01	环 (底 5.5)	底部は中央がやや高く端は角張る	〃	0.1以下の砂粒 微量	淡黄・灰白
12-91	SJ01	环 (底 6.0)	〃	切離は2面の手切	〃 良好	難灰黄・灰オ リーブ
12-92	SJ01	环 (底 5.7)	〃	切離は手切	〃 硬板	灰・同
12-93	SJ01	环 (底 5.6)	〃	〃	〃 良好	灰黄・浅黄
12-94	SJ01	环 (底 5.7)	体部は大きく膨む 底部は中央がやや 高く端は角張る	〃	〃	黄灰 硬板 灰白
12-95	SJ01	环 高(1.5) (底 6.5)	体部は膨む 底部は平坦で厚く端は角 くなる	体部下端鋸削→切 離は直切→擦	0.1の砂粒微量	浅黄
12-96	SJ01	环 底 6.3	体部は膨む 底部はほぼ平坦で端は丸 くなる	〃	0.1以下の砂粒 微量 硬板	灰褐 青灰
12-97	SJ01	环 底 7.0	底部は平坦で中央が高く端は凹む	切離は落切	0.1以下の砂粒 微量	灰・同
12-98	SJ01	环 底 7.2	底部は平坦で端は丸い	切離は落切→擦	〃 硬板	オリーブ灰・ 同
12-99	SJ01	环 底 6.6	底部はやや丸い	〃	0.1の砂粒微量 不良	淡黄・同

第7表 土器観察表(6)

単位cm

編目・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・併成	色・調
12-100	S J 0 1	环 高(2.3) (底 8.0)	体部は緩く膨む 底部は平坦で中央上 端は厚い 端部は角張る	切削は直切一撃 底は円盤状	0.1以下の砂粒 少量	灰白 〃
12-101	S J 0 1	环 高(1.2) 底 8.4	体部は緩く膨む 底部はやや丸くなり 端はやや角張ってから凹む	切削は直切一撃 底は円盤状	0.1以下の砂粒 良好	灰白 佳
12-102	S J 0 1	环 高(1.5) 底 7.3	底部はほぼ平坦で中央が厚い 端部は 角張ってから凹む	切削は直切一撃 底は円盤状	0.1以下の砂粒 少量	灰白 〃
12-103	S J 0 1	环 高(1.7) 底 6.1	体部は緩く膨む 端部はやや丸く端も 丸い	〃	〃	灰白 良好
12-104	S J 0 1	环 高(0.9) 底 7.5	底部はほぼ平坦で中央が厚い 端部は 丸い	〃	0.1前後の砂粒 顯著	灰白 〃
12-105	S J 0 1	环 高(1.1) 底 7.6	底部は厚くほぼ平坦 端部は丸い	〃	0.1以下の砂粒 微量	灰白 〃
12-106	S J 0 1	双耳 高(1.8)	耳部が口唇底面に取り付く 外側に30° 前後の傾きをもつ	耳部は全面荒削	〃	灰白 良好
12-107	S J 0 1	*	高(2.6)	〃	〃	良好
13-108	S J 0 1	横瓶 高(20.3) (底7.0) (横30.7)	横形の膨みをもつ	外は平行叩一撃且 内は円文叩一撃 粗目	0.1前後の砂粒 少量	灰黄褐 灰褐
59-1						
13-109	S J 0 1	壺 高(4.5)	頸部は縦い、くの字 体上位は緩く張る	外は平行叩 内は やや弧状の叩	0.1前後の砂粒 微量	灰 堅緻
13-110	S J 0 1	壺 高(7.7)	頸部は直立丸條 体上位は緩くなだら か 前部中央が最大?	外は直 内は縦筋 状の叩?	〃	オリーブ墨 灰
13-111	S J 0 1	並頭壺 高(1.8)	肩が張る	つくりは3段構成	〃	灰オーブ 灰
13-112	S J 0 1	並頭壺 高(14.7) (底10.8)	肩部は丸塊をもって強く張る 全体胴 は筒形に近い	外は荒削 肩は粗 内は粗	0.1以下の砂粒 顯著	灰白 堅緻
13-113	S J 0 1	壺? 高(2.0) 底10.4	高台は四角形で外に張る 残底部は板 く凹む	切削は直切り? 内 は粗	〃	灰 〃
13-114	S J 0 1	壺? 高(9.3) (底11.3)	肩部に較大径をもつ? 高台は四角形 で外に張る	外は削・擦 内は 粗	0.1以下の砂粒 少量	〃
13-115	S J 0 1	壺 高(3.9) 底 6.9	体部は大きく膨む 底部は中央がやや 高く端は角張る	肩下端荒削→切削 は系切	0.1前後の砂粒 網多數	〃
13-116	S J 0 1	壺 高(8.0) (口36.4)	口縁は大きく段をつくって直立する 体部は緩く内凹して傾斜する	外は口縁装飾→筑 内は粗	〃	灰白 不規

第8表 土器観察表(7)

単位cm

神奈・国原	出土地点	器種・基量	器形の特徴	接法の特徴	胎土・焼成	色調
14-117	S J 0 1	壺 高(5.6) (口24.9) (底18.6)	口唇はやや丸く内に稜をもつ 顶部はくの字で肩は強く張る	外は平行叩→捺 内も叩→蓋	0.1以下砂粒 頗著 堅緻	灰
14-118	S J 0 1	壺 高(12.5) (口14.7) (底13.0)	口唇は横きやや丸く内に稜をもつ 肩はくの字で体部は丸く膨む	外は体上位で捺→ 下位で削 内は撹	0.1前後の砂粒 少量 堅緻	〃
14-119	S J 0 1	壺 高(7.1) (口15.8) (底13.8)	口唇は横きやや丸く内外に稜をもつ 顶部はくの字で体部は丸く膨む	外は平行叩→撹 内は円文叩の叩	0.1以下砂粒 頗著 堅緻	〃
14-120	S J 0 1	壺 高(7.8) (口24.8) (底21.2)	口唇は平坦で内外に稜をもつ 顶部はくの字で肩は強く張る	外は平行叩→撹 内は円文叩→撹	0.1~0.2砂粒 微量 堅緻	黄灰
67-2			くの字で肩は強く張る			
14-121	S J 0 1	壺 高(9.6) (口19.4) (底18.7)	口唇は横きやや丸く内外に稜をもつ 顶部はくの字で体部は丸く膨む	"	0.1以下砂粒 頗著 堅緻	〃
14-122	S J 0 1	壺 高(17.1) (口20.1) (底17.0)	横く口唇は中央が僅に凹み内外に稜をもつ もつ 顶部はくの字で体部は丸く膨む	外は無く平行叩 内は撹→叩	0.1~0.2砂粒 少量 堅緻	〃
14-123	S J 0 1	壺 高(8.1) (口18.6) (底17.1)	横く口唇は中央が僅に凹み内外に稜をもつ もつ 顶部はくの字で肩は強く張る	外は平行叩→捺 内は円文叩→撹	0.1以下砂粒 頗著 堅緻	〃
14-124	S J 0 1	壺 高(8.1) (口19.0) (底16.2)	"	"	"	〃
67-4						堅緻 〃
14-125	S J 0 1	壺 高(6.7) (口19.6) (底16.4)	口唇は直立し外に強い稜をもつ 肩は強く張り非常に高い	外は平行叩→撹 内は円文叩→撹	"	〃
67-5						堅緻 〃
18-126	SK 0 2	环壺 高(2.6)	天井は丸い つまみはボタン状	切離は鋭切→捺削	0.1以下の砂粒 少量	灰・青灰
18-127	SK 0 2	环壺 高 3.9	天井は高く平坦 体部は横く横く 球	"	0.1~0.2砂粒	明オリーブ灰
41-4		口17.0 天 3.1	部は底5字で底底 つまみはボタン状		微量 堅緻	〃
18-128	SK 0 2	花壺 高 2.8 口13.7 天 2.1	天井は丸くやや低い 体部は横く反る 底部は底5字外傾 つまみはボタン状	"	0.1前後の砂粒	灰白
41-5					微量 堅緻	〃
18-129	SK 0 2	杯 高 3.4 口13.5 天 8.0	口縁は内反 体部は横く膨む 底部は平底で端は丸い	切離は鋭切→撹 底円盤状	0.1の砂粒頗著 良好	〃
18-130	SK 0 2	杯 高 3.3 (口14.1) (底 8.8)	口縁は内反反凸 体部は横く膨む 底部は	"	"	〃
		部の端は丸い			良好	〃
18-131	SK 0 2	杯 高 3.2 (口13.4) 底 8.6	口縁は内反反凸 体部は横く膨む 底	"	0.1~0.2砂粒 頗著 良好	〃
		部は平底で端は丸い				〃
18-132	SK 0 2	杯 高 3.3 口13.5 底 8.0	口縁は内反 体部は横く膨む 底部は	切離は鋭切→撹 底円盤状 平行筋	"	〃
		平底で端は丸い			良好	〃
18-133	SK 0 2	杯 高 3.4 口14.5 底 9.0	"	"	0.1~0.4砂粒 頗著 良好	灰オリーブ 灰

第9表 土器観察表(8)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
18-134	SK 0 2	环 高 3.3 □13.7	口縁は内反 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	切離は窓切→施 内に平行な筋模	0.1前後の砂粒 少量 良好	灰白 *
18-135	SK 0 2 51-3	环 高 3.4 □13.7 底 8.5	*	切離は窓切→施 底円盤状 平行筋	0.1~0.2の砂粒 顯著 良好	*
18-136	SK 0 2	环 高 3.5 (□13.5) (底 8.5)	*	切離は窓切→施 内に平行な筋模	0.1前後の砂粒 顯著 良好	オリーブ灰 現オリーブ灰
18-137	SK 0 2	环 高 3.3 □13.9 底 8.5	*	切離は窓切→施 底円盤状 平行筋	0.2の砂粒微量 顯著 良好	灰白 *
18-138	SK 0 2	环 高 3.1 (□13.0) (底 8.9)	口縁は内両気味 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	切離は窓切→施	0.1以下の砂粒 顯著 良好	*
18-139	SK 0 2	环 高 3.4 □13.8 底 8.0	*	切離は窓切→施 内に平行な筋模	0.1前後の砂粒 顯著 良好	*
18-140	SK 0 2	环 高 3.5 □13.6 底 8.8	口縁は内凹 体部は緩く膨む 底部は中央が高くなり端は丸い	切離は窓切→施 底円盤状 平行筋	*	*
18-141	SK 0 2 -	环 高 3.2 (□14.0) 底 9.2	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	*	0.1以下の砂粒 顯著 良好	*
18-142	SK 0 2	环 高 3.4 (□13.9) (底 8.8)	口縁はやや外反 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	切離は窓切→施	0.1の砂粒顯著	*
18-143	SK 0 2	环 高 3.6 (□12.0) 底 6.4	口縁は直線的 体部は大きく膨む 底部は厚く平坦で端は角張る	切離は窓切→施 内に平行な筋	0.1以下の砂粒 顯著 良好	*
18-144 51-4 79-7	SK 0 2	环 高 3.8 □13.1 底 7.4	*	切離は窓切→施 底は円盤状	0.1~0.2の砂粒 顯著 良好	*
18-145	SK 0 2 51-5	环 高 3.6 □13.1 底 6.6	*	切離は窓切→施 底はやや突出	0.1以下の砂粒 顯著 良好	*
18-146	SK 0 2	环 高 3.5 □13.0 底 7.0	口縁は直線的 体部は大きく膨む 底部は厚く平坦で端は角張る	切離は窓切→施 底は円盤状	*	*
18-147	SK 0 2	环 高 3.6 □14.1 底 7.1	口縁はやや外反 体部は大きく膨む 底部は厚く平坦で端は角張る	切離は窓切→施	0.1以下の砂粒 顯著 不良	*
18-148	SK 0 2	环 高 3.2 □11.9 底 7.0	口縁はやや外反 体部は緩く膨む 底部はやや厚く平坦で端は丸い	切離は窓切→施 底は円盤状	0.3~0.5の小石 微黄 良好	灰オリーブ *
18-149	SK 0 2	环 高 3.6 □12.9 底 7.4	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は厚く平坦で端は緩く角張る	切離は窓切→施 底は円盤状	0.1~0.2の砂粒 顯著 良好	灰白 *

第10表 土器観察表(9)

単位cm

辨別・開版	出土地点	器形・性質	部形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色調
18-150	SK02	杯 高 3.2 口12.5 底 7.5	口縁は直線的 体部もやや直線的 底部は中央が厚く平坦	切離は第1→底 底は円盤状	0.1~0.2の砂粒 頗る 良好	灰白
				"	0.1前後の砂粒 頗る 良好	"
18-151	SK02	杯 高 3.6 口12.5 底 7.2	口縁は直線的 体部もやや直線的 底部は平坦で端はやや丸くなる			
				"	0.1前後の砂粒 頗る 良好	"
18-152 51-6 79-8	SK02	杯 高 3.1 口12.1 底 7.3	口縁は直線的 体部は緩く膨らむ 底部は厚く平坦で端は丸い	切離は第1→底 底は円盤状	"	"
				"	底は円盤状	良好
18-153 51-7 80-1	SK02	杯 高 3.2 口12.3 底 7.5	口縁は直線的 体部は中央やや下で縮く 端は折れ 底部は平坦で端はやや凹む	切離は第1→底 底は円盤状	0.2~0.3の小石 微量	"
				"	底は円盤状	良好
18-154	SK02	杯 高 3.4 口13.0 底 6.9	口縁は外反し直線的 体部は大きく膨らむ 底部は平坦で端は角張る		0.1前後の砂粒 頗る 良好	"
				"	底は角張る	"
18-155	SK02	杯 高 3.2 口12.9 底 7.4	口縁は直線的 体部は大きく膨らむ 底部はほぼ平坦で端は角張る		"	"
				"	底は角張る	"
18-156	SK02	杯 高 3.0 口12.9 底 8.2	口縁は外反しや内凸気味 体部は大きく膨らむ 底部は厚く平坦で端は凹む		"	"
				"	底は凹む	"
19-157	SK02	杯 高 3.4 口12.2 底 7.2	口縁は直線的 体部も直線的 底部は中央が厚く端は屈曲		"	"
				"	底は屈曲	良好
19-158	SK02	杯 高 3.1 口12.2 底 7.2	口縁は外反 体部は緩く膨らむ 底部は中央が厚く端は屈曲		"	"
				"	底は屈曲	良好
19-159	SK02	杯 高 3.1 口12.5 底 7.4	口縁はやや外反 体部は直線的 底部はほぼ平坦で端は丸い		"	"
				"	底は円盤状	良好
19-160	SK02	杯 高 3.2 口12.9 底 5.3	口縁はやや外反 体部は大きく膨らむ 底部は厚く平坦で端は角張る	切離は第1→底 底は円盤状?	0.1以下の砂粒 頗る 良好	灰オリーブ
				"	底は円盤状?	灰白
19-161 80-8	SK02	杯 高 2.9 口12.9 底 7.0	口縁は大きく外反 体部は緩く膨らむ 底部は平坦で端は丸い	切離は第1→底 底は円盤状	0.1前後の砂粒 頗る 良好	"
				"	底は円盤状	良好
19-162	SK02	杯 高 3.0 口13.6 底 7.5	口縁は外反 体部は緩く膨らむ 底部は中央が高く端は屈曲		0.2~0.7の砂粒 小石微量	"
				"	底は屈曲	良好
19-163	SK02	杯 高 3.1 口13.1 底 7.3	口縁は大きく外反 体部は大きく膨らむ 底部は厚くほぼ平坦で端は丸い		0.1前後の砂粒 頗る 良好	"
				"	底は平坦で端は丸い	良好
19-164	SK02	杯 高 3.0 口13.6 底 8.8	口縁はやや外反 体部は大きく膨らむ 底部は平坦で端は丸い	切離は第1→底 底は円盤状?	"	"
				"	底は円盤状?	良好
19-165 51-8	SK02	杯 高 3.4 口13.0 底 7.5	口縁は大きく外反 体部は緩く膨らむ 底部は平坦で端は丸い	切離は第1→底 底は円盤状	0.1以下の砂粒 頗る 良好	"
				"	底は円盤状	良好

第11表 土器觀察表(10)

単位cm

序号・図版	出土地点	部種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色 調
19-166	SK 0 2	环 高 3.0	口縁は外反 体部は大きく膨む 底部	切削は窓切→撫	0.1前後の砂粒	灰白
		□13.4 底 6.3	は中央がやや高く端は丸い		顯著 良好	×
19-167	SK 0 2	环 高 3.8	口縁は崩折し側に内凹気味 体部は直	切削は窓切→撫	0.1以下の砂粒	×
		□13.9 底 7.1	線的 底部はほぼ平坦で端は屈曲	底は円盤状	顯著 不良	×
19-168	SK 0 2	环 高 3.4	口縁は一部肥厚し直線的 体部は大き	切削は窓切→撫	※	※
		□12.9 底 6.4	く膨む 底部はやや柱状		良好	×
19-169	SK 0 2	环 高 3.5	口縁は崩折し直線的 体部は大きく膨	切削は窓切→撫	0.1以下の砂粒	※
		□13.0 底 8.0	む 底部は厚くほぼ平坦	底は円盤状	微量 堅淡	※
19-170	SK 0 2	环 高 3.3	口縁は玉様状 体部は極く膨む 底部	切削は窓切→撫	0.1以下の砂粒	※
		□12.5 底 7.0	ほぼ平坦で端は屈曲		顯著 良好	×
19-171	SK 0 2 51-9	环 高 3.6	口縁は玉様状 体部は極く膨む 底部	体部下端鋸歯?	※	※
		□12.9 底 8.2	はやや丸い	→撫	良好	×
19-172	SK 0 2	环 高 3.7	口縁は直線的 体部は極く膨む 底部	切削は窓切→撫	0.1の砂粒微量	※
		□13.0 底 7.0	は平坦で端は丸い		良好	※
19-173	SK 0 2	环 高 3.1	口縁は崩折し玉様状 体部は極く膨む	※	0.1以下の砂粒	※
		□11.8 底 7.0	底部はほぼ平坦で端は屈曲		顯著 良好	※
19-174	SK 0 2	环 高 3.3	口縁は内凹 体部は極く膨む 底部は	※	※	※
		□11.9 底 6.2	端で丸い		良好	※
19-175	SK 0 2	环 高 3.6	口縁は一端崩折し内凹気味 体部は火	体下端鋸歯→切削	0.1前後の砂粒	※
		□12.9 底 6.7	きく膨む 底部は平坦で端は丸い	は窓切→撫	少量 良好	※
19-176	SK 0 2	环 高 3.6	口縁は直線的 体部も直線的 底部は	※	0.1前後の砂粒	※
		□12.6 底 6.6	厚く平坦で端は面をつくる		顯著 良好	※
19-177	SK 0 2	环 高 3.0	口縁は玉様状 体部は大きく膨む 底	※	※	※
		□12.7 底 6.5	部は平坦で端は丸い		良好	※
19-178 51-10 80-2	SK 0 2	环 高 3.7	口縁は一端崩折し内凹気味 体部は板	体下端鋸歯→切削	0.1以下の砂粒	※
		□13.0 底 6.5	く膨む 底部は平坦で端は丸い	は窓切→撫 円盤状	顯著 良好	※
19-179	SK 0 2	环 高 3.2	口縁は直線的 体部は極く膨む 底部	体下端鋸歯→切削	0.1前後の砂粒	※
		□12.1 底 7.0	は平坦で端は丸い	窓切→撫	微量 良好	※
19-180 51-11	SK 0 2	环 高 3.8	口縁は一端崩折し直線的 体部は直線	体下端鋸歯→切削	0.1前後の砂粒	※
		□12.5 底 7.2	的 底部は平坦で端は丸い	窓切→撫 円盤状	少量 良好	※
19-181 51-12	SK 0 2	环 高 3.2	口縁は一端崩折し玉様状 体部は直線	体下端鋸歯→切削	0.1前後の砂粒	※
		□12.5 底 6.5	的 底部は中央が厚く平坦で端は丸い	は窓切→撫	顯著 良好	※

第12表 土器観察表(11)

単位cm

擇田・西版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
19-182	SK 0 2	环 高 3.2 口13.2 底 7.6	口縁は一端崩折し内反気味 体部は直 線的 底部は中央が低く端は丸い	体下端削削→切離 離は荒切→撫	0.1~0.2の砂粒 少量	灰白 良好
52-1						
19-183	SK 0 2	环 高 3.4 口12.6 底 6.4	口縁は玉縁状 体部は直く膨む 底部 は全体に丸く端は面をつくる	体下端削削→切離 離は荒切→撫	0.1以下の砂粒 顯著	グレーベン 良好
19-184	SK 0 2	环 高 3.3 口12.0 底 6.0	口縁は一端崩折し玉縁状 体部は直線 的 底部は平底で端は丸い	切離	0.1前後の砂粒 顯著	グレーベン 良好
19-185	SK 0 2	环 高 3.5 口12.5 底 5.7	口縁は一端崩折し内反気味 体部は直 線的 底部は中央で高く端は丸い	切離	0.1~0.3の砂粒 顯著	グレーベン 良好
19-186	SK 0 2	环 高 3.5 口12.7 底 7.0	口縁は一端崩折しやや外反 体部は大 きく膨む 底部は全体に丸く端も丸い	体下端削削→切離 離は荒切→撫	0.1以下の砂粒 顯著	グレーベン 良好
20-187	SK 0 2	环 高 3.5 口12.2 底 6.0	体部から口縁にかけて内窪 底部は中 央が高く端は角張る	体下端削削→切離 離は未切	0.1~0.2の砂粒 微量	グレーベン 良好
20-188	SK 0 2	环 高 3.6 口12.7 底 5.5	口縁は玉縁状 体部は大きく膨む 底 部は平底で中央がやや高く端は角張る	体下端削削→切離 離は未切 平行筋底	0.3~0.4の小石 微量	グレーベン 良好
52-2						
20-189	SK 0 2	环 高 3.5 口13.8 底 7.7	口縁はやや外反気味 体部は大きく膨 む 底部は中央が高く端は角張る	体下端削削→切離 離は未切	0.1の砂粒少量	グレーベン 良好
20-190	SK 0 2	环 高 3.5 口12.3 底 5.5	口縁はやや外反 体部は大きく膨む 底部は中央がやや高く端は角張る	切離	0.1前後の砂粒 少量	グレーベン 良好
20-191	SK 0 2	环 高 3.7 口12.7 底 5.7	口縁はやや外反し玉縁状 体部は大き く膨む 底部は厚く平坦で端は角張る	切離	0.1の砂粒少量	グレーベン 良好
79-1						
20-192	SK 0 2	环 高 3.9 口12.8 底 5.2	口縁は外反 体部は大きく膨む 底部 は厚く平坦で端は角張る	体下端削削→切離 離は未切 平行筋底	0.1前後の砂粒 顯著	グレーベン 良好
20-193	SK 0 2	环 高 3.7 口12.5 底 6.2	口縁は外反 体部は大きく膨む 底部 は厚く中央がやや高い	体下端削削→切離 離は未切	グレーベン 良好	グレーベン 良好
52-3						
20-194	SK 0 2	环 高 3.2 口13.0 底 6.2	口縁は外反 体部は大きく膨む 底部 は厚く中央がやや高い	切離	0.1前後の砂粒 少量	グレーベン 良好
20-195	SK 0 2	环 高 4.1 口12.7 底 5.3	口縁は把厚し直線的 体部は大きく膨 む 底部は厚く端は角張る	切離	0.1前後の砂粒 微量	グレーベン 良好
20-196	SK 0 2	环 高 3.7 口13.3 底 6.0	口縁は外反 体部は大きく膨む 底部 は厚く中央がやや高い	切離は未切	0.3~0.4の小石 微量	淡黄 良好
52-4						
20-197	SK 0 2	环 高 3.7 口13.2 底 5.6	口縁は外反気味 体部は直く膨む 底 部は薄く中央が高い 端部は角張る	切離	0.1~0.2の砂粒 微量	灰質 良好

第13表 土器観察表(12)

単位cm

擇回・団版	出土地点	器種・測量	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色・質
20-198	SK 0 2	环 高 4.0	口縁はやや外反 体部は大きく膨らむ	切削は糸切	0.1~0.2の砂粒 重量	灰黒褐色
79-2		口12.7 底 5.9	底部は薄く中央が高い 端部は角張る		良好	浅黄
20-199	SK 0 2	环 底 5.6	底部は薄く中央が高い 端部は角張る	体下端直削→切削 は糸切	0.1以下の砂粒 重量	灰白・同
20-200	SK 0 2	环 底 5.6	"	"	0.2の砂粒重量 厚さ	タ
20-201	SK 0 2	环 高 3.8 (底 6.2)	口縁はやや外反 体部は大きく膨らむ 底部は平坦で端は角張る	切削は糸切	0.1の砂粒重量	"
21-202	SK 0 2	环 底 5.7	底部は中央が高く端は角張る	体下端直削→切削 は糸切	0.1~0.3の砂粒 重量	良好
21-203	SK 0 2	环 高(2.4) (底 5.3)	体部は大きく膨らむ 底部はやや厚く中 央が高い 端部は角張る	"	0.1の砂粒重量	タ
21-204	SK 0 2	环 (底 6.2)	底部は薄く端は角張る	"	"	浅黄・同
21-205	SK 0 2	环 (底 5.7)	底部は中央がやや高く端は角張る	"	0.1の砂粒重量 良好	灰白・同
21-206	SK 0 2	环 (底 6.4)	"	体下端直削→切削 は糸切 内に工具痕 留着	0.1以下の砂粒 重量 不良	にじい黄褐色 灰黒
21-207	SK 0 2	环 (底 6.0)	"	切削は糸切 内に工具痕	" 不良	灰・灰白
21-208	SK 0 2	环 底 5.4	"	切削は糸切	0.1の砂粒重量 良好	灰黒・浅黄
21-209	SK 0 2	环 (底 5.7)	底部は中央が高くやや突出する	"	0.1以下の砂粒 重量 良好	浅黄・同
21-210	SK 0 2	环 (底 5.8)	底部は中央が高く端は角張る	"	0.1の砂粒重量 不良	灰白・同
21-211	S J 0 1	环 (底 5.9)	底部は平ら	"	0.1~0.2の砂粒 重量 良好	浅黄・浅黄
21-212	SK 0 2	环 (底 5.8)	底部は中央がやや高い	"	0.1以下の砂粒 重量 良好	灰白・灰オーリー グ
21-213	SK 0 2	环 (底 5.6)	"	"	良好	灰白・同
21-214	SK 0 2	要	口縁は大きく外反し斜邊状	外は平行印	" 堅敏	灰・オリーブ 黒
21-215	SK 0 2	要	口縁は大きく外反し斜邊	内外とも無	" 堅敏	灰・同
21-216	SK 0 2	要	底部は丸底	外は無 内江平行印	" 堅敏	タ
83-5						
21-217	SK 0 2	要	体部下半 223と同一個体	外は平行印 内は無・縦目・印	" 堅敏	灰白・灰
83-6						
21-218	SK 0 2	要	肩が強く張る	外は平行印・縦目 内は平行印・平行印	0.1前後の砂粒 留着 堅敏	灰・同
83-7-3						
22-219	SK 0 2	長要 高(29.2) (口19.8) (頸17.2)	口縁は一端屈折して外反 端部はくの字	外は無→削→印 内は無・縦目・印	"	灰
60-2		字で胴部は圓形状				
22-220	SK 0 2	要 高(5.9) (口12.6) (頸10.4)	口縁尖端は三角形で下に強い傾きを もつ 脇部はくの字	外は無 内は無・ 印	" 良好	灰白
67-6						
22-221	SK 0 2	要 高(4.2) (口14.7) (頸12.5)	"	外は無 内は無	" 堅敏	タ
67-7						
22-222	SK 0 2	要 高(6.0) (口18.8) (頸15.4)	"	外は無 内は無・ 無	" 堅敏	タ

第14表 土器観察表(13)

単位cm

神國・団版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	粘土・焼成	色・同
22-233	SK 0 2	壺 高(14.3) (口17.2) (底15.8)	頸く口唇は中央が凹み内外に縁をもつ 頸部はくの字で体部は丸く膨む	外は指→平行印 内は指→墨印→印	0.1~0.2の砂粒 顯著 塗装	灰
67-8						灰白
22-224	SK 0 2	長壺 高(22.5)	体部から底部にかけて包孕形	外は指→平行印 内は指→墨印→印	0.1~0.2の砂粒 少量 良好	にぶい質地
60-3						改善度
22-225	SK 0 2	長壺 高(25.7) (口24.8) (底21.6)	口縁は一旦屈折して直立する 頂部は 筒形状	外は指→墨印→削 内は指→横印→印	0.1以下の砂粒少 量 良好	灰黄潤
60-4						灰白
22-226	SK 0 2	横壺 (底 7.8)	横は平底で小さな凹み有り	内外に印		× 塗装 灰白・同
23-227	ST 0 3	环壺 高 3.5 (口13.4) 天 1.8	天井は低く平坦 体部は矮く反る 頂部は 逆S字で内に縁をもつ つまみはボタン状	切離は先端→端削 微量	0.1以下の砂粒 微量 塗装	にぶい灰褐色
						にぶい褐
23-228	ST 0 3	环壺 (口14.8) 天 2.0	天井は低く平坦 体部は矮く反る 端	×	0.1以下の砂粒 顯著 良好	灰白
23-229	ST 0 3	环壺 (口14.7) 天 2.2	天井は丸く低い 体部は矮く反る 端 部は逆S字で垂底 つまみはボタン状	×	0.1以下の砂粒 微量 良好	灰白
23-230	ST 0 3	环壺 高 2.6 (口15.5) 天 2.0	天井は丸く低い 体部は矮く反る 端 部は屈曲してやや外傾 つまみはボタン状	×	0.1~0.2の砂粒 微量 良好	灰白
23-231	ST 0 3	环壺 (口13.9) 天 2.0	天井は低く平坦 体部は端に反る 端 部は屈曲して内傾	×		灰
						塗装 ×
23-232	ST 0 3	环壺 高(1.9)	天井は丸い つまみはボタン状	×	0.3の砂粒量豊 富	灰・同
23-233	ST 0 3	环壺 高(1.5)	天井はやや丸い つまみはボタン状	×	0.1以下の砂粒 微量 不良	浅黄・灰白
23-234	ST 0 3	环壺 高(1.5)	×	×	× 良好	灰白・同
23-235	ST 0 3	环壺 高(1.5)	×	×	× 良好	細泥質・にぶい質
23-236	ST 0 3	环壺 高(1.5)	天井は平坦 つまみはボタン状	×	0.1の砂粒少量 豊富	灰黄・黄灰
23-237	ST 0 3	高台付壺 高 3.2 (口11.1) (底 8.0)	口縁は直線的 体部は矮く膨む 底部 は平坦で高台接地面に継い沈線が入る	切離は先端→指 細砂巻		灰
46-1						オーバープレート
23-238	ST 0 3	高台付壺 高(2.8)	体部は矮く膨み底部は厚い 高台は台 形状で路んびる 接地面は僅に凹む	×	0.1以下の砂粒 微量 塗装	灰褐
46-2		底 7.8				にぶい透
23-239	ST 0 3	壺? (底 9.6)	底部は平坦 高台は方形状で外傾	×	× 良好	灰・同
23-240	ST 0 3	高台付壺 (底 7.8)	底部は平坦 高台は方形状で接地面凹む	切離は先端→指 細砂巻著	× 良好	グ
23-241	ST 0 3	高台付壺 (底 8.0)	×	× 塗装		灰褐色・にぶい 非褐
23-242	ST 0 3	高台付壺 (底 7.6)	底部は端が高い 高台は方形状で外傾	×	0.1以下の砂粒 微量	灰白・同
23-243	ST 0 3	高台付壺 (底 8.3)	底部は平坦 高台は外傾し接地面凹む	体下端露頭→切離 は先端→無		良好 灰黄・灰白
23-244	ST 0 3	壺 高 3.1 口12.3 底 8.2	口縁はやや外反 体部は矮く膨む 底 部は中央がやや高く溝は丸い	切離は先端→指 尚明瞭	0.1以下の砂粒 少々 塗装	灰白

第15表 土器観察表(14)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色・調
23-245	S T 0 3	环 高 3.1 (口12.9) (底 8.0)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	切削は直切→無 表面膜	0.1以下の砂粒 顯著 良好	灰白 △
23-246	S T 0 3	环 高 3.1 (口13.8) (底 9.0)	口縁はやや外反 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	△	△ 堅硬	褐色リープ灰
23-247	S T 0 3	环 高 3.0 (口12.2) (底 6.2)	口縁は大きく外反 体部は緩く膨む 底部は平坦で肩曲	切削は直切→無 △	△ 堅硬	にぶい褐 オリーブ灰
23-248	S T 0 3	环 高 3.0 (口12.5) (底 6.7)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	切削は直切→無 表面膜	△ 堅硬	灰 オリーブ灰
23-249	S T 0 3	环 高 2.9 (口13.3) (底 6.6)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は中央が高く端は丸い	切削は直切→無 △	細粒膜著 △	にぶい褐 △
23-250	S T 0 3	环 高 3.2 (口12.3) (底 7.0)	口縁は内凹気味 体部は緩く膨む 底部は丸みをもつ	△ 下端磨削?一切 △	0.1前後の砂粒 少量 良好	灰白 △
23-251	S T 0 3	环 高 2.9 (口11.9) (底 7.0)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は丸い	△ △	△ △	褐色 △
23-252	S T 0 3	环 高 3.1 (口11.6) (底 5.4)	口縁は一旦屈折し直線的 体部は緩く膨む 底部は厚く平坦で端は凹む	△ △	0.1の砂粒膜著 △	淡黄 △
23-253	S T 0 3	环 高 3.7 (口12.8) 底 5.7	口縁はやや外反 体部は大きく膨む 底部は中央がやや高く端は角張る	△ △	△ △	灰白 △
23-254	S T 0 3	环 高 3.8 (口12.3) (底 6.0)	体部中央で屈折し縁は直線的 体部は大きく膨む 底部端は角張る	△ △	0.1前後の砂粒 △	△
23-255	S T 0 3	环 高 3.6 (口12.4) 底 5.6	口縁は内凹 体部は緩く膨む 底部は平坦で端は角張る	△ △	△ △	0.1以下の砂粒 △
24-256	S T 0 3	环 底 6.7	底部は中央が厚く端は丸味多い	△	0.1前後の砂粒 少量 良好	灰黄・灰白
24-257	S T 0 3	环 底 6.2	底部は平坦で端は角張る	△	△ △	褐色・灰黄
24-258	S T 0 3	环 底 6.9	底部は丸味をもつて縁はやや角張る	△ △	△ 不良	灰白・△
24-259 79-3-4	S T 0 3	环 烧 5.6	底部(?)中央がやや高く端は角張る	△ △	△ △	△ △
24-260	S T 0 3	环 底 5.4	△	△ △	0.1前後の砂粒 △	△ △
24-261	S T 0 3	环 底 5.6	△	△ △	0.1の砂粒膜著 △	△ △
24-262	S T 0 3	环 底 5.6	△	△ △	△ △	△ △
24-263	S T 0 3	环 底 5.8	△	△ △	△ △	△ △
24-264	S T 0 3	环 (底 5.4)	△	△ △	0.1前後の砂粒 △	△
24-265	S T 0 3	环 (底 5.3)	△	△ △	0.1~0.2の砂粒 △	褐色黄・灰黄 △
24-266	S T 0 3	环 底 4.6	底部は中央がやや厚く端は角張る	△ △	△ △	△ △

第16表 土器観察表(15)

単位cm

持因・団版	出土地点	器種・底量	器形の特徴	底法の特徴	底土・底成	色 調
24-267	ST 0 3	环 底 5.6	底盤は中央がやや高く端は角張る	切縫は糸切	0.2の砂粒量 良好	淡黄・にじい 黄桜
24-268	ST 0 3	环 底 5.4	底盤は平坦	切縫は糸切	細砂 美好	灰白・青
24-269	ST 0 3	环 底 5.0	底盤は平坦で端は角張る	#	0.1以下の砂粒 微量	淡黄・青
24-270	ST 0 3	双耳环	耳部は口唇部下に有る	耳部は全面磨削	0.1以下の砂粒 微量	灰白・青
24-271	ST 0 3	短頸壺 横 7.2	頸部は薄く直立 端の張りは弱い	頸部接合は1段	細砂頸管 硬膜	灰・青
24-272	ST 0 3	長頸壺 (頭 4.0)	頭部は直立し肩は丸く張る	つくりは3段構成	# 壁膜	灰黄緑・黄武
24-273	ST 0 3	長頸壺 (頭 5.2)	首は下手で直立し上半で大きく開く	内外輪輪脚	# 壁膜	灰黄・にじい 黄
24-274	ST 0 3	大甌 高(10.4) (口16.2)	口縁は大きく外反し先端に大小2つの 棱をもつ	外は口縁で叩→瓶 内は瓶部で横目 体面で叩	0.1~0.2の砂粒 砂粒頗者 良好	灰黄
24-275	ST 0 3	小甌? 底 6.8	底盤は中央がやや高く端は角張る	切縫は糸切	0.1頭後の砂粒 少量	灰白・青
24-276	ST 0 3	長頸壺 (底 9.6)	底盤は平坦で高台は外傾し底面は凹む	切縫は逆切り	細砂頸管 良好	#
24-277	ST 0 3	長頸壺? 底 5.0	高台は接地部が内傾	#	# 壁膜	灰白・灰
28-278	ST 1 2	坏蓋 高 3.9	天井は高く口縁にかけて膨む 端部は	切縫は箇切→全面	細砂少量	淡黄
41-6		口13.9 天 2.6	突起外は角張る つまみは瓶底跡	箇割	#	灰白
28-279	ST 1 2	坏蓋 高 2.9	天井は平坦 体部は極く膨む 端部は	切縫は箇切→箇割	#	#
41-7		口14.5 天 2.0	僅に屈曲し外傾 つまみは瓶底跡	は浅い	# 壁膜	#
28-280	ST 1 2	坏蓋 (口13.8) 天 2.1	天井は平坦? 体部は極く膨む 端部 は黒染して外傾	#	# 壁膜	#
28-281	ST 1 2	坏蓋 高 3.5	天井から口縁にかけて直線的 端部は	#	#	#
41-8		口12.9 天 1.9	僅に屈曲して外傾 つまみは瓶底跡	#	# 壁膜	#
28-282	ST 1 2	坏蓋	天井は平坦 体部は極く膨む 端部は	#	0.1頭後の砂粒 微量	灰
		(口13.4) 天 2.3	屈曲し立つ 瓶底内面は僅に凹む	#	# 壁膜	灰白
28-283	ST 1 2	坏蓋 高(1.9)	体部は膨む 口縫は一旦膨く折れ端部	箇割は浅い	細砂少量	#
		(口14.0)	は極く膨曲して外傾 実際は丸い	#	# 壁膜	#
28-284	ST 1 2	坏蓋 高 3.0	天井は丸い 体部は僅に膨む 端部は直角し	切縫は箇切→箇割	細砂多量	#
41-9		口13.8 天 2.0	外傾 瓶底内面は凹む つまみは瓶底跡	は浅い	# 壁膜	#
28-285	ST 1 2	坏蓋 高 2.6	天井は平坦での様にかけて扁平 端部は屈曲	切縫は箇切→はば	#	#
41-10		口13.6 天 1.4	L外傾 瓶底内面は凹む つまみは瓶底跡	全面に箇割	# 壁膜	#
28-286	ST 1 2	坏蓋 (口14.4) 天 1.6	天井はやや丸い 体部は標に反る 端	#	# 壁膜	淡黄
			部は黒染して外傾 瓶底内面は凹む	#	#	
28-287	ST 1 2	高台行杯 高 4.5	L縫は内面気泡 体部は大きくなむ	切縫は箇切 外面	- # -	#
46-3		口13.9 底 8.4	底盤は平坦 高台は高く台形状に立つ	体部は直角	#	堅硬

第17表 土器観察表(16)

単位cm

番号・調査	出土地点	器種・特徴	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色・調
28-288 46-4	S T 1 2 (口12.2) (底 7.7)	高台付环 高 4.6 口縁は内寄気味 体部は大きく膨らむ	切削は荒切→底鉋 削? 体部は荒削	粗砂少量 堅穢	灰白 +	
28-289 46-5	S J 6 6 (口12.4) 底 8.2	高台付环 高 4.0 口縁は直線的 体部は大きく膨らむ 高台は直立し内側へ凹張は凹む	切削は荒切→底鉋 削→削 体部荒削	+	+	
28-290 46-6	S T 1 2 口12.1 底 7.7	高台付环 高 4.4 口縁は直線的 体部は大きく膨らむ 高台は三角状で直立し底地部は平坦	切削は荒切 体下 削→削上位は荒削	+	+	
28-291 46-7	S T 1 2 口13.2 底 8.9	高台付环 高 4.0 口縁は内寄気味 体部は緩く膨らむ 高台は高く長方形に直立 緩地部は平坦	切削は荒切→削 体部は荒削	+	灰 灰白	
28-292	S T 1 2 (口12.2)	高台付环 高(3.7) む	口縁は屈曲し直線的 体部は大きく膨らむ	体下半荒削 体上 荒削削	+	+
28-293	S T 1 2 口12.9	西台付环? 高(3.3) 口縁から体部は直線的	体下半荒削 体上 半荒削	+	+	
28-294 55-1	S T 1 2 口12.5 天 3.6	空壺 高 5.1 体部は外傾する つまみは製空珠	切削は荒切→肩部 荒削 体部荒削	粗砂豊盛 堅穢	淡黄 灰白	
28-295 55-2	S T 1 2 口12.6 天 3.0	空壺 天井はやや丸い 肩部は斜位で面つく る 体部は大きく外傾する	+	+	淡黄 灰白	
28-296 52-5	S T 1 2 (口13.9) (底 9.3)	壺 高 3.2 口縁は直線的 体部は緩く膨らむ 底部 は中央がやや高く端は丸い 内に凸凹	切削は荒切 体下 荒削削 滑削削 少量	0.1以下の砂粒 堅穢	灰	
28-297	S T 1 2	長頸壺 高(4.1)	肩部は緩く張る	外の肩部平行削→ 張目 製著	0.1以下の砂粒 堅穢	灰白 灰
28-298 81-7	S T 1 2 底12.0	壺 高(2.1) 底地部は平坦	高台内面は荒削?	粗砂少量	灰白 堅穢	
28-299	S T 1 2 (底 1.8)	壺 高(1.8) やや丸味がある	高台は高く長方形に外傾 枝地部は内外丁寧な削	+	+	
28-300 55-3	S T 1 2 口10.4 (底10.2)	高16.6 は大きく膨らむ 高台は直立気味に立つ	切削は荒切 体下 手は荒削	0.1の砂粒混入 堅穢	淡黄 灰白	
28-301 55-4	S T 1 2 (口17.5)	広口壺 高(7.0) 底をもつ 頸部は直立する	内外面に丁寧な削	粗砂少量	淡黄 堅穢	
29-302 83-4 84-5+6	S T 1 2 (口29.8)	壺 高(9.3) に縫をもつ	頸部接合は嵌入式 外は弦紋文	+	灰白 堅穢	
29-303	S T 1 2 底12.5	壺 高(27.5) 肩部は丸く張りは無い	頸部接合は嵌入式 外平行削 内円文	+	にぶい黄緑 灰白	
29-304	S T 1 2 高(17.4)	底部は丸底	外は平行削 内は平行削	+	堅穢 灰白 +	

第18表 土器観察表(17)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・形量	器形の特徴	技術的特徴	黏土・焼成	色 調
30-305	L.P.5.5	环底 高 4.5 D15.4 天 2.9	天井は高く口縁にかけて膨む 底部は厚み屈曲して外傾 つまみは擬宝珠	切削は荒切→荒削 は深い	細砂少量 堅焼	灰白 〃
41-11						
30-306	L.P.5.4	环底 高 3.8 D13.3 天 2.6	天井は平坦で高い 体部は横く膨む 底部は屈曲して直立 つまみは擬宝珠	切削は荒切→荒削 は深い	〃	灰 堅焼
41-12						
30-307	実録	环底 高(2.0)	天井は平坦 つまみはそろばん五形	切削は荒切→荒削	〃 坚焼	灰白・淡黄
30-308	L.P.5.5	环底 高 2.5 D13.9 天 1.6	天井は扁平で体部は直線的 異常に厚 折して外傾 つまみは擬宝珠	切削は荒切→荒削 は深い	〃	灰白
41-13						
30-309	L.Q.5.5	环底 (高 1.7) (D14.0) 天 1.0	天井は扁平 体部は屈折して外傾 底部内面は凹む つまみは擬宝珠	〃	〃	〃
41-14						
30-310	L.Q.5.6	环底 (D14.1) 天 2.4	天井は平坦 体部は直に反る 異常に厚 短く屈曲し立つ	〃	0.1の砂粒重量	灰白
30-311	L.P.5.5	环底 (D13.1) 天 2.3	天井は平坦 体部は横く膨む 異常に厚 短く屈曲し立つ	〃	細砂微量	灰
30-312	L.P.5.5	环底 (D13.9) 天 2.5	〃	〃	細砂少量	〃
41-15						
30-313	L.P.5.3	高台付环 (高10.1)	底部は平坦 高台は三角形で直立	切削は荒切	〃 坚焼	〃
30-314	L.P.5.5	高台付环 高 4.7 (D14.9) 底 10.0	口縁は直線的 体部は横く膨み厚い 底部は平坦で高台は三角形で外傾	切削は荒切→荒削 体部は荒削	〃	〃
46-8						
30-315	L.P.5.5	高台付环 高 4.6 (D13.6) 底 9.1	口縁は直線的 体部は横く膨む 高台 は三角形状で外にふんばる	切削は荒切 体部は荒削	〃	〃
46-9						
30-316	L.P.5.5	高台付环 高 4.6 (D12.1) 底 7.0	口縁は内窓気孔 体部は横く膨む 底部 は平坦で高台は三角形状で直立	〃	〃	〃
46-10						
30-317	L.P.5.6	高台付环 高 4.0 D12.1 底 8.0	口縁は直線的 体部は大きく膨む 底部 はやや丸く高台は三角形状で外傾	切削は荒切→削 体部は荒削	〃	〃
46-11						
30-318	L.P.5.5	高台付环 (D13.5) 高(3.7)	口縁は直線的 体部は横く膨む	体部は下手で荒削 上半は荒削	〃	〃
30-319	L.Q.5.5	高台付环 (D12.3)	口縁から体部にかけて内窓	体部距離	〃	堅焼
30-320	L.P.5.6	环 高 3.8 D12.7 底 7.5	口縁は直線的 体部は横く外反 底部 は平坦で端は屈曲	切削は荒切→削 体下端荒削上段直削	細砂微量	〃
52-6						
30-321	L.Q.5.5	环 高 2.9 (D12.4) (底 7.2)	口縁は内窓気孔 体部は横く膨む 底部 は中央がやや高く端は丸い	切削は荒切→削 体部距離?	〃	灰 堅焼
30-322	L.P.5.5	环 高 3.0 (D12.5) (底 8.5)	口縁はやや外反 体部は横く膨む 底部 はやや内張る	切削は荒切→削 体部距離?	〃	灰白
52-7						

第19表 土器観察表(18)

単位cm

神園・図版	出土地点	器種・径量	器形の特徴	性状の特徴	胎土・焼成	色調
30-323	L Q 5 5	杯 高 4.0 (口13.0) (底 3.6)	口縁は外反 体部は直線的でやや立つ 底部は中央がやや高く嘴は丸い	切削は荒切 滑明 腹 体外面荒無 眼着 壓縮	0.1以下の砂粒	オリーブ灰 灰白
30-324	L P 5 5	壺 (底11.9)	高台は外にふん覆る 接地部は凹む	内外に丁寧な飾	細砂少量 壓縮	灰質・灰
30-325	L J 5 7	壺 高(7.5) (口27.3)	口縁は外反 口唇上に小さい凹そこか ら垂直方向に三角形の大きな腹をもつ	頸部接合は嵌入式 外面に波状文	*	灰白 灰
37-326	S J 0 5	杯蓋 高(3.2)	天井は広く平坦 体部は緩く膨んで嘴	切削は荒切→深い	0.1以下の砂粒	乳白
41-16		口16.1 天 2.7	端に至り短く屈曲 屈曲部内面は凹む	荒削	少量 良好	*
37-327	S J 0 5	杯蓋	天井は広く平坦 体部はやや反る 嘴	*	*	*
		(口16.4) 天 2.6	部は屈曲して立つ 屈曲部内面は凹む	*	良好	*
37-328	S J 0 5	杯蓋	天井は広く平坦 体部は短く膨んで嘴	*	*	*
42-1		(口16.2)	部に至り屈曲 屈曲部内面は凹む		良好	*
37-329	S J 0 5	杯蓋 高 3.1	天井は平坦 体部は端に凹む 嘴部は	切削は荒切→荒削	0.1以下の砂粒	*
42-2		口14.9 天 2.1	鋸い縫をもち里折 つまみは側室跡		少量 壓縮	*
37-330	S J 0 5	杯蓋 高 3.2	天井は平坦 体部は緩く膨む 嘴部は	*	0.1~0.2の砂粒	灰
42-3		口15.7 天 2.2	鋸い縫で里折 つまみはそろばん玉状		微量 壓縮	灰白
37-331	S J 0 5	杯蓋	天井から体部は丸い 嘴部は里折して	切削は荒切→浅い	0.1~0.2の砂粒	灰白
		(口14.0) 天 2.0	立つ	荒削	眼着 壓縮	オリーブ灰
37-332	S J 0 5	杯蓋	天井は広く平坦 体部は緩く膨む 嘴	*	0.1前後の砂粒	灰白
		(口14.6) 天 2.1	部は屈曲してやや内傾		少量 良好	オリーブ灰
37-333	S J 0 5	杯蓋 高 3.5	天井は広く平坦 体部は緩く膨む 嘴	切削は荒切→深い	0.1以下の砂粒	褐色
42-4		(口14.2) 天 2.4	部は屈曲して外傾 つまみは側室跡	荒削	微量 壓縮	灰褐
37-334	S J 0 5	杯蓋 高 2.4	天井は広く平坦 体部は強く反る 嘴	切削は荒切→浅い	0.1~0.2の砂粒	オリーブ灰
42-5		(口15.0) 天 1.6	部は里折して外傾 つまみは側室跡		微量 壓縮	灰
37-335	S J 0 5	杯蓋	天井は広く平坦 体部は直線的 嘴部	切削は荒切→荒削	0.1以下の砂粒	*
		(口16.0) 天 1.5	は里折して外傾 全体に扁平		眼着 壓縮	*
37-336	S J 0 5	杯蓋	天井は広く平坦 体部は反る 嘴部は	切削は荒切→荒削	0.1以下の砂粒	灰白
		(口15.9) 天 1.9	一旦折れ畠曲して立つ 屈曲内に沈線		少量 壓縮	灰
37-337	S J 0 5	杯蓋	天井は広く平坦 体部は反る 嘴部は	切削は荒切→浅い	0.1以下の砂粒	*
		(口14.5) 天 1.6	畠曲して立つ 全体に扁平		眼着 壓縮	*
37-338	S J 0 5	杯蓋	*	切削は荒切→荒削	*	*
		(口13.7) 天 2.6			壓縮	*
37-339	S J 0 5	杯蓋	天井は広く平坦 体部は直線的 嘴部	*	*	*
		(口15.0) 天 1.5	は畠曲し逆S字形に立つ		壓縮	灰白

第20表 土器観察表(19)

単位cm

博団・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色 調
37-340	S J 0 5	坪蓋 (口15.0) 天 1.0	天井は広く平坦 体部は反る 端部は横をつくって屈折し逆S字状に外傾	切削は直切→輪削	0.1以下の砂粒 頬審	灰白 青灰
37-341	S J 0 5	坪蓋 高 2.5 (口15.4) 天 1.7	天井は低く平坦 体部は直線的 端部は屈曲して外傾 つまみはボタン状	※	0.1以下の砂粒 少量	灰 堅致
42-6						※
37-342	S J 0 5	坪蓋 高 3.3 (口14.8) 天 2.5	天井は広平坦 体部は直線的 端部は屈曲し外窓 つまみはボタン状	※	0.1前後の砂粒 少量	※ 堅致
37-343	S J 0 5	坪蓋 高 2.9 (口14.3) 天 2.1	天井は広平坦 体部は反る 端部は屈曲し立つ つまみはボタン状	※	※ 堅致	※ ※
42-7						
37-344	S J 0 5	坪蓋 高 2.4 口14.0 天 1.8	天井は低くほぼ平坦 体部は反る 端部は屈曲して立つ つまみはボタン状	※	※ 堅致	※ ※
42-8						
37-345	S J 0 5	坪蓋 高 2.7 (口14.6) 天 2.1	天井は低く平坦 体部は反る 端部は屈曲し外窓 つまみはボタン状	※	0.1前後の砂粒 頬審	※ 堅致
37-346	S J 0 5	坪蓋 高 2.6 (口14.8) 天 1.8	天井はほぼ平坦 体部は反る 端部は屈曲し逆S字に立つ つまみはボタン状	※	0.1~0.3の砂粒 微量	※ 堅致
37-347	S J 0 5	坪蓋 高 2.8 (口14.0) 天 2.0	天井はほぼ平坦 体部は反る 端部は屈曲して立つ つまみはボタン状	※	0.1~0.3の砂粒 頬審	※ 堅致
37-348	S J 0 5	坪蓋 高(2.2) 天井は平坦 体部は反る つまみはボタン状	※	0.1前後の砂粒 頬審	灰白 堅致	※
37-349	S J 0 5	坪蓋 (口13.8) 天 1.8	天井は低く平坦 体部は反る 端部は屈曲しやや外傾	※	※ 堅致	※ ※
37-350	S J 0 5	坪蓋 高 3.1 口14.5 天 1.9	天井は平坦 体部はやや反る 端部は腰をもじ屈折 つまみは逆台形状	※	0.1~0.3の砂粒 頬審	※ 堅致
42-9						
37-351	S J 0 5	坪蓋 (口13.8) 天 1.8	天井は平坦 体部はやや反る 端部は屈曲して立つ	※	※ 堅致	※ ※
37-352	S J 0 5	坪蓋 (口14.0) 天 1.7	天井は低くほぼ平坦 体部はやや反る 端部は屈曲して立つ	※ 頬審	0.1~0.2の砂粒 堅致	灰 ※
37-353	S J 0 5	坪蓋 (口14.5) 天 1.9	天井は低くほぼ平坦 体部は反る 端部は屈曲し逆S字状に立つ	※	0.1~0.3の砂粒 頬審	灰白 ※
37-354	S J 0 5	坪蓋 高(1.5) つまみはボタン状	切削は直切	※ 堅致	黄灰・灰白	
37-355	S J 0 5	坪蓋 (口14.0) 天 1.8	天井や丸味をもつ 体部はやや反る 端部は屈曲して立つ	切削は直切→輪削	※ 堅致	灰 ※
38-356	S J 0 5	坪蓋 高 3.5 (口15.2) 天 2.2	天井は平坦 体部は反る 端部は延折 L逆S字状に外傾 つまみは亀頭形	切削は直切→天井 窓前	0.1以下の砂粒 頬審	灰 堅致
42-10						

第21表 土器観察表(20)

単位cm

番号・回数	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技術的特徴	胎土・焼成	色調
38-357	S J 0 5	环蓋 高 3.2 (口14.6) 天 2.2	天井は平坦 体部は反る 端部は直曲 し透5字状に外傾 つまみはボタン状	切離は荒切→窓削 顯著 窓縫	0.1前後の砂粒 少量 堅硬	灰
42-11						
38-358	S J 0 5	环蓋 高 3.2 (口14.6)	天井はほぼ平坦 体部は直線的 端部は直曲 は透折し外傾 つまみは頭の丸い圓形	〃	0.1~0.2の砂粒 少量 堅硬	〃
42-12		天 2.1				
38-359	S J 0 5	环蓋 (口19.3)	天井は平坦 体部は直線的 端部は直曲 折して透5字状に外傾	〃	0.1~0.3の砂粒 少量 堅硬	灰白
42-13		天 2.2				
38-360	S J 0 5	环蓋 (口19.4)	体部は直線的 端部は直曲して立つ	外側は丁寧な無	0.1前後の砂粒 少量 堅硬	灰白・灰質
38-361	S J 0 5	环蓋 (口20.5)	体部は僅に反る 端部は直曲して斜く 立つ 透折部内面は凹む	内外面丁寧な無 窓縫	〃	灰
38-362	S J 0 5	环蓋 (口20.6)	体部は僅に反る 端部は直曲して立つ 透折部内面は僅に凹む	窓削	〃	灰白
38-363	S J 0 5	环蓋 (口19.5)	体部は直線的 端部は直曲して外傾	〃	〃 堅硬	灰白・同
38-364	S J 0 5	环蓋 (口19.0)	〃	〃	〃 堅硬	灰・灰白
38-365	S J 0 5	环蓋 高(1.0)	つまみは扁平	切離は荒切?	〃 良好	灰白・同
38-366	S J 0 5	环蓋 高(1.4)	天井は平坦 つまみはボタン状	切離は荒切→窓削 少量	0.1前後の砂粒 良好	灰・灰白
38-367	S J 0 5	环蓋 高(1.4)	つまみはボタン状	内外無	〃 良好	灰白・同
38-368	S J 0 5	环蓋 高(1.7)	天井はほぼ平坦 つまみはボタン状	切離は荒切→窓削 0.1の砂粒 少量	0.1以下の砂粒 堅硬	灰・灰白
38-369	S J 0 5	环蓋 高 1.4	つまみは中央が高い擬宝珠 肢肉薄い	切離は荒切?	0.1以下の砂粒 少量	灰・同
38-370	S J 0 5	环蓋 高(1.3)	つまみは中央が丸く高いボタン状	〃	〃 良好	灰白・同
38-371	S J 0 5	环蓋 高(2.1)	天井は丸い つまみは頭が丸い擬宝珠	切離は荒切→窓削	〃 堅硬	灰・灰白
38-372	S J 0 5	环蓋 (口14.4)	天井はほぼ平坦 体部はやや反る 端 部は腰をもち直曲に透折	切離は荒切→窓削 つまみ部に高底 少量	0.1以下の砂粒 良好	陶灰 オリーブ灰
38-373	S J 0 5	环款 (口14.1)	天 1.8	天井は低い 体部は腰く膨む 端部は 透折し直く立つ	窓削 顯著 堅硬	0.1以下の砂粒 明エリーブ灰
38-374	S J 0 5	环底 (口14.4)	天 2.1	天井は丸い 体部は腰く膨む 端部は 透折し外傾	切離は荒切→窓削 少量	0.1以下の砂粒 魚好
38-375	S J 0 5	环底 (口14.1)	天 2.2	天井は平坦 体部はやや反る 端部は 腰をもち直曲に透折	切離は荒切→窓削 体下半窓縫?	0.1前後の砂粒 顯著 堅硬
38-376	S J 0 5	环底 (口15.1)	体部は反る 端部は直曲し外傾	内外丁寧な無	0.1以下の砂粒 顯著	灰・同
38-377	S J 0 5	环底 (口14.7)	天 1.7	天井は平坦 体部は直線的 端部は直曲 し外傾	切離は荒切→窓削 少量	0.1~0.3の砂粒 堅硬
38-378	S J 0 5	环底 (口15.2)	天 2.5	天井は平坦 体部は腰く膨む 端部は 一旦透折端で直曲して外傾	〃	0.1以下の砂粒 少量 良好

第22表 土器観察表(21)

単位cm

神園・圓板	出土地点	器種・法目	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・質
38-379	S J 0 5	坪蓋 (口12.6)	体部は強く反る 端部は屈曲して内傾	削削	0.1以下の砂粒 鐵青	灰白・灰
38-380	S J 0 5	坪蓋 高(3.2)	天井から体部は膨らむ つまみは擬宝珠	切離は笠切→底削	〃 良好	灰褐色・同
38-381	S J 0 5	坪蓋 高 2.7 (口15.0)	天井は平坦 体部は反る 端部は直立 して立つ つまみはボタン状	〃	0.1以下の砂粒 微量	灰オーリーブ・同
38-382	S J 0 5	坪蓋 高 2.2	天井は平坦 つまみは平坦な擬宝珠	〃	〃 良好	灰オーリーブ・同
38-383	S J 0 5	坪蓋 高 2.7 (口13.6)	天井は平坦 体部は直線的 端部は直 く屈折 つまみは縁の低いリング状	〃	0.1前後の砂粒 少量	浅黄 灰白
38-384	S J 0 5	坪蓋 高 1.6	天井は平坦 つまみは擬宝珠	〃	〃 良好	灰オーリーブ・同
38-385	S J 0 5	坪蓋 高 0.6	つまみは平坦な擬宝珠	無	〃 良好	〃
38-386	S J 0 5	坪蓋 高 0.9	〃	〃	〃 良好	〃
38-387	S J 0 5	坪蓋 (口15.2)	天井は平坦 体部は反る 端部は屈折 して外傾	切離は笠切→底削	〃	〃
38-388	S J 0 5	坪蓋 (口14.5)	天井は平坦 体部は僅に反る 端部は 腰をもじ外傾	〃	〃 良好	〃
38-389	S J 0 5	坪蓋 高 1.0	天井は平坦 体部は僅に反る	〃	〃 良好	灰・同
38-390	S J 0 5	坪蓋 (口14.7)	天井は平坦 体部は強く反る 端部は 腰をもじ逆S字状に外傾	〃	〃	灰オーリーブ
38-391	S J 0 5	坪蓋 (口15.0)	天井は平坦 体部は強く反る 端部は 屈折し逆S字状	〃	〃 良好	灰・白
38-392	S J 0 5	坪蓋 (口14.6)	天井は平坦 体部は強く反る 端部は 屈曲し外傾	〃	〃 良好	〃
39-393	S J 0 5	坪蓋 (口13.7)	天井は平坦 体部は直線的で端部子供 は平坦 端部は屈曲して外傾	〃	〃 良好	灰 灰白
39-394	S J 0 5	坪蓋 (口15.0)	体部は強く反る 端部は屈曲し外傾	〃	0.1以下の砂粒 少量	にじみ質感・ 良好
39-395	S J 0 5	坪蓋 (口15.0)	天井は丸い 体部は強く反る 端部は 屈曲し直立する	〃	0.1以下の砂粒 微量	灰褐色
39-396	S J 0 5	坪蓋 高 2.7 (口14.8)	天井は平坦 体部は強く反る 端部は 屈折して立つ	〃	0.1以下の砂粒 少量	浅黄褐色
39-397	S J 0 5	坪蓋 高(2.8)	天井は広く平坦 体部は反る? つま みは頭が丸い擬宝珠	切離は笠切→底削 笠削	〃	灰白 質感
39-398 42-16	S J 0 5	坪蓋 高(2.6)	〃	〃	〃 良好	灰白・同
39-399	S J 0 5	坪蓋 (口19.5)	天井は広く平坦 体部は緩やかに反る 端部は屈折し逆S字状に立つ	底削	0.1以下の砂粒 少量	褐色 灰白

第23表 土器観察表(22)

単位cm

鉢名・圖版	出土地点	器種・古風	器形の特徴	柱法の特徴	胎土・焼成	色調
39-400	S J 0 5	环蓋 高(2.0)	天井は平坦 つまみは平坦な撲定状	切離は窓切	0.1以下の砂粒少量 良好	灰白・黄灰
39-401	S J 0 5	环蓋 高(1.3)		〃	〃 良好	黄灰・同
39-402	S J 0 5	环蓋 高(1.5)		〃	〃 良好	灰・同
39-403	S J 0 5	环蓋 高(0.7)	天井はほぼ平坦	切離は窓切→窓削	〃 堅敏	灰白・同
39-404	S J 0 5	环蓋 高(2.3)	天井は平坦 体部は反る つまみは平 坦な撲定状	切離は窓切→底面 窓削	〃 堅敏	褐灰
39-405	S J 0 5	环蓋 (口16.1) 天 2.5	天井は平坦 体部は直線的 端部は肥 曲しやや外傾	切離は窓切→窓削	〃 堅敏	灰白
39-406	S J 0 5	环蓋 高(1.7)	天井は平坦	〃	〃 堅敏	褐灰・同
39-407	S J 0 5	环蓋 (口15.8) 天 2.8	天井は平坦 体部は強く反る 端部は 屈曲し逆S字状に立つ	切離は窓切→窓削	〃 良好	明褐色
39-408	S J 0 5	环蓋 (口17.1)	体部は強く反る 端部は屈折して立つ	切離は窓切→窓削	〃 堅敏	灰白・褐灰
39-409	S J 0 5	环蓋 (口15.0)	体部は強く膨む 端部は屈曲して外傾	〃	〃 堅敏	黄灰・褐灰
39-410	S J 0 5	环蓋 (口15.6) 天 2.3	天井は平坦 体部は直線的 端部は膨 曲して外傾	〃	〃	灰
39-411	S J 0 5	环蓋 高(2.6) (口14.1)	体部は強く反る 端部は屈曲し逆S字 状に外傾	内外は丁寧な施	〃 良好	黄灰
39-412	S J 0 5	环蓋 (口13.4) 天 2.6	天井は平坦 体部は強く反る 端部は 屈曲し逆S字状で外傾	切離は窓切→窓削	〃 良好	褐灰
39-413	S J 0 5	环蓋 (口17.2)	体部は反る 端部は屈曲し外傾	内外は丁寧な施	〃 堅敏	灰白・灰
39-414	S J 0 5	环蓋 高(2.0)	天井は平坦 つまみは頭が丸い円盤形	切離は窓切→窓削	0.1以下の砂粒少量	〃
39-415	S J 0 5	环蓋 高(2.1)	天井は平坦	〃	〃 堅敏	にぶい黄根・同
39-416 43-1 78-2	S J 0 5	环蓋 高(3.8) (口14.8) 天(2.3)	天井は平坦 体部は強く膨む つまみは 頭が丸い円盤形	〃	0.1以下の砂粒少量	にぶい根
39-417	S J 0 5	环蓋 高 2.8 (口14.4) 天 1.7	天井は平坦 体部は直線的 つまみは 頭が丸い円盤形	〃	〃 不良	〃
39-418	S J 0 5	环蓋 (口16.2) 天 2.6	天井は平坦 体部は直線的 端部は屈 曲して立つ	切離は窓切→やや 窓削	〃 不良	にぶい根
39-419	S J 0 5	环蓋 高 2.1	天井は平坦 つまみは平坦で頭が丸い 円盤形	切離は窓切→窓削	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰青根
39-420	S J 0 5	环蓋 高 2.0	〃	〃	〃 良好	にぶい黄根・同
40-421	S J 0 5	高台付环 高 5.4 (口15.6) (底10.1)	口縁は内寄 体部は直線的 底部は頭 が高い 高台は三角形状でやや外傾	切離は窓切→窓削 底端部窓削	細砂少量	乳白

第24表 土器観察表(23)

単位cm

種類・固形	出土地点	器種・法長	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色 調
40-422	S J 0 5	高台付环 高 5.6 (口15.6 底 9.3)	口縁から体部にかけて直線的 底部は端が高い 高台は三角形状でやや外傾	切削は荒切→削 底・体部端丸削	細砂少量 良好	乳白 グ
46-12						
40-423	S J 0 5	高台付环 高 5.6 (口15.6 底10.0)				グ
47-1					良好	グ
40-424	S J 0 5	高台付环 高 5.2 (口15.5) (底10.3)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は端が高い 高台は三角形状でやや外傾			グ
47-2					良好	グ
40-425	S J 0 5	高台付环 高 5.5 (口15.5) (底11.1)	口縁から体部にかけて直線的 底部は端が高い 高台は三角形状でやや外傾			グ
47-3					良好	グ
40-426	S J 0 5	高台付环 高 4.3 (口12.6) (底 7.6)	口縁は外反 体部は大きく膨む 底部は中央が薄い 高台は直立気味に外寄	切削は荒切→削 少量	0.1以下の砂粒 良好	灰白 グ
40-427	S J 0 5	高台付环 高 4.3 (口12.9) 底 8.2	口縁から体部にかけて内凹 底部は中央が薄い 高台は外にふん張る			灰白 灰黄
40-428	S J 0 5	高台付环 高 4.7 (口13.2) (底 8.0)	口縁から体部にかけて直線的 底部は平坦で端は角張る 高台は高く三角形	切削は荒切→削 ?	0.1前後の砂粒 少量	黄灰 堅緻
40-429	S J 0 5	高台付环 高 4.5 (口13.1) (底 7.8)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は端で角張る 高台は高く三角形			グ 堅緻
40-430	S J 0 5	高台付环 高 4.7 (口13.2) (底 9.1)				黄灰
40-431	S J 0 5	高台付环 高 4.7 (口13.2) (底 8.7)				堅緻
40-432	S J 0 5	高台付环 高 4.5 (口13.0) (底 8.8)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は端で角張る 高台は高く三角形状			黄灰
40-433	S J 0 5	高台付环 高 4.7 (口12.9) 底 8.7	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は端で角張る 高台は高く三角形状			灰 堅緻
40-434	S J 0 5	高台付环 高 5.2 (口13.6) 底 8.2	口縁は外反 体部は大きく膨む 底部は端で角張る 高台は高く三角形状			黄灰 堅緻
40-435	S J 0 5	高台付环 高 5.4 (口13.8) 底 8.3	口縁は外反 体部は大きく膨む 底部は端で角張る 高台は高く三角形状			褐灰 堅緻
47-4						
40-436	S J 0 5	高台付环 高 5.4 (口14.2 底 7.9)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は端で角張る 高台は高く三角形状			グ 堅緻
47-5						灰黄褐
40-437	S J 0 5	高台付环 高 5.2 (口14.6) (底 7.4)				黄灰 堅緻
						灰

第25表 土器観察表(24)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・数量	器形の特徴	鉄鋸の特徴	胎土・焼成	色調
40-438	S J 0 5	高台付环 高 4.7	口縁は外反 体部は膨ら 底部は端で角張る 高台は高く三角形	切端は直切→尾削 ?	0.1前後の砂粒 少量 堅軟	灰
40-439	S J 0 5	高台付环 高 4.6	*	*	*	灰・青
41-440	S J 0 5	高台付环 高(2.9) 底 8.8	体部は大きく膨ら 底部は厚く平坦で端は角張る 高台は強く屈曲して外傾	*	*	灰オーリーブ
41-441	S J 0 5	高台付环 高 4.4 (口12.9) (底 7.6)	口縁は直線的 体部は大きく膨ら 底部は厚く高台は外傾してふん張る	切端は直切→無	*	灰白
41-442	S J 0 5	高台付环 高 5.6 (口16.2) (底 9.2)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は高い 高台は高く外傾	*	*	褐灰
41-443	S J 0 5	高台付环 高(2.9) (底 8.5)	体部は大きく膨ら 底部は中央が高く端は角張る 高台は高く三角形状	*	0.1前後の砂粒 堅者	灰
41-444	S J 0 5	高台付环 高 4.6 口14.8 底 9.6	口縁から体部は直線的 底部は中央が高く端は角張る 高台は高く三角形状	*	*	*
47-6					堅軟	暗緑灰
41-445	S J 0 5	高台付环 高 4.4 (口14.7) (底10.2)	口縁から体部は直線的 底部は中央が薄い 高台は高く三角形で外傾	*	0.1以下の砂粒	灰
47-7					少量	堅軟
41-446	S J 0 5	高台付环 高 4.6 (口14.0) (底 8.8)	口縁は外反 体部は緩く膨ら 底部端は角張る 高台は屈曲して外傾	*	*	*
47-8					堅軟	*
41-447	S J 0 5	高台付环 高 4.7 (口13.8) (底 8.5)	口縁は直線的 体部は大きく膨ら 底部端は角張る 高台は高く屈曲 体下端尾削?	切端は直切→無	*	*
47-9					堅軟	*
41-448	S J 0 5	高台付环 高 4.3 (口13.4) (底 8.9)	口縁は直線的 体部は緩く膨ら 高台は三角形でふん張る 後地面部は凹む	切端は直切→無	*	灰
41-449	S J 0 5	高台付环 高(2.4) (底 8.9)	体部は緩く膨ら 高台は三角形でふん張る 後地面部は凹む	*	*	灰白
41-450	S J 0 5	高台付环 高 5.0 (口13.8) (底 7.4)	口縁は外反 体部は大きく膨ら 底部は中央が薄い 高台は長方形形状で外傾	*	*	灰青褐
41-451	S J 0 5	高台付环 高 4.7 (口14.2) (底10.0)	*	切端は直切→無 体下端尾削	*	灰青
41-452	S J 0 5	高台付环 高 5.1 口14.2 底 8.8	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は端で高い 高台は強く外傾	*	*	黄灰
41-453	S J 0 5	高台付环 高(2.9) (底 9.2)	体部は緩く膨ら 底部は端で高い 高台は長方形形状で外傾 後地面部は凹む	切端は直切→底部 直端削→底中央削	*	灰青 浅黄褐
41-454	S J 0 5	高台付环 高(2.9) (底 9.2)	体部は大きく膨ら 底部はほぼ平坦 高台は強く外傾	切端は直切→無	*	灰青 灰黄褐

第26表 土器観察表(25)

単位cm

辨別・回数	出土地点	器種・底型	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色 調
41-455	S J 0 5	高台付坏 高(1.9) (底 8.6) 外縁 壁地部付近に鋸い縫	底部はほぼ平坦 高台は狭く三角状で 体部は膨む 底部はほぼ平坦 高台は 底折して外縁 壁地部付近に鋸い縫	切離は荒切→擦	0.1以下の砂粒 少量	灰黄 良好 *
41-456	S J 0 5	高台付坏 高(2.4) (底 9.1)	体部は膨む 底部はほぼ平坦 高台は 底折して外縁 壁地部付近に鋸い縫	*	*	浅黄 良好 灰黄褐
41-457	S J 0 5	高台付坏 高 5.1 (口13.0) (底 9.0)	口縁は直線的 体部は大きくなじむ 高 台は広く外傾	切離は荒切→擦 体下端寬削	*	灰白 良好 *
41-458	S J 0 5	高台付坏 高 5.1 (口14.8) (底 9.5)	口縁は直線的 体部も直線的 高台は 先が丸く長方形状で外傾	体下端寬削	*	黄灰 堅硬 灰白
41-459	S J 0 5	高台付坏 高 4.4 (口12.6) (底 8.4)	口縁は外反 体部は直線的 高台は長 方形状で外にふん張る	*	*	灰 灰白
41-460	S J 0 5	高台付坏 高(3.3) (底 8.6)	体部は大きく膨む 底部は丸味をもつ 高台は先が丸い長方形状で外傾	切離は荒切→擦 体下端寬削	*	良好 制灰
41-461	S J 0 5	高台付坏 高 3.5 (口13.2)	口縁は直線的 体部は大きく膨む 底 部内面は凹凸が激しい	*	*	黄灰 良好 灰黄
42-462	S J 0 5	高台付坏 高 4.3 (口13.8) (底 8.9)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部 は縦で角張る 高台は外にふん張る	*	*	灰白 良好 にぶい黄褐
42-463	S J 0 5	高台付坏 高 4.1 (口12.5) (底 9.0)	口縁はやや外反 体部は緩く膨む 高 台は短く外傾し壁地部は凹む	切離は荒切?→擦 体下端寬削	*	灰白 堅硬 黄灰
42-464	S J 0 5	高台付坏 高 4.6 (口12.2) (底 7.7)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部 は縦で角張る 高台は緩をもって外傾	切離は荒切→擦 堅硬 *	*	灰褐 堅硬 *
42-465	S J 0 5	高台付坏 高 4.5 (口13.8) (底 10.0)	口縁は外反 体部は直線的 高台は後 をもって外傾	切離は荒切?→擦 体下端寬削	*	灰黄 良好 灰白
42-466	S J 0 5	高台付坏 高 4.8 (口13.4) (底 9.5)	*	切離は荒切 体下端寬削	*	*
42-467	S J 0 5	高台付坏 高(4.2) (底 10.0)	体部は緩く膨む 底部は中央で薄い 高台は緩をもって直立気味に立つ	*	*	にぶい褐 良好 にぶい黄褐
42-468	S J 0 5	高台付坏 高 4.6 (口14.1) (底 7.8)	口縁は外反 体部は直線的 高台は緩 い後をもって外傾	切離は荒切?→擦	粗砂礫著	*
47-11					良好	暗赤褐
42-469	S J 0 5	高台付坏 高 5.0 (底 9.2)	体部は大きく膨む 底部は縦で角張る 高台は緩い後をもって外傾	切離は荒切→擦 微量	0.1以下の砂粒 製鍊	灰白 暗赤褐
42-470	S J 0 5	高台付坏 高 4.1 底10.0	体部は大きく膨む 底部は縦で丸い 高台は緩い後をもって外傾	*	*	灰白 堅硬 暗赤褐

第27表 土器観察表(26)

単位cm

掲番・回版	出土地点	器種・状況	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・質
42-471	S J 0 5	高台付杯 高 5.3 底 10.4	体部は直線的 底部は端でやや高い 高台は縁をもつて外傾	切削は端切→撫 体下端荒削	細砂少混 良好	灰白 +
42-472	S J 0 5	高台付杯？ 高(6.8) (口16.7)	口縁は外反 体部は直線的 底部は端 で丸い	体下端荒削	0.1以下の砂粒 顯著	灰 黑褐
42-473	S J 0 5	高台付杯 高 5.0 (口13.0) (底 8.8)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 高台 は外にふん張る	切削は端切→撫	0.1前後の砂粒 顯著	灰白 +
47-12					不良	
42-474	S J 0 5	高台付杯？ 高(1.3) 底 9.7	高台は長方形状に外にふん張る 篦地 部は縁に凹む	切削は端切→撫	0.1以下の砂粒 少量	灰 堅硬
42-475	S J 0 5	高台付杯？ 高(3.5) 底 9.8	体部は緩く膨む 底部は凸がある 高台は厚く長方形状に外傾		*	にぶい黄褐色 不良
42-476	S J 0 5	高台付杯 高 4.6 (口13.3)	口縁は薄く直線的 体部は緩く膨む 底部は端で丸い	切削は不明→撫	0.1前後の砂粒 顯著	灰黄 黄灰
42-477	S J 0 5	高台付杯 高(2.7) (底 9.1)	底部は中央が薄く端で高い 高台は短 く外にふん張る	切削は端切→撫	0.1以下の砂粒 少量	灰白 +
42-478	S J 0 5	高台付杯 高 4.9 (口12.6) (底 9.2)	口縁はやや外反 体部は直線的 高台 は長方形状で外傾	切削は端切→撫	*	灰 堅硬
48-1						
42-479	S J 0 5	杯 高 4.4 (口12.9) 底 8.4	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部 は端で早いがほぼ平坦	切削は端切→撫	0.1前後の砂粒 少量	灰白 にぶい黄褐色
42-480	S J 0 5	杯 高 3.8 (口12.7) (底 8.2)		*	*	灰白
42-481	S J 0 5	杯 高 4.2 (口14.3) (底 10.0)	口縁は外反 体部は直線的 底部は端 が厚く屈曲	切削は端切→撫	0.1以下の砂粒 少量	灰黄 黄灰
42-482	S J 0 5	杯 高 4.8 (口14.2) (底 9.4)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部 は厚く端で丸い	切削は端切→撫	0.1以下の砂粒 顯著	細灰 堅硬
42-483	S J 0 5	杯 高 4.5 52-8	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部 は中央部が薄く端は丸い	*	0.1以下の砂粒 少量	灰白 堅硬
42-484	S J 0 5	杯 高 4.6 (口14.4) (底 9.8)	口縁は内側気味 体部は大きく弓曲 底部は端部が厚く端は凹む	*	*	灰褐色 灰
42-485	S J 0 5	杯 高 4.2 (口12.6) (底 9.0)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部 はほぼ平坦で厚く端は屈曲	切削は端切→撫 済明瞭	0.1以下の砂粒 微量	灰白 堅硬
42-486	S J 0 5	杯 高 4.5 (口13.5) (底 9.3)	口縁は内側気味 体部は直線的 底部 は端で高く屈曲する	*	0.1~0.2の砂粒 微量	+

第28表 土器観察表(27)

単位cm

標識・開版	出土地点	部種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
43-487	S J 0 5	杯 高 3.9 (口13.0) (底 9.2)	口縁は外反 体部は直線的 底部は厚く平坦で端は屈曲	切削は荒切→削 顯著	0.1以下の砂粒 少量	灰白 灰
52-9					堅硬	〃
43-488	S J 0 5	杯 高 3.9 (口14.1) (底 8.5)	口縁は内寄気味 体部は直に反る 底部は中央がやや高く端は丸い	*	0.1以下の砂粒 少量	灰
52-10					堅硬	〃
43-489	S J 0 5	杯 高 3.3 (口13.6) (底 9.9)	口縁は内寄気味 体部は直に反る 底部は平行平坦で端は丸い	*	*	灰白
					堅硬	〃
43-490	S J 0 5	杯 高 3.9 (口14.9) (底 9.2)	口縁は外反 体部は弓曲 底部は中央がやや高く端は丸い	*	*	灰
					堅硬	〃
43-491	S J 0 5	杯 高 3.3 (口13.6) (底 9.2)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は中央がやや高く端は丸い	切削は荒切→削 浜明顯	0.1以下の砂粒 少量	〃
52-11					堅硬	〃
80-6		口13.7 底 9.5	は端が厚く屈曲			
43-492	S J 0 5	杯 高 4.0 (口14.6) (底 9.9)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は端が厚く屈曲	切削は荒切→削	*	*
52-11					堅硬	〃
80-6					堅硬	〃
43-493	S J 0 5	杯 高 3.5 (口14.6) (底 9.9)	*	*	*	〃
					堅硬	〃
43-494	S J 0 5	杯 高 3.8 (口14.1) (底 9.3)	口縁は外反 体部は膨む 底部は平行で中央がやや高く端は屈折	*	*	〃
					堅硬	〃
43-495	S J 0 5	杯 高 3.2 (口14.5) (底 10.4)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は平行で端は凹む	*	*	〃
					堅硬	〃
43-496	S J 0 5	杯 高 3.6 (口15.1) (底 10.0)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は端で丸い	*	*	灰白
					堅硬	〃
43-497	S J 0 5	杯 高 4.5 (口13.3) (底 8.9)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は平行で屈曲	*	0.1前後の砂粒 少量	〃
					堅硬	灰
43-498	S J 0 5	杯 高 4.3 (口14.3) (底 9.6)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は端で折折	切削は荒切?→削	*	〃
					堅硬	〃
43-499	S J 0 5	杯 高 5.0 (口14.5) (底 8.8)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は平行で折折	切削は荒切?→削 剝	0.1以下の砂粒 顯著	灰黄
					堅硬	〃
43-500	S J 0 5	杯 高 4.3 (口14.8) (底 10.0)	*	切削は荒切?→削	*	灰
					堅硬	〃
43-501	S J 0 5	杯 高 4.3 (口14.5) (底 9.0)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は中央がやや高く端で屈折	切削は荒切→削	*	〃
52-12					堅硬	〃
43-502	S J 0 5	杯 高 4.0 (口12.9) (底 8.6)	口縁~体部にかけて直線的 底部は端が厚く折折	*	*	〃
					堅硬	灰白

第29表 土器観察表(28)

単位cm

番号・団版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技術の特徴	粘土・焼成	色調
43-503	S J 0 5	环 高 3.5 (口14.6) (底 8.4)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は中央が高く端は鋸折	切離は荒切→撫 底著 堅硬	0.1以下の砂粒 微量	灰白 +
43-504	S J 0 5	环 高 4.1 (口13.2) (底 7.7)	口縁は内湾気味 体部は緩く膨む 底部は中央がやや高く端は角張る	+	+	にぶい黄澄 堅硬
43-505	S J 0 5	环 高 4.0 53-1 口14.7 (底10.0)	口縁は外反 体部は緩く膨む 底部は薄く端は角張る	+	+	灰白 良好
43-506	S J 0 5	环 高(2.3) 底 9.1	体部は緩く膨む 底部はほぼ平坦で端は鋸折	+	0.1以下の砂粒 微量	+
43-507	S J 0 5	环 高 4.5 (口14.4) (底10.0)	口縁はやや外反 体部は弓曲 底部は端が高く丸い	切離は荒切→撫	+	にぶい黄澄 良好
43-508	S J 0 5	环 高 4.5 (口13.1) (底 8.1)	口縁は一旦屈曲して内湾 体部は弓曲 底部は平坦で端は丸い	+	+	+
43-509	S J 0 5	环 高 4.2 (口13.0) (底 8.7)	口縁～体部にかけて内湾 底部はやや丸く端も丸い	+	+	浅黄澄 不良
43-510	S J 0 5	环 高 3.8 (口12.4) (底 9.2)	口縁～体部にかけて内湾 底部は平坦で端は丸い	+	+	にぶい黄澄 良好
43-511	S J 0 5	环 高 3.5 (口14.0) (底 9.8)	口縁～体部にかけて内湾 底部は中央がやや高く端は丸い	+	+	にぶい黄 にぶい赤澄
44-512	S J 0 5	环 高 3.8 (口13.7) 底 8.9	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は中央がやや高い	+	0.1以下の砂粒 少量	灰白 不良
44-513	S J 0 5	环 高 3.9 (口14.5) (底10.1)	口縁は外反 体部は直線的 底部は平坦で端は丸い	+	+	にぶい黄澄 灰黄褐
44-514	S J 0 5	环 高 3.9 (口13.6) 底 8.8	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は中央がやや高い	+	+	浅黄澄 良好
44-515 53-3 80-5	S J 0 5	环 高 3.8 (口14.0) 底 9.5	口縁は外反 体部は直線的 底部は平坦で端は鋸折	+	+	にぶい黄澄 良好
44-516	S J 0 5	环 高 3.9 (口14.4) 底 8.2	口縁～体部にかけて外反 底部は薄く平坦で凸状に突出	+	+	灰白
44-517	S J 0 5	环 高 3.7 (口13.5) (底 9.0)	口縁～体部にかけて外反 底部は薄く中央が高い 端は鋸折	切離は荒切→撫 済明鏡	+	浅黄澄 灰白
44-518	S J 0 5	环 高 5.2 (口10.9) 底 5.5	口縁～体部にかけて外反 底部は平坦で端は丸い	切離は荒切?	+	黄灰 灰
55-5					堅硬	

第30表 土器観察表(29)

単位cm

標識・回数	出土地点	器種・性質	器形の特徴	柱当の特徴	胎土・焼成	色 調
44-519	S J 0 5	环 高 3.5 (口12.5) (底 8.7)	口縁は外反 体部は腰く膨む 底部は端が丸い。	切離は端切→擦 体部は木口の痕	0.1以下の砂粒 擦著	灰白 黒
44-520	S J 0 5	环 高(2.1) (底 9.4)	体部は膨む 底部は凹凸はあるが平坦 端は凹む	切離は端切→擦	0.1以下の砂粒 少量	にじい質根 灰褐
44-521	S J 0 5	ミニチュア壺 高(4.2) (口7.1)	口縁は外反し頭部はくの字状 底部はやや張り屈曲して体部に至る	内外に丁寧な擦	〃	灰 黄灰
44-522	S J 0 5	長頸壺 高(5.5) (口7.8)	口縁は外反し強い棱をつくる 首中央 頭部は直頸に厚い	内外に擦	0.1以下の砂粒 擦著	灰 良好 〃
44-523	S J 0 5	長頸壺 高(2.9) (口8.5)	口縁は屈曲し直線的に外反 首中央から大きく開く	内外に丁寧な擦	〃	〃 質根 灰灰
44-524	S J 0 5	环 高(1.5) (底9.4)	体部は膨む 底部は中央が高く端は屈曲して凹む	切離は端切→擦	0.1以下の砂粒 少量	灰白 良好 〃
44-525	S J 0 5	壺	天井は中央部が凹み肩部が高く丸い 口縁は直線的でやや外反	切離は端切→擦	0.1以下の砂粒 擦著	灰
55-6	S J 0 5	壺	肩部は丸い 口縁は直線的でやや内反	内外に擦	〃	〃
55-7	S J 0 5	壺	口縁はやや外反し尖端内側が突出	切離は端切→擦	少量	〃
44-526	S J 0 5	壺	天井は平坦 肩部は丸い 口縁はやや内反気味 つまりは底が丸い円盤状	内外に擦	〃	〃
55-8	S J 0 5	壺	口10.3 天 2.3	切離は端切→擦	少量	灰白
44-527	S J 0 5	壺	天井は平坦 肩部は丸い 口縁はやや内反気味 つまりは底が丸い円盤状	内外に擦	〃	〃
55-9	S J 0 5	壺	天井は中央部が凹み肩部が高く丸い 口縁はやや外反し尖端内側が突出	切離は端切→擦	少量	灰
44-528	S J 0 5	壺	天井は中央部が凹み肩部が高く丸い 口縁はやや外反し尖端内側が突出	切離は端切→擦	少量	灰
55-10	S J 0 5	壺	天井は中央部が凹み肩部が高く丸い 口縁は直立気味だが反り実端内側が突出	切離は端切→擦	少量	灰
44-529	S J 0 5	壺	天井は平坦で肩部は丸い 口縁直立	切離は端切→擦	少量	灰
55-11	S J 0 5	壺	天井は内側で突起 つまりは堅定株	切離は端切→擦	少量	灰白
44-530	S J 0 5	壺	天井は平坦で肩部は丸い 口縁直立	切離は端切→擦	少量	灰
55-12	S J 0 5	壺	天井は内側で突起 つまりは堅定株	切離は端切→擦	少量	灰白
44-531	S J 0 5	鉢	口縁は強く内凹 体部は腰く両曲	体部は擦削	〃 質根	灰白・灰
44-532	S J 0 5	高环 高 7.1 (口17.3)	体部は浅く口縁は直立気味 肩部は柱状で底部は大きく開く	体部は端切→擦削 肩部は擦目	〃 質根	灰
55-13	S J 0 5	高台付环 高 7.8 (口17.6)	口縁は外反 体部は直線的 底部は平坦で端は角張る 擦地部は凹む	切離は端切→擦削 体下端擦削	〃 質根	灰黄
44-533	S J 0 5	環?	体部は直立気味 底部は平	切離は端切→擦削	〃 質根	灰黄
55-14	S J 0 5	環?	外側 擦地部は尖る	体下端擦削	〃 質根	灰白
44-534	S J 0 5	壺?	高 2.7 (底 9.2)	内面に同心円状の擦目	〃 質根	明瞭灰
55-15	S J 0 5	壺?	高 1.6 (底12.4)	内面に丁寧な擦	0.1以下の砂粒 微量	〃 質根

B地区の出土土器

第31表 土器観察表(30)

単位cm

坪段・回版	出土地点	種類・法量	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色・調
44-536	S J 0.5	高台杯 高(1.5) (底 7.2) 強ら	体部は直線的 底部は平坦で縁は丸 高台は強く外反	切削は落切→磨 縁著 型缺	0.1以下の砂粒 灰白	
44-537	S J 0.5	高台杯? 底 4.8	底部は厚く平坦 高台は三角状に立つ	*	*	堅板
45-538	S J 0.5	横瓶 高(24.9) (口13.3) (底35.6)	口唇は平坦で口縁は外反 瓶部はくの字に屈折し底部は水平で縁は丸い	外は平行叩→振目 内は円文叩→振目	*	灰
59-2					型缺	*
45-539	S J 0.5	横瓶 高24.8 (口13.5)	口唇は平坦で口縁は外反 瓶部はくの字に屈折 瓶部はやや丸味あり	外は平行叩→振目 内は円文叩	*	*
45-540	S J 0.5	短頸壺 (高28.6) (口15.6) (底16.0)	口唇は僅に凹み口縁は外反 瓶部は両曲 瓶部は強く張り底部は平坦	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	0.1前後の砂粒 灰オリーブ	
56-3				縁著 型缺	灰	
45-541	S J 0.5	鉢 高17.5 (口24.4) 底13.0	口唇は平坦で外傾 瓶部はくの字状に張り 瓶部は底に張り底部は平坦	外は叩→振目 体下端施削 施薬剤 内は振目	0.1以下の砂粒 灰白	
56-3				縁著 不良	*	
45-542	S J 0.5	小甌 高19.3 (口16.4) (底10.0)	口唇は平坦で外傾 瓶部は両曲 瓶部は張り 瓶部は中央がやや高い	外は叩→体下端施削 内は振目	*	灰
60-5				施薬剤 内施 施薬剤	型缺	*
46-543	S J 0.5	四耳壺 高(32.2) (口14.8)	口唇は水平で凹む 底部は大きく張り 四つの耳をもつ 瓶部はくの字に屈折	外は平行叩→撫 内は円文叩→張	*	灰白
56-4				型缺	灰	
46-544	S J 0.5	四耳甌 瓶(14.0)	瓶部は大きく弯曲し四つの耳をもつ	外は平行叩→内は円文叩	*	灰・灰オリーブ
46-545	S J 0.5	短頸壺 高(5.0) (口16.5)	口唇は僅に凹み外側に丸い縁をもつ 口縁は底立 瓶部はやや張る	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	0.1前後の砂粒 灰白	
46-546	S J 0.5	甌 (口30.4)	口唇は僅に凸む 瓶部はくの字に屈曲	外は叩→撫 内施 施薬剤	0.1以下の砂粒 灰・同	
46-547	S J 0.5	甌 高(12.0) (口17.6)	口唇はほぼ平坦で瓶部は内窪 瓶部はくの字状に屈折 瓶部は大きく弯曲	外は圓文叩 内は撫	0.1前後の砂粒 灰	
46-548	S J 0.5	甌 高(8.3) (口16.8)	口唇は凹み内外に縁をもつ 瓶部はくの字に屈折 瓶部はやや強く外傾	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	0.1以下の砂粒 灰白	
47-549	S J 0.5	甌 高(12.9) (口20.2)	口唇はやや丸く外に縁をつくる 瓶部はくの字に屈曲し瓶部は外傾	*	*	灰
47-550	S J 0.5	甌 高 15.6 (口21.0)	口唇は直に凹み外傾 瓶部はくの字に屈折 瓶部は大きく縁をもつ	外は撫→平行叩 内は円文叩→撫	0.1前後の砂粒 灰	
67-9				縁著 型缺	*	
47-551	S J 0.5	甌 高(40.0) (口20.6)	口唇はやや丸く内外に縁をもつ 瓶部はくの字に屈曲	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	*	灰
60-6				型缺	*	
48-552	S J 0.5	甌 高(17.3) (口24.6)	口唇は凹み内外に縁をもつ 瓶部はくの字に屈曲 瓶部は大きく弯曲	外は平行叩→振目 内は円文叩	*	灰白
67-10				型缺	*	
48-553	S J 0.5	甌 (高49.5) (口28.0) (底23.6)	口唇は凹み外傾し内外に縁をもつ 瓶部はくの字に屈曲 瓶部は大きく弯曲	外は平行叩 内は円文叩→撫	*	灰オリーブ
61-1				型缺	*	

第32表 土器観察表(31)

単位cm

御園・団版	出土地点	器種・高さ	部形の特徴	技法の特徴	割七・焼成	色 調
49-554	S J 0 5	甕 高(21.9) (口16.8) (底14.0)	口唇は僅に凹む水平で内に縦をもつ 頸部はくの字に屈曲 瓶は大きく両曲	外は平行叩→振打 内は円文叩→撫	0.1前後の砂粒 頸著	灰
61-2					堅硬	灰
49-555	S J 0 5	甕 高31.1 (口15.1) (底13.5)	口縁は外反 頸部はくの字状に弯曲 肩部は大きく両曲し底部は丸い	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	"	"
71-1					堅硬	灰
49-556	S J 0 5	甕	口縁は折返状 口唇に沈線	内外に丁寧な撫	0.1以下の砂粒 頸著	灰灰質・灰質 灰
49-557	S J 0 5	甕	口唇は凹んで丸味もつ	外叩→撫 内撫	" 堅硬	灰・同
71-1					堅硬	灰
49-558	S J 0 5	甕	"	"	" 堅硬	"
71-1					堅硬	灰
49-559	S J 0 5	甕	口縁は折返状で内面に凹有	外は平行叩→内撫	" 堅硬	"
71-1					堅硬	灰
49-560	S J 0 5	甕	口縁には2つの鋸の後をもつ	内外に撫	" 堅硬	灰オリーブ・ 灰
71-1					堅硬	灰
49-561	S J 0 5	甕	口縁には2つの後をもち折返状になる	外は平行叩→内撫	" 堅硬	灰オリーブ・ 灰
71-1					堅硬	灰
50-562	S J 0 5	甕 高(17.7) (口48.6)	口縁は外傾し内外と中央に縦をもつ 頸部は極く膨む	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	" 灰 堅硬	"
					堅硬	灰
50-563	S J 0 5	甕 高(1.8) (口58.2)	口縁は外唇 口唇は内傾し内外に縦を もつ	外は撫・波状文 内は円文叩→撫	0.1前後の砂粒 頸著 堅硬	"
					堅硬	灰
50-564	S J 0 5	甕 高(9.3) (口46.4)	口縁は僅に凹む 口縁には2つの縦を もち大きく外反	外は撫→波状文 内は撫	0.1~0.2の砂粒 頸著 堅硬	灰オリーブ 灰
					堅硬	灰
50-565	S J 0 5	甕 高(12.6) (口52.2)	口縁は凹んで外傾し内外に縦をもつ 口縁は直線的で底部が外唇	外は撫→波状文 内は撫	0.1前後の砂粒 頸著 堅硬	"
					堅硬	灰
51-566	S J 0 5	甕 高(47.5) (口47.0)	口縁は僅に凹んで垂直 頸部はくの字 状に折折 頸部は大きく両曲	外は平行叩→振打 波状文→内は円文 叩→振打	" 黄灰 堅硬	灰オリーブ
61-4-5					堅硬	灰
51-567	S J 0 5	甕	口縁は外傾し内外と中央に縦をもつ	外は平行叩 内撫	" 堅硬	オリーブ灰・ 同
71-1					堅硬	灰
51-568	S J 0 5	甕	口縁は外反	外は叩→撫 内撫	" 堅硬	灰・同
71-1					堅硬	灰
51-569	S J 0 5	甕	口縁は折返状で2つの縦有 内に沈線	"	" 堅硬	"
71-1					堅硬	灰
51-570	S J 0 5	甕	口縁は丸く外傾し尖端は鋭い	"	" 堅硬	灰白・灰
71-1					堅硬	灰
53-571	S T 1 9	坏基 高 3.2 (口16.0) 天 2.4	火井はやや丸い 体部は壺に反る 壁 底は丸く直ぐ立つ つまみは基石形	切離は鋭切? 0.1以下の砂粒 基盤 不良	乳白	
					不良	灰
53-572	S T 1 9	坏基 高 3.0 (口15.9) 天 2.2	火井は丸い 体部は壺に反る 壁部は 短く底底で内部に沈線 つまみは基盤	切離は鋭切? →撫 削はねじ全剥	"	
43-2					不良	灰
53-573	S T 1 9	坏基	火井は強く平坦 体部は幾く膨む 壁 部は小さな縦をつくり立つ	切離は鋭切? →撫 削はねじ全剥	" 堅硬	灰オリーブ灰 灰白
					堅硬	灰白
53-574	S T 1 9	坏基 高 3.2 (口15.0) 天(2.6)	火井は平坦 体部は大きく両曲 壁部 は經濟して内傾 つまみは円錐状	切離は鋭切? →撫 削はやや深い	0.1前後の砂粒 頸著 堅硬	灰黄 灰黄褐
43-3					堅硬	灰黄褐

第33表 土器観察表(32)

単位cm

部類・固版	出土地点	基盤・底盤	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
53-575	S T 1 9	环底 高 3.0 (口15.1) 天 2.1	天井は平坦 体部は緩く膨らむ 端部は垂直で内には凹む つまみは既定珠	切削は直切→鋸削 少量 型紙	0.1前後の砂粒 灰白	灰白
43-4						〃
53-576	S T 1 9	环底 (口13.7) 天 1.0	天井は低く平坦 体部は直に反る 端部は弧曲して外傾	〃	〃	黄灰
						型紙
53-577	S T 1 9	环底 高 2.6 (口14.1) 天 1.8	天井は平坦 体部は直に反る 端部は屈折し先矢は外窓 つまみはボタン状	〃	0.1前後の砂粒 鐵器	灰白
						型紙
53-578	S T 1 9	环底 高 2.6 (口15.1) 天 1.7	天井は平坦 体部は直に反る 端部は極く弧曲しない つまみはボタン状	〃	〃	灰
						型紙
53-579	S T 1 9	环底 高 2.8 (口14.0) 天 2.0	天井は平坦 体部は直に反る 端部は弧曲し直立 つまみはボタン状	〃	〃	〃
						型紙
53-580	S T 1 9	环底 高(1.4)	天井は低く平坦 つまみはボタン状	〃	〃	環モリーブ灰・灰
53-581	S T 1 9	环底 高(1.5)	天井は平坦 つまみはボタン状	〃	〃	灰白・同
53-582	S T 1 9	环底 高(1.6)	〃	〃	〃	型紙
53-583	S T 1 9	环底 高(1.7)	〃	〃	〃	黄灰・同
53-584	S T 1 9	环底 高(1.8)	〃	〃	〃	型紙
53-585	S T 1 9	环底 高(1.6)	〃	〃	〃	型紙
53-586	S T 1 9	环底 高(1.6)	〃	〃	〃	黄灰・灰白
53-587	S T 1 9	环底 高(1.6)	〃	〃	〃	黄灰・同
53-588	S T 1 9	环底 高(2.0)	天井はやや丸い つまみは亀頭形	〃	〃	不良
						淡青・同
53-589	S T 1 9	环底 高 3.1 (口12.6)	天井は平坦で体部は直に反る 端部は弧曲して外傾 つまみは亀頭形	〃	〃	灰
43-5						良好
53-590	S T 1 9	环底 (口14.5) 天 1.7	天井は低く平坦 体部は直に反る 端部は逆S字状に弧曲し外傾	〃	0.1前後の砂粒 少量	〃
						良好
53-591	S T 1 9	环底 (口13.8) 天 2.2	天井はやや丸い 体部は直に反る 端部は逆S字状に弧曲して外傾	〃	〃	〃
						良好
53-592	S T 1 9	环底 高(2.7)	天井は平坦 体部は反る	切削は直切→無	0.1以下の砂粒	灰・同
53-593	S T 1 9	环底 (口14.5)	体部は直線的 端部は大きく直曲	鋸削	少量	型紙
53-594	S T 1 9	环底 高(1.8)	天井は平坦 つまみは巻が丸いボタン状	切削は直切→無	良好	灰白・灰青
53-595	S T 1 9	高台付环 高(2.1) (底 8.0)	体部は蹲曲 底部は端が厚い 高台は外にふん張り並地部は平坦	〃	〃	環モリーブ
53-596	S T 1 9	高台付环 高 5.4 (底 9.9)	口縁は直線的 体部は緩く膨らむ 底部はやや膨らみ端は高い 高台は外傾	切削は直切→無 体下端無	細砂少量	乳白
43-2						不良

第34表 土器観察表(33)

単位cm

辨識・回数	出土地点	器種・法量	形態的特徴	技法的特徴	胎土・施灰	色調
53-597	S T 1 9	高台付环 高 4.9 (口13.0) 底 9.1	口縁は直線的 体部は僅に反る 底部 は端で角張る 高台は高く三角形状	切削は直切→削 顯著 施灰	0.1前後の砂粒	褐灰
53-598	S T 1 9	高台付环 高 4.8 底 8.8	口縁は直線的 体部は僅く膨む 底部 は平坦で端で内張る 高台は三角形状	×	×	黄灰 堅穢
53-599	S T 1 9	高台付环 高 4.7 (口13.3) (底 8.4)	口縁～体部は直線的 底部はやや丸く 端は屈曲 高台は三角形状で直立	×	×	× 堅穢
53-600	S T 1 9	高台付环 高 4.6 (口13.7) (底 8.9)	口縁～体部は直線的 底部はやや丸く 端は屈曲 高台は三角形状でやや外傾	×	×	× 堅穢
54-601	S T 1 9	高台付环 高(3.0) (底 8.1)	体部は僅く膨む 底部は平坦で端は角 張る 高台は三角形状で直立	×	×	褐灰 堅穢
54-602	S T 1 9	高台付环 高 4.8 (口12.6) (底 8.4)	体部はやや外反 体部は僅く膨む 底 部は平坦で角張る 高台は高く三角形	×	×	灰白 堅穢
54-603	S T 1 9	高台付环 高 5.1 (口13.2) (底 9.2)	口縁は直線的 体部は僅に反る 底部 は平坦で端は角張る 高台は三角形状	×	×	黄灰 灰白
54-604	S T 1 9	高台付环 高(3.6) (底 9.0)	体部は僅く膨む 底部は平坦で端は角 張る 高台は高く外傾	×	×	黄灰 堅穢
54-605	S T 1 9	高台付环 高(3.0) (底 8.5)	体部は僅く膨む 底部は平坦で端はや や丸い 高台は三角形状で直立	×	×	灰白 堅穢
54-606	S T 1 9	高台付环 高(4.6)	口縁～体部にかけて直線的 底部は平 坦で端は丸い 高台は三角形状	×	×	× 堅穢
54-607	S T 1 9	高台付环 高(2.8) (底 8.5)	底部は平坦で端は丸い 高台は三角形 状で直立	×	×	黄灰 堅穢
54-608	S T 1 9	高台付环 高(2.9) (底 8.5)	体部は僅く膨む 底部は平坦で端は角 張る 高台は三角形状でやや外傾	×	×	灰白 堅穢
54-609	S T 1 9	高台付环 (口13.1)	口縁は外反 体部は直線的	内外に丁寧な施	×	堅穢 褐灰
54-610	S T 1 9	高台付环 高 4.4	口縁～体部は直線的 高台は三角形状	— ×	×	堅穢 灰白・褐灰
54-611	S T 1 9	高台付环 高 4.1 (口13.0) (底 8.1)	口縁は外反 体部は大きくなじみ 高台 は薄く外傾 底部は中央が浅い	切削は直切→削 少量	0.1以下の砂粒 良好	灰白
54-612	S T 1 9	高台付环 高(2.9) (底 8.8)	体部は直曲 底部は端で丸い 高台は 薄く外傾 先端に縁をもつ	×	×	灰白
54-613	S T 1 9	高台付环 高(1.9) (底 8.2)	体部は直曲 底部はほぼ平坦で端は丸 い 高台は直立してから外傾	×	×	灰白 良好

第35表 土器観察表(34)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
54-614	S T 1 9	高台付环 高 3.0 (底 8.8)	体部は弯曲 底部の端はやや高い 高台はやや太く直立	切削は荒切→削 少量	0.1以下の砂粒 良好	灰白 黄灰
54-615	S T 1 9	高台付环 高(2.0) (底 8.4)	体部は弯曲 底部はほぼ平坦で端が丸い 高台は細く外にふん張る	×	×	灰白 堅密 黄灰
54-616	S T 1 9	高台付环 高(2.2)	体部は弯曲 底部はほぼ平坦	×	× 堅密	灰白・同
54-617	S T 1 9	高台付环 高 6.0 (底 8.7)	体部は強く膨らむ 底部は端がやや高く丸い 高台は外傾し尖端は内に屈折	×	×	灰 良好 ×
54-618	S T 1 9	高台付环 高 5.6 (口13.9) (底 8.9)	口縁～体部は内窓気孔 底部は厚い 高台は外傾し強い棱をもつ	×	0.1以下の砂粒 数量 良好	にぶい黄緑 灰黄
54-619	S T 1 9	高台付环 高(3.9) (底 9.0)	体部は弯曲 底部は中央が低く端が高い 高台は尖端がやや丸く外傾	×	×	黄灰 良好 灰褐
54-620	S T 1 9	高台付环 高 3.0 (底 8.9)	体部は弯曲 底部は中央が低く端が高い 高台は直立気孔にふん張る	×	0.1以下の砂粒 少量 良好	にぶい黄緑
54-621	S T 1 9	高台付环 高(2.1) (底10.0)	体部は弯曲 底部は平坦で端は角張る 高台は長方形に直立し内に稜をつくる	切削は荒切→削 体下端剥離	× 良好	浅黄
54-622	S T 1 9	环 高 4.1 (口12.9)	口縁～体部は内窓気孔 底部は厚く平坦で端は丸い	切削は荒切→削 端部 剥離	0.1以下の砂粒 良好	灰白 浅黄
54-623	S T 1 9	环 高 3.1 (口14.0) (底10.2)	口縁は外反 体部は直線的 底部は平坦で端は丸い	×	×	灰白
54-624	S T 1 9	環	口縁はやや丸く平坦で内外に稜をもつ	内外に丁寧な剥離	粗砂粒量 良好	乳白・同
54-625	S T 1 9	壺 ? (底)1.9	高台は外にふん張り後地面は平坦	×	× 良好	×
55-626	S T 1 9	壺 高38.8 (口23.8)	口器は3つの後 端部はくの字に屈折	外は平行叩→剥離	0.1以下の砂粒	にぶい黄
61-6			肩部は強く弯曲	内は押え→剥離	粗著	堅密
55-627	S T 1 9	壺 高34.6 (口23.8)	口器は直立で内外に稜 端部はくの字に屈曲 肩部は強く弯曲	外は純支扣 内は押え→剥離	×	黄灰
55-628	S T 1 9	小壺 高25.7 (口12.8)	口管部は円筒 口縁は直立気孔で頭部はくの字状 底部は喇叭形で厚い	外は括目 内は括目	×	黄褐
62-2					堅密	灰
59-629	S T 1 7	环壺 高(2.2) (口15.4)	体部は僅に反る 端部は後を成し屈折して内側 屈折部内面に沈線	切削は荒切→剥離	0.1以下の砂粒 少量	黄灰 坚密
59-630	S T 1 7	环壺 高(1.8)	天井は丸い つまみは扁平な横宝珠	切削は荒切→剥離	0.1以下の砂粒 粗著	灰白・同
59-631	S T 1 7	环壺 (口18.5)	体部は強く膨らむ 端部は屈折して立つ	路滑	× 堅密	にぶい黄
59-632	S T 1 7	环壺 高 3.1 (口17.8)	天井はほぼ平坦 体部は弯曲 底部は屈折して立つ つまみは横宝珠	切削は荒切→剥離	×	灰
43-6					堅密	×

第36表 土器観察表(35)

単位cm

特徴・固版	出土地点	器種・法算	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
59-633	ST1.7	环盖 高(2.0)	天井は丸い つまみは扁平な楕円形	切削は荒切→荒削 端部はやや窪む	0.1前後の砂粒 堅密	灰
59-634	ST1.7	环盖 (口17.4)	体部は最も膨む 端部は屈折して立つ	端部はやや窪む	×	半纏
59-635	ST1.7	环盖 高 3.0 口14.7 天 2.3	天井は丸い 体部は最も膨む 端部は屈折して立つ つまみは扁平	切削は荒切→荒削	×	灰白
59-636	ST1.7	环盖 高 2.6 口13.7 天 2.0	天井は丸い 体部は最も膨む 端部は屈折して内傾 つまみは扁平	×	×	堅密
59-637	ST1.7	环盖 口14.8 天 2.1	×	×	×	灰
59-638	ST1.7	环盖 口14.7 天 2.1	×	×	×	半纏
59-639	ST1.7	环盖 (口14.8)	体部は最も膨む 端部は屈折して立つ	×	×	堅密
59-640	ST1.7	环盖 (口14.0) 天 2.2	天井は丸い 体部は最も膨む 端部は屈折して内傾	×	×	灰白
59-641	ST1.7	环盖 (口14.0) 天 2.2	天井は丸い 体部は最も膨む 端部は逆S字状に屈折して立つ	×	×	堅密
59-642	ST1.7	环盖 (口13.6) 天 2.4	天井は丸い 体部はやや反る 端部は屈折してやや内傾	×	×	青灰
59-643	ST1.7	环盖 (口14.6)	体部は最も膨む 端部は屈折して立つ	×	×	堅密
59-644	ST1.7	环盖 (口13.8)	体部は反る 端部は逆S字状に屈折	×	×	堅密
59-645	ST1.7	环盖 高 3.0 口13.8 天 2.3	天井は丸い 体部は最も膨む 端部は屈折して内傾 つまみは扁平	×	×	灰白
43-7	ST1.7	环盖 高 3.4 口14.5 天 2.5	×	×	×	堅密
59-647	ST1.7	环盖 高 3.3 (口13.6) 天 2.6	天井は丸い 体部は最も膨む 端部は屈折して細く内傾 つまみはボタン状	×	×	灰
59-648	ST1.7	环盖 高 3.5 口13.8 天 2.7	天井は丸い 体部は膨む 端部は屈折して立つ つまみは扁平な楕円形	×	×	堅密
43-8	ST1.7	环盖 (口13.8) 天 2.8	天井は丸い 体部は最も膨む 端部は逆S字状に屈折し直立する	×	×	堅密
59-649	ST1.7	环盖 (口13.8) 天 2.8	天井は丸い 体部は最も膨む 端部は逆S字状に屈折し直立する	×	×	堅密
59-650	ST1.7	环盖 (口13.5) 天 2.9	天井は丸い 体部は最も膨む 端部は屈折して内傾	×	×	堅密
59-651	ST1.7	环盖 (口14.0)	体部は裡に反る 端部は屈折して立つ	×	×	堅密

第37表 土器観察表(36)

単位cm

群別・段版	出土地点	器種・法蓋	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
59-652	S T 1.7	环蓋	天井は丸い 体部は幅く膨む 端部は (口13.6) 天 2.5 崩折して内傾	切離は丸切→尾削	0.1前後の砂粒 糊著 硬板	淡黄
59-653	S T 1.7	环蓋	天井は丸い 体部は幅く膨む 端部は (口13.8) 天 2.7 崩折して直立	〃	〃	淡黄
59-654	S T 1.7	环蓋	天井は三角形状 体部は膨む 端部は (口13.4) 天 3.4 崩折して内傾	〃	〃	淡黄
59-655	S T 1.7	环蓋	天井は三角形状 体部は直線的 端部 (口13.8) 天 3.0 は崩折して内傾	〃	〃	灰白
59-656	S T 1.7	环蓋 高 3.5	天井は丸く低い 体部はやや膨む 端 (口13.9) 天 2.2 部は丸く屈曲し直立 つまみは擬宝珠	〃	0.1~0.2の砂粒 微量 良好	淡黄
43-9						
59-657	S T 1.7	环蓋 高 2.9	天井はやや丸い 体部はやや膨む 端 (口14.2) 天 2.1 部は屈曲し外傾 つまみはボタン状	〃	0.1~0.2の砂粒 少量 良好	淡黄褐
43-10						
59-658	S T 1.7	环蓋 高 2.9	天井は低く平坦 体部は直線的 端部 (口14.6) 天 1.8 は崩折し外傾 つまみは亀頭形状	〃	0.1前後の砂粒 少量	淡黄
43-11						
59-659	S T 1.7	环蓋	天井は丸く高い 体部は膨む 端部は (口16.0) 天 3.1 縦をつくって屈曲し外反	〃	0.1前後の砂粒 糊著 良好	淡黄
59-660	S T 1.7	环蓋	天井はやや丸い 体部はやや反る 端 (口14.4) 天 2.6 部は屈曲しやや外反	〃	〃	にぶい黄緑
60-661	S T 1.7	高台付环 高 4.5	口縁から体部は直線的 底部は端が高 (口13.5) (底 9.1) い 高台は三角形状でやや外傾	切離は丸切→尾 底部尾削 体部 笠抜?	0.1以下の砂粒 少量 硬板	暗オリーブ灰
60-662	S T 1.7	高台付环 高(3.6)	口縁から体部は直線的 底部から体部 48-3 口(15.4) 底 9.2 は崩折 高台は高く三角形状	切離は丸切→尾 体部尾削?底部内 面不定形	〃	オリーブ灰
60-663	S T 1.7	高台付环 高 4.8	口縁から体部は直線的 底部は端が高 (口14.9) (底 9.7) い 高台は高く三角形状でやや外傾	底部端は尾削 端	〃	黄緑
60-664	S T 1.7	高台付环 底 8.6	高台は三角形状でやや外傾	切離は丸切→尾	〃 硬板	オリーブ黒 底オリーブ
60-665	S T 1.7	高台付环 (底 9.2)	〃	〃	〃	
60-666	S T 1.7	高台付环 (底 9.2)	底部端は高い 高台は三角形状	〃	〃 硬板	〃
60-667	S T 1.7	高台付环 高 6.1	口縁はやや外反 体部は直線的 底部 (口16.1) (底 10.1) 端は厚い 高台は長方形形状でやや外傾	〃	0.1前後の砂粒 少量 硬板	灰
60-668	S T 1.7	高台付环 高 5.6	口縁は僅に外反 体部は直線的で枕縫 (口16.2) (底 9.1) 有 底部端は厚い 高台は平行四辺形状	〃	〃	灰 硬板
60-669	S T 1.7	高台付环 高 5.7	口縁は直線的 体部は僅に膨む枕縫有 (口16.2) (底 9.4) 底部端は厚い 高台は長方形狀	〃	〃	灰 硬板

第38表 土器観察表(37)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・測量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・調
60-670	S T 17	高台付杯 高 6.0 (口)16.2 底10.0 有	口縁はやや外反 体部は直線的で比較	切削は荒切一撫	0.1初後の砂粒	灰
48-4			底部端はやや厚い 高台は外輪		少量 硬質	灰白
60-671	S T 17	高台付杯 高 6.5 (口)15.6 底 9.3	口縁は大きく外反 体部は直線的で比較	切削は荒切一撫		黄灰
			底部端は厚い 高台は外輪	底部増加削		堅硬 灰
60-672	S T 17	高台付杯 高 6.2 (口)15.3 底10.5 有	口縁はやや外反 体部はやや膨らみ沈線	切削は荒切一撫		シ
			底部端は厚い 高台は三角形状		堅硬	黒
60-673	S T 17	高台付杯 (口)15.9	口縁はやや外反 体部は直線的 沈線有	内外削		シ 堅硬 灰白・灰
60-674	S T 17	高台付杯 (口)14.8			シ	堅硬 灰白・同
60-675	S T 17	高台付杯 (口)16.3			シ	堅硬 灰・灰白
60-676	S T 17	高台付杯 高 4.0 (口)13.0 底 9.1	口縁から体部は直線的 底部は中央と 縁が高い 高台は方形状で直立	切削は荒切一撫	0.1以下の砂粒	灰
					少量 硬質	黒
60-677	S T 17	高台付杯 高 4.0 (口)13.8 底 9.0	口縁はやや外反 底部は端が厚い 高 台は低く逆三角形状で直立		シ	シ 灰
					堅硬	シ
60-678	S T 17	高台付杯 高 4.1 (口)13.0 (底 8.3)	口縁は内湾 体部は直線的 底部は端 が高い 高台は低く逆三角形状で直立		シ	シ シ
					堅硬	黒
60-679	S T 17	高台付杯 高 4.3 (口)12.4 底 8.7	口縁は直線的 体部は腰く膨らむ 底部 は端が高い 高台は方形状でやや外輪		シ	シ 黄灰
					堅硬	オリーブ黒
60-680	S T 17	高台付杯 高 4.4 (口)13.1 底 8.7	口縁はやや外反 体部は直線的 底部 の端と中央が高い 高台は直立	シ	シ	褐灰
48-5					堅硬	黒
60-681	S T 17	高台付杯 高 4.4 (口)13.5 (底 9.3)	口縁は直線的 体部はやや膨らむ 底部 は端が高い 高台は方形状でやや外輪		シ	シ 灰
					堅硬	黒
60-682	S T 17	高台付杯 高(4.0) (底 8.7)	体部は腰く膨らむ 底部は端でやや高い 高台は高く外輪し後部は平坦	シ 端の乳頭	0.1以下の砂粒 微量 良好	にぶい黄 浅黄
60-683	S T 17	高台付杯 高 4.4 (口)12.5 (底 7.1)	口縁はやや外反 体部は腰く膨らむ 底 部は端が厚い 高台は高くくの字状	切削は荒切	シ	灰質
48-7						良好
61-684	S T 17	高台付杯 高 4.2 (口)13.5 (底 9.3)	口縁から体部は直線的 底部は端で厚 い 高台は台形状で直立	切削は荒切一撫	0.1以下の砂粒 少量 硬質	灰 黑
61-685	S T 17	高台付杯 高 4.2 (口)13.3 (底 9.3)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部 は端で厚い 高台は逆三角形状で外輪	シ	シ	シ 灰
					堅硬	シ
61-686	S T 17	高台付杯 高 4.6 (口)12.9 底 9.2	口縁から体部は直線的 底部の端は厚 い 高台は低く逆三角形状でやや外輪	シ	シ	シ 黑
					堅硬	黒
61-687	S T 17	高台付杯 高 4.4 (口)13.5 底 8.9	口縁は外反 体部は直線的 底部は端 で厚い 高台は低く逆三角形状	シ	シ	褐灰
48-8					堅硬	オリーブ黒

第39表 土器観察表(38)

単位cm

番号・固版	出土地点	器種・伝承	器形の特徴	技術の特徴	出土・作成	色調
61-688	S T 1 7	高台付环 高 4.3 (口13.0) (底 8.6)	口縁はやや外反 体部は軽く膨らむ 底部は端が厚い 高台は方形形状で外縁	切削は直切一貫	0.1以下の砂粒 少量	灰 黒
61-689	S T 1 7	高台付环 高 4.5 (口12.6) (底 8.1)	口縁から体部は内凹する 底部は端が厚い 高台は逆三角形状で立つ	*	*	灰 灰白
61-690	S T 1 7	高台付环 高 4.2 口13.5 底 9.4	口縁から体部は直線的 底部は端がやや厚い 高台は逆三角形状で立つ	*	*	灰 灰白
61-691	S T 1 7	高台付环 高 4.2 (口12.4) (底 8.8)	口縁は内凹気味 体部は直線的 成都は端が厚い 高台は軽く外縁	*	*	灰 黒
61-692	S T 1 7	高台付环 高 4.3 (口13.4) (底 8.7)	口縁から体部は直線的 高台は逆三角形状で立つ	*	*	灰 灰白
61-693	S T 1 7	高台付环 高 4.3 口13.1 底 9.3	口縁はやや外反 体部は直線的 高台は軽く変形状で外縁	*	*	灰 黒
61-694	S T 1 7	高台付环 高 4.3 (口13.4) (底 8.9)	口縁はやや外反 体部は直線的 成都は端が厚い 高台は軽く変形状で外縁	*	*	灰 黒
61-695	S T 1 7	高台付环 高 4.2 (口13.2) (底 9.4)	口縁は直線的 体部は横く膨らむ 底部は端が厚い 高台は軽くやや外縁	*	*	灰 黒
61-696	S T 1 7	高台付环 高 4.5 口13.0 底 8.8	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は端が厚い 高台は軽くやや外縁	*	*	灰 灰白
61-697	S T 1 7	高台付环 高 4.5 (口12.1) (底 8.0)	口縁から体部は直線的 成都の端は厚い 高台は逆三角形状でやや外縁	*	*	灰 灰
61-698	S T 1 7	高台付环 高 4.3 口13.2 底 9.0	*	*	*	灰 灰白
61-699	S T 1 7	高台付环 高 4.3 口13.5 底 9.5	口縁から体部は直線的 底部は端が厚い 高台は逆三角形状でやや外縁	*	*	灰 黒
61-700	S T 1 7	高台付环 高 4.4 口13.0 底 8.8	口縁から体部は直線的 底部の端は厚い 高台は軽く変形状で外縁	*	*	灰 黒
61-701	S T 1 7	高台付环 高 4.5 口13.1 底 7.5	口縁から体部は直線的 底部の端は厚い 高台は逆三角形状で立つ	*	*	灰 黒
61-702	S T 1 7	高台付环 高 4.3 (口13.0) (底 9.5)	口縁から体部は直線的 底部は薄く端が厚い 高台は軽く逆三角形状で外縁	*	*	灰 黒
61-703	S T 1 7	高台付环 高 4.3 (口13.0) (底 8.8)	口縁から体部は内凹気味 底部の端は厚い 高台は方形形状に外縁	*	*	灰 黒

第40表 土器觀察表(39)

単位cm

番号・図版	出土地点	基盤・底盤	器形の特徴	技法の特徴	粘土・焼成	色調
61-704	S T 1.7	高台付环 高 4.3 (口13.0) (底 8.3)	口縁から体部は直線的 底部端は厚い 高台は逆三角形で外傾	切削は端切→削	0.1以下の砂粒 少量	灰 黒
61-705	S T 1.7	高台付环 高 4.5 口13.2 底 8.7	口縁は近くやや外反 体部は直線的 底部は端が厚い 高台は逆三角形状	×	×	褐灰 黒褐
61-706	S T 1.7	高台付环 高 4.4 (口13.3) (底 9.2)	口縁から体部は内面気味 底部は端が 厚い 高台は變形状で外傾	×	×	灰白 黒
61-707	S T 1.7	高台付环 高 4.1 (口13.3) (底 9.2)	口縁はやや外反 体部は横く膨む 端 部の端は厚い 高台はやや外傾	×	×	灰 黒
61-708	S T 1.7	高台付环 高 4.1 (口13.4) (底 8.5)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部 の端は厚い 高台は近く外傾	×	×	灰 黒
61-709	S T 1.7	高台付环 高 4.5 (口12.8) (底 7.6)	口縁は内面気味 体部は直線的 高台 はくの字状で接地面に沈線がある	×	×	灰 黒
62-710	S T 1.7	环 高 4.1 (口13.0) 底 8.4	口縁から体部は内面気味 底部は丸く 端は厚い	×	細砂少量 堅穀	灰白 ×
62-711	S T 1.7	环 高 4.0 口12.5 底 8.3	口縁から体部は内面気味 底部は丸く 中央が厚い	×	×	×
62-712	S T 1.7	环 高 3.7 (口12.5) (底 8.9)	口縁から体部は内面気味 底部は丸い	×	×	明オリーブ 黒
62-713	S T 1.7	环 高 4.0 口13.7 底 7.8	口縁から体部は内面気味 底部は丸く 端は厚い	切削は端切→削 内部端に木質痕	0.1以下の砂粒 少量	灰 堅穀
62-714	S T 1.7	环 高 3.9 口13.8 底 8.5	口縁は内面気味 体部は直線的 底部 は丸く端は厚い	×	×	灰 明オリーブ灰
62-715	S T 1.7	环 高 3.6 (口14.2) (底 9.0)	口縁から体部は直線的 底部は丸く端 は厚い	×	×	灰 明オリーブ灰
62-716	S T 1.7	环 高 4.1 口13.9 底 9.1	口縁から体部は内面気味 底部は丸く 端は厚い 場に凹部がある	×	×	灰 明オリーブ灰
62-717	S T 1.7	环 高 4.0 口13.0 底 7.7	口縁は直線的 体部はやや膨む 底部 は中央が厚い	切削は端切→削 0.1前後の砂粒	0.1前後の砂粒 少量	灰白 良好
62-718	S T 1.7	环 高 4.2 口13.9 底 9.0	口縁はやや外反 体部は膨む 底部の 中央は薄い	×	×	良好 ×
62-719	S T 1.7	环 高 3.5 (口12.7) (底 9.2)	口縁から体部の内面 底部は薄く中央 は高い	切削は端切	×	× 不良

第41表 土器觀察表(40)

単位cm

地圖・図版	出土地点	器種・状況	基形の特徴	技法の特徴	証士・焼成	色調
62-720	S T 1 7	环 高 3.3 (口14.1) (底 9.0) 中央が高い	口縁から体部は内側気味 底部は薄く 切削は荒削	0.1前後の砂粒 少量 不良	灰白	
62-721	S T 1 7	壺蓋 高 3.4 (口 9.3) 天 2.7 外縁 つまみは扁平な擬宝珠	天井は平坦 端部は丸い 口縁はやや 切削は荒切→荒削	0.1前後の砂粒 銀青 良好	灰	青灰
62-722	S T 1 7	壺蓋 高 3.2 口13.3 天 2.9 縁は外縁 つまみは扁平な擬宝珠	天井は平坦で反る 端部は角張る 口 切削は荒切→荒削	細砂顯著 →黒	灰	
62-723	S T 1 7	壺蓋 (口11.7) 天 3.6	天井は平坦でやや反る 端部は丸い 口縁は直立気味で内に腰をもつ	切削は荒切→無 少量	0.1前後の砂粒 少量	黒 灰白
62-724	S T 1 7	壺蓋 高(6.8) (口12.6)	口縁は直立し内に僅に腰をもつ 端部 は緩く膨らむ	内外面丁寧な削 内は円滑	0.1前後の砂粒 銀青	にほい青 灰灰青
62-725	S T 1 7	壺 高(9.9) 口21.0	口縁は外縁 口唇は緩く膨み外縁に内 外に腰をもつ	外は平行印→無 内は円滑	0.1以下の砂粒 銀青	灰白
62-726	S T 1 7	鉢 高(7.1) (口24.1)	口縁は直立に外反 端部は強く屈折し 体上位は大きく膨らむ	内外面丁寧な削 内は円滑	少量 →黒	黒 オリーブ黒
62-727	S T 1 7	壺	——	外は平行印→無 内は押印→無	0.1以下の砂粒 少量	灰白・同
62-728	S T 1 7 83-8	壺	——	外は圓文印	少量	黒
62-729	S T 1 7	壺	——	外は平行印 内は 圓文印	0.1以下の砂粒 圓青	灰・にほい青 緑
63-730	S T 1 7	壺蓋 高 3.7 口16.5 天 2.8	天井はほぼ平坦 体部は圓曲 端部は 屈折して内傾 つまみは擬宝珠	切削は荒切→荒削	0.1前後の砂粒 銀青	灰白
43-12						灰
63-731	S T 1 7	壺蓋 高 3.9 (口16.7) 天 2.6	天井はやや丸い 体部は膨らむ 端部は 屈折して立つ つまみは擬宝珠	少量	少量	灰白
63-732	S T 1 7	壺蓋 高(2.4)	天井はやや丸い つまみは擬宝珠	少量	少量	灰白・褐灰
63-733	S T 1 7	壺蓋 高 3.1 (口17.2) 天 2.2	天井はほぼ平坦 体部は圓曲 端部は 屈折して立つ つまみは擬宝珠	少量	少量	灰白
63-734	S T 1 7	壺蓋 高 2.9 (口18.3) 天 2.1	天井はやや丸い 体部は圓錐的 端部は 屈折して外傾 つまみは擬宝珠	少量	少量	灰黄褐
63-735	S T 1 7	壺蓋 高(2.1)	天井はやや丸い つまみは蓄石状	少量	少量	灰白
63-736	S T 1 7	壺蓋 高(1.8)	天井はやや丸い つまみは擬宝珠	少量	少量	初灰・同
63-737	S T 1 7	壺蓋 高 2.9 (口13.8) 天 2.3	天井は丸い 体部は膨らむ 端部は屈折 して内傾 つまみは扁平	少量	少量	灰
63-738	S T 1 7	壺蓋 高 3.2 (口13.9) 天 2.4	天井は丸い 体部は膨らむ 端部は屈折 して立つ つまみは扁平な擬宝珠	少量	少量	灰白 オリーブ灰

第42表 土器観察表(4)

単位cm

鉢部・國板	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
63-739	ST17	环底 高3.2 (口14.4) 天2.5	天井は丸い 体部は膨む 端部は崩折して立つ つまみは扁平	切削は範囲→端削 端部は空缺	0.1前後の砂粒 無着 空缺	灰 灰白
63-740	ST17	环底 高2.8 (口14.0) 天2.1	天井は丸い 体部は直線的 端部は崩折して立つ つまみは扁平	*	*	*
63-741	ST17	环底 高2.5 (口14.4) 天1.9	*	*	*	にぶい緑 にぶい赤褐
63-742	ST17	环底 高3.5 (口13.8) 天2.8	天井から体部は大きく膨む 端部は崩曲して短く立つ つまみは扁平	*	*	灰白 堅穢
63-743	ST17	环底 高(2.9)	天井は丸い つまみは扁平	*	*	青灰・青
63-744	ST17	环底 (口14.4) 天2.5	天井は丸い 体部は膨く膨む 端部は崩折し 崩く内傾	*	*	灰白 堅穢
63-745	ST17	环底 (口14.5) 天2.6	天井は丸い 体部は膨く膨む 端部は崩曲して立つ	*	*	青灰 堅穢
63-746	ST17	环底 (口13.8) 天2.8	天井は丸い 体部は膨く膨む 端部は崩折し内傾	*	*	灰白 堅穢
63-747	ST17	环底 (口14.0) 天3.0	*	*	*	灰 堅穢
63-748	ST17	环底 (口14.5) 天1.7	天井はほぼ平坦 体部は膨む 端部は崩折して立つ	*	*	青灰 堅穢
63-749	ST17	环底 (口13.8) 天2.0	天井は丸い 体部は膨く膨む 端部はやや高く崩折して立つ	*	*	灰白 灰
63-750	ST17	环底 (口13.4) 天2.2	天井は丸い 体部は膨く膨む 端部は崩折して立つ	*	*	灰白 堅穢
63-751	ST17	环底 (口13.7) 天2.2	天井は丸く広い 体部は大きく膨む 端部は崩折し逆三角形で立つ	*	*	灰 堅穢
63-752	ST17	环底 (口15.8)	体部は膨む 端部は崩折して短く立つ	*	*	灰白・灰 堅穢
63-753	ST17	高台付环 高6.2 (口15.3) (底8.2)	口縁はやや外反 体部は直線的 沈縮 有 高台は台形状でやや外傾	切削は範囲→範削 0.1以下の砂粒 少量 坚穢	灰黄 灰白	
63-754	ST17	高台付环 高6.0 (口16.4) 底9.2	口縁から体部は外反 端部は端で厚い 沈縮有 高台は平行四辺形状で外傾	*	*	*
63-755	ST17	高台付环 高6.0 (口15.1) (底8.8)	口縁はやや外反 体部は膨く膨む 沈縮有 底部端が厚く 高台は外傾	*	*	灰 堅穢

第43表 土器觀察表(42)

単位cm

鉢印・頭版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色 調
63-756	S T 1 7	高台付杯 高 6.2 (口15.5) (底 9.5) 有	口縁は僅に外反 体部は直線的 沈線 底部は端が厚い 高台は外傾	切離は窓切→無 少量	0.1以下の砂粒 堅板	灰白 黒
63-757	S T 1 7	高台付杯 高 5.8 (口15.3) (底 9.5) 有	口縁はやや外反 体部は僅く膨らむ 沈線 底部は端が厚い 高台は端んばかり 接地部は凹む	*	*	灰セリーブ 堅板 オリーブ風
63-758	S T 1 7	高台付杯 高 5.2 (口14.8) (底 9.2) 有	口縁はやや外反 体部は直線的で沈線 高台は方形状でやや外傾	*	*	灰白 堅板 *
64-759	S T 1 7	高台付杯 高 5.6 (口16.1) (底 9.5) 有	口縁はやや外反 体部は直線的で沈線 高台は逆三角形状で外傾	*	*	*
78-8					堅板	黒
64-760	S T 1 7	高台付杯 高 6.2 口17.0 底10.4	口縁から体部は僅く外反 沈線有 底 部は全体に厚い 高台は外傾	*	*	灰白
48-10					堅板	黒
64-761	S T 1 7	高台付杯 高 5.2 (口16.6) (底 10.2) 有	口縁はやや外反 体部は直線的で沈線 底部は端が厚い 高台は外傾	切離は窓切→無	*	灰白 堅板 *
64-762	S T 1 7	高台付杯 高 5.3 (口16.6) (底 9.3)	*	*	*	灰赤 灰白
64-763	S T 1 7	高台付杯 高 5.7 (口16.1) (底 9.8)	口縁から体部は僅く外反 沈線有 底 部は中央で薄く端が厚い 高台は外傾	*	*	灰赤 堅板 緑オリーブ風
64-764	S T 1 7	高台付杯 高 5.2 (口15.8) (底 8.9)	口縁から体部は僅く外反 沈線有 底 部は端が厚い 高台は強く外傾	*	*	浅黄 堅板 にぶい黄褐
64-765	S T 1 7	高台付杯 高 5.5 (口15.2) (底 9.3)	*	*	*	灰 堅板 黒
64-766	S T 1 7	高台付杯 高 5.2 (口14.6) (底 9.6) 有	口縁はやや外反 体部は直線的で沈線 高台は菱形状で外傾	*	*	灰 堅板 オリーブ風
64-767	S T 1 7	高台付杯 高 5.1 (口15.9) 有	口縁はやや外反 体部は直線的で沈線 底部は端が厚い	切離は窓切→無 無	*	灰 堅板 黒
64-768	S T 1 7	高台付杯 (口15.4)	口縁はやや外反 体部は直線的	内外擦	*	灰・同
64-769	S T 1 7	高台付杯 (口15.6)	*	*	*	灰・ 黒
64-770	S T 1 7	高台付杯 高(3.3) (底 8.6)	体部は内側外斜 基部の端は厚い 高 台は方形状でやや外傾 接地部に沈線	切離は窓切→無 無	*	黄灰 堅板 *
64-771	S T 1 7	高台付杯 高 4.5 (口13.5) (底 8.7)	口縁から体部は内側気味 底部は端が厚 い 高台は逆三角形状で沈線有	*	*	オリーブ風 灰白
64-772	S T 1 7	高台付杯 高 4.2 口13.5 底 8.8	口縁から体部は直線的 底部は端が厚 い 高台は逆三角形状で沈線有	*	*	黄灰 堅板 黒

第44表 土器観察表(43)

単位cm

辨別・開拓	出土地点	器種・法度	輪形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・調
64-773	S T 1 7	高台付杯 高 8.3 (口12.7) (底 8.5)	底部の端は厚い 高台には沈線有り	切削は直切一激	0.1以下砂粒 少量	灰・黒
64-774	S T 1 7	高台付杯 高 4.1 (口12.7) (底 8.5)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部 は端が厚い 高台は逆三角形状で立つ	*	*	灰 堅緻
64-775	S T 1 7	高台付杯 高 4.5 (口12.9) (底 8.9)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部 は端が厚い 高台は逆三角形状で立つ	*	*	黄灰 堅緻
64-776	S T 1 7	高台付杯 高 4.3 (口12.8) (底 8.1)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部 は端が厚い 高台は方形状で沈線有	*	*	灰黄緑 堅緻
64-777	S T 1 7	高台付杯 高 4.4 (口13.1) (底 9.4)	口縁から体部は直線的 底部は中央と 端が厚い 高台は逆三角形状で外傾	*	*	灰白 堅緻
64-778	S T 1 7	高台付杯 高 4.4 (口13.5) (底 9.0)	口縁から体部は直線的 底部は端が厚 い 高台は逆三角形状で立つ	*	*	灰 堅緻
64-779	S T 1 7	高台付杯 高 4.3 (口12.6) (底 8.5)	口縁はやや外反 体部は緩く膨む 底 部は端が厚い 高台は外傾	*	*	灰 堅緻
64-780	S T 1 7	高台付杯 高 4.3 (口13.5) (底 9.1)	口縁から体部は直線的 底部は端が厚 い 高台はくの字状で外傾	*	*	黄灰 堅緻
64-781	S T 1 7	高台付杯 高 4.5 (口13.6) (底 9.0)	口縁から体部は直線的 底部は端が厚 い 高台はやや外傾	*	*	灰白 堅緻
65-782	S T 1 7	高台付杯 高 3.9 (口12.9) (底 9.0)	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部 は端が厚い 高台は変形状で沈線?有	*	*	黄灰 堅緻
65-783	S T 1 7	高台付杯 高 4.4 (口12.1) (底 9.8)	口縁から体部は直線的 底部端は厚い 高台は逆三角形状で膨脹して外傾	*	*	*
65-784	S T 1 7	高台付杯 高 4.2 (口12.9) (底 8.8)	口縁は外反 体部は直線的 底部は端 が厚い 高台は逆三角形状で外傾	*	*	灰白 堅緻
65-785	S T 1 7	高台付杯 高 4.5 (口13.0) (底 8.2)	口縁から体部は直線的 底部は端が厚 い 高台は長方形状で外傾	*	*	褐灰 堅緻
65-786	S T 1 7	高台付杯 高 4.1 (口12.7) (底 8.6)	口縁から体部は直線的 底部は端が厚 い 高台は逆三角形状で外傾	*	*	灰 堅緻
65-787	S T 1 7	高台付杯 高 4.3 (口12.2) (底 8.2)	口縁から体部は直線的 底部は端が厚 い 高台はやや高く外傾	*	*	褐灰 堅緻
65-788	S T 1 7	高台付杯 高 4.1 (口14.0) (底 9.3)	口縁から体部は直線的 底部は全体に 均一 高台は逆三角形状で沈線有	*	*	灰 堅緻
65-789	S T 1 7	高台付杯 高 4.4 (口13.0) (底 8.6)	口縁から体部は直線的 底部は端が厚 い 高台は逆三角形状で外傾	*	*	褐灰 灰白

第45表 土器觀察表(44)

単位cm

番号・器名	出土地点	器種・法蓋	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色調
65-790	ST 17	高台付杯 高 4.2 (口13.0) (底 9.0)	口縁は直線的 体部は緩く膨らむ 高台 は端が厚い 高台は變形状で外傾	切離は鋭切→削 少量 脊綫	0.1以下の砂粒 灰	褐色
65-791	ST 17	高台付杯 高 4.3 (口13.4) (底 9.0)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は端が 厚い 高台は逆三角形状で立つ	×	×	灰白
65-792	ST 17	高台付杯 高 4.5 (口12.7) (底 8.8)	口縁は直線的 体部は膨らむ 底部は端 が厚い 高台は逆三角形状で立つ	×	×	灰
65-793	ST 17	高台付杯 高 4.2 (口12.8) (底 9.0)	口縁は直線的 体部は緩く膨らむ 底部は端 が厚い 高台は變形状で外傾	×	×	灰白
65-794	ST 17	高台付杯 高 4.0 口13.0 底 8.9	口縁から体部は直線的 底部は端が厚 い 高台は方形状で外傾	×	×	灰
65-795	ST 17	高台付杯 高 4.3 (口12.7) (底 8.3)	口縁はやや外反 体部は直線的 表面 は端が厚い 高台はやや高く方形状で外傾	×	×	灰
65-796	ST 17	高台付杯 高 3.9 (口13.3) (底 9.1)	口縁から体部は直線的 底部は中央が 薄く端は厚い 高台は腰地部で内凹	×	×	灰
65-797	ST 17	高台付杯 高 5.0 (口12.4) (底 8.0)	口縁から体部は内凹 底部は端が厚い 高台は逆二等辺三角形状で立つ	×	0.1以下の砂粒 細密 良好	灰オリーブ
65-798	ST 17	高台付杯 高 4.5 口13.5 底 8.7	×	×	黄灰	黒褐色
65-799	ST 17	杯 高 3.6 (口12.3) (底 8.3)	口縁から体部は内凹 底部は平坦で厚 く端は丸い	切離は鋭切→削削 少量	0.1以下の砂粒 少量	オリーブ灰
65-800	ST 17	杯 高 3.6 口14.1 底 8.8	口縁は直線的 体部は緩く膨らむ 底部 は端が厚く丸い	切離は鋭切→削 内面端に工具痕	0.1以下の砂粒 少量	×
65-801	ST 17	杯 高 4.1 (口13.1) (底 8.9)	口縁から体部は内凹 底部は厚く端は 丸い	切離は鋭切→削 少量	0.1以下の砂粒 少量	灰白
65-802 53-9 81-4	ST 17	杯 高 4.0 口13.0 底 7.5	口縁はやや外反 体部は緩く膨らむ 底 部は丸い	切離は鋭切→削 内面端に工具痕	×	黄灰
65-803	ST 17 53-10	牙 高 3.8 口13.7 底 9.2	口縁から体部は内凹 底部は薄く平坦 で端は角張る	切離は鋭切→削 高明瞭	×	灰
65-804	ST 17	杯 高 3.6 (口14.1) 底 9.0	口縁から体部は内凹 底部は平坦で端 は角張る	×	×	灰
65-805	ST 17	杯 高 3.5 (口13.8) 底 9.3	口縁は粗く外反 体部は緩く膨らむ 底 部は端が厚く角張る	切離は鋭切→削 内面端に工具痕	×	×

第46表 土器観察表(45)

単位cm

件名・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色・質
65-806	S T 1.7	杯 高 3.8 口13.5 底 8.5	口縁から体部は内湾 底部は平底で端が は丸い	切削は直切→削 少量 硬質	0.1以下の砂粒	灰
						*
65-807 53-11	S T 1.7	杯 高 3.7 口13.6 底 8.0	口縁から体部は内湾を除く 底部は端が 厚く丸い	切削は直切→削 内部端に工具痕	少量 硬質	青灰
						*
65-808 (口13.7) (底 8.6)	S T 1.7	杯 高 3.5	口縁は薄くやや外反 体部は極く膨らむ	切削は直切→削 厚紙	少量 硬質	灰
		(口13.7) (底 8.6)	底部は端が厚く丸い			*
65-809 (口13.7) (底 9.7)	S T 1.7	杯 高 3.8	口縁から体部は内湾 底部は丸く端は 厚い	切削は直切→削 →削	薄砂少量	灰白
		(口13.7) (底 9.7)				*
65-810 (口13.9) (底 8.8)	S T 1.7	杯 高 4.0	口縁は内湾 体部は直線的 底部は丸	切削は直切→削 内部端に工具痕	0.1以下の砂粒	*
			くぼみがない		少量 硬質	*
71-811 (口16.7) 天 1.2	S J 0.7	杯盤	天井から体部は低く平坦 墓部は崩壊	切削は直切→削 はが全面	少量 硬質	灰白
			して連三角形状			青灰
71-812 (口13.4) 天 2.9	S J 0.7	杯盤	天井から体部は大きくなじむ 墓部は逆	切削は直切→削 細著 良好	0.1以下の砂粒	灰
			S字状で外側 つまみの基部に凹痕有			*
71-813 (口14.0) 天 2.4	S J 0.7	杯盤 高 3.5	天井は山形状 体部は端で膨らむ 墓部	切削は直切→削 少量 硬質	0.1以下の砂粒	青灰
			は崩壊して倒立つ つまみは撲空跡			灰白
71-814 (口14.0) 天 3.6	S J 0.7	杯盤 高 3.4	天井は平坦 体部は反る 墓部は崩壊	切削は直切→削 細著 硬質	0.1以下の砂粒	*
			して軽く立ち つまみはボタン状			*
71-815 (口17.1) 天 2.2	S J 0.7	杯盤 高 4.2	天井はやや丸い 体部は反る 墓部は	切削は直切→削 細著	0.1以下の砂粒	灰
			屈曲し外側 つまみはボタン状擴室跡			灰白
71-816 (口14.5) 天 2.6	S J 0.7	杯盤	天井から体部は大きくなじむ 墓部は外	切削は直切→削 少量 良好	0.1以下の砂粒	*
			だけ軽く崩壊			*
71-817 (口1.8)	S J 0.7	杯盤 高 1.8	天井は平坦 つまみはボタン状	切削は直切→削 少量 良好	0.1以下の砂粒	灰白・灰オリーブ
						*
71-818 (口2.8)	S J 0.7	杯盤 高 2.8	天井は平坦 つまみは撲空跡	切削は直切→削 少量 良好	0.1以下の砂粒	青灰・灰
						*
71-819 (口3.0)	S J 0.7	杯盤 高 3.0	天井は軽く平坦 体部は直接的 つま	切削は直切→削 少量 不良	0.1以下の砂粒	浅青色
			みは裏面を撲空跡			*
71-820 (口1.3)	S J 0.7	杯盤 高 1.3	天井は平坦 つまみはボタン状	切削は直切 少量 硬質	0.1以下の砂粒	灰・灰
						*
71-821 (口14.5)	S J 0.7	杯盤	天井はほぼ平坦 体部は反る 墓部は	切削は直切→削 少量 良好	0.1以下の砂粒	灰白
			破をつくって屈曲し三角形で軽く立つ			*
71-822 (口18.6)	S J 0.7	杯盤	天井はやや丸い 体部は僅に反る 墓	切削は直切→削 少量 硬質	少量 硬質	灰
			部は便をつくり崩壊し外側			青オリーブ灰
71-823 (口19.3)	S J 0.7	杯盤 高 3.9	天井は平坦 体部は反る 墓部は反り	切削は直切→削 内面が平滑	少量 硬質	灰白
			屈曲し外側 つまみはボタン状			青オリーブ灰

第47表 土器観察表(46)

単位cm

部類・脚版	出土地点	器種・注意	器形の特徴	技法の特徴	胎土・施皮	色調
71-824	S J 0 7	环盖	天井は平坦 体部はやや膨ら 端部は切離は丸切→削削	0.1前後の砂粒	灰白	
44-3	(口19.4)	天 2.7	端折して外傾	内面が平坦	少量 良好	■
71-825	S J 0 7	环盖 高 3.3	天井は平坦 体部は直線的 端部は水	"	0.1以下の砂粒	■
44-4	口15.5	天 2.6	平から屈折し外傾 つまみはボタン状	"	少量 良好	淡黄
71-826	S J 0 7	环盖 高 3.3	"	"	"	灰
44-5	口15.5	天 2.5	"	"	堅硬	■
71-827	S J 0 7	环盖 高 3.2	"	"	"	灰白
44-6	(口14.4)	天 2.5	"	"	良好	■
71-828	S J 0 7	环盖 高 3.2	"	"	"	■
	(口14.1)	天 2.4	"	"	良好	■
71-829	S J 0 7	环盖	天井は平坦 体部は直線的 端部は水	"	"	■
	(口14.6)	天 2.3	平気味から屈折し外傾	"	良好	■
71-830	S J 0 7	环盖 高(2.4)	体部は直線的 端部は水平気味から屈	"	0.1前後の砂粒	■
	(口18.0)	曲し外傾	"	"	少量 良好	■
71-831	S J 0 7	环盖	天井は平坦 体部は緩く膨ら 端部は	"	0.1以下の砂粒	■
	(口14.8)	天 1.9	水平から屈曲し外傾	"	少量 良好	■
71-832	S J 0 7	环盖 高 3.6	天井は平坦 体部は直線的 端部は屈	切離は丸切→削削	0.1以下の砂粒	に赤い斑紋
44-7	(口15.6)	天 2.8	折し腰をもつ つまみは扁平な擬宝珠	"	微量 不良	■
71-833	S J 0 7	环盖 高 3.3	天井は平坦 体部は緩く膨ら 端部は	"	0.1以下の砂粒	灰黄
44-8	口15.7	天 2.2	水平から屈曲し内傾 つまみは擬宝珠	"	頭着 良好	暗灰黄
71-834	S T 3 5	环盖	天井はほぼ平坦 体部は緩く膨ら 端	"	0.1以下の砂粒	淡黄
44-9	(口16.7)	天 2.9	部は水平から屈折して逆三角形に立つ	"	少量 堅硬	■
71-835	S T 3 5	环盖	天井はほぼ平坦 体部は緩く膨ら 体	切離は丸切→削削	"	■
	(口17.3)	天 2.5	部は水平気味で屈折して内傾	内面中央に不定調	良好	淡黄灰
71-836	S T 3 5	环蓋	体部は緩く膨ら 端部は水平気味から	切離は丸切→削削	0.1以下の砂粒	淡黄
44-10	(口16.9)	天 2.5	端折して内傾	"	微量 兵刃	■
71-837	S T 3 5	环蓋	天井はほぼ平頂で高い 体部は膨ら	切離は丸切→削削	0.1以下の砂粒	■
44-11	口14.4	天 2.7	端部は屈折して逆三角形で立つ	"	少量 良好	■
71-838	S T 3 5	环蓋	天井は大きめで膨ら 体部は緩く膨ら	"	"	■
	(口14.2)	天 2.9	端部は屈折して内傾	"	堅硬	淡黄灰
71-839	S T 3 5	环蓋 (口15.8)	天井は緩く平頂 端部は緩く内傾	"	" 良好	淡黄・青
71-840	S T 3 5	环蓋	天井はほぼ平頂 体部はやや反る 端	"	"	■
	(口15.7)	天 2.5	部は屈折して逆三角形状に立つ	"	良好	■

第48表 土器観察表(47)

単位cm

博物・図版	出土地点	器種・形量	器物の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色調
71-841	S T 3.5	杯蓋 (口14.5) 天 2.7	天井はやや丸い 体部は蓋に反る 端部は折削して強く立つ	切削は荒切→鋸削 少量 不良	0.1以下の砂粒 淡黄	淡黄
71-842	S T 3.5	杯蓋 (口14.6) 天 2.1	天井は平坦 体部は直線的 端部は端折して逆三角形状に立つ	×	×	×
71-843	S T 3.5	杯蓋 高 3.0 (口14.7) 天 2.1	天井は平坦 体部は直線的 端部は端折して内側 つまりはボタン状	×	×	×
71-844	S T 3.5	杯蓋 (口14.8) 天 2.3	天井はほぼ平坦 体部は強く膨らむ 端部は内面だけを引き出す	×	×	×
71-845	S T 3.5	杯蓋 高 2.8 (口16.4) 天 1.8	天井はほぼ平坦 体部は直線的 端部は外側 つまりはボタン状突出	×	×	×
71-846	S T 3.5	杯蓋 (口16.2)	天井は強く反る 端部は外傾	×	× 良好	×
71-847	S T 3.5	杯蓋 (口13.5) 天 2.2	天井は丸い 体部は強く膨らむ 端部は端折して立つ	×	0.1前後の砂粒 顯著 塗装	淡白 黒
71-848	S T 3.5	杯蓋 (口13.6) 天 2.2	天井は丸い 体部は膨らむ 端部は端折して内側	×	×	淡白 塗装
72-849 48-12 78-7	S J 0.7	高台付环 高 4.8 (口13.9) 底 10.9	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は瘤が厚い 高台は長方形状で外傾	切削は荒切→鋸削 →鋸 少量 良好	0.1以下の砂粒 明オーリーブ模	模擬
72-850	S J 0.7	高台付环 高 4.7 (口13.9) (底 8.7)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は中央が窪む 高台は瘤をもつて外傾	×	×	淡黄
72-851	S J 0.7	高台付环 高(5.6) 底11.5	体部は直線的 底部は均一で中央が高 い 高台は長方形状でやや外傾	切削は荒切→鋸	×	淡白
72-852 49-1	S J 0.7	高台付环 高 4.9 (口11.4) (底 6.2)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は瘤が厚い 丸い 高台は長方形状で外傾	×	×	×
72-853	S J 0.7	高台付环 (口19.3)	口縁は大きめ外反 体部は強く膨らむ	内外丁寧な鋸	× 良好	淡白 黑
72-854	S J 0.7	高台付环 高 6.1 (口13.1) (底 7.2)	口縁から体部は外反 底部は瘤が厚い 高台は高く長方形状で外傾	切削は荒切→鋸削 吸益	0.1前後の砂粒 良好	淡白
72-855	S T 3.5	高台付环 高 5.0 (口14.8) (底 9.4)	口縁はやや外反 体部は円角 底部は均一 高台は高く長方形状で外傾	×	×	淡黄
72-856 49-2	S T 3.5	高台付环 高 4.5 (口13.6) 底 9.6	口縁はやや外反 体部は膨らむ 底部は窪む 高台は内側気味に外傾	×	0.1前後の砂粒 少量 良好	淡白
72-857	S T 3.5	高台付环 高 5.0 (口15.8) (底 12.6)	口縁は直線的 体部は強く膨らむ 底部は長方形状で外傾	×	×	×
					良好	に、ない、模倣

第49表 土器観察表(48)

単位cm

件番・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色・調
72-855 49-3	S T 3.5	高台付环 高 4.4 (口14.8) (底 9.5)	口縁から体部は内湾 底部は薄く端は角張る 高台は逆三角形状でやや外傾	切離は落切→削 滑磨面	粗砂少量 不良	淡黄 ノ
72-859	S T 3.5	高台付环 高 5.0 (口11.6) (底 8.0)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は丸い 高台は長方形状で立つ	切離は落切→削	*	淡黄 良好
72-860 49-4	S T 3.5	高台付环 高 5.1 (口12.6) (底 6.5)	口縁から体部は内湾 底部は中央が高い 高台は長方形状でやや外傾	*	*	淡黄 良好 にぶい質感
72-861	S T 3.5	高台付环 高 4.3 (口13.8) (底 9.2)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は薄い 高台は長方形状でやや外傾	*	0.1以下の砂粒 少量	淡黄 滑
72-862 49-5	S T 3.5	高台付环 高 4.0 口11.1 底 7.1	口縁から体部は直線的 底部は端で角張る 高台は逆三角形状で立つ	切離は落切→削	*	淡黄 良好 ノ
72-863	S T 3.5	高台付环 高 3.9 (口10.6) (底 7.3)	口縁から体部は直線的 底部は均一で端は凹曲 高台は長方形状でやや外傾	*	*	ノ
72-864	S T 3.5	高台付环 (底 7.8)	底部は薄い 高台は長方形状で直立	*	*	良好 黄白・同
72-865	S T 3.5	高台付环 (底 8.1)	底部は厚い 高台は逆三角形状で立つ	*	*	良好 ノ
72-866	S T 3.5	高台付环 高 4.9 (口12.0) (底 7.8)	口縁はやや外反 体部は膨らむ 底部は中央と端が厚い 高台は外傾	*	*	淡黄 良好 ノ
72-867	S T 3.5	高台付环 高 4.9 (口15.0) (底 8.6)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は薄い 高台は長方形状で外傾	*	*	灰白 良好 ノ
72-868	S T 3.5	高台付环 高 4.7 (口14.0) (底 9.8)	*	切離は落切→削	0.1以下の砂粒 精密 不良	淡黄 黄白
72-869	S T 3.5	高台付环 高 4.8 (口13.5) (底 9.3)	口縁は直線的 体部は膨らむ 底部は端が厚い 高台は端をもち外傾	*	*	ノ 不良 ノ
72-870	S T 3.5	高台付环 高 6.3 (口15.9) (底10.1)	口縁は外反 体部は緩く膨らむ 底部は薄い 高台は端をもち外傾	切離は落切→削 内面底面は不定形	0.1以下の砂粒 少量	にぶい質感 良好 ノ
72-871	S T 3.5	高台付环 高 5.2 (口12.4) (底 7.5)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は中央が得く端が厚い 高台は外傾	切離は落切→削	*	淡黄 不良 黄白
72-872	S T 3.5	高台付环 高 4.9 (口14.0) (底10.0)	口縁から体部は直線的 底部は平坦 高台は長方形状で外傾	*	*	淡黄 良好 ノ
72-873	S T 3.5	高台付环 (底10.6)	高台は丸い後をもって外傾	*	*	良好 黄白・同
72-874	S T 3.5	高台付环 高 (2.5) (底 6.7)	底部は中央が低く端が高い 高台は端が内側した逆三角形状	切離は落切→一部 削削→削	*	灰白 良好 ノ
72-875	S T 3.5	高台付环 (底 6.1)	底部は端が高い 高台はやや外傾	切離は落切→削	*	良好 黄白・同
72-876	S T 3.5	高台付环 底 6.9	底部は薄い 高台をもって底く立つ	切離は落切→削	*	良好 ノ

第50表 土器観察表(49)

単位cm

種類・断版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・調
73-877	S J 0.7	环 高 3.7 (口13.1) (底 8.5)	口縁から体部は直線的 底部は広く端 は厚い	切離は荒切→無 内部端に工具痕	0.1以下の砂粒 少々 堅穢	灰赤 灰白
73-878	S J 0.7	环 高 4.1 (口13.4) (底 8.0)	口縁は直線的 体部は膨ら 底部は厚 く端は丸い	切離は荒切→無 内面底部に痕	少々 良好	明オリーブ グ
53-12						
73-879	S J 0.7	环 高 3.5 (口13.7) (底 9.0)	口縁は外反 体部は膨ら 底部は 端が厚い	切離は荒切→無	少々 堅穢	灰 灰白
73-880	S J 0.7	环 高 4.4 (口14.7) (底 10.2)	口縁から体部は直線的 底部は薄く端 が厚い	少々	少々 不良	少々
73-881	S J 0.7	环 高 4.3 (口13.9) (底 8.6)	口縁はやや外反 体部は横く膨ら 底 部は平坦で端が角張る	切離は荒切→無 溝明瞭	少々 堅穢	灰 灰白
54-1						
73-882	S J 0.7	环 高 3.6 (口13.7) (底 8.1)	口縁は直線に内凹気味 体部は直線的 底部は平坦で薄い	切離は荒切→荒削 少々	0.1前後の砂粒 少々 良好	少々
73-883	S T 3.5	环 高 4.3 (口11.6) (底 5.0)	口縁から体部は内凹 底部は厚く端は 角張る	切離は荒切→無 端子持尾削	0.1以下の砂粒 少々 良好	明オリーブ 少々
73-884	S T 3.5	环 高 4.3 (口14.1) (底 9.3)	口縁から体部は内凹 底部は薄く端は 丸い	切離は荒切→無 少々	少々 不良	灰白 少々
73-885	S T 3.5	环 高 3.7 (口14.1) (底 9.2)	口縁はやや外反 体部は弓曲 底部は 中央が高く高い 端は丸い	少々	少々 不良	少々
73-886	S T 3.5	环 高 4.2 (口13.1) (底 9.6)	口縁から体部は内凹気味 底部は丸く 中央と端が厚い	切離は荒切→無 底端に工具痕	少々 堅穢	少々
73-887	S T 3.5	环 高 3.8 (口12.3) (底 9.4)	口縁は直線に外反 体部は横く膨ら 底 部は丸く端は厚い	少々	少々 良好	浅黄
73-888	S T 3.5	环 高 3.8 (口12.3) (底 9.4)	少々	少々	少々 良好	少々
73-889	S T 3.5	环 高 4.0 (口14.3) (底 10.4)	少々	少々	少々 良好	浅黄 灰白
73-890	S T 3.5	环 高 4.0 (口12.7) (底 9.0)	少々	少々	少々 良好	浅黄 灰白
73-891	S T 3.5	环 高 3.4 (口13.1) (底 9.6)	口縁から体部は直線的 底部は丸く端 は厚い	切離は荒切→無	少々 不良	灰白 少々
73-892	S T 3.5	环 (底 9.6)	体部は直線的 底部は丸く端は高い	少々	少々 不良	淡黄・灰白
73-893	S T 1.8	环? 高 (2.6) (底11.1)	高台は高く長方形状に外傾し一旦強い 腰をつくって瓶く直立	内外に丁寧な施	少々 良好	灰黄 灰白

第51表 土器観察表(50)

単位cm

番号・図版	出土地点	特徴・法蓋	笠形の特徴	枝紐の特徴	胎土・施皮	色調
73-894	S T 1 8	环盖 (口15.5) 天 1.4	天井は低く平坦 体部は緩く膨む 端部は水平から屈折し外傾	切縫は尾切→尾削	0.1以下の砂粒	灰
				頭著 壓縮	灰白	
73-895	S T 1 8	环盖 高 3.0	天井は低く丸い 体部は緩く膨む 端	*	0.1前後の砂粒	*
44-12		口15.3 天 1.7	部は屈折して内傾 つまみに聚宝珠		少量 壓縮	*
73-896	S T 1 8	环盖 高 3.4	天井から体部は丸い 端部は屈折して	*	0.1以下の砂粒	綠灰
44-13		口14.0 天 2.3	内傾 つまみは中央が深いボタン状		少量 壓縮	*
73-897	S T 1 8	环盖 高 3.1	天井は丸い 体部は直線的 端部は屈	*	*	*
44-14		口14.9 天 2.2	折して立つ つまみはボタン状聚宝珠		壓縮	灰白
73-898	S T 1 8	环盖 (口14.1) 天 2.6	天井は丸い 体部は直線的 端部は屈	*	*	青灰
		折して緩く立つ			壓縮	綠灰
73-899	S T 1 8	环盖 (口14.9)	体部は膨む 端部は屈折して斜く立つ	*	*	壓縮 緑灰・同
73-900	S T 1 8	环盖 (口14.6) 天 2.5	天井は丸い 体部は直線的 端部は屈	*	0.1前後の砂粒	オリーブ灰
		折して緩く立つ			頭著 壓縮	灰
73-901	S T 1 8	环盖 (口14.7) 天 2.4	天井から体部は丸い 端部は屈折して	切縫は尾切→尾削	*	*
		緩く立つ		つまみ部に凸	壓縮	オリーブ灰
73-902	S T 1 8	环盖 (口14.6) 天 1.9	*	*	*	*
78-3					壓縮	*
73-903	S T 1 8	环盖 (口14.5) 天 1.5	天井から体部は直線的 端部は屈折し	切縫は尾切→尾削	*	灰
		て立つ			頭著 壓縮	綠灰
73-904	S T 1 8	环盖 (口18.0) 天 3.5	天井は平坦 体部は緩く膨む 端部は	切縫は尾切→尾削	0.1以下の砂粒	灰白
		水平から屈曲して外傾		内面が平滑	少量 壓縮	*
73-905	S T 1 8	环盖 (口18.0) 天 3.4	天井は平坦 体部は緩く膨む 端部は	*	*	青灰
		水平から屈曲して外傾			頭著 壓縮	*
73-906	S T 1 8	环盖 (口14.3) 天 2.3	天井は平坦 体部は緩く膨む 端部は	*	*	灰
		水平から屈折して外傾			頭著 壓縮	*
73-907	S T 1 8	环盖 高 2.8	天井はほぼ平坦 体部は直線的 端部	切縫は尾切→尾削	0.1前後の砂粒	灰白
44-15		口14.9 天 2.1	は屈折して外傾 つまみはボタン状		少量 良好	*
73-908	S T 1 8	环盖 (口19.0)	端部は水平気泡から屈曲して立つ	内外に丁寧な施	0.1以下の砂粒 少量 不良	淡黄・同
74-909	S J 0 7	要 高(31.7)	口唇は僅に凹む 口縁は外灰 端部は	外は平行叩一張目	0.1前後の砂粒	灰削
62-3		(口20.9) (頭18.8)	への字形に膨る 端部はやや緩く弯曲			
		内は押え・抜		頭著 壓縮	灰白	
74-910	S J 0 7	要 高(38.2)	口唇は僅に凹む 口縁は外灰 端部は	*	*	灰削
62-4		口29.8 窄 19.0	頭曲 端部はやや緩く弯曲		頭著 壓縮	灰白

第52表 土器観察表(51)

単位cm

博物・國版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
75-911	S J 0 7	甕 高(39.9) 口21.7 縁18.2	口唇は僅に凹む 口縁は外反 顎部はくの字状 届部は緩く弯曲	外は平行印→擦目 内は押え→擦	顯著 堅緻	灰黄 灰白
62-5						
75-912	S J 0 7	甕 高(26.6) (口20.4) (頸15.6)	口唇は凹む 口縁は大きく外反 顎部はくの字状 脊は球状	外は平行印→擦 内は円文印→擦	〃	灰黄 〃
62-6						
76-913	S J 0 7	甕 高(22.6) (口23.4) (頸17.1)	口唇は凹み直立気味 口縁は大きく外反 顎部はくの字状 脊は球状	外は平行印→擦 内は円文印→擦	〃	灰オリーブ 灰白
63-1						
76-914	S J 0 7	甕 (高46.6) (口24.1) (高18.6)	口唇は平坦でやや外縫 口縁は外反 顎部はくの字状 脊は草状	外は平行印→擦 内は円文印→平行印	〃	灰黄 粗糲
63-2						
77-915	S J 0 7	甕	口唇は凹んで外縫 口縁はやや外反	外は平行印→擦 内は円文印→擦	〃 显著	灰黄褐色・灰白
77-916	S J 0 7	甕	口唇内に突き 口唇下に三角の縫	外は擦→擦状文	〃 堅緻	灰オリーブ・灰
77-917	S J 0 7	甕	口唇は先細り 口唇下に丸い縫	内外に丁寧な擦	〃 堅緻	灰オリーブ・褐風
71-1						
77-918	S J 0 7	甕	口唇は先細り 口唇下外に段、内に凹み	外は擦→擦状文	〃 堅緻	灰 - 暗
71-1						
77-919	S J 0 7	大甕	脛部はくの字状	〃	〃 堅緻	灰 - 黑褐色
71-1						
78-920	S T 1 8	高台付坏 高 5.0 口14.6 底10.4	口縁は外反 体部は膨む 底部は平坦で薄い 高台は長方形状で外縫	切削は荒切→擦削 滑削	0.1以下の砂粒 少量	灰オリーブ オーリーブ灰
49-5						
78-921	S T 1 8	高台付坏 高 4.4 (口14.3) 底 9.6	口縁は直線的 体部は緩く膨む 底部は薄い 高台は長方形状で立つ	〃	〃	灰白 〃
49-7						
78-922	S T 1 8	高台付坏 高 4.6 口14.7 底10.0	口縁から体部は直線的 底部は薄い 高台は長方形状で外縫	〃	〃	〃
49-8						
78-923	S T 1 8	高台付坏 高 4.3 (口15.1) (底11.0)	口縁は薄くやや外反 体部は直線的 底部中央は薄い 高台は長方形で外縫	切削は荒切→擦	〃	灰白 良好
78-924	S T 1 8	高台付坏 高 5.0 (口14.1) (底 9.6)	口縁は直線的 体部は膨む 底部は平坦で厚く均一 高台は長方形状で外縫	切削は荒切→擦削	〃	灰黄 〃
78-925	S T 1 8	高台付坏 高 4.7 (口15.1) (底11.6)	口縁はやや外反 体部は僅に膨む 底部は平坦 高台は長方形状で外縫	〃	〃	灰白 堅緻
78-926	S T 1 8	高台付坏 高 5.3 (口12.0) (底 7.4)	口縁は外反 体部は膨む 底部中央は薄い 高台は長方形状で外縫	〃	0.1以下の砂粒 顯著	灰白 細灰黃
78-927	S T 1 8	高台付坏 高(3.6) (底 9.5)	体部は膨む 底部は凹凸有 高台は逆三角形状でやや外縫	切削は荒切→擦	0.1以下の砂粒 少量	灰白 不良
78-928	S T 1 8	高台付坏 高 4.7 (口13.7) (底11.1)	体部はやや外反 体部は膨む 底部は薄い 高台は長方形状で外縫	〃	0.1以下の砂粒 少量	〃
78-929	S T 1 8	高台付坏 高(4.0) (底 8.9)	体部は直線的 底部は中央が薄い 高台は逆三角形状で外縫	〃	〃	〃 良好

第53表 土器観察表(52)

単位cm

井図・圖版	出土地点	形態・法蓋	器形の特徴	技法の特徴	胎土・施灰	色・調
78-930	S T 1 8	高台付环 高 6.5 (口16.4) (底 9.2)	口縁は外反 体部は最も膨らむ 底部は 厚い 高台は逆三角形状で立つ	切削は荒切→荒削	0.1以下の砂粒 少量 施灰	オリーブ灰 ※
78-931	S T 1 8	高台付环 高 5.3 (口14.1) (底 7.8)	口縁は内萼型味 体部は最も膨らむ 底 部は薄い 高台は逆三角形状で外傾	※	※ 良好	灰白
78-932	S T 1 8	高台付环 高 5.4 (口12.8) (底 7.8)	口縁は直線的 体部は最も膨らむ 底部 は薄い 高台は長方形状で外傾	※	※ 不良	※
78-933	S T 1 8	高台付环 高 4.3 (底11.0)	体部は膨らむ 底部は平坦で薄い 高台 は高く長方形状に外傾し尖端は内傾	切削は荒切→無 施灰	0.1以下の砂粒 良好	※
78-934	S T 1 8	高台付环 高 2.8 (底 7.2)	体部は膨らむ 底部は中央が薄い 高台 は逆三角形状でやや外傾	※	0.1以下の砂粒 少量 良好	※
78-935	S T 1 8	高台付环 高 4.5 (口12.6) (底 8.2)	口縁はやや外反 体部は膨らむ 底部は 中央が薄い 高台は長方形状に外傾	切削は荒切→荒削	※	※ 良好
78-936	S T 1 8	高台付环 高 4.9 (口14.3) (底 9.2)	口縁はやや外反 体部は膨らむ 底部は 中央が薄い 高台は外傾し内外に傾	切削は荒切→無	※ 良好	灰灰
78-937	S T 1 8	高台付环 高 4.8 (口14.2) (底 9.8)	口縁から体部は直線的 底部は薄い	※	※ 良好	灰灰
78-938	S T 1 8	高台付环 高 4.9 (口14.2) (底 10.1)	口縁は直線的 体部は膨らむ 底部は 高台は長方形状で外傾し内尖端で立つ	切削は荒切→荒削	※ 良好	灰白
78-939	S T 1 8	高台付环 高 4.9 (口12.3) (底 8.0)	口縁は直線的外反 体部は膨らむ 底部は 薄い 高台は外傾し内側尖端で立つ	切削は荒切→荒削 内面底部は不定形	※ 良好	※
78-940	S T 1 8	高台付环 高 5.2 (口11.8) (底 8.4)	口縁は直線的 体部は膨らむ 高台は太 く外傾し内側端部が内凹	切削は荒切→荒削	※ 不良	※
78-941	S T 1 8	高台付环 高 5.2 (口12.4) (底 8.5)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は薄い 高台は外傾し内側端部で立つ	※	※ 不良	※
78-942	S T 1 8	高台付环 高 3.6 (底 7.1)	体部は膨らむ 底部は中央で最も薄く端で厚 い 高台は長方形状で外傾	切削は荒切→荒削 外底面に布目状模	※ 不良	※
79-943	S T 1 8	高台付环 高 5.3 (口11.6) (底 6.4)	口縁は内凹 体部は直線的 底部は中 央が薄い 高台は外傾し内側端部で内傾	切削は荒切→荒削	※ 不良	※
79-944	S T 1 8	高台付环 (底 7.1)	底部は中央が薄い 高台は円曲	切削は荒切→無	※ 良好	灰白・黄
79-945	S T 1 8	高台付环 (底 9.5)	底部は薄い 高台は外傾し内側端部で立つ	※	※ 良好	※
79-946	S T 1 8	高台付环 (底 9.5)	底部は中央が高い 高台は外傾	※	※ 良好	※
79-947	S T 1 8	高台付环 高 3.3 (底 8.5)	体部は膨らむ 底部中央は薄い 高台は 逆三角形状で外傾	切削は荒切→荒削 0.1前後の砂粒 少量 不良	※	灰白

第54表 土器観察表(53)

単位cm

辨別・固版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・質
79-948	ST1.8	高台付杯 高 4.6 (口13.4) (底 9.0)	口縁から体部は内湾気味 底部は丸く 端が厚い 高台は長方形状で外傾	切削は直切→鋸削 一部	少量 型紙	淡黄 にぶい赤褐色
49-11						
79-949	ST1.8	高台付杯 高 4.1 (口13.5) (底 9.0)	口縁は外反 体部は直線的 底部は中 央が薄い 高台は長方形状で外傾	切削は直切→鋸削	0.1前後の砂粒	淡黄
49-12					少量 良好	淡緑
79-950	ST1.8	高台付杯 高 4.5 (口12.3) (底 8.1)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は薄い 高台は細く長方形状で外傾			淡黄
					良好	々
79-951	ST1.8	高台付杯 高 4.6 (口13.1) (底 10.2)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は端が 厚い 高台は長方形状で外傾	切削は直切→鋸削 微量	0.1前後の砂粒 良好	淡黄
79-952	ST1.8	高台付杯 高 3.9 (口13.4) (底 9.1)	口縁は内湾気味 体部は横く膨らむ 高 台は中央が薄い 高台は逆三角形状	切削は直切→鋸削 少量	0.1以下砂粒 良好	々
79-953	ST1.8	高台付杯 高 5.2 (口12.7) (底 7.7)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は平坦 で均一 高台は後をもつ逆三角形状			灰白
					良好	々
79-954	ST1.8	高台付杯 (口16.8)	口縁は外反 体部は膨らむ	切削不規→鋸削	々 良好	灰白・同
79-955	ST1.8	杯 高 5.0 (口14.0) (底 9.9)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は厚く 平坦で突出気味	切削は直切→鋸削	々	明赤灰 堅緑
79-956	ST1.8	杯 底 10.4	底部は端が厚い		々 良好	灰白・同
79-957	ST1.8	杯 高 3.9 (口13.6) (底 9.0)	口縁は強く外反 体部は横く膨らむ 底 部は丸く中央部と端が厚い	切削は直切→鋸削 内底部端に工具痕	々 良好	淡黄
						々
79-958	ST1.8	杯 高 3.7 54-2 口13.9 底 9.8			々 良好	淡黄緑
						々
79-959	ST1.8	杯 高 4.0 (口13.6) (底 10.6)	口縁は強く外反 体部は直線的 底部 は丸く中央部と端が厚い		々 良好	淡黄
						灰白
79-960	ST1.8	杯 高 3.9 (口13.1) (底 10.1)	口縁は強く外反 体部は横く膨らむ 底 部は丸く端が厚い		々 良好	淡黄
						々
79-961	ST1.8	杯 高 4.2 (口13.4) (底 10.5)			々 良好	々
						灰白
79-962	ST1.8	杯 高 4.0 (口13.6) (底 9.1)	口縁は外反 体部は直線的 底部は丸 く中央部と端が厚い		々 不良	々
79-963	ST1.8	杯 高 4.0 (口13.1) (底 9.6)	口縁は僅に強く外反 体部は横く膨らむ 底部は丸く端が厚い		々 不良	々
79-964	ST1.8 54-3 81-2-3	杯 高 3.7 (口13.4) (底 9.5)			々 良好	淡黄
						々
79-965	ST1.8	杯 (口14.0)	口縁は外反 体部は膨らむ		々 良好	灰白・同

第55表 土器観察表(54)

単位cm

標識・調査	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・調
79-966	S T 1 8	平 底 9.9	体部は膨む 底部は丸く端は厚い	切削は荒切→無	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰黄・青
81-967	S T 3 6	平底 高 4.5 (口18.7) 天 2.7	天井は平坦 体部は反る 端部は屈曲して外寄 つまみは中央の高い環状突起	切削は荒切→荒削	少 数 堪能	灰
81-968	S T 3 6	高台付环 高 4.7 (口13.8) (底 5.6)	口縁から体部は弯曲 底部は中央が高く高い	少	少	灰白
81-969	S T 3 6	高台付环 高 4.0 (口13.3) (底 5.8)	口縁は僅に外反 体部は直線的 高台は逆三角形状で立つ	切削は荒切→無	少 数 良好	灰
81-970	S T 3 6	高台付环 高(7.8) 口18.1	口縁はほんの僅に内反気味 体部は直線的	切削は不明→荒削	0.1前後の砂粒 少量 堪能	少
81-971	S T 3 6	甌 高(4.4) 底 5.5	体部は丸く膨む 高台は一亘外傾し縁は斜をついて鋸く内傾	切削は荒切→無	0.1以下の砂粒 底部外に凸窓多数 少量 堪能	少
81-972	S T 3 6	环 高 4.4 (口19.3) (底 5.2)	口縁はやや内寄気味 体部は直線的 底部は均一で中央部が高い	切削は荒切→無	少 数 良好	灰白
81-973	S T 3 6	高台付甌 高(7.2) (口17.9)	口縁は僅に外反 体部は弯曲 体部中央に斜をもつ	内外に丁寧な削	少	黄灰
81-974	S T 3 6	ミニチュア短颈甌 (口 5.4) 高(3.7)	口縁は瓶く内傾 瓶部は屈曲する 体部は膨らみ横円形状	少	少	少
81-975	S T 3 6	高台付环? (底10.2)	底部の中央部は低い 高台は高く外傾	切削は荒切→無	少 数 良好	灰黄・灰白
81-976	S T 3 6	甌 高 4.4 (口19.5) (底15.1)	底板有 口縁から体部は弯曲 底部は向て薄い 高台は高く長方形状で外傾	切削は荒切→底部全面荒削→無	少 数 堪能	オリーブ灰
81-977	S T 3 6	平底 高 7.3 (口 5.7) 天 5.3	口縁は凹んで外傾 口縁は外傾し瓶部は屈曲 天井が僅に高くなる	天井は無 体部下端は荒削	少 数 良好	灰白
81-978	S T 3 6	环 高(2.5) 底 7.8	体部は膨む 瓶部は厚く均一で平坦 瓶は角張る	切削は荒切→無 斜切跡	0.1前後の砂粒 硬量 堪能	灰 灰白
81-979	S T 3 6	环 高 4.2 (口12.8) (底 5.2)	口縁は直線的 体部は板く膨む 底部は丸く平坦 瓶は角張る	切削は荒切→無	少	少
81-980	S T 3 6	环 高 4.7 (口11.0) 底 7.7	口縁はやや外反 体部は板く膨む 瓶は厚く平坦 瓶は角張る	切削は荒切→無 浅切跡	少	少
81-981	S T 3 6	环 高 4.2 (口12.8) (底 7.7)	口縁から体部は内寄 底部は中央がやや高く寄り	切削は荒切→無	少 数	少
81-982	S T 3 6	大甌 高(12.2) 口41.2 瓶51.7	口縁は内外に縁をもち垂直方向に反る 口縁は外反 瓶部はくの字状	外は平行印→無 内は無	0.1前後の砂粒 硬著 堪能	灰オリーブ

第56表 土器観察表(55)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・測量	器形の特徴	成法の特徴	胎土・焼成	色 製
82-983	S T 3 6	大甌 高(34.0) (口46.0) (底38.2)	口唇は丸く外反 口縁は外反 瓢部は くの字状 脊は丸く膨む	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	0.1前後の砂粒 頸唇 不良	にぶい質感
63-3						x
82-984	S T 3 6	甌 高(16.3) 口23.8 底 20.4	口唇は内外に後をもち直腹 口縁は直 立して外反 瓢部は直角 腹部は張る	外は施文叩→撫 内は押え→撫	x	灰
63-4						堅敏 x
82-985	S T 3 6	甌 高(25.3) (口22.8) (底19.2)	口唇は凸む 口縁は外反 瓢部はくの 字に屈曲 脊は緩く側は大きく膨む	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	x	淡黄
63-5						良好 灰黄
83-986	S T 3 6	大甌 高(31.5) (口49.6) (底37.6)	口唇は内外に後をもち凹み内形 口縁 は外反 瓢部はくの字状 脊は細い	外は張目 平行叩 内は円文叩→撫	x	黑
63-6						堅敏 灰
83-987	S T 3 6	甌 高(45.0) 口22.5 底 18.4	口唇は丸く外に後有る 口縁は外反 瓢 部はくの字状 脊は緩く側は現状	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	x	灰黄褐
63-7						灰黄
84-988	S T 3 6	大甌 高(62.9) (底 37.6)	口縁下位は直立反角 瓢部はくの字状 に屈折 脊は大きく膨む	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	x	灰オリーブ
64-1						灰白
85-989	S T 3 6	大甌 高 90.7 口51.9 底 42.6	口唇は内外に後をもち直腹 口縁は外 反し瓢部は屈折 脊は張り底部は丸い	外は平行叩→撫 内は円文叩→撫	x	灰
64-2-3						堅敏 x
88-990	S T 1 3	坏甌 高(2.2) (口16.3) 天 2.5	天井は丸い つまみは縁が薄く尖って いるボタン状	切離は鋭切→施削	0.1以下の砂粒 重量	灰白
88-991	S T 1 3	坏甌 高 3.4 (口16.3) 天 2.5	天井はほぼ平坦 体部は直線的 壁部は 丸い つまみはボタン状	x	x	x
88-992	S T 1 3	坏甌	天井はほぼ平坦 体部は直線的 壁部は 丸い つまみはボタン状	x	x	x
45-1		(口14.1) 天 2.5	天井はほぼ平坦から屈曲し内傾			良好 x
88-993	S T 1 3	坏甌 天(1.6)	天井はほぼ平坦	x	x	良好 x
88-994	S T 1 3	高台付甌 高 6.5 (口13.3) (底 6.8)	口縁から体部は内湾彎曲 底部は丸く 中央が無い 商合は長方形状に外縁	切離は鋭切→撫	x	x
88-995	S T 1 3	高台付甌 高 7.1 (口16.4) (底 8.2)	口縁から体部は内湾彎曲 底部の端は 丸い 高台は平行四辺形状でやや外傾	x	x	灰白
88-996	S T 1 3	高台付甌 高 7.7 口15.5 底 9.3	口縁はやや外反 体部は緩く膨む 端 部は丸い 高台は外傾	切離は鋭切→撫 高明度	x	灰白
57-2						オリーブ灰
88-997	S T 1 3	高台付甌 高 6.5 (口13.3) (底 9.0)	口縁はやや外反 体部は膨む 高台は 方形状でやや外傾	切離は鋭切→撫	x	朝オリーブ灰
88-998	S T 1 3	高台付甌 高(5.0) (底 8.7)	体部は膨む 底部は丸い 高台は長方 形状に外傾	x	x	灰白
88-999	S T 1 3	坏 高(1.6) (底 9.0)	体部はやや膨む 底部は平坦で均一だ が縁が僅に厚い	x	0.1以下の砂粒 少量	淡黄緑
						良好 x

第57表 土器観察表(56)

単位cm

拂岡・闇坂	出土地点	形種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・調
88-1000	S T 1 3	坪 高 3.1 (口13.6) (底 7.0)	口縁は外反 体部は膨む 底部は平坦で中央部が厚い	切削は先切一削 溝明瞭	0.1以下の砂粒 数量 良好	灰白
88-1001	S T 1 3	坪 高 3.2 (口13.1) (底 7.8)	口縁は外反 体部は膨む 底部は中央部と端が厚い	*	*	*
88-1002	S T 1 3 54-7	坪 高 3.5 口13.0 底 8.2	口縁は外反 体部は膨む 底部は平坦で均一	*	*	*
88-1003	S T 1 3	坪 高 3.5 (口13.0) (底 7.2)	口縁は外反 体部は膨む 底部は場がやや厚い	*	*	*
88-1004	S T 1 3	坪 高 4.2 (口14.1) (底 7.8)	口縁から体部は直線的 底部は全体に厚く端が丸い	切削は先切一部 全面手持薬剤	0.1前後の砂粒 顯著 良好	黄澄
88-1005 54-8 80-3	S T 1 3	坪 高 3.5 口12.8 底 7.5	口縁から体部は内凹 底部は平坦で中央部が厚い	切削は先切一部	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰
88-1006	S T 1 3	豆 高(10.0)	体部は弯曲	外は指→薬剤 内は指→模様	0.1前後の砂粒 少量 壓接	灰・同
88-1007	S T 1 3	小壺 高14.1 (口15.0) (底 8.0)	口縁は外反して尖端は内凹 額部はくの字状に屈曲 脚はやや膨らみ底は平坦	切削は系切	0.1前後の砂粒 顯著 壓接	灰
88-1008	S T 1 3 56-4	長頸瓶 高(13.6)	胴は中央や上辺に最大径をもち膨む 肩部には2本の浅い沈窓	外は指→薬剤 内は無	0.1以下の砂粒 少量 壓接	にぶい黄澄
88-1009	S T 1 3	長頸甌 高(9.4) (口10.8)	口縁は垂直気味 口縁は外反し脛部付近は直立気味	内外面丁寧な施	*	灰 灰白
89-1010 88-5	S T 1 3	壺 高(11.3) (口21.0) (頸16.5)	口縁は凹み内に鋭い稜 口縁は外反 頸部はくの字状 肩部は頗る膨らむ	外は平行叩一張目 内は円文叩一張目 頸部	0.1以下の砂粒 顯著 壓接	*
89-1011	S T 1 3	壺 高(5.6)	口縁は凹み内に鋭い稜 口縁は外反 頸部はくの字状 肩部は強く膨る	外は叩一張目 内は平行叩一張	*	灰
89-1012 68-6	S T 1 3	壺 高(5.1) (口23.7) (頸19.4)	*	外は平行叩一張 内は摸音一円文叩	0.1以下の砂粒 少量 壓接	灰白
89-1013	S T 1 3	壺 (口21.0)	口縁は凹み内に鋭い稜 口縁は外反	外は平行叩一張	*	壓接 灰白・灰
89-1014 68-7	S T 1 3	壺 高(10.3) (口24.0) (頸19.2)	口縁は直に凹む 口縁は外反 頸部はくの字状に昆曲 肩部は極く膨む	外は平行叩一張	*	灰白
89-1015	S T 1 3	壺 高(7.8)	口縁は凹み下位に丸い棱をもつ	外は平行叩 内側	0.1以下の砂粒 顯著	灰・同
89-1016	S T 1 3	壺 高(7.9)	*	*	0.1前後の砂粒 顯著	灰白・にぶい
89-1017	S T 1 3	壺 高(6.0)	口縁は凹み下位に三角形の棱をもつ には沈窓有	*	*	にぶい褐色・にぶい
89-1018	S T 1 3	壺 高(10.0)	口縁は凹み下位外には三角形の後口内	外は平行叩一張	*	にぶい褐色
			には沈窓有	内は無	良好	にぶい・灰白

第58表 土器観察表(57)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	動土・焼成	色調
90-1019 45-2	ST 1 4	环底 高 2.9 口14.3 天 2.3	天井は丸い 体部は直線的 嘴部は長 折して立つ つまみは環子	切削は尾切→尾削 内面に不定数	0.1以下の砂粒 粗著 良好	灰白 淡黄
90-1020 45-3 78-1	ST 1 4	环底 高 2.8 口14.0 天 2.2	*	*	*	*
90-1021 45-4	ST 1 4	环底 (口16.2) 天 3.5	天井は丸い 体部は僅く膨む 嘴部は 平行気味から屈曲して外傾	切削は尾切→尾削 少量	0.1以下の砂粒 堅硬	灰 灰白
90-1022	ST 1 4	环底 高(1.9)	天井は平坦 つまみは瓶宝珠	切削は不規→尾削	*	不良
90-1023	ST 1 4	高台付环 高 4.5 (口13.0) (底 8.7)	口縁はやや外反 体部は直線的 高台 は方形形状でやや外傾 基底部は凹む	内外面丁寧な施 焼成	0.1以下の砂粒 良好	灰白 淡黄
90-1024	ST 1 4	高台付环 底 4.4 (口13.0) (底 4.4)	口縁から体部はやや外反し薄い 底部 は平坦 高台は長方形状でやや外傾	切削は尾切→施 は	*	浅黄褪
90-1025	ST 1 4	高台付环 高(2.0) (底 9.3)	体部は膨む 底部は厚い 高台は長方 形状で外傾	切削は尾切→全面 施削?	0.1前後の砂粒 少量	淡黄 灰白
90-1026	ST 1 4	高台付环 (底 9.3)	底部は平坦 高台は方形形状でやや外傾	切削は尾切→施 少量	0.1以下の砂粒 少量	浅黄・同 灰白
90-1027	ST 1 4	环 (底 9.0)	底部は丸く端が厚い	切削は尾切→施 内部は工具痕	*	不良
90-1028	ST 1 4	环 (底 9.0)	底部はやや丸く端が厚い	切削は尾切→施	*	不良
90-1029	ST 1 4	环 底 7.2	底部は丸く厚い	*	*	堅硬
90-1030	ST 1 4	臺? 高(3.6) (底12.0)	体部は膨む 嘴部は丸く均一 高台は 長方形形状でやや外傾	切削は不規→底部 施削	0.1以下の砂粒 粗著	弱オリーブ 同
90-1031 57-3	ST 1 5	壹盡 (口16.4) (天 5.1)	天井はほぼ平坦 底部は丸い 口縁は 直線で底部が凹む	切削は尾切→尾削 少量	0.1以下の砂粒 堅硬	灰 弱オリーブ
90-1032	ST 1 5	环 高 3.8 (口13.8) 底 9.7	口縁は直線的 体部は膨む 底部は丸 く中央が薄い 端は厚い	切削は尾切→施 施削	*	灰褐色 褐色
90-1033 61-4	ST 1 5	壹 高40.1 (口21.1) (底19.0)	口縁は丸い 口縁は外反 脊部はぐくの 字形に崩折 嘴部は最も胴上位で張る	外は平行叩一施 内は円文明→施	0.1前後の砂粒 粗著	黄灰 灰白
90-1034	ST 1 5	环底	口縁から体部は丸く膨む 嘴部は崩折 して立つ	切削は尾切→尾削 少量	0.1前後の砂粒 堅硬	灰白 同
90-1035	ST 1 5	环底 高(1.3)	天井は平坦 つまみは環平	*	0.1以下の砂粒 粗著	灰白・同
90-1036	ST 1 5	环底 高 2.7 (口13.5) 天 2.2	口縁から体部は丸く膨む 嘴部は崩折 して立つ つまみは環子	*	0.1前後の砂粒 粗著	灰白 淡黄
90-1037	ST 1 5	环底 (口13.5)	天井は丸い 嘴部は昂折して内傾	*	*	堅硬
90-1038	ST 1 4	快瓶 高(4.0) (口11.4)	口縁は僅に凹み外傾 口縁は直立気味 に外反	内外に丁寧な施 少量	0.1前後の砂粒 良好	灰白 黄灰

第59表 土器観察表(58)

単位cm

測定・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・調
90-1039	S T 1 4	鉢器 (底13.6)	底はほぼ平坦	内外に丁寧な施 外は荒削 内は搔目	0.1以下の砂粒 少量 良好 0.1前後の砂粒 少量 良好	灰黄 灰黄褐・黒褐
90-1040	S T 1 4	盤 高(6.4)	底部は膨らむ	外は荒削 内は搔目	細砂少量	灰黄褐
91-1041	S T 1 5	長颈瓶? 高(17.5) 頸(12.0)	瓶底下位は直立 瓶部はくの字に膨らむ 胴は球状	外は荒削 内は搔	細砂少量 豊富	灰黄 灰
91-1042	S X 0 9	壺鉢 (口29.8)	口唇は僅に凹む 口縁は短く内傾	外はおろし目	*	豊穣 に多い赤褐色
91-1043	S X 0 9	高台付杯 (底 6.5)	底部は均一 高台は長方形状で外に後	切削は荒切→撫	0.1以下の砂粒 少量 良好	浅黄褐・同
91-1044	S X 0 9	高台付杯 高(2.7) (底 8.6)	体部は両曲 底部は平坦で均一 高台 は長方形状で外傾 瓶底部は僅に凹む	*	*	明褐色 に多い黄褐色
91-1045	S X 0 9	高台付杯 高(2.6) (底 8.1)	体部は両曲して薄い 底部は青い 高 台は長方形状で外傾	切削は荒切→撫 渦切削 爪の痕跡	*	灰 灰
91-1046	S X 0 9	壺 高(5.9)	口唇は内に突き 口縁は腹をもって外反	外は平行叩→撫	0.1以下の砂粒 豊富	灰白・灰
91-1047	S X 0 9	壺 高(6.0)	口唇はV字に凹む 口縁は外反	*	*	豊穣 *
91-1048	S X 1 0	長颈甌 高(11.5) (口20.0)	口縁は外反し口唇で三角形に立つ 瓶 部はくの字状に膨らむ 脇は少し膨らむ	外は搔目→荒削 内は搔目	0.1前後の砂粒 豊富 不良	櫻 浅黄褐
91-1049	S X 1 0	环蓋 高 2.3 (口16.6) 天 1.7	天井は平坦 体部は最も膨らむ 瓶部は 本平から内傾 つまみはボタン状	切削は荒切→撫	*	灰白 柄オーリーブ灰
91-1050	S X 2 9	环蓋 高 3.0 (口13.9) 天 2.2	天井は平坦 体部は最も膨らむ 瓶部は 昆折して立つ つまみはボタン状	切削は荒切→撫	0.1前後の砂粒 少數 豊穣	オリーブ灰 灰
91-1051	S X 2 9	环蓋 高 2.4 (口14.5) 天 1.8	天井は平坦 体部は蓋に反る 瓶部は 昆曲して外傾 つまみはボタン状	*	*	灰
91-1052	S X 2 9	环蓋 (口14.3) (天 2.0)	天井は平坦 体部は蓋に反る 瓶部は 昆曲して立つ	*	*	オリーブ灰 灰白
91-1053	S X 2 9	环蓋 高(1.5)	つまみは中央が高く高いボタン状	丁寧な撫	細砂 良好	灰白・同
91-1054	S X 2 9	环蓋 高(1.4)	つまみは瓶が丸いボタン状	*	0.1以下の砂粒 少量 豊穣	灰白・灰
91-1055	S X 2 9	环蓋 (口15.0) -天 2.6	天井はほぼ平坦 体部は最も膨らむ 端 部は昆折して鋭く立つ	切削は荒切→撫 少數 豊穣	0.1前後の砂粒 少數 柄オーリーブ灰	灰黄 灰
91-1056	S X 2 9	环蓋 (口16.4)	体部は膨らむ 瓶部は屈曲してやや内傾	切削は不規則→撫	*	良好 黄灰・灰白
91-1057	S X 2 9	高台付杯 高 5.4 (口14.9) (底 9.5)	口縁は外反 体部は膨らむ 瓶部は中央 部と端が厚い 高台は長方形状で外傾	切削は荒切→撫 細砂 良好	0.1以下の砂粒 豊富	灰黄 灰
91-1058	S X 2 9	高台付杯 高 4.4 (口12.4) (底 8.7)	口縁から体部は内窪 底部は端が厚い 高台は長方形状で僅に外反	切削は荒切→撫	*	灰 豊穣 *
91-1059	S X 2 9	高台付杯 高(2.2) (底 8.3)	体部は膨らむ 瓶部は端が厚い 高台は 方形状で立つ 接地部には枕縫有	*	*	灰白 豊穣 *

第60表 土器観察表(59)

単位cm

種類・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	性状の特徴	胎土・地成	色・画
91-1060	S X 2.0	杯 高 4.1 (口13.3) (底 9.4)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は平坦で端が厚い	切妻は荒切→擦	0.1以下の砂粒 少量	灰白 良好
91-1061	S X 2.9	杯 高 4.1 (口12.8) (底 9.2) 平坦	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は厚く	×	×	灰白 良好 オリーブ灰
91-1062	S X 2.9 54-9	杯 高 3.5 (口14.7) (底 9.3)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は中央が薄く端が厚い	×	×	灰白 堅穢 ×
91-1063	S X 2.9 54-10	杯 高 4.1 口14.5 底10.1 均一	口縁は外反 体部は膨らむ 底部はほぼ均一	切妻は荒切→擦 湯舟腹	×	× 堅穢 ×
91-1064	S X 2.9	ミニチュア瓶底窓 (口 3.1)	口縁は直立して尖端は細い 頸部はくの字状 底部は要る	内外面丁寧な擦	細砂少量	× 堅穢 ×
92-1065	S T 3.0	坪蓋 (口15.7) 天 2.9	天井はほぼ平坦 体部は反る 端部は脛曲して内傾	切妻は糸切→笠剣	0.1以下の砂粒 少量	× 不良 ×
92-1066	S T 3.0	坪蓋 高(2.1)	天井はほぼ平坦 体部は反る つまみは頸が丸い擬宝珠	×	×	浅黄緑 不良 ×
92-1067	S T 3.0	坪蓋 高(2.4)	天井はほぼ平坦 つまみは擬宝珠	×	× 良好	オリーブ灰- にぼい黄緑
92-1068	S T 3.0	- 坪蓋 高(1.9)	天井はほぼ平坦	×	× 良好	灰黄緑-にぼい 黄緑
92-1069	S T 3.0 45-9	坪蓋 高(2.8) 天井はほぼ平坦 脊部は丸くなる つまみは擬宝珠	切妻は糸切→笠剣 前	0.1前後の砂粒 少量	× 不良 ×	×
92-1070	S T 3.0	坪蓋 高(1.9)	天井はほぼ平坦 脊部は丸くなる つまみは頭がボタン状	切妻は糸切→笠剣	0.1以下の砂粒 少量	× 不良 ×
92-1071	S T 3.0	坪蓋 高(1.1)	天井はほぼ平坦	×	× 不良	にぼい黄緑- 同
92-1072	S T 3.0	高台付坪 (底 9.9)	底部は平坦 高台は外傾し尖端は細い	切妻は糸切→擦	細砂少量	灰黄-灰黄緑
92-1073	S T 3.0	高台付坪 底 6.5	体部は弓曲	切妻は糸切	0.1以下の砂粒 少量	灰黄-灰白
92-1074	S T 3.0	杯 (底 7.0)	体部は膨らむ 底部は均一で中央が高い	切妻は糸切→擦	× 堅穢	灰・同
92-1075	S T 3.0	杯 高 3.3 (口13.5) (底 7.0)	口縁から体部は弓曲 底部は厚く平坦で均一 やや突出する	切妻は糸切	0.1前後の砂粒 少量	灰白 良好 ×
92-1076	S T 3.0	杯 底 6.4	体部は膨らむ 底部は厚く平坦	×	細砂少量	灰白 良好
92-1077	S T 3.0	杯 高 4.0 (口13.4) (底 7.3)	口縁は外反 体部は膨らむ 底部は厚く 平坦で均一 やや突出する	切妻は荒切→擦	0.1以下の砂粒 少量	灰白 良好 ×
92-1078	S T 3.0 57-4	短脚壺 高(5.1) (口10.8)	口縁は直線的に内傾 頸部はくの字状 に脣曲 脊部は腰く張る	外は平行叩→擦 内は平行搔目	0.1以下の砂粒 微量	灰 堅穢 ×
92-1079	S T 3.0	長脚壺 (底 5.6)	肩は強く張る	つくりは3段構成	0.1以下の砂粒 少量	灰・明青灰
92-1080	S T 3.0	長脚壺 (口 8.2)	口縁は凹んで直立 口縁は外反	内外丁寧な擦	× 堅穢	灰・同

第61表 土器觀察表(60)

単位cm

件名・回数	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色調
92-1081	S T 3 0	甕 高(5.0) (口13.6)	口唇は中央が高く内外に腹有 口縁は直線的で外反	外は無 内は叩	0.1前後の砂粒 銀巻 堅穀	灰オーリーブ
92-1082	S T 3 0	甕 高(5.6) (口23.0) (頸20.6)	口唇は縦に凹む 内面に鋸い外に丸い 腹有 口縁は外反	内外に丁寧な撫	*	灰
92-1083	S T 3 0	甕 高(21.5) (頸19.2)	口縁は外反 端部は直線気味に屈曲 脇は強く張り胸は玲瓏	外は平舟叩→撫 内は円文叩→撫	*	灰白
64-5					堅穀	*
97-1084	L N 5 4	环甕 高(2.4)	天井は丸い つまみは擬宝珠	切離は不明→薬剤	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰白・灰
97-1085	表様	环甕 高 2.5	天井はやや平坦 体部は直線的 端部は	切離は薬切→薬剤	0.1前後の砂粒	灰白
45-10		口14.7 天 1.7	は屈折して外縁 つまみはボタン状		少量 堅穀	*
97-1086	*	环甕 高 2.8 (口14.5) 天 2.2	天井は平坦 体部はやや反る 端部は 屈折して立つ つまみはボタン状	*	*	オリーブ灰 堅穀
97-1087	L P 5 7	环甕 高 4.0 (口12.8) 天 2.7	天井はやや丸い 体部は直線的 端部は 屈折して立つ つまみは拟宝珠	*	*	灰白
45-11					良好	*
97-1088	L O 5 7	环甕 高 3.1 (口13.6) 天 1.9	天井は平坦 体部は僅に反る 端部は 屈折して立ち外縁 つまみは亀頭形	切離は薬切→手持 薬剤	0.1以下の砂粒 少量 血野	灰質
45-12						*
97-1089	L O 5 7	环甕 高 3.3 (口15.2) 天 2.3	天井は平坦 体部は薄く反る 端部は 屈折して立ち外縁	切離は薬切→薬剤	0.1前後の砂粒 少量 良好	灰白
45-13						*
97-1090	L N 5 6	环甕 高 4.2 (口15.5) 天 3.2	天井はやや丸い 体部は薄く反る 端部は 屈折して立ち外縁 実端は折れる	*	*	にぶい質感
45-14					良好	*
97-1091	L P 5 7	环甕 高 4.2 (口15.7) 天 2.9	天井は薄く平坦 体部は極く膨らむ 端部は 屈折して立ち つまみは擬宝珠	切離は薬切→薬剤 銀巻 堅穀	0.1以下の砂粒 少量	灰
45-15						*
97-1092	表様	环甕 高(3.6)	天井は丸い 体部は直線的? つまみ	*	0.1前後の砂粒	灰質
45-16			は中央が三角状の擬宝珠		銀巻 良好	灰白
97-1093	L Q 5 6	环甕 高 2.4 (口15.3) 天 1.4	天井は近く平坦 体部は直線的 端部は 屈折して外縁 つまみは亀頭形	切離は薬切→薬剤	0.1前後の砂粒 少量 堅穀	灰
45-17						*
97-1094	L O 5 3	环甕 高(2.0)	天井はやや丸い つまみは亀頭形	切離は薬切→薬剤 銀巻 堅穀	0.1前後の砂粒 少量	灰・同
97-1095	L K 5 6	环甕 高(1.5)	天井は西洋平坦 つまみは擬宝珠	切離は薬切?	0.1以下の砂粒 少量	灰白・灰
97-1096	L Q 5 7	环甕 高 2.5	天井は平坦で中央が低い 脇は角張る つまみはボタン状擬宝珠	切離は薬切→薬剤 銀巻 堅穀	0.1以下の砂粒 少量 堅穀	灰白
97-1097	L J 5 8	环甕 高(1.9)	天井は平坦 つまみはボタン状擬宝珠	—	—	明オーリーブ灰・灰
97-1098	L M 5 2	环甕 高(2.8)	—	—	—	堅穀 灰質・同
97-1099	L O 5 3	环甕 高(1.5)	天井は平坦 つまみは擬宝珠	—	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰白・灰
97-1100	L L 5 4	环甕 高(2.2)	天井は平坦 つまみはボタン状	切離は薬切→薬剤 銀巻 良好	—	灰質灰・同

第62表 土器観察表(61)

単位cm

序番・図版	出土地点	器種・法数	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
97-1101	L.N.5.5	杯蓋 高(1.9)	天井は平坦 つまみはボタン状突起	切削は施切→窓削	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰白・青
97-1102	L.Q.5.3	杯蓋 高(2.9)	*	切削は施切→窓削	*	堅硬 明青灰・同
97-1103	L.P.5.3	杯蓋 高(2.5)	天井はほぼ平坦 つまみは茎尖端	*	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰白・灰
97-1104	實錠	杯蓋 高(2.3)	天井は平坦 つまみは茎の高いボタン状	*	0.1以下の砂粒 少量 坚硬	灰・青
97-1105	L.S.5.3	杯蓋 高(2.3)	天井は丸い つまみはボタン状突起	*	*	堅硬 灰白・灰
97-1106	L.O.5.2	杯蓋 高(1.8)	天井は平坦 つまみはボタン状突起	切削は施切?	*	堅硬 灰・同
97-1107	L.O.5.3	杯蓋 高(2.6)	天井は平坦 つまみはボタン状	*	*	堅硬
97-1108	L.P.5.7	杯蓋 高 3.3 (口14.7) 天 2.3	天井から体部は丸い 墓部は施削せず 内に腰 つまみはリング状	切削は施切? → 窓削	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰白
97-1109	L.P.5.7	杯蓋 高(1.8)	天井は丸い つまみはリング状	*	*	良好 灰白・同
97-1110	L.Q.5.4	杯蓋 高(1.5)	天井はほぼ平坦 つまみはリング状	*	*	良好
97-1111	L.O.5.6	杯蓋 高(1.6)	天井はほぼ平坦 つまみはボタン状	—	*	良好 淡黄・同
97-1112	實錠	杯蓋 高(1.5)	*	—	*	良好
97-1113	L.O.5.5	杯蓋 高(1.3)	つまみはボタン状	—	*	良好 灰白・同
97-1114	L.N.5.3	杯蓋 高(1.5)	*	—	*	堅硬 *
97-1115	L.N.5.2	杯蓋 高(1.4)	天井は平坦 つまみはリング状	切削は施切→窓削	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰白・淡黄
97-1116	L.K.5.1	杯蓋 高(1.4)	天井は平坦 つまみは扁平なボタン状	切削は施切→窓削	*	良好 灰白・同
97-1117	L.J.5.5	杯蓋 高(1.4)	*	切削は施切	*	堅硬 灰・褐色灰
97-1118	L.Q.5.4	杯蓋 高(1.5)	天井は平坦 つまみはボタン状	切削は施切→窓削	*	良好 灰白・同
97-1119	L.P.5.3	杯蓋 高(2.2)	天井は丸い つまみはボタン状	切削は施切→窓削	*	良好 *
97-1120	L.O.5.4	杯蓋 高(2.0)	*	切削は施切→窓削	*	良好 オリーブ灰 明オリーブ灰
97-1121	L.Q.5.6	杯蓋 高(1.6)	つまみはボタン状	—	*	良好 オリーブ 灰白
97-1122	L.P.5.6	杯蓋 高(2.1)	天井は丸い つまみは台形状	切削は施切→窓削	*	堅硬 灰白・同
97-1123	L.M.5.2	杯蓋 高(1.8)	天井は平坦 つまみはボタン状	*	*	良好 にぶい黄緑・同
97-1124	L.O.5.4	杯蓋 高(1.7)	*	—	*	良好 灰黄・同
97-1125	L.P.5.5	杯蓋 高(0.5)	天井は平坦	つまみ部に凹凸	*	堅硬 灰・同
97-1126	L.O.5.6	杯蓋 高(0.6)	つまみは茎平な無突起	—	*	不良 灰白・同
97-1127	L.P.5.3	杯蓋 高(1.6)	つまみはボタン状突起	—	*	堅硬 布オリーブK・同
98-1128	L.Q.5.3	杯蓋 高(0.7)	天井は平坦	内面に擦目	*	堅硬 灰白・淡灰
98-1129	L.N.5.5	杯蓋 (口16.7)	天井は扁平 焼部は畳曲して立つ	切削は施切→窓削	*	堅硬 灰・黑
98-1130	L.P.5.5	杯蓋 (口14.5)	天井から体部は丸く低い 焼部は外傾	*	0.1以下の砂粒 顯著	灰・灰白
98-1131	L.N.5.5	杯蓋 高(2.2) (口16.5)	体部は膨む 焼部は水平から畳曲して 外傾	切削は不規→窓削	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰黄

第63表 土器観察表(62)

単位cm

番号・団版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
98-1132	L N S 5	环釜 (口18.6) 天 2.2	天井は広く平坦 体部は直線的 端部は水平から屈曲して外傾	切離は直切→窓削 少量 脊縫	0.1以下の砂粒 灰白	灰
98-1133	表鉢	环釜 (口14.4) 天 3.5	天井はほぼ平坦 体部は直線的 端部は水平気味から屈曲して外傾	切離は直切→窓削 内面は平滑	少量 脊縫	暗オリーブ灰
98-1134	L Q S 3	环釜 (口16.1) 天 1.7	天井は扁平 体部は直線的 端部は屈曲して外傾	切離は直切→窓削	0.1前後の砂粒 少量 脊縫	灰黒
98-1135	L Q S 6	环釜 (口16.0) 天 1.7	天井は扁平 体部は反る 端部は屈曲して外傾	*	0.1以下の砂粒 脊縫	灰白
98-1136	L P S 7	环釜 高(1.7) (口14.6)	天井から体部は丸い 端部は屈曲して内傾し尖端で立つ	切離不明→窓削	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰
98-1137	L P S 7	环釜 (口13.6) 天 2.5	天井はほぼ平坦で高い 体部は緩く膨らむ 端部は屈曲して内傾	切離は直切→窓削	良好 脊縫	灰白
98-1138	L P S 6	环釜 (口14.7) 天 3.3	天井はほぼ平坦で高い 体部は反る 端部は屈曲して丸く立つ	*	*	灰白
98-1139	L P S 7	环釜 (口14.2) 天 2.1	天井はほぼ平坦 体部は緩く膨らむ 端部は屈曲して内傾し先は尖る	*	*	灰
98-1140	L P S 7	环釜 (口14.6) 天 2.4	天井はほぼ平坦 体部はやや反る 端部は後をつくり屈折して立つ	*	*	灰黒
98-1141	L O S 8	环釜 (口13.4) 天 2.5	天井はほぼ平坦 体部は反る 端部は屈曲して立つ	*	*	灰白
98-1142	L P S 5	环釜 (口14.2) 天 2.1	天井はやや丸味有 体部は直線的 端部は屈曲して立つ	*	0.1前後の砂粒 脊縫	灰
98-1143	L O S 8	环釜 (口14.1) 天 2.5	天井はやや丸味有 体部はやや反る 端部は屈曲してやや外傾	*	良好 不良	灰白
98-1144	L F 4 4	环釜 (口14.0) 天 2.6	天井はほぼ平坦 体部はやや反る 端部は屈折して立つ	*	0.1前後の砂粒 少量 良好	*
98-1145	表鉢	环釜 (口13.8) 天 2.1	天井はほぼ平坦 体部はやや反る 端部は屈折して複数つくりやや外傾	*	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰オリーブ
98-1146	L Q S 3	环釜 (口16.6)	体部は緩く膨らむ 端部は屈折して外傾	切離は不明→窓削	*	灰黒・同
98-1147	L P S 5	环釜 (口14.3) (天 2.2)	天井は広く平坦 体部は反る 端部は緩く内側気味	切離は直切→窓削	*	にぶい質感
98-1148	L Q S 6	环釜 (口12.3) (天 2.1)	天井は平坦 体部は大きく反る 端部は水平から屈折して外傾	*	0.1以下の砂粒 脊縫	灰白

第64表 土器観察表(63)

単位cm

種類・因版	出土地点	形状・性質	器形の特徴	技術的特徴	胎土・焼成	色調
98-1149	L P 5.7	环底 (口17.1) 天 2.8	天井はやや丸味有 体部は直線的 端部は屈曲して縁をつくり外傾	切削は箇切→荒削 少量 良好	0.1以下の砂粒 灰	灰
98-1150	L Q 5.7	环底 (口14.3) 天 2.2	天井から体部は弯曲 端部は内面だけを引き出す	*	*	灰白
98-1151	L P 5.7	环底 高 2.6 (口15.0)	天井は高い 体部はやや反る 端部は屈曲して立ち光は弯曲	切削は不明→荒削 良好	明褐色	灰
98-1152	L P 5.7	环底 (口14.9) 天 1.9	天井はやや丸い 体部は緩く膨らむ 端部は折断して立つ	切削は箇切→荒削 少量 良好	0.1前後の砂粒 灰オリーブ	灰
98-1153	L J 5.7	环底 (口13.8) 天 1.45	天井は低くやや丸い 体部は緩く膨らむ 端部は屈曲して内傾	*	0.1以下の砂粒 少量 良好	淡黄
98-1154	L P 5.6	高台付环 高 8.2 (口17.8) (底12.6)	口縁は外反 体部は緩く膨らむ 底部は中央が厚い 高台は外傾し端は内傾	切削は荒切→無 良好	灰白	灰
98-1155	L O 5.7	高台付环 高(8.6) (口21.9)	口縁はやや外反 体部は弯曲 底部は中央部が薄く端が厚い	切削は不明→荒削 ？ 体部下半荒削	0.1前後の砂粒 微量 不良	浅黄褐
98-1156	L P 5.5	高台付环 高(6.1) (口15.8)	口縁はやや外反 体部は緩く弯曲 底部は丸味有	切削は箇切→荒削 良好	0.1以下の砂粒 灰	灰オリーブ
98-1157	L O 5.7	高台付环 高 7.0	口縁は直線的 体部はやや反り薄い	切削は荒切→底面	0.1前後の砂粒 少量 良好	淡黄
50-2		口 8.5 底10.5	底部は平底で均一 高台は逆三角形状	荒削	良好	浅黄褐
99-1158	L M 5.2	高台付环 高(6.1) (底10.2) 有	体部は直線的 底部は厚く2本の沈線 高台は長方形状に外傾	*	0.1以下の砂粒 少量 製織	灰
99-1159	L O 5.6	高台付环 高(4.7) (口14.6)	口縁は直線的 体部は緩く弯曲 底部は厚く平底	切削は荒切→無 良好	0.1以下の砂粒 良好	浅黄褐
50-4		(口14.3) (底 8.1)	中央が薄く端が厚い 高台は外傾	良好	良好	灰
99-1160	L O 5.6	高台付环 高 4.8 (口14.3) (底 8.1)	口縁は直線的 体部は弯曲 底部は中央が薄く端が厚い 高台は外傾	切削は荒切→無 良好	0.1以下の砂粒 良好	浅黄褐
50-5		(L)14.4)	は薄い 高台は長方形状で外傾	荒削？	良好	浅黄褐
99-1161	L O 5.7	高台付环 高(5.1) (L)14.4)	口縁から体部は弯曲 端部は平底で端が薄い 高台は外傾	切削は箇切→底面 荒削？	0.1以下の砂粒 良好	浅黄褐
50-6		(口14.6)	は薄い 高台は長方形状で外傾	良好	良好	灰
99-1162	L N 5.3	高台付环 (高 4.6) (底 9.6)	体部は直線的 底部は平坦で端が薄い 高台は逆三角形状で立つ	切削は荒切→無 良好	0.1以下の砂粒 良好	淡黄
99-1163	L R 5.6	高台付环 高 4.3 (口13.7) (底 9.0)	口縁はやや外反 体部は直線的 底部は中央が薄い 高台は長方形状で外傾	切削は荒切→無 良好	0.1以下の砂粒 良好	灰
50-7		(口14.0) (底 8.8)	底部は薄く平底 高台は外傾	荒削？	不良	浅黄

第65表 土器観察表(64)

単位cm

所蔵・団体	出土地点	断面・法量	器形の特徴	接続の特徴	胎土・焼成	色調
99-1165 表揚	高台付环	高 4.7 (口13.9) (底 9.4)	口縁から体部は直線的 底部は平坦で 横が厚い 高台は長方形状で外傾	切離は笠切・無 量	0.1前後の砂粒 良好	灰白 ※
99-1166 LN 5.5	高台付环	高(3.9) (底 8.8)	体部は最も膨む 底部は端が厚い 高 台は短く外傾	※	※	灰黄 良好
99-1167 LOS 8	高台付环	高(3.1) (底 8.2)	体部は膨む 底部は中央が薄く端が厚 い 高台はやや外傾	※	※ 不均	灰白 ※
99-1168 表揚	高台付环	高(2.4) (底10.0)	体部は膨む 底部は中央がやや薄い 高台は高く長方形状に外傾	※	0.1以下の砂粒 頗著 良好	オリーブ灰 灰
99-1169 表揚	高台付环	高(5.1) (口14.3) (底10.0)	口縁はやや外反 体部は膨む 底部は 薄く平坦 高台は逆三角形状で外傾	※	0.1前後の砂粒 少量 良好	灰白 ※
99-1170 LP 5.3	高台付环	高(3.6) (底 9.0)	体部は最も膨む 底部は厚く平坦 高 台は逆三角形状で内面端に棱有	切離は底切→底部 剥解?	0.1以下の砂粒 少量 不良	灰黄 ※
99-1171 LP 5.6	高台付环	高 4.4 (口12.5) (底 9.1)	口縁は近く外反 体部は最も膨む 高 台は最も多く方形状で外傾	切離は不明→無 量	0.1前後の砂粒 ※	灰灰 ※
99-1172 LN 5.7	高台付环	高 4.5 (口12.4) (底 8.9)	口縁は僅に外反 体部は直線的 底部 は端が角張る 高台は長方形状で外傾	切離は底切→無 量	0.1以下の砂粒 ※	灰白 ※
99-1173 LN 5.7 50-9	高台付环	高 5.0 (口11.6) (底 7.9)	口縁はやや外反 体部は最も膨む 底 部は平坦 高台は方形状で立つ	※	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰白 にない、黄橙
99-1174 LN 5.7	高台付环	高 4.4 (口12.7) (底 8.9)	口縁から体部にかけて直線的 底部は 厚い 高台は方形状で直立	※	0.1以下の砂粒 量	褐灰 ※
99-1175 表揚	高台付环	高 5.1 (口14.6) (底10.5)	口縁はやや外反 体部は膨む 底部は 平坦で均一 高台は外傾し底部で内側	※	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰白 ※
99-1176 50-10	高台付环	高 5.0 (口12.8) (底 9.2)	口縁から体部は直線的 底部は薄く平 坦 高台は長方形状で外傾	切離は底切→剝離 量	※ 良好	※ 灰黄
99-1177 表揚	高台付环	高 4.7 (口11.3) (底 7.4)	口縁から体部は最も膨む 底部は薄い 高台は長方形状で外傾	切離は底切→無 量	0.1以下の砂粒 良好	灰ナリーブ 灰白
99-1178 表揚	高台付环	高 5.7 (口12.4) (底 6.3)	口縁から体部は僅に膨む 底部は中央 部が薄い 高台は逆三角形状で端が内凹	※	0.1以下の砂粒 少量 良好	※ ※
99-1179 LR 5.6	高台付环	高 7.9 (口14.0) (底 5.5)	口縁は外反 体部は膨む 底部は厚く 平坦 高台は直線で底部が凹む	切離は底切→剝離 量	※	明オリーブ灰 灰白
99-1180 表揚	高台付环	高 4.2 (口13.9) (底10.6)	口縁はやや外反 体部は最も膨む 高 台は長方形状で外傾	※	※ 良好	※ ※

第66表 土器観察表(65)

単位cm

擇園・園原	出土地点	器種・高さ	器形の特徴	性状の特徴	動土・焼成	色調
99-1181	L P 5 7	高台付环 高 2.8 (底 9.2)	体部は膨む 底部は厚い 高台は直方 形状で外傾	切削は荒切→推 底部外に爪の痕跡	0.1前後の砂粒 顯著 良好	灰黄
99-1182	L M 5 7	高台付环 高 2.3 (底 8.3)	体部は膨む 底部は厚く平坦 高台は やや外傾し先端部に後	切削は荒切→推 底部外に爪の痕跡	0.1以下の砂粒 微量 良好	浅黄褐
99-1183	L N 5 7	高台付环 (底 7.5)	底部は厚く平坦 高台は逆三角形で外傾	"	" 良好	浅黄褐・青
99-1184	L N 5 5	高台付环 (高 1.8) (底 9.6)	底部は厚く平坦 高台は外傾し外に強 い腰をつくって直立	切削は不明→推 内面底に木口状跡	" 良好	浅黄褐
100-1185	L Q 5 5	环 高 3.6 (口13.3) (底 9.8)	口縁から体部は緩く膨む 底部は平坦 で端は角張る	切削は荒切→推 体部は擦擦 少量 硬膜	0.1以下の砂粒 微量 硬膜	灰
100-1186	表揮	环 高 3.6 (口13.4) (底 9.0)	口縁から体部は内凹 端部は端が厚く 丸い	切削は荒切→推 微量	" 良好	にぶい黄褐
100-1187	L Q 5 6	环 高 4.0 (口13.3) (底 9.4)	口縁は外反 体部は大きくなじむ 底部 は厚く均一で端はやや丸い	"	0.1前後の砂粒 顯著 硬膜	灰
100-1188	L O 5 7	环 高 3.8 (口13.9) (底 9.6)	口縁から体部は弯曲 底部は中央が薄 く端は丸い	切削は荒切→推 微量	0.1以下の砂粒 微量	灰白
100-1189	L P 5 6	环 高 3.7 (口13.6) (底 8.7)	口縁は再び直線的 体部は緩く膨む 底部は平坦で均一	"	"	"
54-11	L O 5 7	环 高 4.4 (口15.1) (底 8.8)	口縁は直線的 体部は僅に膨む 底部 は中央がやや高く平坦	"	" 不良	浅黄褐
100-1191	L O 5 6	环 高 4.0 (口13.0) (底 8.2)	口縁から体部は直線的 底部は端が厚 く丸い	切削は荒切→底部 道削	" 良好	浅黄
100-1192	L P 5 5	环 高 4.5 (口13.4) (底 7.7)	口縁は厚く直線的 体部は膨む 底部 は厚く平坦	切削は荒切→推 箇記号	0.1前後の砂粒 微量 良好	灰白
100-1193	L N 5 7	环 高 3.5 (口13.5) (底 8.9)	口縁は外反 体部は膨む 底部は中央 が高い 全体が薄い	切削は荒切→推 微量	0.1以下の砂粒 微量 硬膜	灰黄
100-1194	L O 5 6	环 高 4.8 (口14.7) (底 7.3)	口縁は外反 体部は直線的 底部は平 坦で中央が高い	切削は不明→底部 体下端鋸削	0.1以下の砂粒 微量 硬膜	にぶい黄褐
100-1195	L O 5 6	环 高 4.6 口13.1 底 8.1	口縁から体部は緩く膨む 底部は平坦 で均一	切削は荒切→推 微量	" 不良	灰白
100-1196	L P 5 7	环 高 4.4 (口14.2) (底 8.6)	口縁から体部は弯曲 底部は厚く端は 角張る	切削は荒切→推 箇記号	0.1以下の砂粒 微量 良好	"
100-1197	L N 5 6	环 高 4.2 (口14.3) (底 8.6)	口縁は外反 体部は膨む 底部は中央 部が厚く端は角張る	切削は荒切→推 微量	" 良好	"

第67表 土器観察表(66)

単位cm

拂因・四葉	出土地点	器種・法度	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・調
100-1198 54-12	L O S 7	杯 高 4.7 (口14.5 絶 8.1)	口縁から底部は横く膨らむ 底部は中央が厚く高い。	切離は窓切→削 底部端が一部削削	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰白 灰黄褐色
100-1199	L L S 6	杯 高 2.9 (口12.6) (底 8.3)	口縁から底部は弯曲 底部は丸い。	切離は不明→削	—	灰オリーブ 堅穢
100-1200 81-5-6	L P S 6	不明 (口14.0)	口縁直下に強く強い便	内外に強	0.1以下の砂粒 微量	灰・同
100-1201	L Q S 6	杯? (底 7.6)	体面は膨らむ 底部は中央が薄い	切離は窓切→削	0.1以下の砂粒 少量	灰白・灰
100-1202	表模	杯? (底 5.6)	体部は膨らむ 底部は平均で端は角張る	—	—	灰・同
100-1203 81-5-6	L N S 6	杯 (底 8.5)	底面は平坦で端は角張る	切離は窓切→窓削 内面底に落書き文字	0.1前後の砂粒 微量	にぶい黄緑・ 灰黄
100-1204	表模	壺? 高(2.8)	体部は膨らむ 底部は中央が薄い	切離は窓切→削 底外圍に落書き	0.1前後の砂粒 微量	灰白・灰
100-1205 57-5	L T S 3	高台付壺? 高(4.7) (底11.7)	体部は直線的 底部は平坦で均一 高台は高く長方形状で外反	切離は窓切→削 内面底は不定削	0.1前後の砂粒 少量	灰灰
100-1206	L Q S 3	高台付壺? 高(3.0) (底10.2)	体部は弯曲 底部はほぼ平坦で均一 高台は長方形状で外傾 接地部は凹む	切離は窓切→窓削	—	灰黄 灰オリーブ
100-1207 57-6	L J S 7	壺蓋 高 5.1 (口16.2)	天井は平坦で肩部は丸い 口縁は直立 尖端は内側で突出 つまみは楕円形	切離は窓切→窓削	0.1前後の砂粒 少量	灰灰
100-1208 57-7	L P S 7	壺蓋 高 4.3 (口12.1)	天井は平坦で肩部は丸い 口縁は直立 尖端はやや内傾 つまみは扁平	—	—	オリーブ風
100-1209	L P S 5	壺蓋 (口18.0)	肩部は丸く口縁はやや外傾	—	—	灰灰・灰白
100-1210 57-8	L Q S 5	壺蓋 高 4.4 (口14.3) (底 3.4)	天井は平坦 肩部は丸い 口縁はやや 反って直立 つまみはボタン状	切離は窓切→窓削 縫合 不良	0.1以下の砂粒 微量	にぶい黄緑 灰黄
100-1211 57-9	L Q S 5	壺蓋	天井はやや丸い 肩部は丸い 口縁は やや内傾	—	0.1以下の砂粒 少量	灰
100-1212	L O S 6	壺蓋 (口13.1)	肩部は角張る 口縁は垂直に立ち端部 は僅に外斜	—	—	オリーブ風
100-1213 57-10	L O S 6	壺蓋 (口 9.2)	天井は平坦 肩部は丸い 口縁はやや 内傾し尖端は丸い	切離は窓切→窓削	—	灰黄
100-1214	L O S 5	壺蓋? 高(2.1)	天井は平坦 つまみは楕円形	—	—	暗灰・灰
101-1215 57-11	L O S 7	短頸壺 (頸10.5)	口縁は直立 脊部はくの字で肩は張る	外は無 内は張目→削	—	灰オリーブ・ 灰
101-1216 57-11	L O S 6	短頸壺 (頸 9.6)	口縁はやや外反 脊部はやや傾いて張り	内外面丁寧な削	—	灰オリーブ・ 同
101-1217 57-12	L P S 7	短頸壺 (頸11.5)	口縁はやや膨らんで直立 肩部は張る	—	—	灰白・灰
101-1218	L P S 6	短頸壺 高(11.5) (口11.6) (頸11.2)	口縁はやや外反 脊部はくの字に屈折 肩部は張り沈み有 全体は横円形状	外は横天下手に窓削 内は無	—	灰 灰白

第68表 土器観察表(67)

単位cm

種類・因版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	性状の特徴	胎土・焼成	色調
101-1219 58-1	L O 5 6	ミニチュア埴輪 (口 6.2) (底 5.2)	口部は高く直立 顎部はくの字状に膨 折 腹部は強く張る	外は胴下半に毫削 内は漸	0.1以下の砂粒 少量	オリーブ灰 ■
101-1220	L O 5 3	ミニチュア埴輪 (口 6.2) (底 5.2)	口部は高く直立 顎部はくの字状 に膨折 腹部は腰が突出する	外は胴下半に毫削 内は漸	※	黄灰
101-1221 58-2	L S 5 4	壺? (底 9.0)	底盤は中央が厚く平坦 高台は外傾	切離は鋭切→毫削	※	黄灰・同
101-1222	L P 5 6	壺 (底 10.0)	底盤は厚く平坦 高台は強く外傾	外は横目	0.1前後の砂粒 顯著	灰・灰白
101-1223	L P 5 6	壺 (底 12.2)	底盤は外傾し縁をもつ 端は腰が立つ	内外丁寧な漸	※	良好
101-1224	L J 5 7	壺? (底 10.7)	※	切離は筋切→漸 内は横目	0.1以下の砂粒 少量	淡黄・同
101-1225	L Q 5 3	壺 (底 14.8)	高台は長方形状で外傾 壁地盤は凹む	内外丁寧な漸	0.1以下の砂粒 顯著	黄灰・灰
101-1226	L K 5 6	壺 (底 11.4)	底盤は厚く丸い 高台は長方形状で外傾	切離は筋切→漸	※	淡黄・灰白
101-1227 58-3	L P 5 6	円筒壺 高 5.0 (口 10.0) (脚 17.0)	平坦な底に 2種の縁が並ぶ 体部は大 きく反り 4方透有 脚部は昂忻	切離は不明→丁寧 な漸	0.1以下の砂粒 少量	灰白
101-1228	素探	円筒壺 高 4.0 (外直径 19.7)	3種の縁が並び内底の 2つは低く細い が外はしっかりしている 体部は外傾	内外に漸	※	黒褐
101-1229 58-4	L O 5 6	円筒壺 高 10.1 (上直径 14.7) (底 22.0)	平坦な底に 2種の底く細い縁が並ぶ 脚部は外反し 4方透有 壁部は水平	胎外面に不定の漸 顯著	0.1前後の砂粒 顯著	灰褐
101-1230	L P 5 6	円筒壺 高 (4.0) (底 27.6)	脚部は外反し 4方透有 壁部は水平で 尖端が強く突出	外は平行横目 内は丁寧な漸	0.1以下の砂粒 少量	灰
101-1231	L J 5 7	瓦字窓 高 (1.7)	手柄が高く横断面は U 字形 左側には 足を入れる稍穴有	外表面は毫削 内表面は漸	0.1前後の砂粒 顯著	灰青
101-1232	N M 5 3	鉢 壱 (20.6)	口縁は内凹 体部は膨む	外周体部は毫削	0.1前後の砂粒 少量	灰・同
101-1233 58-6	L O 5 5	鉢 壱 (7.7) (口 16.6) 底 4.0	口縁は内凹し口器は外傾 体部は両曲 底盤は丸味のある平坦面	体部は平行横目 底盤は漸	0.1前後の砂粒 顯著	黒
101-1234	素探	楕 壱 (5.9) (口 23.2)	口縁は僅に凹み口縁は折返し 脚は内 傾	外は平行横目 内は漸	※	灰
101-1235	L P 5 5	鉢 高 (7.7) (口 31.4)	口縁はやや丸く口縁は外反 顎部はく の字状 体部は両曲	体部外周は毫削→ 脚 内部は漸	0.1前後の砂粒 顯著	オリーブ 灰
101-1236	L I 5 7	壺?	口縁は直立し下段が水平で強い稜有	外は波状文	0.1前後の砂粒 少量	オリーブ 同
102-1237 58-5	L O 5 6	短頸壺 高 26.4 (口 11.3) 底 13.4	口縁は直立 顎部はくの字状に膨折 体部に沈線有 高台は長方形状で外傾	外は平行印→毫削 内は平行横目	0.1前後の砂粒 顯著	灰
102-1238 58-7	L P 5 6	長頸壺 高 (7.0) (底 5.1)	体部は膨み沈線有 底盤は中央が薄い 高台は外傾し強い縁をつくって直立	外は毫削→漸 内は底盤が不定無	※	灰青
102-1239 58-8	L T 5 3	長頸壺 顎 5.9	口縁は外反 顎部付近は直立気味	つくりは 3段構成 少量	0.1以下の砂粒 顯著	灰・灰白

第69表 土器観察表(68)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・底型	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
102-1240 66-5	L T 5 6	長頸甌 高(18.0)	肩部は強く張り球形	内外面に細い抓目 0.1以下の砂粒 顯著 良好	灰白・灰	
102-1241 59-5-4	L O 5 7	横瓶	体部横は丸い	内外面に印	× 良好	淡黄褐色・にじ い黄橙
102-1242 59-5	L N 5 6	横瓶	△	外は無 内は押	× 良好	にじい黄褐色・ 同
102-1243 59-4	L N 5 6	横瓶 高20.7	口唇は凹む 口縁は外反 頭部はくの	外は平行印→撫 内は円文印	0.1前後の砂粒 少量 显著	灰黄
		口 9.8 底 8.2	字状に屈曲 体部は全体に横形	内は円文印	少量 显著	にじい黄褐色
103-1244	L P 5 4	甌 (口24.1)	口縁は外反 扇は強く張る	外は平行印→撫 内は円文印→撫	0.1前後の砂粒 顯著 良好	灰・灰白
103-1245 66-9	L O 5 5	甌 (口24.8)	口唇は凹む 口縁は外反 頭部屈曲	外は平行印→撫 内は円文印→撫	× 显著	灰白・青
103-1246 66-6	L N 5 6	横瓶 高(24.1)	全体に横形	外は平行印 内は円文印	0.1以下の砂粒 顯著 良好	灰黄・オリーブ 青
103-1247	L Q 5 5	横瓶? (口13.0)	口唇は外板 口縁は外反	外は平行印→撫 内は円文印→撫	0.1前後の砂粒 顯著 良好	灰・同
103-1248	L O 5 8	甌 (口25.3)	口唇は内に後有 斜部は張る	外は平行印 内は円文印	× 显著	△
103-1249	L O 5 2	甌 (口28.9)	口唇は丸く内外に後 斜部は張る	外は平行印→撫 内は印→撫	× 显著	△
103-1250	L N 5 7	甌 (口23.6)	口唇は丸い 頭部はくの字に屈曲	外は平行印→撫 内は円文印→撫	△ 显著	灰・灰オリーブ
103-1251	L N 5 6	甌 (口23.0)	口唇は凹む 口縁は僅に外反	外は平行印→撫 内は印→撫	× 显著	灰・灰白
103-1252	L N 5 6	甌 (口25.1)	口唇は凹んでやや外板 頭部は細い	外は平行印→撫 内は円文印→撫	0.1以下の砂粒 顯著 良好	灰・同
104-1253 66-10	L M 5 2	甌 高(6.8) (口25.4)	口唇は平坦で外傾 口縁は先が外反気味 味 頭部はくの字に屈曲	外は平行印→撫 内は円文印→撫	0.1以下の砂粒 少量 显著	灰オリーブ
104-1254	L N 5 5	甌 高(9.4) (口21.0)	口唇はやや丸く外傾 口縁は直立気味 から外反 斜部は屈曲 斜部は張る	外は平行印→撫 内は円文印→撫	0.1前後の砂粒 顯著 良好	灰
104-1255 66-1	L Q 5 5	甌 (底19.3)	肩部は丸珠を滑びる	外は平行印 内は円文印	△	灰白・灰オリーブ
104-1256 66-2	L N 5 6	甌	肩部は強く張る	外は平行印	△	黄灰・同
105-1257 66-3	L N 5 6	大甌 高(17.2) (口50.0) (底44.2)	口唇は丸く外傾 口縁は底立気味から 外反 頭部はくの字状に屈折	外は平行印→撫 内は円文印→撫	△ 显著	灰オリーブ
105-1258 66-4	L O 5 2	大甌 高(13.0) (口60.0) (底49.4)	口唇は平坦で外傾 口縁は外反 斜部 はくの字状に屈折	外は撫→波状文 内は印→撫	△ 波	
105-1259 66-5	L O 5 3	大甌 高(12.4) (口53.2) (底42.0)	口唇は丸く外傾 口縁は外反 斜部は くの字状に屈折	外は撫→波状文 内は印→撫	△ 灰オリーブ	
105-1260 66-6	L N 5 6	大甌 高(17.6) (口41.6) (底34.3)	口唇は凹んで外傾 口縁は外反し先に 三角状の棱有 頭部はくの字状屈曲	外は平行印→波状文 内は円形文	△ 显著	灰白
106-1261 66-7	L N 5 5	大甌 高(18.7) (口51.4) (底39.6)	口唇は内傾 口縁は外反し先に丸い後 が有 頭部はくの字状に屈折	外は平行印→撫 内は円形文→撫	△ 显著	にじい青
106-1262 66-8	L N 5 5	大甌 高(18.7) (口51.4) (底39.6)	口唇は凹み内傾 口縁は外反し尖端は 内側氣味で外に棱有	内外は撫	△ 显著	灰青褐色

第70表 土器観察表(69)

単位cm

辨識・固有	出土地点	器種・法員	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色調
106-1263	L O 5 2	大甕 高(9.0) (口53.2)	口唇は凹む 直下に垂れ下がる後 頸部は直立気味から外反	外は波状文 内は施	0.1前後の砂粒 顯著 良好	灰褐
106-1264	L O 5 2	大甕 (頸29.6)	口唇は外反 頸部はくの字状に屈折	外は平行印→施 内は円文印→施	〃 堅敏	灰・同
107-1265	L N 5 6	大甕 高(16.2) (口52.7) (頸44.3)	口唇は凹み直下内には施有	外は平行印→施	〃	灰褐
69-10			頸部は外反 頸部はくの字状に屈折	内は円文印 施	良好 にぶい性	
107-1266	L O 5 6	大甕 高(22.0) 70-1	体部は大きく膨む	外は縞文印→施 内は円文印→施	〃 堅敏	灰・灰質
108-1267	L S 5 4	大甕 高(43.1)	〃	〃	〃 堅敏	灰・灰ナリーブ
109-1268	L N 5 5	大甕	口唇はV字状に凹む 直下に厚い突唇	外は平行印	〃 良好	灰黄褐色・にぶい黄緑
109-1269	L R 5 3	大甕	口唇に2つの枕線 直下に丸い後	〃	〃 堅敏	褐灰・同
109-1270	L R 5 2	大甕	口唇は凹んで外傾 直下に丸い後	内外に施	0.1前後の砂粒 少量	灰灰褐色・同
109-1271	L M 5 2	大甕	口唇はV字状に凹む 直下に厚い突唇	外は平行印	0.1前後の砂粒 顯著 良好	灰黄褐色・にぶい黄緑
109-1272	L Q 5 3	大甕	口唇はU字状で外傾 直下に三角の後	〃	〃 堅敏	灰・同
109-1273	L Q 5 3	大甕	〃	〃	〃 堅敏	〃
109-1274	L T 5 4	大甕	口唇はU字状で外傾 直下の外は後内 には浅い枕線	〃	0.1前後の砂粒 少量 良好	にぶい性・同
109-1275	L N 5 6	大甕	口唇はU字状で太平 外に丸い後	〃	〃 堅敏	オーリーブ黒・同
109-1276	L N 5 5	大甕	口唇は凹む 直下に垂れ下がる後	〃	〃 堅敏	灰白・灰
109-1277	L N 5 6	大甕	口唇は凹み外傾 直下に垂れ下がる後	〃	0.1以下砂粒 顯著 良好	灰黄・同
109-1278	L M 5 2	大甕	〃	〃	0.1前後の砂粒 顯著 良好	黄灰・褐灰
110-1279	L O 5 3	大甕	口唇は凹む 直下に近く垂れ下がる後	外は波状文	〃 良好	灰黄褐色・灰褐
110-1280	L M 5 2	大甕	口唇はV字状で内外に膨 直下に後	〃	0.1以下の砂粒 少量	灰黄・にぶい
110-1281	L Q 5 4	大甕	口唇は凹み直下に垂れ下がる後	外は波状文 沈痕 顯著	0.1以下の砂粒 顯著 良好	灰黄・灰灰
110-1282	表様	大甕	〃	外は波状文	〃 良好	〃
110-1283	L T 5 2	大甕	口唇は凹み内外は丸い 直下に盛れる 後	外は平行印	〃 良好	灰黄・灰
110-1284	L O 5 2	大甕	口唇はU字状に凹む 直下に垂れ下が る後	外は波状文	〃 良好	灰褐・同
110-1285	表様	大甕	口唇は凹み垂直 直下に波有	外は平行印	〃 堅敏	灰オーリーブ・ オーリーブ黒
110-1286	L M 5 6	大甕	口唇下に2つの丸い後	内外施	〃 〃 良好	灰黄褐色・同
110-1287	表様	大甕	口唇は外傾 直下に丸い後	内は平行彫目	0.1前後の砂粒 顯著 良好	灰・同
110-1288	L O 5 6	人甕	口唇は凹み水平 直下に丸い後	外は平行印	0.1以下砂粒 少量 良好	にぶい黄褐色・ 灰褐
110-1289	L S 5 6	大甕	口唇は凹み垂直 直下に丸い後	〃	0.1以下の砂粒 顯著 良好	灰白・灰
110-1290	L N 5 6	大甕	口唇の内に2本の沈痕 外に波有	〃	〃 良好	にぶい性・に ぶい黄緑
111-1291	L N 5 5	大甕	口唇は丸く立つ 外に後内に沈痕	〃	〃 堅敏	暗灰褐色・灰 内
111-1292	L M 5 2	大甕	口唇の外に2つの後内に沈痕	〃	〃 良好	にぶい・黄緑・ にぶい性
111-1293	L T 5 6	大甕	口唇は凹み水平 外に強く垂れ下がる後	〃	〃 堅敏	灰・同

第71表 土器観察表(70)

単位cm

神戸・国版	出土地点	器種・表量	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色・調
111-1294 72-2	L N 5 6	大器	口唇は丸い 直下外に粗く垂れ下がる縫	外は平行印 内は平行印	0.1以下砂粒 少量 良好	にぶい・灰・同
111-1296 72-2	表探	大器	口唇は丸い 直下内に沈線外に後	外は平行印 内は平行印	× 堆積	削鉢・オーブ・灰
111-1296 72-2	L O 5 2	大器	口唇は丸い 直下外に縫有	外は平行印→沈線	× 硬板	灰オリーブ・灰
111-1297 72-2	L Q 5 3	大器	口唇は内反気味 直下は厚く二重口縫状	内外に丁寧な施	0.1前後の砂粒 少量 良好	×
111-1298 72-2	L P 5 4	大器	×	×	× 堆積	灰・オリーブ・灰
111-1299 72-2	L F 4 4	大器	口唇は丸く内反気味 直下は二重口縫状	外は平行印	× 良好	にぶい・灰・灰
111-1300 72-2	L N 5 5	大器	×	×	× 良好	にぶい・黄緑・ にぶい・灰
111-1301 72-2	L S 5 3	要	口唇は丸い 直下に三角形の後	内外に丁寧な施	0.1以下の砂粒 少量 良好	にぶい・褐・同
112-1302 72-2	L Q 5 4	要	口唇は凹み垂直 口縫外反	外は平行印	× 堆積	灰・オリーブ・ 灰
112-1303 72-2	L P 5 6	要	口唇は垂直気味 口縫は垂直気味に立ち先で外反	内外に丁寧な施	× 堆積	灰白・同
112-1304 72-2	L N 5 6	大器	口唇は凹み外傾し内外とも突出	外は被状文	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰・同
112-1305 72-2	表探	大器	口唇は凹み垂直で内外とも突出	外は平行印	0.1以下の砂粒 少量 不良	灰・灰白
112-1306 73-1	L T 5 6	要	口唇は凹み方形状 口縫は垂直気味に立ち先で外反	内外に丁寧な施	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰白・灰
112-1307 73-1	L N 5 8	要	口唇は方形状 直下に鋭い縫有	外は平行印→施	× 堆積	灰・同
112-1308 73-1	L N 5 2	要	口唇はやや丸く内外に後 強部は屈曲	×	0.1以下の砂粒 少量	×
112-1309	M C 5 5	要	口唇は外傾し内に後 強部は屈曲	外は平行印→施 内は円文印→施	× 堆積	×
112-1310	L M 5 2	要	口唇は水平で外が突出 頭部は屈折	×	× 堆積	×
112-1311 73-1	L Q 5 5	要	口唇は外傾し内外に後 頭部は屈折	外は平行印→施 0.1以下の砂粒 少量 良好	灰黒・同	
112-1312 73-1	L Q 5 3	要	口唇は凹み外傾 口縫は強く外反	外は平行印→施 内は内文印→施	× 堆積	灰・同
112-1313 73-1	M C 5 5	要	口唇内に鋭い縫 強部は屈曲	外は平行印→施 内は平行張目	× 堆積	×
113-1314 73-1	L P 5 7	大器	口唇は尖る 直下外に縫有	外は被状文	0.1前後の砂粒 少量 良好	×
113-1315 73-1	表探	大器	口唇は尖る 直下は小さな縫有	内外丁寧な施	× 堆積	灰・灰白
113-1316 73-1	×	大器	口唇は丸い 直下は粗く凹む	外は被状文→施	× 堆積	灰白・灰
113-1317 73-1	表探	大器	口唇は丸い 直下内に極く凹む	外は被状文	× 堆積	灰・同
113-1318 73-1	表探	大器	口唇は丸い 直下外の沈線内は凹む	×	× 堆積	×
113-1319 73-1	L O 5 2	大器	口唇は方形 直下外には鋭い後	×	× 堆積	灰オリーブ・ 焦
113-1320 73-1	L O 5 3	大器	口唇先端は細く外反 直下に丸い縫有	内外丁寧な施	0.1以下の砂粒 少量 良好	灰オリーブ・ 灰
113-1321 73-2	表探	大器	口唇はやや外傾で外は突出 直下に後	×	× 堆積	×
113-1322 73-2	L L 5 2	大器	口唇は直立 直下に大きく鋭い縫有	外は平行印	× 堆積	灰・同
113-1323 73-2	L M 5 2	大器	口唇は外傾し内は立つ 下に鋭い突起	外は平行印	× 堆積	灰オリーブ・ 灰
113-1324 73-2	L R 5 4	大器	口唇はやや凹む 直下外に丸い後	外は被状文	0.1前後の砂粒 少量	灰オリーブ・ 同
113-1325 73-2	L O 5 3	大器	口唇は垂直気味 直下に縫有	×	0.1以下の砂粒 少量 堆積	淡黄・灰
114-1326 73-2	L O 5 6	大器	口唇は丸く内に縫有 口縫は先で外凸	×	0.1前後の砂粒 少量 堆積	灰白・同

第72表 土器観察表(71)

単位cm

番号・図版	出土地点	器種・後量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色・調
114-1327 73-2	後孫	大甕	口唇は外傾し内外に稜有	外は平行叩→ 波状文	0.1以下砂粒 少量 風好	暗灰青・同
114-1328 73-2	LQ 5.7	大甕	口唇は丸く外傾 口縁は外反	*	0.1前後の砂粒 顯著	灰・黒
114-1329 73-2	LN 5.7	大甕	口唇は極く凹み外傾 口縁は外反	*	*	灰黄・灰
114-1330 73-2	LN 5.6	大甕	口唇は外傾し内に稜有 口縁は外反	外は平行叩→ 波目 一振→波状文	*	良好 灰黄・同
114-1331 74-1	LQ 5.6	大甕	口唇は丸く直立 口縁は外反	外は波状文→無	*	直線 灰黄・黄灰
114-1332 74-1	LQ 5.4	大甕	口唇は凹み内は突出して立つ	外は平行叩→ 波→ 波状文	*	直線 灰・オリーブ 風
114-1333 74-1	後孫	大甕	口唇は丸く直立気味 口縁は外反	外は波状文	*	直線 灰オリーブ・ 同
114-1334 74-1	LQ 5.3	大甕	口唇は内外中央が突出 口縁は外反	外は直→波状文	*	直線 灰オリーブ・ オリーブ風
114-1335 74-1	LP 5.6	大甕	口唇は丸くやや外傾 内が僅に凹む	外は波状文	*	直線 灰オリーブ・ 同
115-1336 74-1・82-5	LN 5.6	大甕	口唇はやや外傾 内外に稜有	外は平行叩→ 波状文	*	灰オリーブ・ カーリーブ風
115-1337 74-1	LS 5.4	大甕	口唇はやや凹み内外に稜有 口縁外反	外は波状文	*	直線 灰・同
115-1338 74-1	後孫	大甕	口唇はほぼ平坦で外傾 内外に稜有	*	*	直線 同
115-1339 74-1・82-1	LQ 5.3	大甕	口唇はやや内傾 直下に凸角状の稜	外は木口彫→ 波状文	*	灰白・灰オリーブ
115-1340 74-2	LR 5.4	大甕	口唇は凹みやや外傾 直下内に沈線	外は波状文	*	直線 灰・同
115-1341 74-2・82-2	MD 5.4	大甕	口唇は丸く外傾 直下に長い後有	外は直→波状文	*	灰オリーブ・ 灰
115-1342 74-2・82-6	LO 5.2	大甕	口唇に大小2つの沈線有 二重口縁状	外は直→波状文→ 無	*	直線 灰・同
115-1343 74-2	LO 5.2	大甕	口唇は中央が三角形状に突出	外は直→波状文	*	直線 灰オリーブ・ 灰
115-1344 74-2	LS 5.5	大甕	口唇はやや凹み内面に後有	*	*	直線 灰オリーブ・ オリーブ風
115-1345 74-2・82-4	MS 5.2	大甕	口唇はやや外傾 内に強い後有	外は波状文	*	直線 灰オリーブ・ 灰
115-1346 74-2	LR 5.3	大甕		*	*	直線 同
116-1347 74-2	後孫	大甕	口唇は凹んで外傾 直下外に稜有	外は平行叩→ 波状文	*	直線 灰・黒
116-1348 75-1	LM 5.2	大甕	口唇は丸く外傾し外は突出	*	*	直線 灰オリーブ・ 灰
116-1349 75-1	ML 5.2	火甕	口唇は中央に低い鼓と沈線をもち直立	外は直目→波状文 内は直目	0.1以下の砂粒 少量 直線	*
116-1350 75-1	LR 5.5	大甕	口唇は垂直 直下の内は僅に凹む	外は波状文	0.1前後の砂粒 顯著	灰オリーブ・ 灰白
116-1351 75-1	LP 5.3	大甕	口唇は中央がやや膨み内外に稜有	外は平行叩→ 波状文	*	直線 灰・黒
116-1352 75-1	LR 5.6	大甕	口唇はやや膨み外が突出して外傾	*	*	直線 灰・同
116-1360-65 1 82-3・82-7	MR 5.2	大甕		*	*	直線 灰オリーブ・ オリーブ風
116-1364 75-1	MD 5.5	大甕	口唇先は内均気味 直下に稜有	外は波状文	0.1以下の砂粒 少量 直線	灰・同
117-1365 75-1	後孫	大甕		外は平行叩→ 波 内は円印叩	0.1前後の砂粒 顯著	灰オリーブ・ 同
117-1366 75-2	LP 5.6	火甕	口唇は平底で直立	外は波状文	*	直線 真黄・浅黄
117-1367 75-2	LN 5.2	大甕	口唇先は内向して立つ 外に2つの後	外は平行叩	0.1前後の砂粒 少量 直線	灰・同
117-1368 75-2	LO 5.6	大甕	口唇は丸く内に稜有	外は圓印叩→無	0.1前後の砂粒 顯著	暗灰青・黄灰
117-1369 75-2	LO 5.6	火甕	口唇は外傾し内に稜有	*	*	直線 灰青・灰

第73表 土器觀察表(72)

単位cm

地図・國名	出土地點	器種・法量	器形の特徴	技術の特徴	胎土・構成	色・調
117-1360 76-2	MC 5 5	大甕	口唇の中央はやや膨ら内外が尖出	外は直口→鉢 内は円弧印→無	0.1以下の砂粒 網目 堅版	灰オリーブ・ 青
117-1361 76-1	LM 5 2	大甕	口唇は丸く沈線有 内外が内に突出	外は縦文の平行印	+	堅版
118-1362 76-1	LO 5 6	大甕	口唇先は円弧気味に立つ	外は直口→波状文	0.1前後の砂粒 網目 堅版	黄褐・灰褐
118-1363 76-1	LN 5 2	大甕	口線は外反	外は平行印→無	+	堅版
118-1364 76-1	表掛	大甕	+	内外擦	+	堅版
118-1365 76-1	LQ 5 3	大甕	+	外は直口→無 内は直口→直	0.1以下の砂粒 少量	灰・青
118-1366 76-1	LR 5 3	大甕	+	内外に擦	0.1前後の砂粒 網目 堅版	+
118-1367 76-1	表掛	大甕	+	外は波状文	+	堅版
118-1368 76-1	LR 5 6	大甕	+	外は平行印→直→ 波状文	+	堅版
118-1369 76-1	MB 5 5	大甕	+	外は平行印→直 内は平行印	0.1以下の砂粒 網目 良好	+
118-1370 76-1	MR 5 2	大甕	+	外は直口→波状文	+	堅版
118-1371 76-2	LN 5 2	大甕	+	外は平行印→直	+	堅版
119-1372 76-2	LP 5 4	甕	+	内外丁寧な擦	+	良好
119-1373 76-2	表掛	甕	+	+	+	堅版
119-1374 76-2	LN 5 8	甕	+	外は平行印→直	+	堅版
119-1375 76-2	MC 5 4	大甕	+	外は直口→直 内は直口	+	堅版
119-1376 76-2	LO 5 2	大甕	+	内外丁寧な擦	0.1前後の砂粒 網目 堅版	灰黄褐・灰白
119-1377 76-2	LQ 5 6	大甕	+	外は平行印→直	+	堅版
119-1378 76-2	表掛	大甕	+	外は直 内は直口	+	堅版
119-1379 76-2	MS 5 1	大甕	+	外は平行印→ 波状文	+	堅版
119-1380 76-2	LM 5 2	大甕	+	外は平行印→直 内は平行印	+	堅版
119-1381 77-1	LO 5 2	大甕	+	外は平行印→直	+	堅版
119-1382 77-1	LP 5 1	大甕	+	外は平行印→直	+	堅版
119-1383 77-1	LO 5 3	大甕	+	内外丁寧な擦	+	堅版
120-1384 77-1・84-2	LR 5 6	大甕	肩部は強く張る	外は平行印→直 内は円弧印→直	+	堅版
130-1385 77-1	LO 5 5	大甕	+	+	+	堅版
130-1386 77-1	LN 5 6	大甕	肩部はやや張る	+	+	堅版
130-1387 77-1・84-1	LR 5 5	甕	肩部は強く張る	+	+	堅版
130-1388 77-1	LO 5 2	大甕	+	+	+	堅版
130-1389 77-1	LM 5 2	大甕	+	+	+	堅版
130-1390 77-1	MC 5 4	大甕	+	+	+	堅版
130-1391 77-2・84-3	LQ 5 6	大甕	+	+	+	堅版
130-1392 77-2	LO 5 2	甕	+	+	+	堅版

第74表 土器観察表(73)

単位cm

擇固・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
120-1393 77-2	L Q 5 7	甕	肩部は強く張る	外は平行印→撫 内は円文印→撫	0.3以下の砂粒 顎著	灰オーリーブ・淡黄
120-1394 77-2	L G 4 6	甕	〃	〃	〃 聖誠	灰・同
121-1395 77-2・83-1	丟拂	甕	頸部はくの字に膨出 底部は張る	外は平行印→撫 内は円文印→撫目	0.1前後の砂粒 顎著	灰・灰オーリーブ
121-1396 77-2	L T 5 4	大甕	底部は丸い	外は平行印→撫 内は円文印→撫目	〃 聖誠	灰オーリーブ・灰
121-1397 70-2	L O 5 5	大甕	〃	外は織文印 内は円文印→撫	〃 聖誠	〃
121-1398 77-2	M C 5 4	甕	〃	外は平行印 内は平行印	0.1以上の砂粒 少量 良好	灰白・青
121-1399 70-2・83-7	L O 5 3	甕	〃	外は平行印→撫 内は撫目	〃 良好	にぶい黄緑・同
126-1400	S J 2 0	坏蓋	天井は平坦 体部は反る 端部は水平	切削は糸切→荒削	〃	灰
45-16	(口18.4) 天 2.7	から屈曲してやや内傾			聖誠	〃
126-1401	S J 2 0	坏蓋	〃	〃	〃	〃
	(口18.3) 天 2.4	から屈曲してやや内傾			聖誠	灰白
126-1402	S J 2 0	坏蓋	天井は低く平坦 体部は反る 端部は水平から屈曲して先は立つ	〃	〃	灰黄
	(口17.8) 天 1.7				聖誠	〃
126-1403	S J 2 0	坏蓋	天井は平坦 体部は反る 端部は水平	〃	〃	灰
	(口17.3) 天 2.0	から屈曲してくの字状に立つ			聖誠	灰白
126-1404	S J 2 0	坏蓋	天井は本末平坦 体部は反る 端部は水平から屈曲して先は立つ	— — — — —	〃	灰
	(口18.5) 天 3.4	から屈曲してくの字状に立つ			聖誠	〃
126-1405	S J 2 0	高台付坏 蓋 5.1	口縁は直線的 体部は緩く弯曲 高台	切削は糸切→撫	〃	灰白
	(口15.3) (底 9.5)	は外傾し施地部も外傾 底部は平坦			不良	〃
126-1406	S J 2 0	高台付坏 高 4.6	口縁から体部は弯曲 底部はほぼ平坦	〃	〃	〃
	(口14.2) (底 8.6)	高台は平行四辺形で外傾			聖誠	灰
126-1407	S J 2 0	高台付坏 高 5.1	口縁はやや外反 体部は緩く膨む 蓋	切削は糸切→撫	〃	灰白
50-13	(口11.4) (底 6.8)	は底が丸い 高台は施地部が外傾	— — — — —		良好	灰オーリーブ
126-1408	S J 2 0	高台付坏 (口14.4)	口縁から体部は弯曲	内外に撫	〃 聖誠	灰・同
126-1409	S J 2 0	坏 高 3.9	口縁から体部は外反 底部は中央が両側に厚く、端に凹みが付く	切削は糸切→撫	〃	灰白
	(口13.0) (底 8.8)	— — — — —			良好	〃
126-1410	S J 2 0	横瓶 高(10.2)	口縁は凹み内に鋭い後 口縁は外反	外は底回りの撫目	0.1前後の砂粒	〃
59-6	(口15.2) (底10.2)	頸部は屈曲 屢々は丸く全体に寸づまり	内は底回りの撫目	顎著	聖誠	灰
126-1411	S J 2 0	甕 高(15.5)	口唇の中央に稜有 口縁は外反 頸部	外は平行印→撫 内は押え	〃	〃
70-3	(口21.4) (底17.0)	はくの字状に屈曲	— — — — —		聖誠	灰オーリーブ
127-1412	S J 2 0	大甕 高(33.5)	口唇中央には縦有 内外に突出 口縁	外は平行印・波状	〃	灰
65-1	(口46.4) (底36.4)	は外反 頸部は屈曲 底部は緩く膨む	内は押え		聖誠	灰オーリーブ

第75表 土器観察表(74)

単位cm

博物・図版	出土地点	器形・口径	器形の特徴	形状の特徴	胎土・焼成	色・調
127-1413	S J 2 0	大甕 高(11.9) (口50.0)	口唇中央には腹が有内外が突出 は外反	外は平行叩一筋状 内は撻	0.1前後の砂粒 粗著 壓縮	灰オーリーブ
128-1414	S J 2 0	大甕 高(90.0) (口45.8) (底35.8)	*	外は平行叩一筋状 内は押え→撻	*	灰オーリーブ
65-2-3					壓縮	*
129-1415	S T 2 6	坪蓋 高 4.0 (口17.3) 天 2.6	天井は平坦 体部は反る 端部は水平 から屈曲し内傾 つまみは擬宝珠	切離は系切一筋削 少量	0.1前後の砂粒 少量 壓縮	灰
129-1416	S T 2 6	坪蓋 高(2.6)	つまみは中央が高い擬宝珠	—	0.1以下の砂粒 少量 壓縮	灰・同
129-1417	S T 2 6	坪蓋 高(1.4)	つまみはボタン状擬宝珠	接合部に高領凹	*	壓縮
129-1418	S T 2 6	坪蓋 (口17.5)	端部は水平から屈曲して立つ	内外丁寧な施	*	壓縮
129-1419	S T 2 6	坪蓋 (口17.0)	*	*	*	壓縮
129-1420	S T 2 6	坪蓋 高(1.8)	天井は平坦 つまみはボタン状	切離不明一筋削	*	壓縮 灰・灰質
129-1421	S T 2 6	坪蓋 (口17.1)	体部は反る 端部は水平から屈曲し立つ	*	*	壓縮 灰・同
129-1422	S T 2 6	坪蓋 高(1.7)	天井は平坦 つまみは扁平なボタン状	*	*	壓縮 灰・灰白
129-1423	S T 2 6	坪蓋 高(0.7)	天井は平坦	切離は系切一筋削 つまみ接合部に残	*	壓縮
129-1424	S T 2 6	坪蓋 高(2.8)	天井は平坦 体部は反る つまみは擬 宝珠	切離は系切一筋削	*	灰オーリーブ
					少量	灰白
129-1425	S T 2 6	坪蓋 高(1.4)	天井は平坦	*	*	壓縮 灰・同
129-1426	S T 2 6	坪蓋 高(0.6)	天井は低く平坦 端部は屈折して内傾	切離は系切一筋削 内は系切→不定施	*	オーリーブ灰
129-1427	S T 2 6	坪蓋 高(0.9)	天井は低く平坦	切離は系切一筋削	*	オーリーブ灰・同
129-1428	S T 2 6	高台付坪 高(3.0) (底 7.7)	体部は膨らむ 底部は中央にはね平底で 幅は丸い 高台は長方形状に立つ	切離は系切→無	*	灰オーリーブ オーリーブ黒
129-1429 50-12 78-6	S T 2 6	高台付坪 高 4.7 (口14.3) (底 9.0)	口縁から体部は内凹状 高台は平坦 高台は長方形状でやや外傾	*	*	灰 良好 *
129-1430	S T 2 6	高台付坪 高 5.0 (口15.1) (底 8.6)	口縁は直線的 体部は弓曲 高台は長 方形状でやや外傾	*	*	灰白 良好
129-1431	S T 2 6	高台付坪 高(2.4) (底 7.2)	体部は膨らむ 底部は平底で縁は角張る 高台は三角形状でやや外傾	*	*	灰白 良好
129-1432	S T 2 6	高台付坪 高(2.3) (底 6.2)	*	*	*	黄灰 良好 *
129-1433	S T 2 6	高台付坪 (底7.1)	底部はねば平坦	*	*	良好 灰白・同
129-1434	S T 2 6	高台付坪 高(2.0) (底11.0)	底部は中央が低い 高台は長方形状で 外傾 接地面はやや凹み外傾	*	*	灰白 良好 *

第76表 土器銅鑑表(75)

単位cm

擇・西版	出土地点	器種・寸法	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調
129-1435	S T 2 6	高台付环 (底10.0)	高台は長方形で外側	内外丁寧な擦	0.1以下の砂粒 少量	灰白・同
129-1436	S T 2 6	高台付环 (底10.9)	高台後部は平坦で外側	切離は未切→擦	〃 良好	〃
129-1437	S T 2 6	高台付环 高(2.7) (底 8.9)	体部は弯曲 底部は端が丸い 高台は長方形で外側 後部は凹む	切離は未切→擦	〃 良好	オリーブ灰
129-1438	S T 2 6	高台付环 高(2.0) (底 8.4)	体部は膨む 底部は平坦で均一 高台は長方形で外側 後部は凹む	〃	〃 良好	灰白 灰
129-1439	S T 2 6	高台付环 (底11.1)	底部は中央が低い 高台は長方形状	〃	〃 良好	灰白・灰黄
129-1440	S T 2 6	高台付环 高(3.3) (底 8.4)	底部は薄く平坦 高台は高く平行四辺形 姿形 妥底部はやや凹む	〃	〃	灰白
130-1441	S T 2 6	环 高 4.3 (口14.6) (底 8.0)	口縁から体部は薄く弯曲 底部も中央は薄く端は突出	切離は未切→擦 少量	0.1前後の砂粒 良好	灰 灰白
130-1442	S T 2 6	环 高 3.9 (口15.3) (底 8.0)	口縁は直線的 体部は薄く緩く膨む 底部は中央が厚く端は薄い	切離は不規→擦	〃	灰
80-4					良好	〃
130-1443	S T 2 6	高台付环? 高(4.8)	体部は緩く膨む 底部は中央が薄い	切離は未切→擦 少量	0.1以下の砂粒 良好	灰白・同
130-1444	S T 2 6	环 高 4.1 (口15.5) (底 8.0)	口縁は外反 体部は膨む 底部中央は平坦で端は突出気味	〃	0.1以下の砂粒 顕著	灰白 良好
130-1445	S T 2 6	环 高(1.9)	口縫外内が膨む 口縫は外反	外は沈線文様	0.1以下の砂粒 少量	灰・同
130-1446	S T 2 6	長頸壺 (口 8.5)	口縫は膨ら進縫は立つ	内外丁寧な擦	〃	灰・オリーブ・同
130-1447	S T 2 6	高环? 高(1.0)	底部はやや膨む	切離は未切→観察	〃 不良	灰白・同
130-1448	S T 2 6	环 (底 8.0)	体部は膨む 底部は中央が薄く端が厚い	切離は未切→擦	〃 不良	〃
130-1449	S T 2 6	短頸壺 高(4.9) (口10.4) (底10.4)	口縫内外に縫 口縫は直立気味一部はくの字状に研削 底部は強く張る	内外丁寧な擦 顕著	0.1以下の砂粒 堅硬	灰・同
58-9						
130-1450	S T 2 6	長頸壺 高(22.9) (口 8.2)	口縫は中央に縫 口縫は直立から外反 両縫は強く張る 体部は全体に球状	つくりは3段構成	〃	灰白
58-10						
84-8					つくりは3段構成	堅硬 灰
130-1451	S T 2 6	長頸壺 高(9.4)	口縫は直立気味から外反	つくりは3段構成	〃 堅硬	灰・同
130-1452	S T 2 6	長頸壺 (底 9.0)	体部は緩く膨む 底部は平坦	切離は不明→擦	〃 堅硬	灰白・灰
130-1453	S T 2 6	長頸壺 高(5.9)	体部は球状	つくりは3段構成	〃 堅硬	灰白・同
130-1454	S T 2 6	長頸壺 (底 9.7)	底部は厚く平坦 高台は長方形状	切離は不明→擦	〃 堅硬	灰白・灰
130-1455	S T 2 6	鉢 (底11.1)	底部は中央部が厚い 体部は緩く	切離は不明→擦 外は平行印	〃 堅硬	灰・同
130-1456	S 1 2 7	环 高 4.0 口12.5 底 6.0	口縫から体部は緩く膨む 底部は平坦で均一 端は屈曲	切離は疏切→擦 顕著	0.1前後の砂粒 良好	浅黄 灰白
130-1457	S 1 2 7	环 底 7.3	底部は平坦で均一	切離は疏切→擦	〃 良好	灰・灰オーブ

第77表 土器観察表(76)

単位cm

地図・図版	出土地点	器種・法量	器形の特徴	技術の特徴	胎土・焼成	色調
130-1458	S K 2 3	环 高 3.9 (口14.5) 底 7.8	口縁は外反 体部は薄く膨らむ 底部は端がやや厚い	切削は荒切→削 少量 堅穀	0.1以下の砂粒 灰白	
80-7						*
130-1459	S I 2 7	环 高 3.9 (口12.8) 底 7.0	口縁は外反 体部は薄く膨らむ 底部は端が厚く丸い	*	*	*
						*
131-1460	S T 2 6	横瓶 高(30.4) (口14.4) (頸10.6)	口唇は閉じ 口縁は回んでやや外反 体部は平行叩き 端部はくの字に屈折	外の体部は平行叩き 内は押え→削	0.1前後の砂粒 細密 堅穀	灰白
59-7						灰オリーブ
131-1461	S T 2 6	算 高(7.1) (口40.6)	口唇は僅に凹み重複 口縁は外反 額部はくの字に屈折 額部は軽く屈曲 体部は上位で最大	内外丁寧な削 少量 不良	0.1以下の砂粒 灰白	
						*
131-1462	S T 2 6	甕 高(23.8) (口22.1) (頸17.8)	口唇は中央に腹有 内外は鋭く突出	外は平行叩き→削	0.1前後の砂粒 内は撃	灰
65-4			口縁は外反 額部はくの字状 端は張る			*
132-1463	S T 2 6	甕 高(17.1) (口17.7) (頸16.5)	口唇はやや尖り 口縁は外反 額部は端はやや緩く張る	外は平行叩き 内は押え→削		灰オリーブ
65-5						*
132-1464	S T 2 6	甕 高(7.8) (口21.5) (頸17.3)	口唇は丸く内側に後有 口縁は外反 額部は昌曲	*	*	*
70-4						*
132-1465	S T 2 6	甕 高(14.3) (口18.6) (頸14.5)	口唇中央は沈殿状で内外は鋭く突出 口縁は外反 額部はくの字状に屈曲	外は平行叩き→削 内は撃		灰
						*
132-1466	S T 2 6	甕 高(32.1)	体部上位で最大盛	外は平行叩き→削 内は押え→削		灰オリーブ・同
						*
133-1467	S T 2 6	甕 高(20.3) (口27.6) (頸20.5)	口唇中央に腹有 内外は突出 口縁は外反 額部はくの字状 端部は張る	外は平行叩き 内は押え→削		灰オリーブ
65-6						*
133-1468	S T 2 6	甕 高(36.0) (口29.3) (頸21.6)	口唇中央に腹有 内外は突出しやや内傾 口縁は外反 額部は昌曲 端は張り	*	*	灰
70-5						灰オリーブ
134-1469	S T 2 6	大甕 高(14.5) (口29.4) (頸22.4)	口唇中央に腹有 内外は突出 口縁は外反 額部は屈折 端部は張り	外は平行叩き→削 内は押え→削		*
70-5						*
134-1470	S T 2 6	大甕 高(16.4) (口38.6) (頸29.4)	*	*	*	*
65-1						*
134-1471	S T 2 6	大甕 (口46.6)	口唇中央に後有 内外は突出	外は平行叩き→削 内は撃 極度孔有	0.1以下の砂粒 少量	灰・同
70-7						*
134-1472	S T 2 6	大甕 (口51.4)	*	外は平行叩き→削	0.1前後の砂粒 細密	灰オリーブ・灰
70-8						*
138-1473	S K 2 3	甕 高43.9 (口30.8) (頸23.4)	口唇中央に腹有 内外は突出 口縁は外反 額部はくの字状に屈折	外は平行叩き→削 内は押え→削	0.1前後の砂粒 細密	灰
65-2						*
138-1474	S K 2 4	甕 高(22.7) (口31.0) (頸23.3)	*	*	*	*
						*
139-1475	N L 5 4	环甕 天 2.2 (口14.4) 天 2.2	天井は平坦 体部は弧る 端部は水平 から屈折して内傾	切削は荒切→削 頸著 良好	0.1以下の砂粒 良好	灰白

第78表 土器觀察表(77)

単位cm

標識・図版	出土地点	器種・径量	器形の特徴	技法の特徴	胎上・焼成	色調
139-1476	L N 5 3	坪蓋 高(3.2)	天井は平底 つまみはボタン状	切削は半切7→荒削 底部は黒色処理	0.1前後の砂粒 顯著 良好	淡黄・にじ 灰
139-1477	N M 5 3	坪蓋 高(1.5)	"	切削不明→荒削 内部は黒色処理	0.1以下の砂粒 顯著 良好	黒 淡黄
139-1478 78-4	N L 5 2	坪蓋 高(0.6)	天井は平底	"	" 良好	黒・淡黄
139-1479	N M 5 3	坪蓋 (口15.4) 天(2.0)	天井はやや丸い 体部は傾く反る 離 部は丸く内に沈線有	切削不明→荒削 0.1以下の砂粒	0.1以下の砂粒 少量 坚硬	淡オーリーブ
139-1480	N C 5 0	長颈甌 瓶(8.2)	底部は丸く膨む	つくりは3段構成	" 坚硬	にじ・黒・淡 黄褐
139-1481	N M 5 3	坪 高 3.5 (口13.9) (底 7.4)	口縁は外反 体部は傾く膨む 底部は 平底で均一 縁は丸い	切削不明→施 風記号	0.1前後の砂粒 微量 良好	灰白
139-1482	M B 5 1	坪 高(1.5)	底部は中央部がやや厚い	切削は半切→施	" 良好	淡オーリーブ・ 青
139-1483	N K 5 2	坪 (底 6.7)	底部は均一で中央がやや高い	切削は半切→荒削 少量	0.1前後の砂粒 良好	淡黄・青
139-1484	N L 5 3	甌 高 7.0	底部は厚く平坦	切削は半切→施 風記号	0.1前後の砂粒 良好	淡黄褐・青
139-1485	N M 5 3	坪 (底 7.5)	底部は平底	"	0.1前後の砂粒 少量	灰白・青
139-1486	N M 5 3	坪 (底 6.2)	底部は中央がやや高く端は突出	"	" 不良	青・青
139-1487	N M 5 3	坪 (底 6.6)	底部は厚く平坦	"	0.1以下の砂粒 顯著	淡黄・青
139-1488	N L 5 3	坪 (底 5.6)	底部は中央が薄い	"	0.1以下の砂粒 顯著	明黄褐・淡黄 青
139-1489	N L 5 3	短颈甌 (底13.3)	高台は長方形状に外傾 横地部凹む	切削不明→施 少量	0.1前後の砂粒 良好	淡黄・青
139-1490	N M 5 3	高台付坪 高 4.0 (口12.5) (底 6.8)	口縁から体部は彎曲 底部は中央部が 厚い 高台は三角形状	切削不明→底部 荒削	0.1以下の砂粒 顯著 良好	淡黄
139-1491	N L 5 3	高台付坪 (底 9.6)	底部は平坦 高台は高く外反	切削は不明→施 少量	0.1以下の砂粒 良好	黒・青
139-1492	N M 5 3	高台付坪 (底 6.6)	底部は平坦で均一 高台は外反	切削は不明→施	" 良好	黒・淡黄

第5章 奈良・平安時代以外の調査

第1節 遺構

奈良・平安時代以外の遺構は、調査区で北側の緩斜面に集中して検出された。この中には、河原石を出土し隣り合う土坑SK31・SK32、これらの南に位置するSK33がある。また、これらの北西には、幅が狭くて浅い溝SD34が位置している。

SK31(第137図、図版38)

SK31はN I 53区に位置し、SK32東側の緩斜面に位置している。標高は54.3mで、長軸方向はS-30°-Eを指す。規模は長軸1.35m×短軸1.2m深さが35cmあり、形態は隅丸長方形状の不整形を呈する。壁はやや角度をもって傾斜し底面は平坦である。覆土中には拳代前後の河原石が密につまり、その間に暗褐色土の軟らかい土が堆積していた。

SK32(第137図、図版39-1)

SK32はN I 53区に位置し、SK31西側の緩斜面に隣接している。標高は54.3mを測る。形態は一辺が約70cmの不整三角形を呈している。壁は緩やかで底面は平坦である。底面から10~20cmの細長い河原石が数点出土し、覆土にはやや軟らかい暗褐色土が堆積していた。

SK33(第137図、図版39-2)

SK33はN H 53から54区にかけてあり、SK31・32の南側標高49.8mの緩斜面に位置している。最も長い部分の方向はN-20°-Eを指す。規模は長軸1.4m×短軸1.2m深さ50cmを測り、形態は略円形を呈している。覆土は軟らかい暗褐色土を主体とする土で、10cm前後の河原石が数点含まれていた。

SD34(第137図)

SD34はN L 52区を中心とし、標高53.2m前後の緩斜面に位置している。この溝は北から南西に大きく曲がり、幅は35~55cmで断面は緩いU字形を呈している。覆土は軟らかい黒色土が堆積していた。溝の底面が北から南西にかけて緩やかに傾斜していることから、排水用の溝と考えられる。

第2節 遺構外出土遺物(第140図)

1493は高台付焼で土師質。法量は、口径15.0cm・底径7.1cm・高さ4.9cmである。体部から

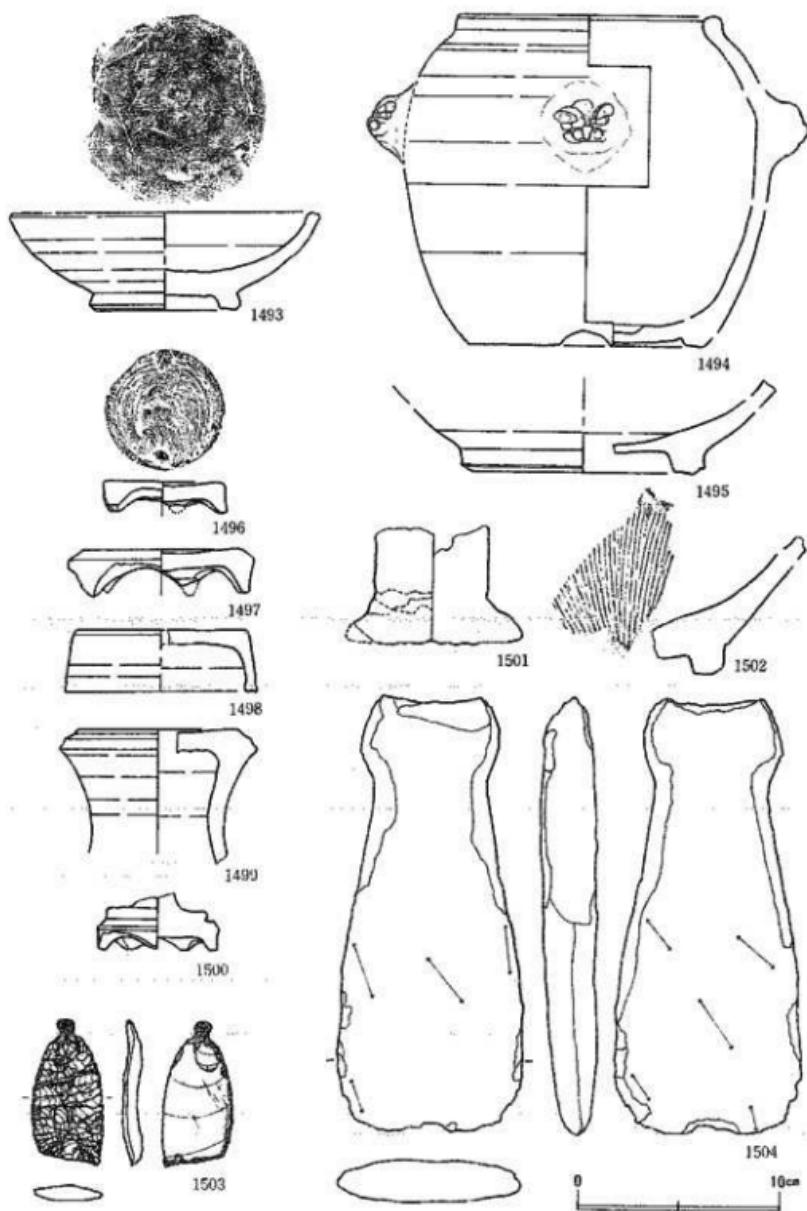
丸く仕上がる口唇部まで弯曲し、高台はやや外傾する。器厚・高台とともに厚く、高台端部外側に箇削りを施す。胎土には1~3mmの小石を少量含む。焼成は良好で、色調は浅黄褐色である。底部内面には、「五十集屋敷」と籠書きされている。

1494(図版66-3)は壺で土師質。法量は、口径12.8cm・底径11.7cm・高さ16.5cmである。口唇部は丸く仕上がり、口縁部は短く直立する。体部は頸部から底部にかけて緩く膨らみ、胴上位には獅子の把手が付く。高台は、低く断面形が長方形を呈するが、その外側は体部最下端に当たっており、一部に蒲鉾形のスリットがある。胎土・焼成・色調は1493と類似している。

1495は鉢あるいは壺類の陶器片である。法量は底径が11.0cmである。器肉と高台が厚く、高台端部外側に箇削りを施す。胎土は1mm前後の砂粒を少量含み、焼成は良好である。断面の色調は赤橙色で、高台接地部を除く外面には暗赤褐色の、外面には灰白色の隙間のある貫入状の釉が付く。

1496~1501は窯道具である。1496・1497はハマで、1501はトチである。1499と1500はともに焼き台と考えられるが、1500は柱状部上位に台が付くと思われる。1498は、中央に穴があく蓋と思われるが不明。法量は1496~1499の上面径がそれぞれ6.1cm、8.0cm、8.5cm、8.0cmで1498の口径と1501の底面径がそれぞれ9.6cmと8.8cmである。1496~1499の上面には回転糸切り痕が認められ、1496・1497・1500の下部には5ヶ所の切り込みがあり、5つの花弁状を呈している。胎土は1496~1500までが、1mm前後の砂粒を顯著に含み、1501は1~10mmの砂粒や小石を多量に含む。焼成はすべて良好で、色調は1496・1499が暗赤褐色、1497が褐色、1498が褐色~橙色、1500は表面上部がオリーブ色、1501は黒褐色である。1502は擂鉢の陶器片である。内面の卸し目は隙間なく並んでいる。高台は厚く、端部外側に箇削りを施している。胎土は1mm前後の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色である。1496~1502は、中山焼きの製品と考えられる。

1503は石匙である。長さは7.2cm最大幅3.15cm最大厚は9mmである。反り気味の継長削片の打面側に小さなつまみが作出され、表面には、丁寧で整った押圧剝離が施されている。この押圧剝離は、裏面縁辺にせまい幅の打面が用意された後に施されたもので、打面が裏面の右側辺と下辺に明瞭に残っている。裏面左側辺の上部と下部にも、わずかに打面が見えている。また、つまみ部に弱い火熱による火バネが見られる。1504は打製石斧である。長さは22.0cm、最大幅9.2cm、最大厚は2.8cmである。全体は楔形で、基部とその付近は僅かに抉れている。先端には刃こぼれがあり、内外に擦痕を認める。古墳時代以降に鐵として使用された可能性がある。



第6章 自然科(化)学分析

第1節 火山灰分析

1 竹原窯跡の火山灰

山田一郎・庄子貞雄(東北大学農学部)

竹原窯跡(平鹿郡平鹿町竹原)のSJ07とSK02には火山灰が認められた。SJ07では多量の遺物が出土した焼土層の下に、SK02では多量の遺物を直接に覆う状態で火山灰が存在した。これらの火山灰が付近で存在が確認された灰白色火山灰かどうかを検討した。比較に用いた火山灰は平鹿遺跡(平鹿郡増田町字増田字平鹿)、蝦夷塚古墳群(平鹿郡雄物川町造山字蝦夷塚51)、大久保(杉宮)遺跡(雄勝郡羽後町大久保字相原)、七窓遺跡(雄勝郡羽後町足田字七窓9)そして払田櫛遺跡(仙北郡仙北町払田)から採取された火山灰である。

粒径組成は他に遺跡の火山灰と同様に、SJ07とSK02の火山灰とも、2mm以上の礫がなく、ほとんどが0.2mm以下と細粒である。

1次鉱物組成で重鉱物含量はSJ07、SK02とも各々3%、1%と他の灰白色火山灰と同様、極めて少なかった。重鉱物組成は、SJ07ではシソ輝石>磁鐵鉱>普通輝石>角閃石、SK02でシソ輝石>磁鐵鉱>普通輝石>角閃石であり、この結果は他の灰白色火山灰と同じであった。軽鉱物組成は、SJ07、SK02とも火山ガラス>斜長石であり、この結果も灰白色火山灰と同様であった。しかし、火山ガラスの形態には両火山灰で違いが認められた。SK02の火山灰はスポンジ状>顆粒状>その他であり、他の遺跡の灰白色火山灰と同じであったが、SJ07では顆粒状>スポンジ状>その他であった。以上の結果からみて、SK02の火山灰は灰白色火山灰と考えられた。しかし、SJ07の火山灰は火山ガラスの形態が、灰白色火山灰とは異なっており、むしろ、払田櫛に認められた火山灰に類似していた。このことから、SJ07の火山灰は灰白色火山灰とは異なる火山灰か、それとも再堆積物であるかについては不明である。

平鹿遺跡や他の遺跡中には灰白色火山灰以外の火山灰は認められなかった。従ってSJ07の火山灰の由来については今後さらに検討する必要がある。

参考文献

- (1) 庄子貞雄・山田一郎(1983)秋田県はりま館、大岱II、案内V、払田櫛および平鹿の各古代遺跡中の火山灰の鉱物科学的分析、秋田県文化財調査報告書第101集、243~247。
- (2) 庄子貞雄・山田一郎(1986)蝦夷塚古墳群の火山灰、秋田県文化財調査報告書第136集、35。

- (3) 山田一郎・庄子貞雄(1987)大久保(杉宮)遺跡の火山灰、羽後町文化財調査報告書、58~59。
 (4) 山田一郎・庄子貞雄(1988)七瀬遺跡の火山灰、羽後町文化財調査報告書第8集、49。
 (5) 庄子貞雄・山田一郎(1983)払田櫛跡中の火山灰、払田櫛跡調査事務所年報1983、73~77。

2 竹原窯跡出土火山灰の蛍光X線分析

三辻利一 奈良教育大学

(1)はじめに

東北地方北部地域の平安時代後期の遺跡からは蛍光X線分析により2種類の火山灰が検出されている。そのうち、下位火山灰は十和田a火山灰と推定されており、K、Rb量が少なく、逆に、Ca、Sr量が多いという特徴をもつ。他方、上位火山灰は十和田a火山灰とは対照的にK、Rb量が多く、Ca、Sr量が少ないという特徴をもっており、大陸から飛来した白頭山火山灰と考えられている。両火山灰はこのように対照的な特性をもっているため、蛍光X線分析法によって容易に識別される。既に青森、岩手、秋田、北海道南部地域の数多くの遺跡から、300点を越える火山灰の分析データーが出されている。

本報告では、竹原窯跡から出土した火山灰の蛍光X線分析の結果について報告する。

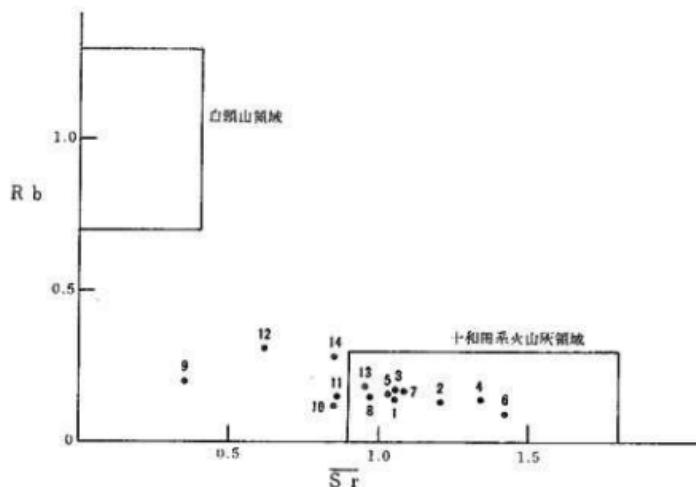
(2)分析結果

第141図にはRb-Sr分布図を示す。これまでの分析データーに基づいて白頭山領域と十和田系火山灰領域を示してある。この分布領域は定性的な意味しかもないが、それでも、白頭山火山灰か十和田a火山灰かを識別する上には有効である。第141図より白頭山領域に分布するものは1点もないことがわかる。殆どの火山灰は十和田系火山灰領域に分布するが、No.9・12の2点のみは明らかに十和田系火山灰領域を離れて分布する。No.9・12を除く他の火山灰は十和田a火山灰と推定される。

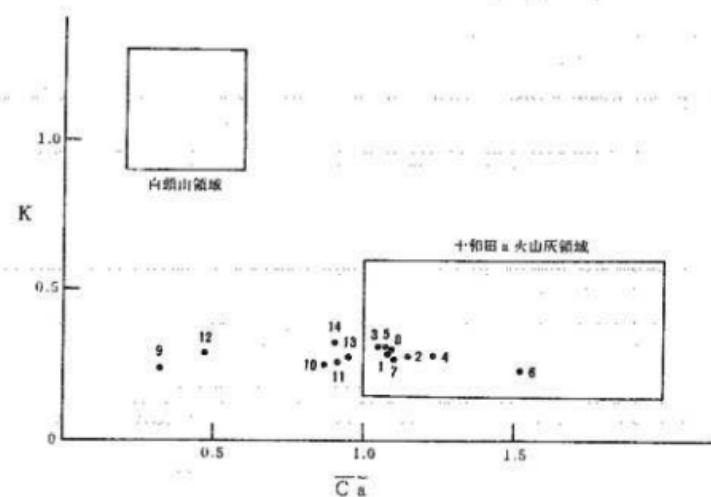
第142図にはK-Ca分布図を示す。この分布図でも白頭山領域と十和田a火山灰領域を示してある。やはり、No.9・12の2点は明らかに十和田a火山灰領域を離れるが、白頭山領域にも対応しない。他の火山灰はほぼ、十和田a火山灰に対応するとみられる。

第143図にはFe因子を対応してある。殆どの火山灰は十和田a領域に対応するが、No.9のみは明らかに離れる。

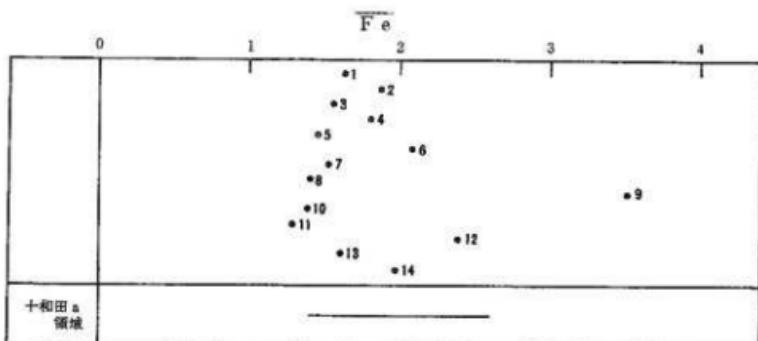
以上の結果、No.1・2・3・4・5・6・7・8・13の9点は十和田a火山灰と推定される。No.10・11・14も十和田a火山灰とみられるが、風化による変質がかなりある試料であろう。No.9・12は変質が著しく、土壤に近い試料ではないかと思う。分析結果は分析値とともに第79表にまとめておく。なお、第79表にはZrの分析値も示してあるが、白頭山火山灰のもつZrの特異性はどの火山灰にも認められない。



第141図 竹原窯跡出土火山灰のRb - Sr分布図



第142図 竹原窯跡出土火山灰のK - Ca分布図



第143図 竹原窯跡出土火山灰のFe量

第79表 竹原窯跡火山灰化学分析数值表

		K	Ca	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	推定結果
1-774	1	0.291	1.08	1.63	0.141	1.05	0.887	1.15	十和田 a
775	2	0.284	1.15	1.87	0.129	1.20	0.758	1.08	十和田 a
771	3	0.307	1.05	1.55	0.167	1.05	1.02	1.48	十和田 a
777	4	0.282	1.23	1.80	0.142	1.34	0.697	1.00	十和田 a
778	5	0.309	1.07	1.45	0.163	1.03	1.15	1.46	十和田 a
779	6	0.228	1.52	2.08	0.092	1.42	0.570	1.07	十和田 a
780	7	0.273	1.10	1.52	0.166	1.08	1.03	1.41	十和田 a
781	8	0.300	1.09	1.40	0.151	0.972	1.09	1.54	十和田 a
782	9	0.235	0.316	3.52	0.203	0.346	0.991	1.81	土壤 (?)
783	10	0.248	0.872	1.39	0.123	0.853	1.06	1.44	十和田 a (?)
784	11	0.259	0.908	1.29	0.146	0.858	1.11	1.36	十和田 a
785	12	0.286	0.471	2.39	0.312	0.623	1.13	1.63	土壤 (?)
786	13	0.276	0.951	1.60	0.182	0.949	0.971	1.44	十和田 a
787	14	0.325	0.904	1.97	0.277	0.849	1.11	1.64	十和田 a (?)

3 テフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1)試料

本分析では竹原窯跡で発見されたテフラ試料について、鉱物分析ならびに屈折率測定を行い、すでに堆積年代が明らかにされている示標テフラとの対比を行うことにある。試料は、にぶい黄褐色の中粒の火山灰(SK02-No.10)1点である。

(2)分析方法

分析は、次の手順で行われた。

1. 40gを秤量。
2. 超音波洗浄と分析篩(1/16mm)による篩別を繰り返し、泥分を除去。
3. 80°Cで恒温乾燥。
4. 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
5. テトラブロモエタン(比重2.96)で比重分離。
6. 重鉱物・軽鉱物それぞれ250粒について偏光顕微鏡下で同定し、重鉱物組成及び軽鉱物組成を求める。
7. 火山ガラスについて、新井(1972)の方法に従い屈折率を測定する。

(3)分析結果

重鉱物組成ダイヤグラムを第144図に、その内訳を第80表に示した。含まれる重鉱物は、量の多い順に斜方輝石、不透明鉱物(おもに磁鐵鉱)、単斜輝石である。わずかにカソラン石が認められる。角閃石は含まれていない。

また軽鉱物組成ダイヤグラムを第145図に、その内訳を第81表に示した。比較的分厚いバブル型(平板状)火山ガラスや分厚い中間型火山ガラスも少量認められるものの、圧倒的に軽石型火山ガラスが多い。軽石型火山ガラスのなかでは、スポンジ状に発泡したものが特に多く、織維束状に発泡した火山ガラスも認められる。

火山ガラスの屈折率(γ)は1.498-1.508であるが、ごくわずかに1.509より高い屈折率をもつ火山ガラスも認められる。

(4)考察—示標テフラとの対比

重鉱物組成上の特徴、とくに角閃石を含まないことや、火山ガラスの形態さらに屈折率から、分析試料は、仙台平野周辺に分布する10世紀前半に堆積したと考えられる灰白色火山灰(山田・庄子、1981)と同じテフラと考えられる。またA,D、915年に噴出したと考えられている十和田a火山灰(To-a:町田ほか、1981、町田ほか、1984)とも同じ特徴をもつ。灰白色火山灰は、

To-aと同じテフラと考えられる。なお1.509より高い屈折率をもつ火山ガラスがごく少量認められている。この屈折率が高い火山ガラスは、層位的に近い11-12世紀に韓半島の付け根付近に位置する白頭山から噴出した白頭山-苦子牧火山灰(B-Tm:町田ほか、1981、町田ほか、1984)、あるいはその他のテフラ起源の可能性があり、なんらかの原因によりTo-a中に混入したと考えられる。

参考文献

新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究ー、第四紀研究、11、P·254-269

町田洋・新井房夫・森脇広(1981)日本海を渡ってきたテフラ、科学、51、P·562-569

町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学ー考古学研究と関係するテフラのカタログー、古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、P·865-928

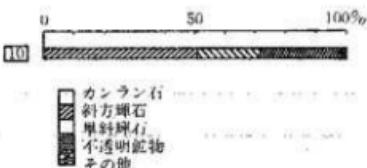
山田一郎・庄子貞雄(1981)宮城県に分布する新期の灰白色火山灰について、日土誌、52、P、155-158

第80表 重鉱物組成の内訳

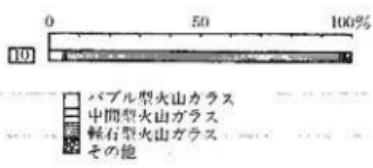
試料番号	重鉱物組成					固定鉱物粒数
	カルン石	斜方輝石	單斜輝石	不透明鉱物	その他	
10	1	126	52	67	4	250

第81表 軽鉱物組成の内訳

試料番号	軽鉱物組成				固定鉱物粒数
	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	
10	12	2	226	10	250



第144図 重鉱物組成ダイヤグラム



第145図 軽鉱物組成ダイヤグラム

第2節 胎土分析

1 竹原窯跡、および、その周辺の遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

三辻利一

奈良教育大学

(1)はじめに

秋田県内の須恵器の伝播・流通の模様を明らかにするためには、まず、秋田県内の窯跡出土須恵器の化学特性を整理しておかなければならぬ。その一環として、本項では平鹿町の竹原窯跡および西ヶ沢窯跡出土須恵器の化学特性を明らかにするとともに、能代市の2・3の遺跡出土須恵器の産地を推定した結果も併せて報告する。

(2)分布結果

はじめに平鹿町の竹原窯と西ヶ沢窯出土須恵器の化学特性に差異があるかどうかについて説明する。第146図には西ヶ沢窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。この分布図は各地の窯跡出土須恵器の地域差を有効に表示することで知られる。第146図では西ヶ沢群としてまとまって分布しており、窯跡出土須恵器特有のまとまり方をしていることが分かる。これに対し、宮衙やその他の消費地遺跡出土須恵器はもっと大きくばらついて分布するのが普通である。第147図には竹原窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。第146図で求めた西ヶ沢領域とともに、大部分の竹原窯跡出土須恵器を包含するようにして竹原領域を示してある。勿論、これらの領域は定性的な意味しか持たないが、それでも遺跡出土須恵器の産地を定性的に推定する上には十分有効である。第147図をみると、竹原窯の須恵器は同じ平鹿町内の西ヶ沢窯の須恵器に比べて、Rb、Sr量とも多く、右上にずれて分布することが分かる。しかし竹原窯の少數の須恵器は西ヶ沢領域に分布しており、この意味は目下のところ不明である。ともかく、平鹿町内には竹原的な特性をもつ須恵器と西ヶ沢的特性をもつ須恵器の両方があるということは確かである。勿論、両者の素材粘土の採集場所は異なっているはずである。平鹿町内の何處にこのような粘土が分布しているのか、今後機会があればサンプリングしてみたい。

第148図には西海老沢窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。この窯の須恵器は秋田県産にしては珍しくRb、K量が多いという特徴をもつ。そのため、秋田県内の他の窯の須恵器からは容易に識別される。また、第149図には大曲市の成沢1、2号窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。竹原窯の須恵器の化学特性に類似しており、成沢領域のかなりの部分は竹原領域と重複する。このように、秋田県内の窯跡出土須恵器の化学特性は必ずしも類似したものばかりではなく、相互識別が十分できる場合がかなりある。したがって、秋田県内の須恵器の伝播・流通の研究は蛍光X線分析法で十分可能であることがわかる。ただ、この研究を推進するためには、化学

特性の整理の外に、窯の推定操業年代に関する情報が必要である。

次に能代市内の2・3の遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図を紹介しておこう。

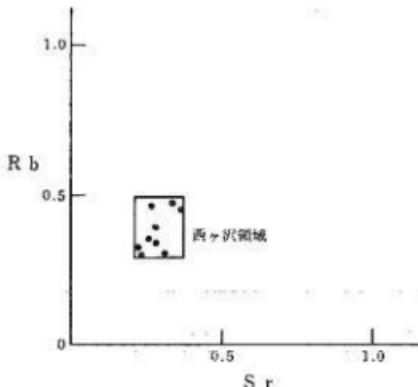
第150図には福田遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。遺跡出土須恵器特有の大きなばらつきをもって分布していることがわかる。このことはこれらの須恵器は少なくとも2・3ヶ所の產地から供給されたものであることを示唆している。大まかな推定を試みると、No.1・2・6・9の4点は竹原的であり、また、No.3は西ヶ沢的、No.4・5は西海老沢的であることがわかる。

同様にして、第151図の寒川II遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図をみると、No.1・4・5・7の4点は竹原的、No.8・9の2点は西ヶ沢的、No.1・2・3は西海老沢的である。

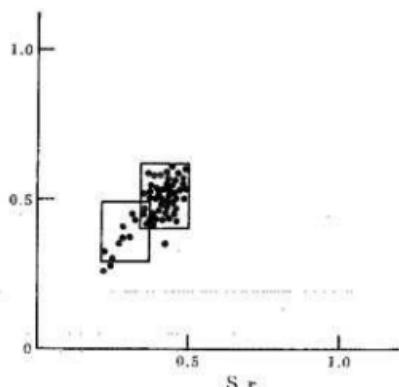
第152図には十二林遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。No.4・6・8は竹原的、No.2・3・7は西ヶ沢的であるが、2の遺跡には西海老沢的な胎土をもつ須恵器は1点もない。

第153図には上の山II遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。この遺跡にも西海老沢的な胎土をもつ須恵器は1点もない。大部分は竹原的な胎土をもつ須恵器である。No.1は西ヶ沢的な胎土をもつ須恵器である。勿論、竹原的とした須恵器の中には成沢的な胎土をもつ須恵器があることも断っておく。

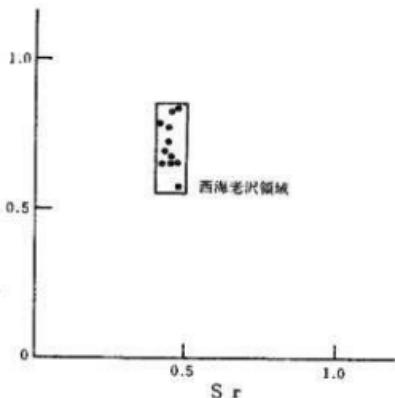
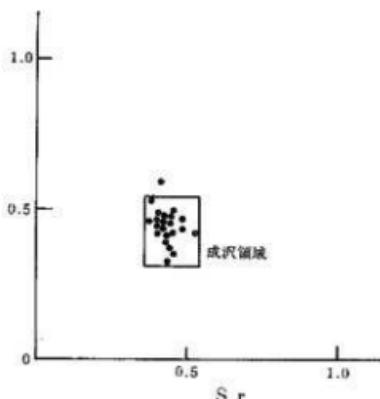
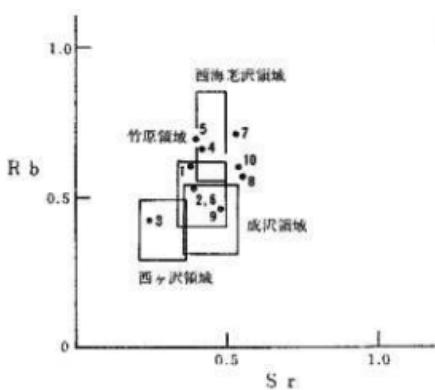
上述の產地推定で竹原的などとあいまいに表現した理由は、まだ、秋田県下の須恵器の伝播・流通の流れを大づかみに把えようとしている段階であるからである。もう少し、しづく切るためには、生産遺跡と消費遺跡の年代の一一致に関する情報が必要である。その上で、可能性のあるいくつかの產地を整理しこれらのマハラノビスの汎距離をK、Ca、Rb、Srの4因子を使って計算しなければ產地推定における別々分析はできない。ここでは、～的胎土という表現で大雑把な產地推定をするにとどめた。

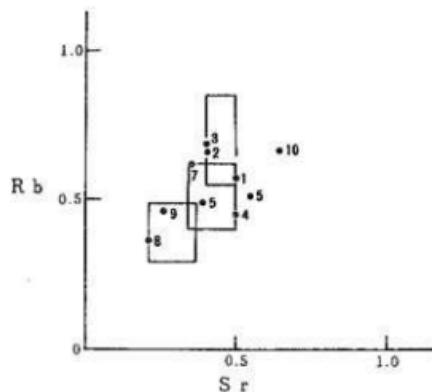


第146図 西ヶ沢窯出土須恵器の
Rb-Sr分布図

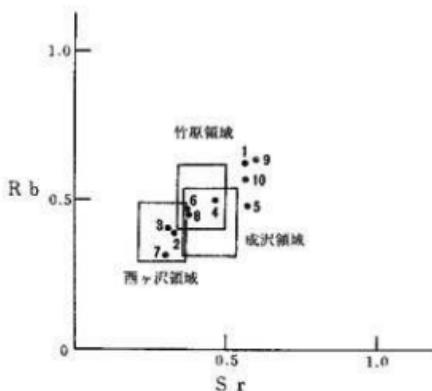


第147図 竹原窯跡出土須恵器の
Rb-Sr分布図

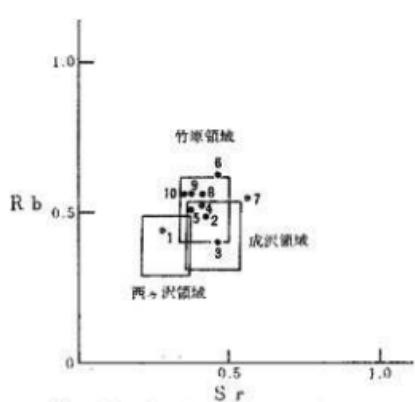
第148図 西海老沢窯出土須恵器の
Rb-Sr分布図第149図 成沢1・2号窯出土須恵器の
Rb-Sr分布図第150図 福田遺跡出土須恵器の
Rb-Sr分布図



第151図 寒川II遺跡出土須恵器の
Rb - Sr分布図



第152図 十二林遺跡出土須恵器の
Rb - Sr分布図



第153図 上の山II遺跡出土須恵器の
Rb - Sr分布図

2 ブラント・オパール分析

バリノ・サ・ヴェイ株式会社

(1) 試料

試料は、S J 05-f右壁(No.8)とS J 20窓(No.9)で認められた繊維状の植物遺体それぞれ1点ずつの合計2点である。

ブラント・オパールは、植物体内の植物珪酸体に由来したものである。とくに、イネ科植物の葉部(葉身と葉鞘)表皮細胞にある亜鉛型細胞列に由来したものは形態が属レベルで異なるため、古イネ科植物相を推定するうえでよい指標となる(大越、1982)。したがって、植物遺体がイネ科植物の葉部を起源としている場合には、植物遺体中に亜鉛型細胞に由来したブラント・オパールが列状に多数観察されるはずである。

(2) 分析方法

試料を同定する方法は以下の通りである。

1. 植物遺体採集
2. 過酸化水素・塩酸処理(植物遺体中の有機物・鉄分の除去)
3. 封入・同定

(3) 結果

試料を採取する際の観察では、No.8のS J 05-f右壁には繊維状の植物遺体とイネ科植物の葉部のような痕跡が認められた。いっぽう、No.9のS J 20窓壁では植物遺体が縦横に交差して認められたが、植物遺体の形状は繊維状のものほかに草本植物の木質部のようなものも認められた。しかし、イネ科植物の葉部のような痕跡はみられなかった。

同定の結果、S J 05-f右壁より採取したNo.8の植物遺体にはマコモ属の亜鉛型細胞由来のブラント・オパールが列をなして多数みられた。したがって、この植物遺体はマコモ属に属する植物を起源としたものである。S J 20窓壁より採取したNo.9の植物遺体にはブラント・オパールが認められず、起源となった植物はわからなかった。

引用文献

- 大越昌子(1982): ブラント・オパール、寿能泥炭層遺跡調査報告書-自然遺物編-p 239~254、
埼玉県教育委員会

第3節 炭化材分析

1 竹原窯跡出土炭化材の樹種

鶴倉巳三郎

秋田県平鹿郡平鹿町にある8・9世紀の須恵器窯跡の竹原窯跡から出土した炭化材の樹種を調査した。

試料は2-4cmくらいの大きさの木炭で、材組織の保存状態は良いものが多かったが、中には放射方向に多数の割目のあるものや、組織が著しく変形したものもあった。他にスサとされた3個の炭化材は調査ができた。

炭化材は破断面を反射顕微鏡で観察したが、その結果はつぎの通りである。

第82表 試料分析一覧表

試料番号	遺構	樹種	注記	試料番号	遺構	樹種	注記
No. 1	SJ 01	クヌギ		No. 14	SJ 07	クヌギ	
2	SJ 01	クリ?	変形材	15	SJ 20	クヌギ	
3	SJ 01	クヌギ	他に散孔材	16	SJ 20	クヌギ	
4	SJ 01	クヌギ	図版85	17	SJ 20	クヌギ	
5	SJ 05	クヌギ		18	SK02	クヌギ	
6	SJ 05	ノリウツギ	図版85	19	SN04	クリ	
7	SJ 05	クヌギ	図版85	20	SN11	クリ	図版85
8	SJ 05d	クヌギ		21	SN22	クリ	
9	SJ 05d	クヌギ		22	LQ56区	クヌギ	
10	SJ 05d	クヌギ		23	LP56区	クヌギ	
11	SJ 07	クヌギ		24	SJ 05	(不明)	スサ
12	SJ 07	クヌギ		25	SJ 05	(不明)	スサ?
13	SJ 07	クヌギ		26	SJ 20	(不明)	スサ

以上をまとめると、クヌギ炭は、SJの殆ど全部と、SK、LQ・LP56区で18例、クリ炭は、SNの全部とSJの1で計4例となる。ほかに、ノリウツギと散孔材が各1例である。

クヌギ炭はいわゆる櫟炭で、適当に硬く、強い火力が持続する優良品である。クリ炭もそれに近い性状の良質な燃料である。考古学の本には、須恵器窯の燃料は殆ど松であると記されているが、この遺跡の窯では、最適の燃料を選んで使用したように思われる。

註：倉田芳郎・「須恵器」『新版考古学講義5』1979

スサとされたものは、白色の微小鉱物質と黒色物質を混台したような硬塊で、シルトや微砂に炭粉を混ぜて練り、壁材としたようにも想像される。No.24には、幅1mm以下の細長い繊維様物が介在しているが、細胞構造は認められなかった。奈良県香芝町の平野須恵器窯跡の壁のスサにはイネ藁の痕が残っており、王水処理でイネの表皮の珪酸細胞も認められたことがある。

炭化材の構造

クヌギ *Quercus acutissima Carrth.*

早材部道管の大きな環孔材で、晩材部に移ると道管は急に小さくなり、やや厚壁で、単独に放射方向に並ぶ。放射組織は単列のものと、幅の広い大きな複合のもの(広放射組織)がある。

クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.*

環孔材で、早材部の道管はきわめて大きく、数環に並び、晩材部に移るとかなり小さな道管が、多数集まって火炎状態に配列する。放射組織は単列のものばかりで、広放射組織はない。

ノリウツギ *Hydrangea paniculata Sieb.*

やや小さい道管の散孔材である。道管の多くは単独に分布し、穿孔は階段状で、階段数が多い。放射組織は異性で、中部の平伏細胞からなる部分は、2-4細胞幅、その両端部の直立細胞は上下に長く延び、1列で数段に続くことがある。

付 記

顯微鏡写真の説明 (図版85図、1~9)

1. クヌギ、No.4、木口。左端に広放射組織、上部は早材部、下部は晩材部。
2. 同上、板目。中央に広放射組織。
3. クヌギ、No.7、木口。右端に広放射組織、左側に晩材部小道管の配列。
4. 同上、板目。右側に広放射組織。
5. クリ、No.20、木口。下部に晩材部の小道管の集合配列。
6. 同上、板目。放射組織は単列のみ。
7. ノリウツギ、No.6、木口。上は早材部、下は晩材部、道管の平等分布。
8. 同上、板目。放射組織、上は直立細胞、下は平伏細胞。
9. 同上、板目。放射組織。

2 炭化材同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) 試料

試料はNo.1~7、11、12の炭化材片9点である。いずれも窯および窯状遺構から検出されたもので、燃料材および窯構築材と考えられている(第83表)。遺構の時代は明らかにされていない。(2)方法

試料を乾燥させたのち木口・柱目・板目三断面を作成、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版(図版86~87)も作成した。

(3)結果

手元の現生標本の中に該当するものがなかったため同定できなかった1点を除く8点がつぎの2種類(Taxa)に同定された。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などは、つぎのようなものである。

◎コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一種【*Quercus*(subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*)sp】

ブナ科 No.1, 2, 4, 5, 7, 11, 12.

環孔材で孔圈部は、1~2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では橢円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周閉状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が2年目に墜するグループで、クヌギ(*Quercus acutissima*)とアベマキ(*Q. variabilis*)の2種類がある。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されるところが多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・枕材・舟木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。

◎クリ(*Castanea crenata*) ブナ科 No.6

環孔材で孔圈部は1~3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では橢円形、小道管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面

では角張った橢円形～多角形、単穿孔を有し、癡孔は交互状に配列、放射組織との間では横状～網目状となる。放射組織は同性、単(1～2)列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、樹木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。

以上の同定結果を出土遺構とともに一覧表で示す(第83表)。

第83表 竹原窯跡出土炭化材の樹種

試料番号	出土 遺構 など	種	名
1	S J 01 窯内	コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一一種	
2	S J 05d 窯内	コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一一種	
3	S J 05f 窯構築材	広葉樹(散孔材)	
4	S J 07 窯内	コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一一種	
5	S J 20 窯内	コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一一種	
6	S N04 窯状遺構	クリ	
7	S N11 窯状遺構	コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一一種	
11	L P55 炭化物層	コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一一種	
12	S J 05 窯内	コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一一種	

(4)考察

遺構が何を焼成した窯であるのかわからないが、No.3を除く8点が燃料材であるとすれば、上記のように古くから薪炭材として利用されてきたクヌギ節(クヌギと考える)やクリが使われていることから、これらの材の特長を意識した樹種選択があったものと思う。とくに、クヌギ炭は発熱量が多く、火持ちもよいことからその可能性は高いと考えている。

第4節 年代測定分析

学習院大学放射性炭素年代測定

木越邦彦

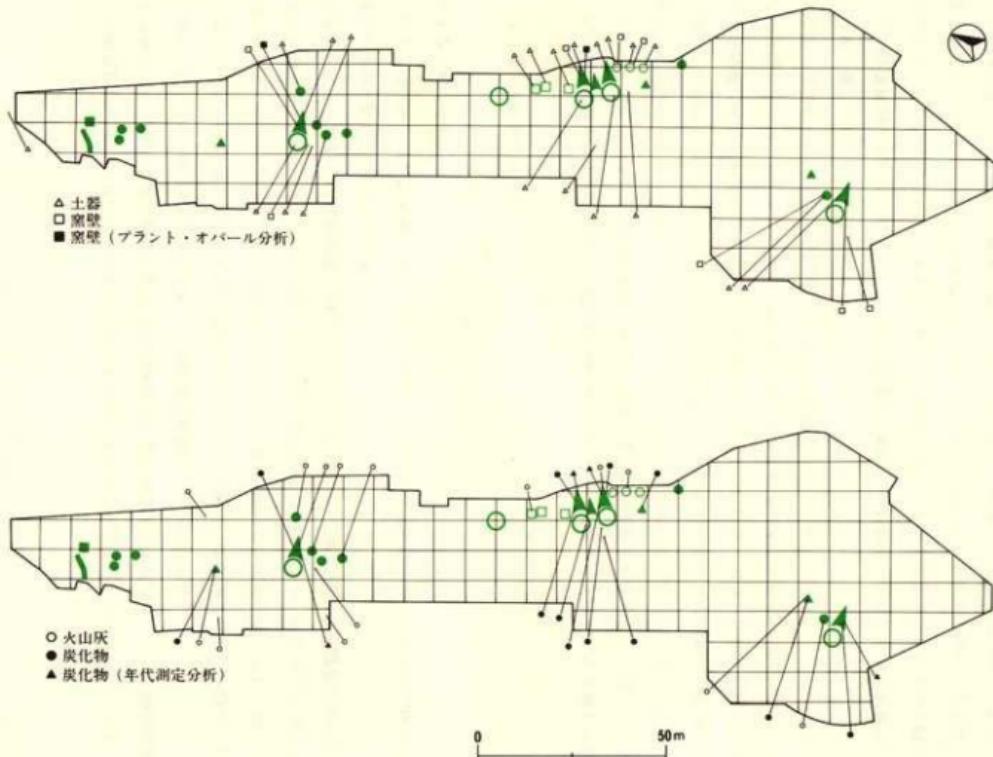
年代測定の結果を下記の通りご報告致します。

なお年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 δ にもとづいて算出した年数で標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2δ 以下のときは 3δ に相当する年代を下限の年代値の(B.P.)として表示してあります。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANARD CARBON)について計数率との差が 2δ 以下のときは、Modernと表示し、DC%を付記してあります。

記

Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
GaK-14212	Charcoal from 秋田県 竹原窯跡 No.1. 8TW-SJ01	750±80 A.D.1200
GaK-14213	Charcoal from 秋田県 竹原窯跡 No.2. 8TW-SJ05d	1610±100 A.D.340
GaK-14214	Charcoal from 秋田県 竹原窯跡 No.3. 8TW-SJ05f	1840±100 A.D.110
GaK-14215	Charcoal from 秋田県 竹原窯跡 No.4. 8TW-SJ07	1830±80 A.D.120
GaK-14216	Charcoal from 秋田県 竹原窯跡 No.5. 8TW-SJ20	1900±100 A.D.50

以上



第154図 分析試料出土地点図

第7章 まとめ

竹原窯跡は秋田県平鹿郡平鹿町上吉田間内字竹原に所在する奈良時代～平安時代の須恵器生産遺跡である。遺跡は東北横断自動車道秋田線建設事業の事前遺跡発掘調査として、昭和63年(1988年)5月9日～10月15日に実施された。発掘調査面積は、9,200m²である。

調査の結果、奈良時代～平安時代の窯跡6基、その灰原13箇所、溝状遺構1基、上坑5基、性格不明遺構3基、堅穴住居跡1軒、時期不明の土坑3基、溝状遺構1条の遺構が検出され、夥しい量の土器などが出土した。これら遺構の大部分は、独立丘状の丘陵斜面から検出されたものであるが、今回の調査区は高速道路予定幅に限ってのものであり、丘陵斜面の上方調査区外にも、多くの遺構・遺物が存在すると予想される。

以下、今回検出された遺構と遺物および、遺構と遺物のあり方に深く係っている火山灰についてまとめてみたい。

1 窯の構築について

竹原窯跡にはS J 06・S J 05・S J 07・S J 08・S J 20・S J 01の6基とS J 05から切り離して考えられる可能性のあるS J 05 fの窯跡がある。窯跡およびその灰原から出土した土器により、S J 06・S J 05・S J 07・S J 08が奈良時代の、S J 01・S J 20が平安時代の窯跡と考えられる。このうち完掘できたものはS J 01とS J 20の2基だけで、他は焚口部分だけの場合、痕跡をとどめる程度のもの、断面による検出などと全容が不明なものばかりである。これらの窯跡の中には主軸が同一方向を指しながら同一地点で重複している場合があり、S J 05ではa～e、S J 07ではa～c、S J 01ではa・bとそれぞれ造り変えていることが分かった。以下ここでは窯の構造について若干まとめてみたい。

1つは窯構造と年代についてである。竹原窯跡から検出された窯跡のうち、地下式窯のものは奈良時代のS J 05 b～e、S J 07 b・c、S J 08があり、半地下式窯のものは平安時代S J 01 a・b、S J 20それに奈良時代のS J 05 fをあげることができる。S J 06については、S T 12灰原に筋の含まない窯跡が存在していることから地ド式の可能性が高い。また、S J 05 aとS J 07 aについては、筋が含まれないものの他と比べると地山上面から比較的浅い位置にあるために、地下式と断定することはできず半地下式も考慮する必要がある。また、S J 05 fについてはS J 06を掘り込んで造られたと推定され、焼成時に自然堆積土を大井にするこ

とができず半地下式構造にせざる得なかったと考えることができる。以上により竹原窯跡における奈良時代の窯跡は地下式構造が主体であり、平安時代においては半地下式構造が主体となる傾向にある。また奈良時代においても状況に応じて半地下式構造を採用していることを知ることができる。

2つ目は溝状部分を伴う窯についてである。溝状部分を伴う窯にはS J 05とS J 07の古い溝状部分をあげることができる。はじめに溝状部分について、S J 05を例にとって整理すると次のようになる。S J 05溝状部分は、S J 05 a～e の焚口付近から下方へ少なくとも8mの距離をもち、覆土は地山排土で充填していた。そしてこの地山排土の直上をS J 05 e 以後の灰原が覆っていた。以上の事実からすれば、地山排土はS J 05 e 窯構築時に掘り出されたもので、この排土で覆われた溝状部分はS J 05 e 構築直前に掘られたものと考えられる。以上より、溝状部分は排土を下方に運び出すあるいは掘き出すための施設と考えることができる。一般的に窯構築時の掘削土は、焚口下方へ無造作に掘き出したり(S J 06・S J 20・S J 01)、窯脇に捨てたりする(S J 01のように半地下式の場合)と考えられ、S J 05 e は特殊な在り方を示している。

一方S J 05はe～aに順次造り変えられていると予想できる窯である(S J 05 f と S J 05 a～e は、この点や地山排土で分離されていること、窯構造や出土遺物が相違している点などから、本来別個の窯であったと考えられる)。そしてそこから出る灰層や掘削土は、S J 05 e 構築時の排土量を大きく上回る。当初から、順次窯底が上方へ移動する様な造りを変えを予定している窯であれば、そのはじめの排土を焚口近くの斜面に捨てるとは極めて不合理な事と考えられる。したがってS J 05 a～e の中で最も最初に構築されたS J 05 e の掘削土を、あらかじめ焚口下方の遠い場所に寄せておく必要性があったと考えられる。S J 07の溝状部分も1つはS J 07 c に関する施設と考えることができ、この場合も後に窯の造り変えを予定したことと考えられよう。これらのことから、地下式窯を主体とし上方へかさ上げする様な造り変えを伴う窯に限って、溝状部分が存在する可能性がある。

2 須恵器の製作技法について

竹原窯跡から出土した須恵器には、杯蓋・杯・壺・甕など多くの器種が認められている。このうち杯と甕の中には、従来の一般的な考え方と異なる技法が用いられているものがある。以下これら2点についてまとめてみたい。

1つは杯の切り離し技法と調整手法の関係についてである。S K02出土の回転糸切りと回転範削りを施しているタイプ(190など)に例をとる。一般に範削りをもつ杯の製作は大きく成形(輻輪調整を含む)→切り離し→調整の製作工程をたどると解釈されており、範削りは切り離し

の後に施すのが普通である。これに対して、190は成形(調整)→調整→切り離しの工程をたどる資料として特筆できるものである。このことを証明するために、まず前提条件として上から見た轆轤回転方向は、糸切り痕の渦から時計回り(右回り)であることを確認しておき、以下にその理由を述べる。

- ① 坯を正立させて正面から見た場合、回転籠削りの砂粒は左→右へ移動しているので、回転籠削り調整を切り離しの後に施したとすれば、轆轤の回転方向は逆時計回り(左回り)でなければならない。このことは、轆轤回転方向が一定方向であると仮定すれば矛盾した結果となる。
- ② 糸切り痕跡と削り痕跡の接点における粘土屑の有り方は、削り面の上に糸切りで生じた粘土屑がかぶるよう観察できる。
- ③ 190と同じタイプの破片の中には、回転糸切り時に付いた糸の痕跡が回転籠削りの面に観察できるもの(200)がある(糸切りの糸が交差する部分は、切り離しの後に擦でや削りの調整で不明なものが多い)。この場合、切り離し以前に回転籠削りの面が存在していなければならぬ。

以上より、成形(調整)→回転籠削り調整→切り離しという坯製作工程をたどることができる。よって、従来の切り離し技法の後に削り調整を施す技法を「籠削りA技法」切り離し技法以前に削りを施す技法を「籠削りB技法」と仮称する。同遺構出土籠切りタイプの中にも、明確に証明し難いが、その種の技法と考えられるもの(177など)がある。

2つには甕頸部の製作状態についてである。頸部の製作法には、体部から粘土帯を積み上げて成形する方法と体部・口縁部を別個に作りそれらを接合させる方法(頸部接合技法)とがある。ここでは後者について述べる。竹原窯跡出土大型甕のはほとんどは、頸部接合技法によっている。そしてその接合状態は、面取りされている口縁部下端の断面部分を体部の上端に載せ粘土で補強する方法をとる(1362・1387)。これに対してST12出土の中型甕の接合状態は、体部上端の面取りされている断面部分に、口縁部下端を嵌め込み粘土で補強する方法をとる(302・303)。よって従来観察されてきた前者の接合方法を「頸部接合A技法」後者の接合方法を「頸部接合B技法」と仮称しておく。

以上、土器製作上の2点について整理したが、その分布と時代的位置付けを行うことで、竹原窯跡の性格をより具体的に把握することができると言えている。

3 火山灰について

竹原窯跡からは、A・B・C各地区より灰白色を呈した火山灰(灰白色火山灰は噴出源と時代

が限定された火山灰として用いている場合があり、そのことと区別するために以下灰白色の火山灰と記述する)が多く検出されているが、10cm以上の厚さで遺構と係わって堆積していたのはA地区のSK02・SN04、B地区のSJ07・SX10、C地区のSJ20・SN22・SK21・SK23・SK25である。そして、出土遺物との係わりで注目されるのがSK02・SJ07・SJ20とこの窓の遺物を含んでいるSK21・SK23・SK25である。これらの火山灰は、斜面上方から窓地に二次的に堆積したと思われるが、それぞれが連続した一過性の堆積状態を示しており、後に動いたり逆転したりした痕跡はない。このうち、SK02とSJ07については、分析方法の異なる山田一郎・庄子貞雄、三辻利一の各先生に分析をお願いした。また、SK02のものについてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した(第6章参照)。ここではSK02・SJ07覆土検出の火山灰を中心とした分析結果と、土器に係わる考古学的な成果を中心にしてまとめる所とする。SK02・SJ07火山灰の分析結果は次の通りである。

山田・庄子両先生は、2つの資料について重鉱物の在り方や軽鉱物の在り方は同様であるが、火山ガラスの形態においては異なるとする分析結果を示された。そしてSK02の火山灰は平鹿遺跡・蝦夷塚古墳群・大久保(杉宮)遺跡・七窓遺跡と同様に灰白色火山灰と考え、SJ07のものは灰白色火山灰とは異なる火山灰の可能性があるとした上で、むしろ払田構の火山灰に類似する点を指摘された。ここでは、白頭山火山灰については言及されていない。

また三辻先生は、螢光X線分析によれば十和田aと推定されている火山灰と白頭山火山灰は、K・Rb量とCa・Sr量の在り方で両者を容易に識別できるとした上で、SK02・SJ07それぞれの火山灰を十和田a火山灰と推定された。ここでは、白頭山火山灰以外の灰白色の火山灰が複数存在する可能性をもつ場合の識別については触れていない。

以上よりSK02・SJ07の火山灰は、どちらも白頭山火山灰とは言えずSK02・SJ07を十和田a火山灰とする考え方(三辻)と、SK02は灰白色火山灰でSJ07は灰白色火山灰とは異なる火山灰の可能性があるとする考え方(山田・庄子)に整理できる。よって、SJ07のように灰白色火山灰とは異なり、かつ、白頭山火山灰とも異なる火山灰が存在する可能性があり、このことは灰白色の火山灰が複数の起源をもつ可能性のあることを示唆するものである。

他方、SK02火山灰におけるパリノ・サーヴェイ株式会社の分析結果は、重鉱物組成上の特徴や火山ガラスの形態・屈折率から灰白色火山灰=To-aと結論した上で、1.509より高い屈折率をもつ火山ガラスがごく少量含まれるとした。そして屈折率の高い火山ガラスは白頭山・苦小牧火山灰あるいはその他のテフラ起源の可能性があり、何らかの要因で混入したと結んでいた。SK02火山灰は先の三辻先生の結果からして白頭山火山灰の可能性はないので、ここでも灰白色の火山灰の中には複数あることが示唆される。

一方、考古学的調査における灰白色の火山灰と土器との関係は次の通りである。SK02の底

面から覆土にかけてはS J 01の製品である須恵器が多数投棄され(一括土器群A)、その上にわずかな間層を挟んで灰白色の火山灰が厚く堆積していた。またS J 07の覆土には厚い火山灰が堆積し、その上に間層を挟んでまとまった土器が出土した(一括土器群G)。これらの土器は型式学的観点から見ると、火山灰下の一括土器群Aは9世紀後半でも後の方に、火山灰上の一括土器群Gは9世紀前半とされる。このことは、火山灰を同一時期のものと考えた場合に矛盾した土器の在り方を示すことになる。したがって、S J 07のものが古くSK 02のものが新しい2つの火山灰を想定することができる。すなわち、灰白色の火山灰は時期の異なる2つのものが存在したと考えられるのである。

以上の考古学的成果と先の分析結果からみて、竹原窯跡で検出された灰白色の火山灰には複数の種類が存在していると考えられる。

4 一括土器群とその変遷について

竹原窯跡から出土した須恵器は、後述する理由で8世紀中葉から9世紀後葉にかけての時期と考えられるが、その器種は壺蓋・高台付壺(境)・壺(境)・高壺・盤・硯・壺・瓶・鉢・甕と多くの種類がある。本項でこれらすべてを網羅して説明することは、内容を煩雑にするだけと思われるため、同一層内や同一窯内から出土した一括土器群A～I(以下土器群Aなどと記す)の整理と変遷、およびその年代などについてまとめるにすることにする。ただし、土器群内の個々が、かならずしも同時生産によるものばかりではない点を断っておきたい。

はじめに、土器群とその出土状況について簡単に記すと、土器群Aは火山灰下のSK 02覆土、土器群BはS J 06の灰原と考えられるST 12灰原、土器群CはS J 05fの覆土、土器群DはS J 05eと考えられる灰層、土器群EはS T 17とした土器集中部、土器群FはS J 07もしくはS J 08の炭化物層a、土器群GはS J 07・08よりも新しく火山灰の上にある焼土層、土器群Hは窯が上方調査区外にあると考えられるST 13覆土、土器群IはS J 20窯体内覆土となる。

土器群Aでは、壺蓋・壺・横瓶・甕が出土している。壺蓋には天井が平坦で高いタイプ(127)と天井が丸くやや低いタイプ(128)がある。壺には笠切りで大ぶりのタイプ(129)と小ぶりのタイプ(150)、回転糸切りで体部下端に笠削り(笠削りB技法)をもつタイプ(190)と、同じく笠削りをもたないタイプ(196)などがある。横瓶は、被蓋部に小さな窪みをもつ特徴がある(226)。甕の長胴タイプには口縁端部が立ち(219・225)砲弾型(224)で、器面が灰色(219)、橙色(224)、褐色(225)の違いがある。また小型で、口唇部が外傾するタイプがある(222)。これらの胎土は粗く、甕の224・225を除いた色調は全般的に灰～灰白色を呈している。

土器群Bでは、壺蓋・高台付壺・壺・壺蓋・壺・甕が出土している。壺蓋には天井が丸く高いタ

イブ(278)、天井が扁平なタイプ(285)などがある。环は浅く底面に渦をもつタイプである(296)。高台付环には体部下位が丸く、高台の断面形が三角形状のタイプ(290)がある。壺蓋には口唇部が丸く天井が平坦なタイプ(294)、天井のやや丸いタイプ(295)がある。長頸壺は成形時の三段構成が認められるタイプがある(297)。短頸壺には、口唇・高台部の先端が丸くおさめられ、それらの径が一致するタイプ(300)があり、広口壺は口唇部が垂直である(301)。甕は中型で、頸部の接合技法は、体部上端に口縁部下端を嵌め込み(頸部接合B技法)口唇部が垂直なタイプがある(302)。これらの胎土は、296と297を除くと精製された黄白色で、緑色の自然釉が付く。この胎土・色調の特徴から、1041も同類と考えられる。

土器群Cでは、坏蓋・高台付坏が出土している。坏蓋には、天井が丸く三角形状のタイプ(326)がある。高台付坏には、やや深く体部下端に削りをもつものがあり、高台の断面形が三角形状のタイプ(422)がある。これらの胎土は僅かに砂粒を含み、乳白色を呈している。624・625は、胎土・色調が類似している。

土器群Dでは、坏蓋・高台付坏・坏・壺蓋が出土している。坏蓋には、天井が低く扁平なタイプ(341)、天井が平坦でやや低いタイプ(343)がある。高台付坏には、高台が高く断面形が三角形状のタイプ(428)などがある。坏には底部が厚く深いタイプ(482)、底部が薄くやや浅いタイプ(503)などがある。壺蓋には、口唇部内側が鋭く突出するタイプ(529)などがある。これらの胎土には大き目の砂粒を含み、343、428タイプの坏蓋や高台付坏は、器面に炭素が付着したと思われる黒色部分をもち、灰色が斑状をなすものがほとんどである。

土器群Eでは、坏蓋・高台付坏・坏・壺蓋・壺・鉢・甕が出土している。坏蓋には天井が丸く三角形状のタイプ(629)、天井が丸くやや高いタイプ(635)、天井が丸く大ぶりのタイプ(632)、天井が低く平坦気味になるタイプ(657)などがある。高台付坏には、やや深く体部下端に削りをもち、高台断面形が三角形状のタイプ(663)、体部下端が丸く低い高台の断面形が方形状のタイプ(676)、深く大ぶりで沈線をもつタイプ(668)、高台が薄く高いタイプ(683)などがある。坏には底部が丸く口縁が内湾するタイプ(711)、底部が丸く口縁部先端が薄いタイプ(713)、底部が平坦でやや深いタイプ(718)、底部が平坦でやや浅いタイプ(719)などがある。壺蓋には、天井に稜をもち口唇部の丸いタイプ(722)、天井が平坦で口唇内部に稜をもつタイプ(723)、天井が丸く口唇部の丸いタイプ(721)がある。短頸壺は、口唇部が丸く肩の張りが緩いタイプ(724)である。鉢は頸部の断面形がくの字状で体部が膨らむタイプ(726)である。これらの胎土には僅かに砂粒を含む。また、635・632・676・668タイプの坏蓋と高台付坏は、器面に炭素が付着したと思われる黒色部分をもち、本上器群で主体を占めている。この黒色の特徴から、532・1227・1233・1237も同類と考えられる。

土器群Fでは、坏蓋・高台付坏・坏が出土している。坏蓋には天井がやや丸味を帯び端部が外

湾するタイプ(822)、天井が平坦で端は一旦水平気味になり外傾するタイプ(823)、天井の平坦部が狭く端部が内に短く折れるタイプ(833)がある。高台付坏は深く、高台の断面形が方形のタイプ(851)がある。坏にはやや深く体部から口縁部にかけて反るタイプ(881)、やや浅く体部下端に窓削りをもつタイプ(882)がある。これらの胎土には大き目の砂粒を含み、灰色系の色調をもつ。

土器群Gでは、坏蓋・高台付坏が出土している。坏蓋には、天井が丸く端部の屈折部で鋭い角が付くタイプ(838)、天井部が平坦気味で端部は一旦水平気味になり、屈折部に鋭い角が付くタイプ(834)、天井部は平坦でやや低く、天井部と端部の間が直線もしくは反るタイプ(843)、天井部は丸味を浴びて低く、端部は一旦水平気味から外傾するタイプ(845)などがある。高台付坏には、体部下端に窓削りをもち、高台の断面形が四角張るタイプ(855)、口縁部は内湾気味で高台が中央寄りに付くタイプ(863)、口縁部はやや大きく開いて、高台の断面形は外傾する内面に長い底辺をもち三角形状を示すタイプ(869)、口縁部はやや大きく開いて高台の先端内側が鋭く突出するタイプ(870)、体部下端に窓削りをもち高台先端が内に短く屈曲するタイプ(871)などがある。坏は口縁端部が薄く底部の丸いタイプ(885)がある。これらの胎土には大き目の砂粒を含み、淡黄色系の色調をもつ。

土器群Hでは、坏蓋・高台付杯・高台付壺・坏・壺が出土している。坏蓋は、天井が丸味のある平坦で、端部の先端が短いタイプ(991)がある。高台付杯には、口縁部が大きく開いて、断面方形の高台が先端外側で接地するタイプ(995)、口縁部はあまり開かず、断面方形の高台が先端外側で接地する深いタイプ(997)がある。高台付壺は口縁部があまり開かず、断面方形の高台は先端外側で接地する深いタイプ(996)がある。坏は、口縁部が薄く平底のタイプ(1000)がある。壺では、小型で回転糸切り痕をもち、口縁部は外反してから内傾するタイプ(1007)、中型で口唇部が窪んでいるタイプ(1010)がある。これらの胎土は僅かに砂粒を含み、スリップ状を呈した器面は灰白色系の色調をもつ。

土器群Iでは、坏蓋・高台付杯・坏・横瓶・壺が出土している。坏蓋では、回転糸切り痕をもつ天井部が平坦でやや低く、端部が内に屈折するタイプ(1400)、回転糸切り痕をもつ天井部は扁平で、端部が内に屈折するタイプ(1403)がある。高台付杯には、底面に回転糸切り痕をもち高台部が先端外側で接地するタイプ(1405)、底面に回転糸切り痕をもち高台は先端外側で接地する深いタイプ(1407)がある。坏は、底面に回転糸切り痕をもつ箱形のタイプ(1409)がある。横瓶は口唇部が窪んでいる(1410)特徴がある。壺には、口縁部が無文で口唇部内外とその中間が突出している中型タイプ(1411)、口縁部に波状櫛搔き文をもち、口唇部内外とその中間が突出している大型タイプ(1412)がある。これらの胎土には大き目の砂粒を含み、1405の乳白色を除くと灰色系の色調を

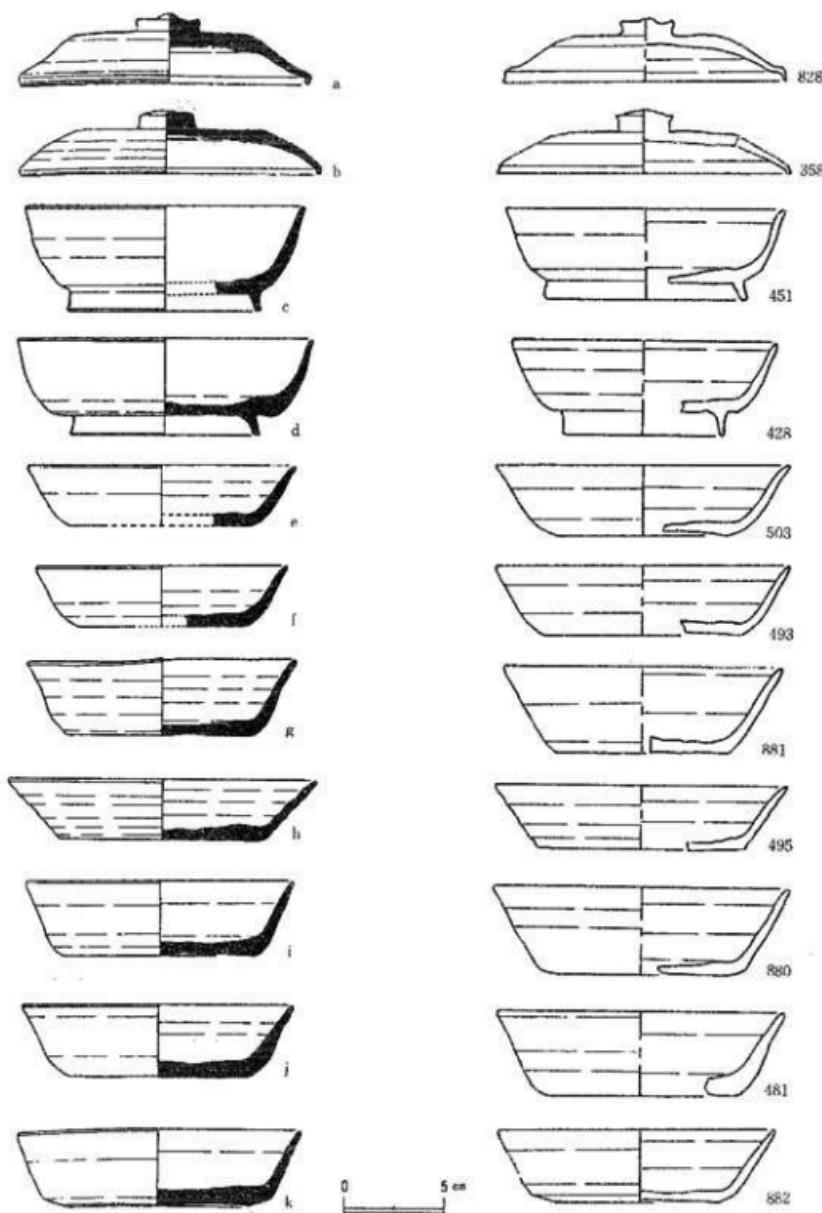
もつ。以上、各括出土土器群ごとに出土須恵器の特徴をまとめたものであるが、次にこれを基にして竹原塗跡出土須恵器のおおまかな変遷を検討してみる。

土器群Bは灰原S T12出土の土器群で、S T12はB地区の重複する灰原群の中で最下層に存在することから、竹原塗跡で最も古いと考えられる。S T12とその周辺における土層の堆積状況は、第26図に示した通りである。これによると、最下層の灰原S T12(⑤)の直上には、S J 05 f の製品と考えられる乳白色を呈する土器やS T17と同じく炭素が付着したと考えられる黒色の土器を含んでいる層(③・④)があり、さらにその上には地山排土を挟んで、S J 05 e の製品である黒色部分がありかつ灰色部分が斑状を呈する土器などを含む層(①)がある。①、③・④、⑤に含まれる土器群の在り方は、以下のようである。③・④層中から⑤層の土器の一部が出土することがあっても、⑤層中から③・④層の土器が出土することはなく、また①層の土器が③・④・⑤層から出土することもない。したがって以上の層位関係から、S T12(土器群B)→(以下矢印は前後関係を示し、左が古い。また、カッコ付の矢印は推定である)S J 05 f (土器群C)・S T17(土器群E)→S J 05 e (土器群D)の変遷が成立つ。また、S T17の土器群中には、629と663タイプの杯蓋と高台付杯が存在している。これらは、著しく焼けひずみただれた状態であることから、焼台として使用されたと判断される資料である。そして、これらと形態・技法の類似を指摘できるのがS J 05 f の土器群Cである。したがって、S J 05 f (→) S T17の関係が想定できる。一方S J 07とS T35の関係は、S J 07(土器群F)→S T35(土器群G)として明白である。以上の層位における遺物の関係や造構の前後関係は、各土器群の変遷を示すことになりこれらを整理すると、土器群B→土器群C→土器群D・Eと、土器群F→土器群Gの変遷として捉えることができる。一方土器群A・H・Iは回転糸切り技法を伴う(Aの187、Hの1007、Iの1400)傾向に加えて、杯蓋端部手前で極端に反る(Aの127・128、Hの991・992、Iの1400・1403)という特徴がある。これに対して土器群D・Gは回転糸切り技法を含まず、杯蓋端部手前部分だけで反るのは稀で(845)、極端な反りを示さない(Dの341・342、Gの838・840)ものがほとんどである。この形態・技法上の特徴から土器群A・H・Iは土器群D・Gよりも新しい。土器群A・H・Iの関係については、土器群Iの杯蓋1400などの端部が明瞭に屈折するものだけなのに対し、土器群Aと同時期と考えられる杯蓋1・2と土器群Hの杯蓋991・992は明瞭な屈折を示さず屈折部退化タイプとして捉えられる。また土器群Iの杯には、箱型に近いタイプを含むのに対して、土器群A・Hにはこれを含まない。これらのことから、土器群I→土器群A・Hの変遷が考えられる。

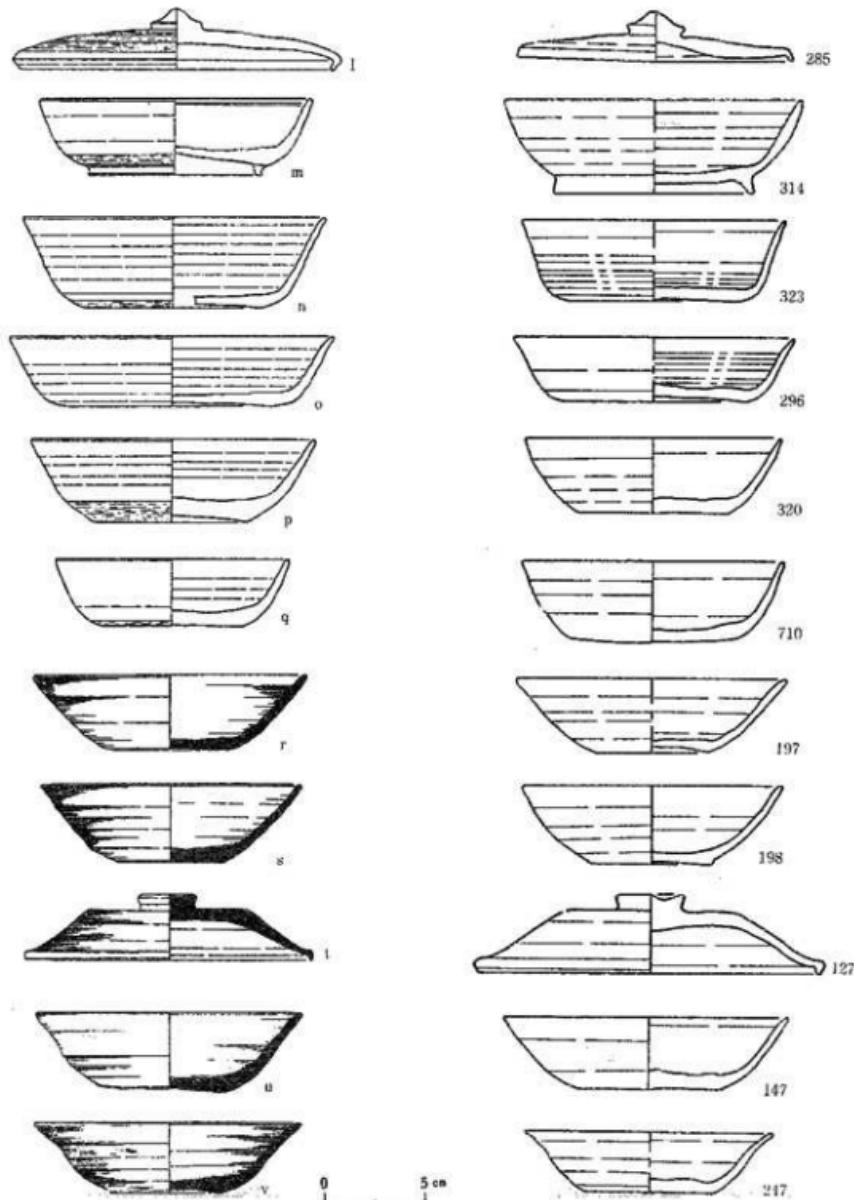
次に変遷がある土器群の中で、併行する土器群を見い出すことができないであろうか。この関係を捉えるために、山形県西村山郡河北町に所在する不動木遺跡⁽¹²²⁾のSD Iから出土した須恵器の比較検討を行ってみたい。この遺構からは、多量の須恵器と土師器が共存して出土した。

第155図の左側には不動木遺跡出土須恵器、右側には竹原窯跡出土須恵器を並べてある。aと828は、天井が平坦でやや高い点、中心から稜までが1/2口徑強となる点で類似し、稜から端部にかけて反る特徴をもつ。bと358も天井や稜の在り方が類似し、稜から端部にかけては膨らむか直線的である。cと451は高台の形態と、そこから体部へ移行する部分が丸味をもち類似する。dと428は高台が底部端から内側に入り、高い三角高台を有する点で極めて特徴的である。また、428のタイプは底面から体部の移行部が角張り、dにもその特徴がある。e・f・gと503・493・881は、体部下位でやや膨らみ口縁部がやや外反する。h・i・j・kと495・880・481・882は体部から口縁にかけて直線的か反ることで類似し、lと882は底部と体部の境に面を成している。また輪轂からの切り離しは、すべて回転窓切りである。このように、不動木遺跡出土須恵器と竹原窯跡のものは、形態・技法上に類似性がある。他方、不動木遺跡出土の須恵器はSD Iの单一層から一括出土したものがほとんどで、短期間に集中的に投棄されたものと考えられている。年代は共伴した土器群から、SD Iを国分寺下層式の終末(8世紀末)にとらえ、土器については古手のものを考慮して奈良時代後半の土器群としている。しかし、遺物が短期間に投棄されたことを考慮すれば8世紀の後葉を中心とする時期を考えて良いと思われる。一方、竹原窯跡出土須恵器の中で、828・881・880・882は土器群F、428・503は土器群D、358・451・493・495・481は出土層位や形態・色調からS J 05 eよりも新しいS J 05のいずれかの製品と判断されるものである。したがって、土器群D・Fは不動木遺跡出土土器群からおよそ8世紀後葉の時期が想定でき、両者はほぼ併行すると考えられる。以上より、竹原窯跡における土器群の変遷は、土器群B→土器群C(→)土器群E→土器群D・F→土器群G(→)土器群I(→)土器群A・Hと考えられる。

次に、土器群の年代について考えてみたい。竹原窯跡の上限については、宮城県利府町に所在する硯沢窯跡を参考にする(第156図)。l～qは、硯沢窯跡で8世紀中葉に位置づけられている資料である。これらは大きさが異なるものの土器群B(285・296)およびこれらと併行する時期と考えられる土器(314・323・320)と類似する点がある。lと285のつまみは、頭が丸い三角形でリング状の縁があり短く立つ点や天井部の削りが深い点など、両者の緊密さがうかがえる。mと314は体部に削りを施し、底部から口縁部まで内湾する形態や高台が三角形状を呈する点で類似している。n・oと323・296は、体部下半がやや膨らみ体部から口縁にかけて外反する深いタイプと浅いタイプである。このうち、oを除くと体部下端に回転窓削りを施している。pと320はやや深く内湾し、体部下端にやはり回転窓削りを施している。このような形態や技法上の特徴から、土器群Bの年代は8世紀中葉と考えられる。また、qと土器群Eの710は、710の体部下端に削りを施していないものの形態が類似するため、これも8世紀中葉の中でも後出の可能性があり、土器群Eを第3四半期を中心とする時期に考えておく。



第155図 須恵器の比較(1)



第156図 須恵器の比較(2)

下限については、山形県東置賜郡川西町に所在する道伝遺跡を参考にする(第156図)。この遺跡のSD1出土土器は、2層から古い方へ3層・4層上面・4層下面・5層上面・5層下面と土器が層位的に出土し、4層からは寛平8年(896)と記された木筒が検出されている。この4層中の回転糸切り底と思われる須恵器壺r(4層上面)・s(4層下面)と壺蓋t(4層下面)は、SK02出土の回転糸切り底である壺197・198と同壺蓋127に形態が類似する。壺では、底径が口径の1/2弱でやや深く、体部が緩く弯曲している点、壺蓋は天井がやや高く平坦で、縁から端部にかけて反る特徴のある点である。また、4層よりも古い5層上面のものには窓切りと思われる壺u・vがあり、それぞれSK02の147・ST03の247と類似している。ST03はSJ01の製品で、SK02出土須恵器とはほぼ併行する時期である。このように比較すると土器群AはSD1の5層上面や4層から出土した遺物とほぼ同時期に対比することができ、土器群Aの年代を寛平8年(896)をそう翻らない9世紀後葉と考えることができる。

また、土器群Gの高台付壺855・857と、SJ07に関する炭化物層bから出土した849とは、大きく開く口縁部や断面が方形状の高台、それに体部下端に窓削りを施すなどの点で類似し、形態・技法上近い関係にあると考えられる。このことから土器群Gは9世紀前葉を下る時期とは考えられず、8世紀末葉の可能性もあるもの---応9世紀前葉と考えておきたい。土器群Iについては、9世紀中葉かと思われるが不明である。

以上を整理すると、土器群B・C・Eは8世紀中葉～第3四半期にかけての時期、土器群D・Fは8世紀後葉、土器群G・Iは9世紀前葉～中葉、土器群A・Hは9世紀後葉の時期と考えることができ、これら4つの時期をおおまかに竹原I～IV期として捉えることにしたい。これら4時期のうち、特に竹原I期の土器には、金属器模倣タイプ(668)や硯・短頭壺など郡衙や他の官衙などに供給されたと思われる製品が多い。

以上、竹原窯跡に関する成果と問題を4点に絞って述べてきたが、最後に若干のまとめを行う。竹原窯跡は、肥沃な横手盆地を見わたせる狭長な独立丘西端に位置した、須恵器生産を専らとする窯跡群である。窯跡の数は、調査区内から検出された灰原(窯体が斜面上方にあると^(註)考えられる)やA・B地区の反対側(東側)斜面に存在した2基の窯跡などから推定すると、この丘陵には少なくとも10基以上存在していたことになる。さらに、調査区の北西端から北西約50mに存在する上猪岡遺跡からも平安時代の窯が1基検出されていることから、隣接する丘陵斜面も含めると相当数の窯跡が存在し、中山丘陵中の各窯跡支群の中でも、最も規模の大きな須恵器生産地の一つと考えられる。

また、竹原窯跡における各窯跡の在り方は、奈良時代のものはB地区に集中し、平安時代のものはA地区(SJ01)、B地区(ST13、ST30などの斜面上方に存在すると考えられる窯)、

C地区(SJ20)と散在する。つまり、奈良時代の局所集中的な在り方に対して、平安時代では散発的な在り方を示している。平安時代の在り方は、富ヶ沢窯跡支群や西ヶ沢窯跡支群の在り方と共にしている。

一方、横手盆地における奈良時代中葉もしくは後葉にかけての窯跡は、奈良時代中葉以降とした竹原窯跡と、同窯西方で雄物川を越えた出羽山地東端に位置する末館窯跡I・II^(註6)、の2つである。そして、『統日本紀』の天平寶字三年9月己丑条には「始置出羽国雄勝平鹿二郡」とあり、この雄勝・平鹿両郡の郡衙は横手盆地南部にあると考えられている。したがって、これら2地域の窯跡が各郡域における須恵器生産の拠点であった可能性がある。また、同条には「造陸奥國桃生城出羽国雄勝城」と見え、これらの窯跡が雄勝城の成立する頃と併行することから、竹原窯跡もその供給地としての一端を担った可能性も考えられる。いづれにしても、竹原窯跡出土須恵器の中には、円面鏡、鉄鉢、四耳壺などのすぐれて官衙的な色彩をもつ器種に恵まれているものを含み、今後、消費地遺跡の調査が進展することによって竹原窯跡の性格がより具体化するはずである。

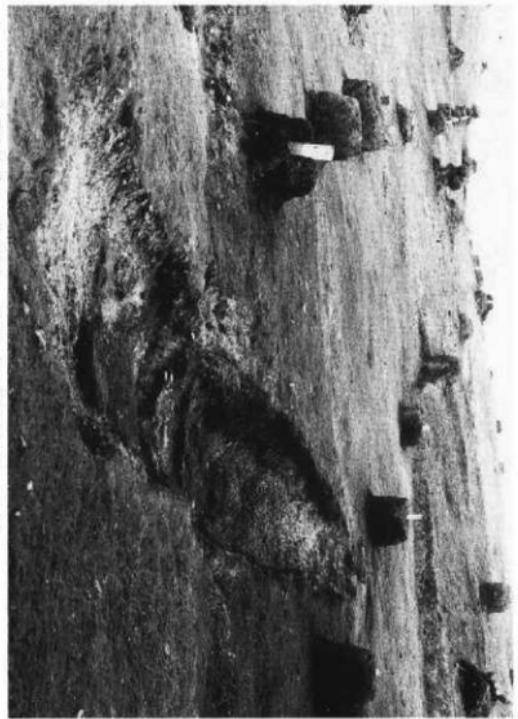
- 註1 竹原窯跡出土須恵器は、還元焰焼成による黒・灰色系のものと酸化焰焼成と考えられる白色・橙色系のものとに分けることができる。後者は、その焼成の在り方から厳密には還元状態の色調をもつ須恵器の範疇を逸脱する可能性を含むが、本遺跡での窯の実態は不明である。したがって、ここではその問題には触れず、前者と形態・技法が類似する点から後者も須恵器として扱う。
- 註2 山形県教育委員会『不動木遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第100集 1986(昭和61年)
- 註3 宮城県教育委員会『覗沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集 1987(昭和62年)
- 註4 川西町教育委員会『遺伝遺跡発掘調査報告書』川西町埋蔵文化財調査報告書第2集 1981(昭和56年)
- 註5 昭和58年、秋田県教育委員会が分布調査を行った際に確認されたが、現在はぶどう畑造成のため消滅している。
- 註6 本書、歴史的環境(P3)の項で触れてある。なお、富ヶ沢窯跡(A~C)については、1990年秋田県教育委員会によって調査され、窯跡4基が検出されている。
- 註7 『払田橋跡 I-政府跡-』(1985)のP119~145の間で、実測図を掲載して紹介している。この中で、同窯の年代の上限を8世紀中葉としているが、竹原窯跡I・II期の遺物との比較から、古く遡っても8世紀第3四半期と考えられる。
- 註8 新野直吉「秋田城・雄勝城と払田橋」『古代史上の秋田』秋田魁新報社 1981(昭和56年)



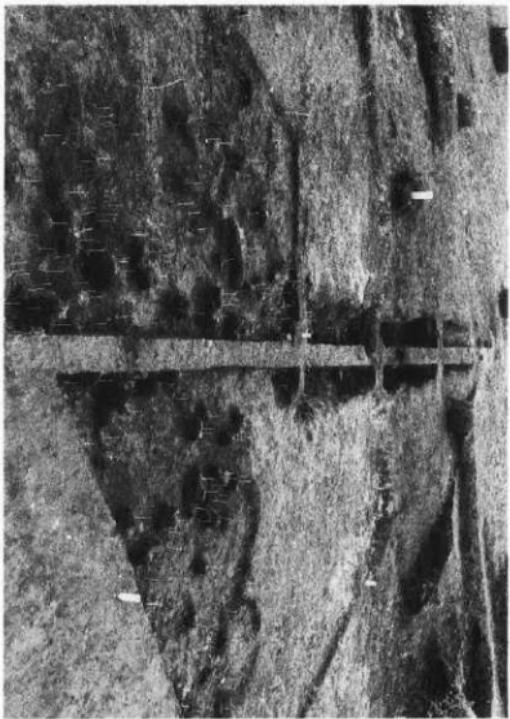
1 A地区調査風景(南東D) プレハブ右斜面がB地区、後ろ斜面がC地区。



2 S J01・S K02全景(西D) S J01の左側には、失敗品を捨てたS K02がある。



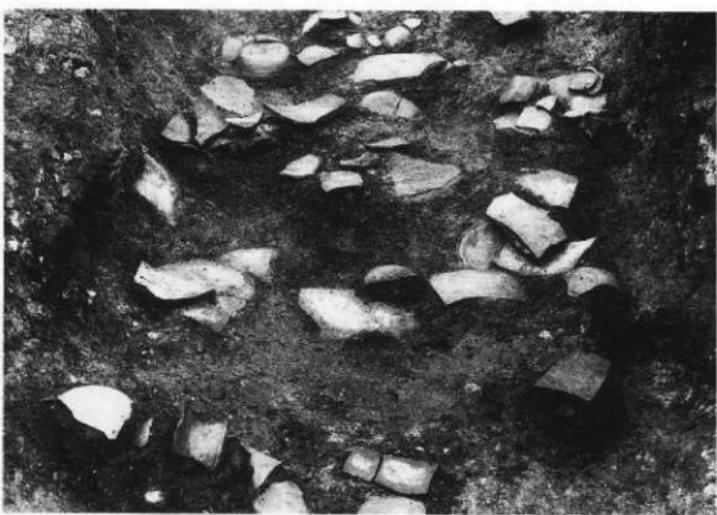
1 SJ01全景(南西) 始成部は、最大30°の角度で傾斜している。



2 SJ01・ST03調査状況(西) 灰原からは、小さな破片が多く出土した。



1 S J01近景(北西D) 右壁下の段はS J01 bの床面である。



2 S J01 a 遺物出土状況(西D) 床面出土遺物。ほとんどは焼台。

図

版

4



1 SK02遺物出土状況(東D) 土坑状の穴はアンカーによる搅乱。



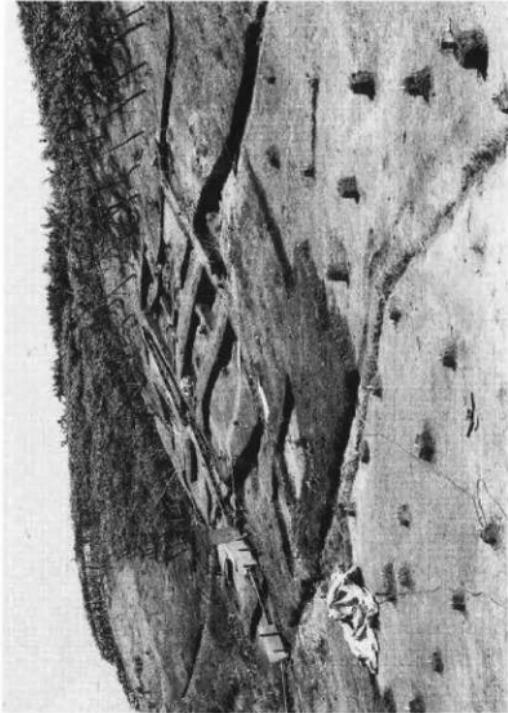
2 SK02近景(北D) 白いのが、火山灰で約15cmの厚さがある。



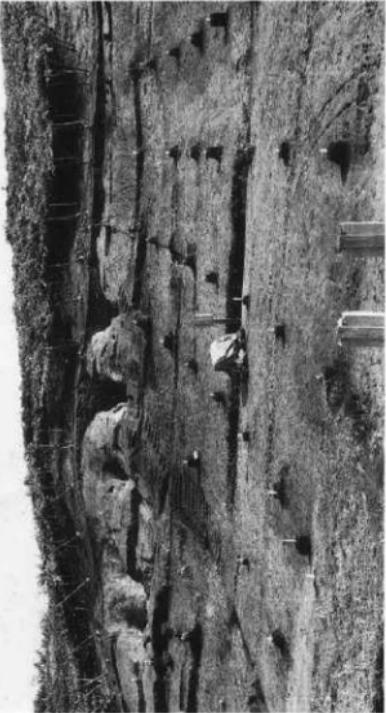
1 S N04断面(北西) 白いのが火山灰で約15cmの厚さがある。



2 S N04底面(南西) 底面には炭化物が光輝していた。



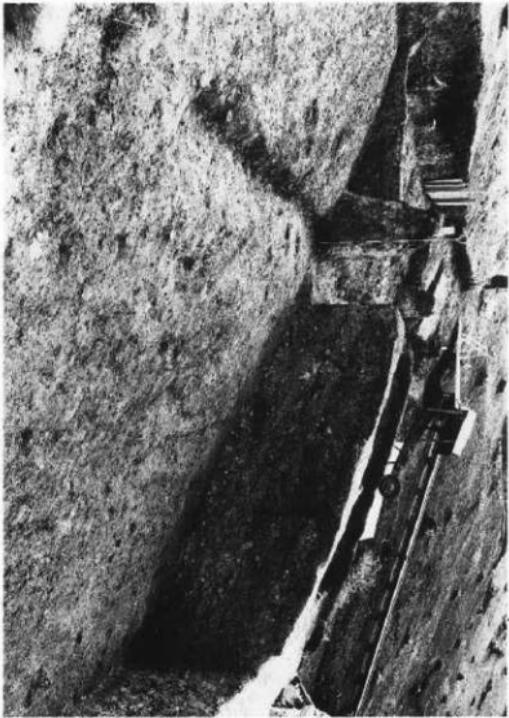
1 B 地区風景(1)(南△) 斜面の黒い帯はトレンチの断面。



2 B 地区風景(2)(南西△) 斜面尾根状部分が S X 29、その右側に S J 05・07が並ぶ。



1 B地区灰岩断面(西) S J 05-07下方の灰岩。断面黒は、炭化物層。



2 B地区塊山堆土断面(北西) S T13-15下方にある塊山堆土。



1 ST12遺物出土状況(1)(西側) L Q56区斜面の遺物出土状況。



2 ST12遺物出土状況(2)(北側) L P56区。中央は蓋(294)、左上は甕(302)である。



1 S T12遺物出土状況(3)(南東△) L P 56[斜面の遺物出土状況。



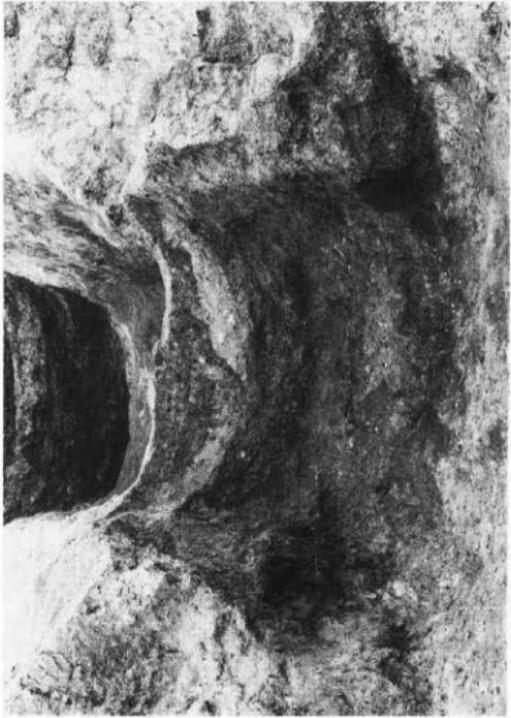
2 S T12遺物出土状況(4)(南東△) L P 56区。中央は杯蓋(278)右側は片(320)である。



1 S J05-06-07-08全景(南西D) 左側がS J05-06、右側がS J07-08である。



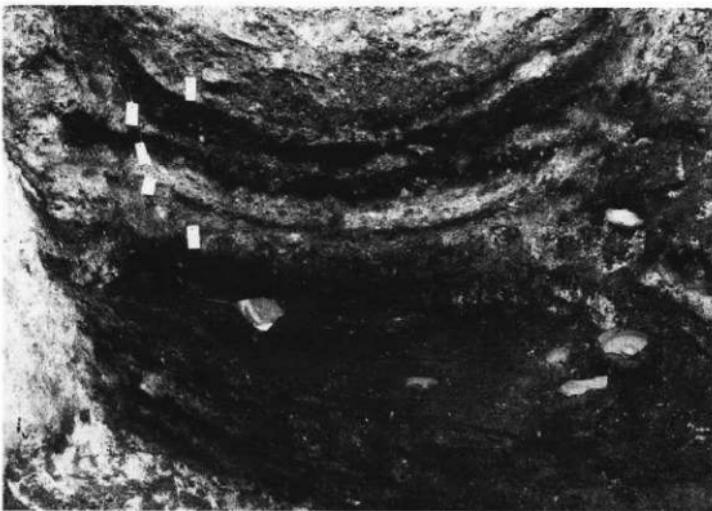
2 S J05-06全景(南西D) 焙口はS J05 fで、その右脇にS J06がある。



1 S J 05横断面(1)(南西△) 断面に白く見えるのが、地山耕土である。



2 S J 05縦断面(西△) 白いのが地山耕土で、斜面に沿って連続している。



1 S J05横断面(2)(南) 挿業面を示す炭化物層が重っている。



2 S J05遺物出土状況(北西) 遺物の下には炭化物が重なっている。



1 S J05 e 遺物出土状況(北西) 一括土器群Dとした遺物である。



2 S J05 遺物出土状況(北) 床に近いが、S J05 e 以後の蓋である。



1 S J05 f 架構材(1)
(南東) >
周辺は切入粘土
である。



2 S J05 f 架構材(2)
(南東) >
炭化材が側壁に
当接している。



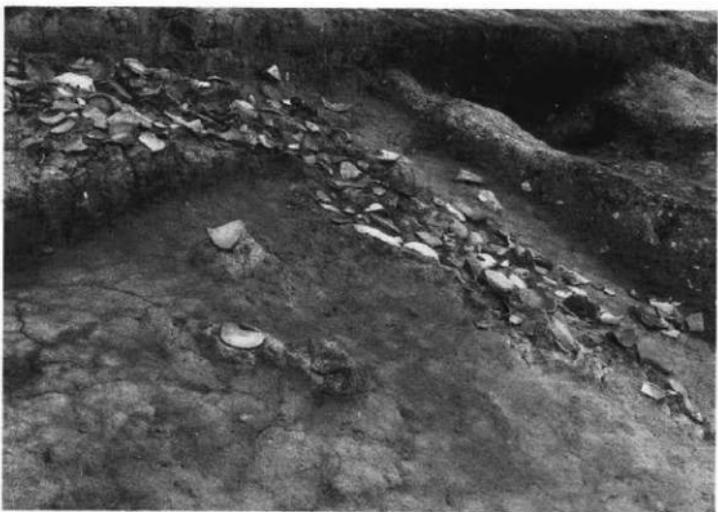
3 S J05 f 架構材(3)
(北西) >



1 SJ05 f 焚口付近遺物出土状況(南西△) 中央が一括土器群Cとした遺物である。



2 SJ05 f 覆土遺物出土状況(南△) SJ05 f の製品と考えられる土器である。



1 ST17遺物出土状況(1)(北西)> 上面は地山耕土で覆われていた。



2 ST17遺物出土状況(2)(南西)> 一括土器群Eとした遺物である。



1 SJ 05-07と灰原(南▷) 左側がSJ 05、右側がSJ 07である。



2 SJ 07-08断面(南西▷) 左側がSJ 07、右側がSJ 08である。



1 SJ07縦断面(1)(東▷) 中央の白いのが火山灰、床面の白いのは地山である。



2 SJ07縦断面(2)(南西▷) 炭化物層と地山堆土が互層を成している。



1 S T17・18遺物出土状況(南西△) 成化物と地山伴土が複雑に混じる。



2 S T18遺物出土状況(東△) L056区。地山伴土から蓋(885)が出土。



1 ST36と地山排土(南西) 地山排土は約90cmの厚さがある。



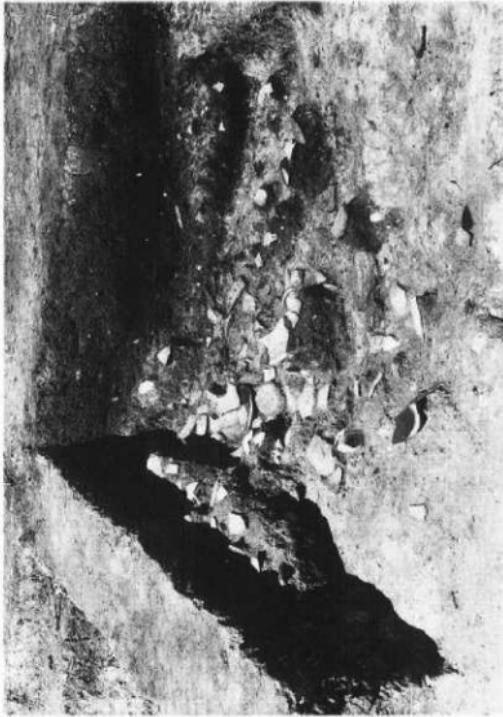
2 ST36遺物出土状況(南西) 右上が茶褐色土上面、左下が赤色地山土出土土器。



1 ST 35遺物出土状況(南西D) 中央下に白く見えるのが火山灰。



2 ST 35断面(束D) 右上の黒が焼土層、下の白が火山灰。



1 S T13遺物出土状況(南東△) 一括土器群Hの土器を含んでいる。



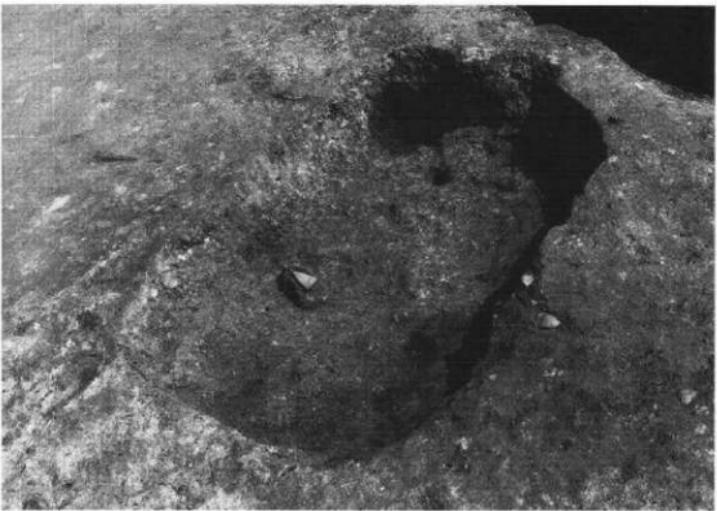
2 S T13全景(南西△) 地山掛土の上に溝状に造っている。



1 S T14遺物出土状況(1)(東) 左側トレンチの底面が自然堆積土である。



2 S T14遺物出土状況(2)(北西) 右側上の角がS T15である。



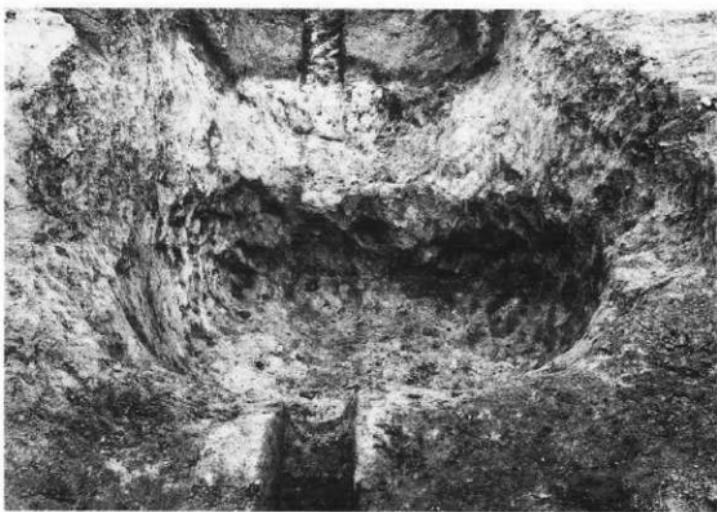
1 SN11全景(南) 底面は、炭化物で覆われていた。



2 SN11断面(南東) 地山排土は約1mの厚さがある。



1 SK 37断面(南東) 覆土上面がSJ 05 fの床で、その焚口に当っている。



2 SK 37全景(南西) 底面から壁面にかけて丸味をもっている。



1 SK16断面(南東△) 左側が斜面下方で、右側が斜面上方である。



2 SK16全景(南西△) 手前が斜面下方で、奥に傾斜している。



1 SX09・10全景(南西D) SX09の溝状部分は極く傾斜している。



2 SX09・10覆土断面(北東D) SX09がSX10の火山灰を切っている。



1 SX09調査部分全景(南西) 手斧の跡が明瞭に認められる。



2 SX09調査部分入口(北東) 右側壁の下部は、僅に段状を呈している。



1 SX29全景(1)(南西D) 右の穴と手前はトレンチである。



2 SX29横断面(南西D) 手前床面には須恵器が敷かれている。



1 SX29全景(2)(南△) 斜面の泥根状部分に透らわれている。



2 SX29遺物出土状況(北西△) 遺物の下には炭化物が顯著である。



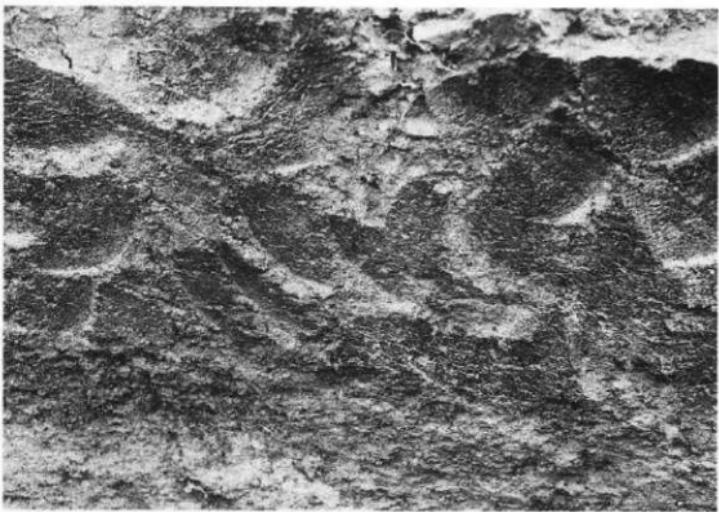
I S.J. 20全景(南西)> 燐成面は最大25°の角度で傾斜している。



2 S.J. 20窓口付近断面(西)> 白く覆っているのが火山灰である。



1 SJ20全景(西▷) この斜面は礫を多く含んでいる。



2 SJ20工具痕(北▷) 工具の幅は、10cm前後である。



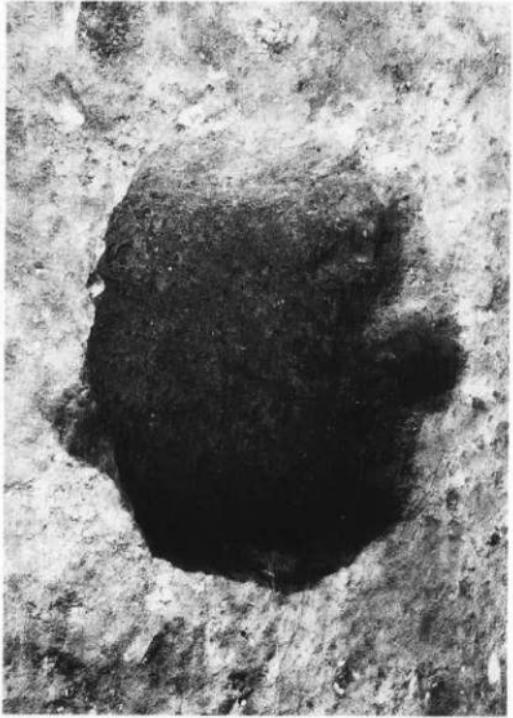
1 S 127全景(北) 右側の壁はトレンチで削平されている。



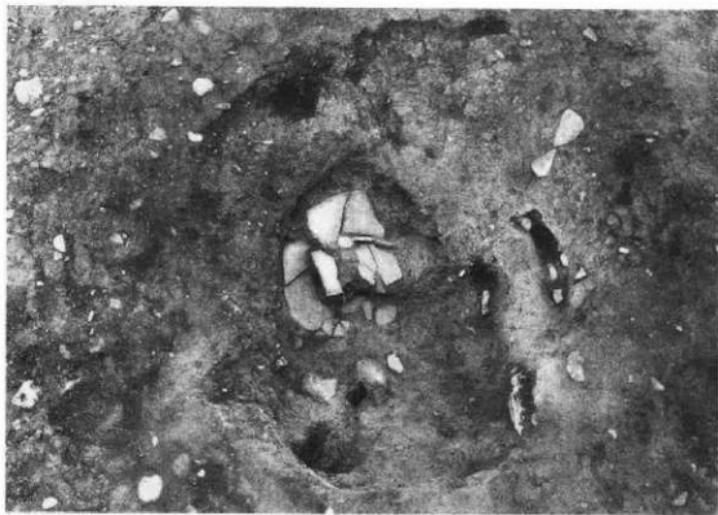
2 S 127カマド(南) 須恵器が支脚に転用されている。



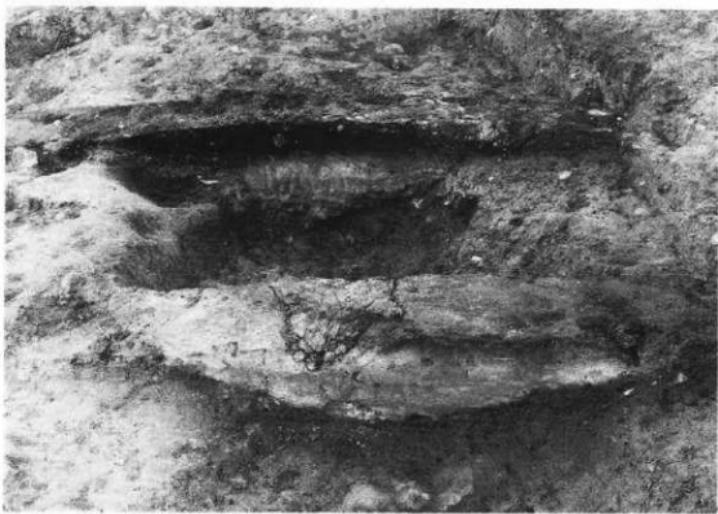
1 SN22断面(南) 白く見えるのが厚さ10mmの火山灰である。



2 SN22全景(北) 壁の1つには焼けたビットがある。



1 SK21全景(西▷) 壺の破片が出土している。



2 SK25断面(南東▷) 手前と奥の白い部分が火山灰である。



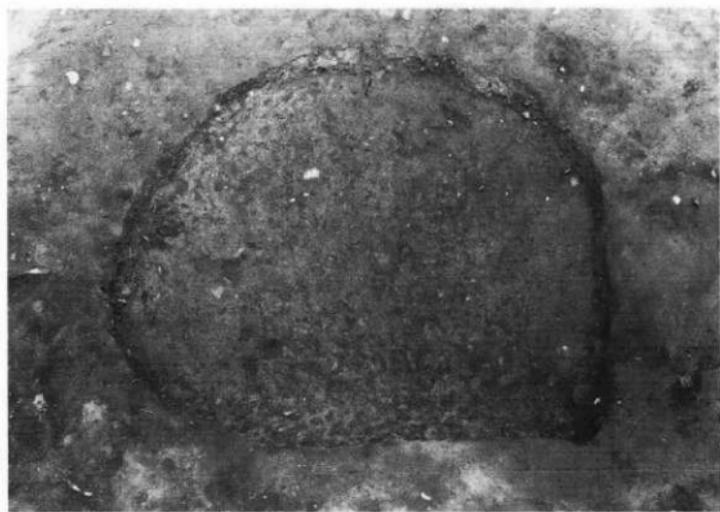
1 SK23断面(南東) 遺物の上に火山灰が堆積している。



2 SK23全景(南西) 遺物は底面下方に集中している。



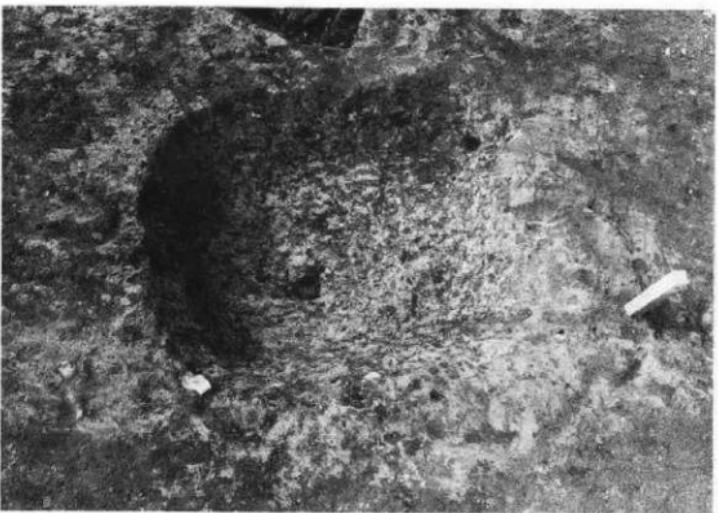
1 SK24断面(南) 底面下方に遺物が集中している。



2 SK24全景(西) 下が斜面下方で、上が斜面上方である。



1 SK31砾出土状況(南東D) 犬大前後の砾が集中している。



2 SK31全景(北東D) 底面は平坦である。



1 SK 32断面(北東▷) 碓が集中している。



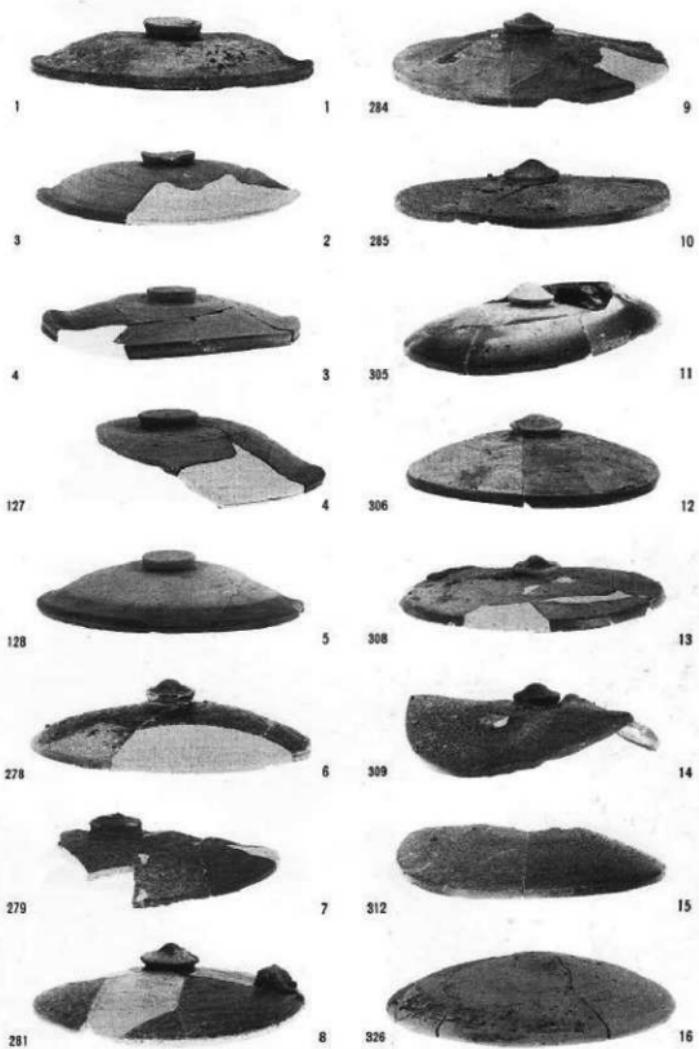
2 SK 33断面(西▷) 底面から壁にかけて緩く弯曲する。



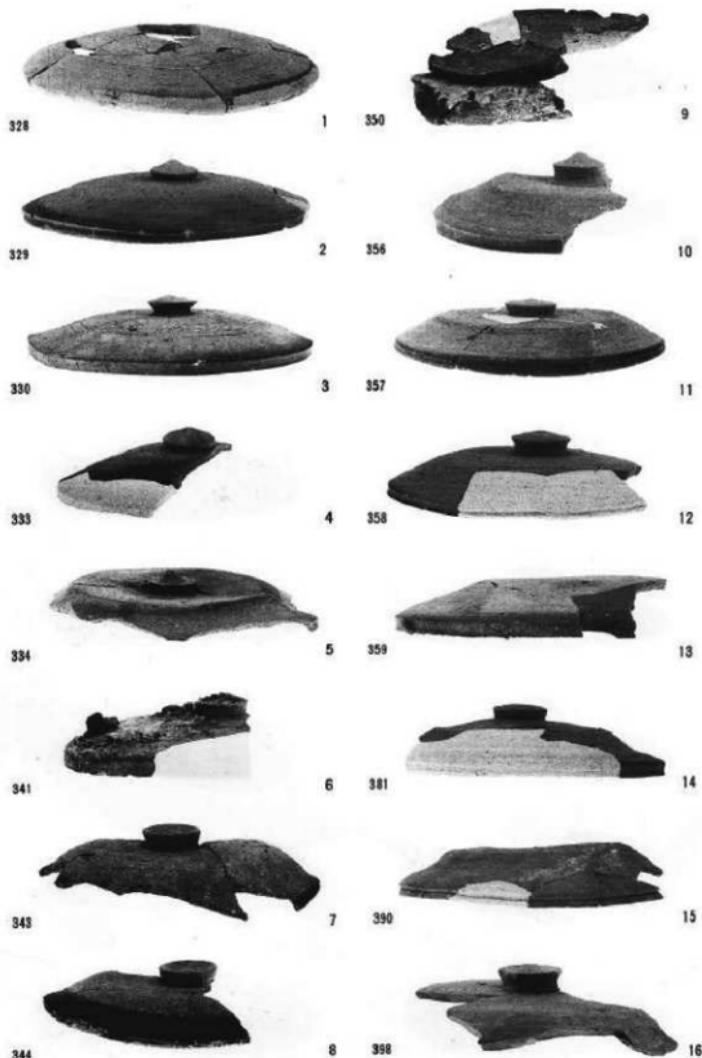
1 剥ぎ取り風景(1)(南西) S J 05横断面を平らにしている。



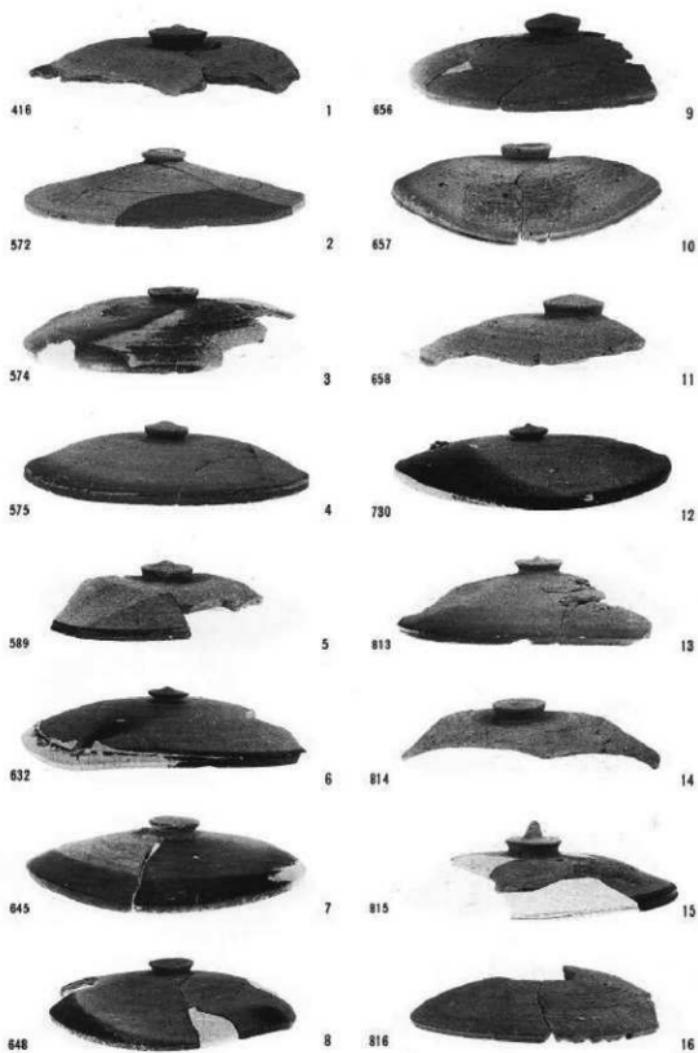
2 剥ぎ取り風景(2)(南西) 壁面の寒冷沙に薬品を塗り込んでいる。



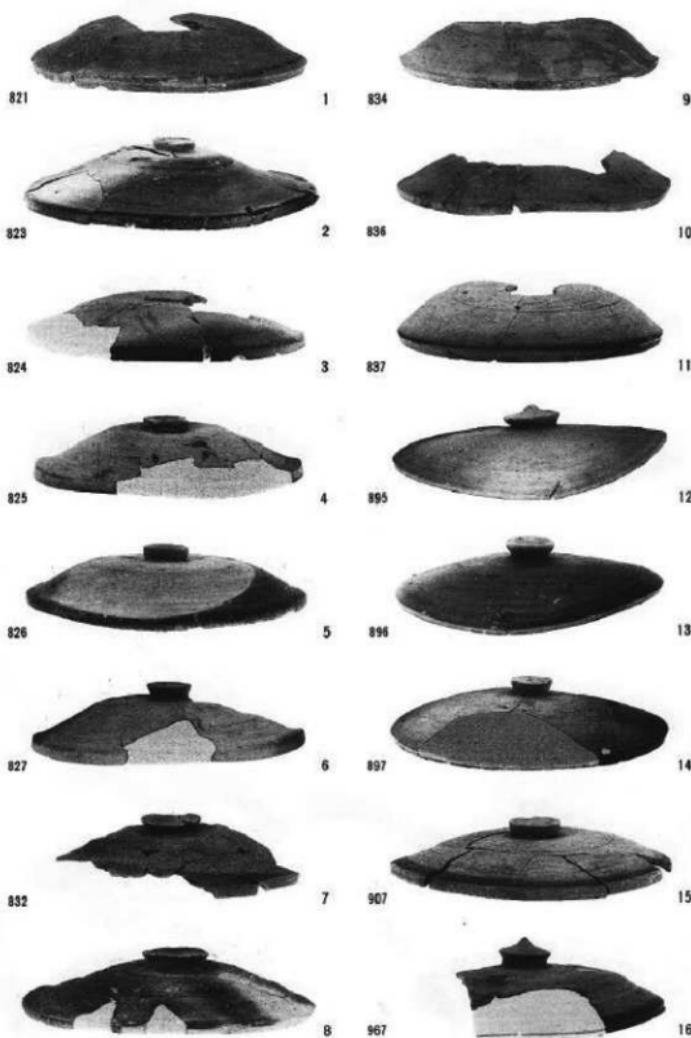
出土遺物(1) 环蓋



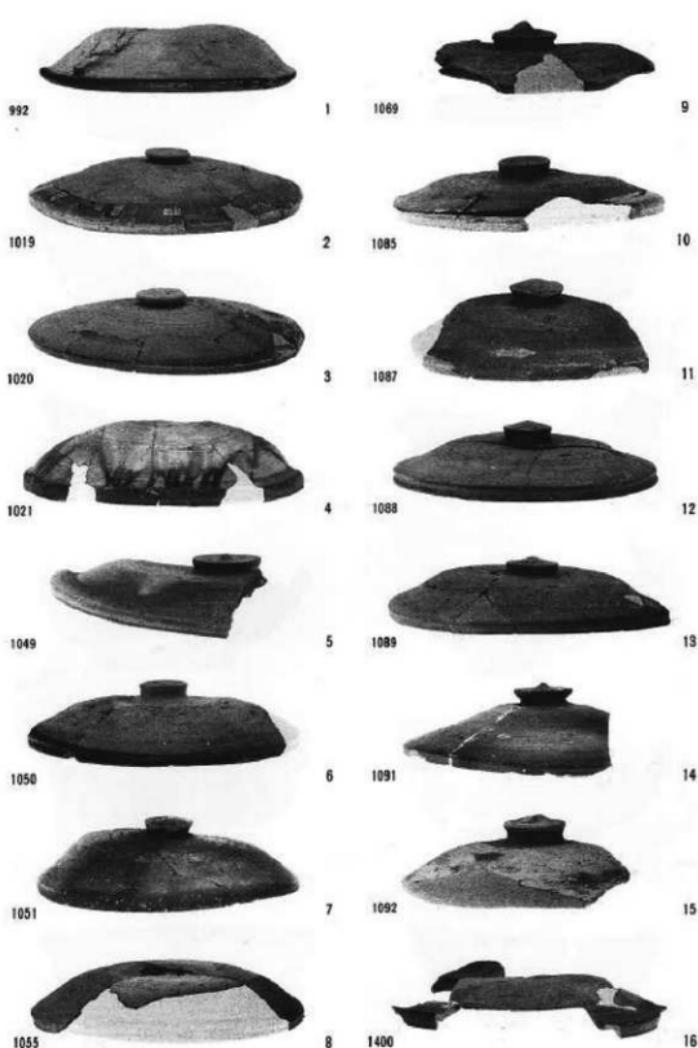
出土遺物(2) 壺蓋



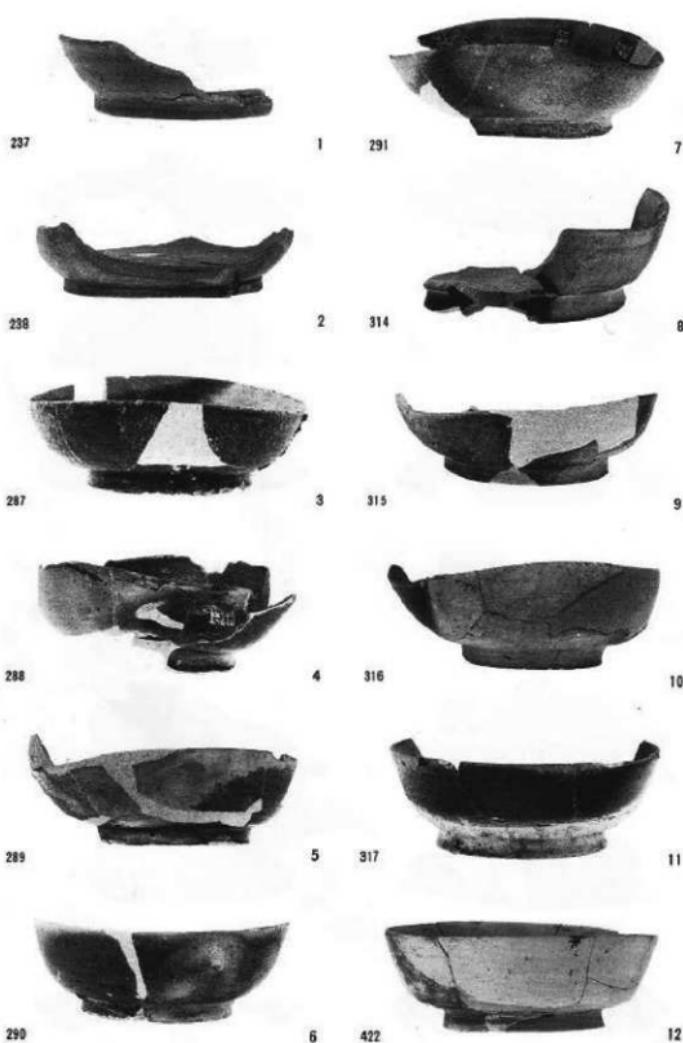
出土遺物(3) 壺蓋



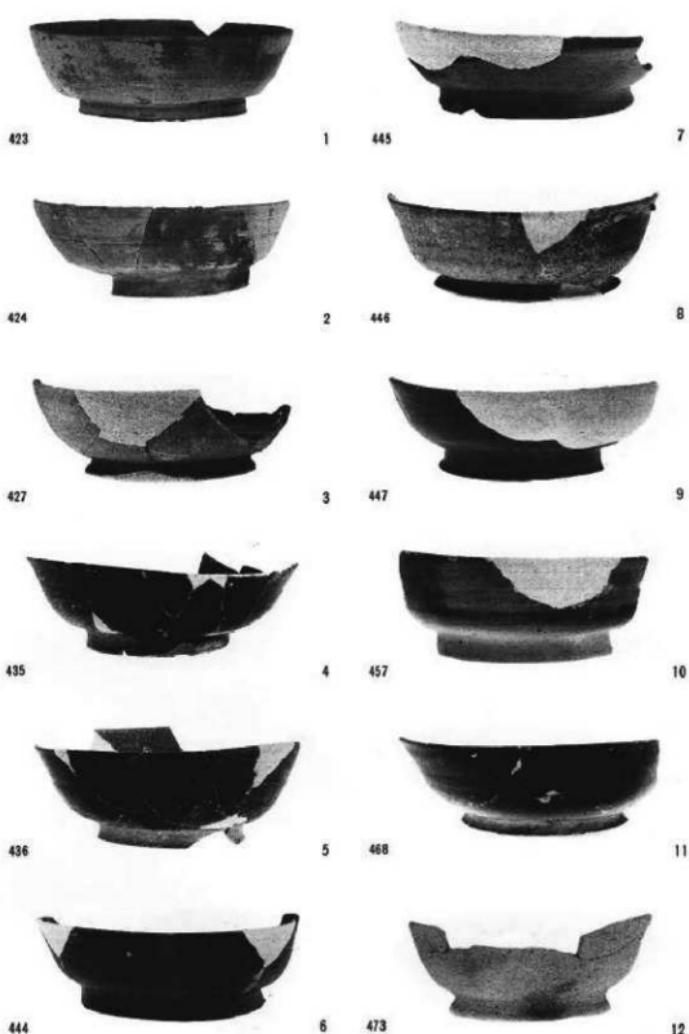
出土遺物(4) 瓶蓋



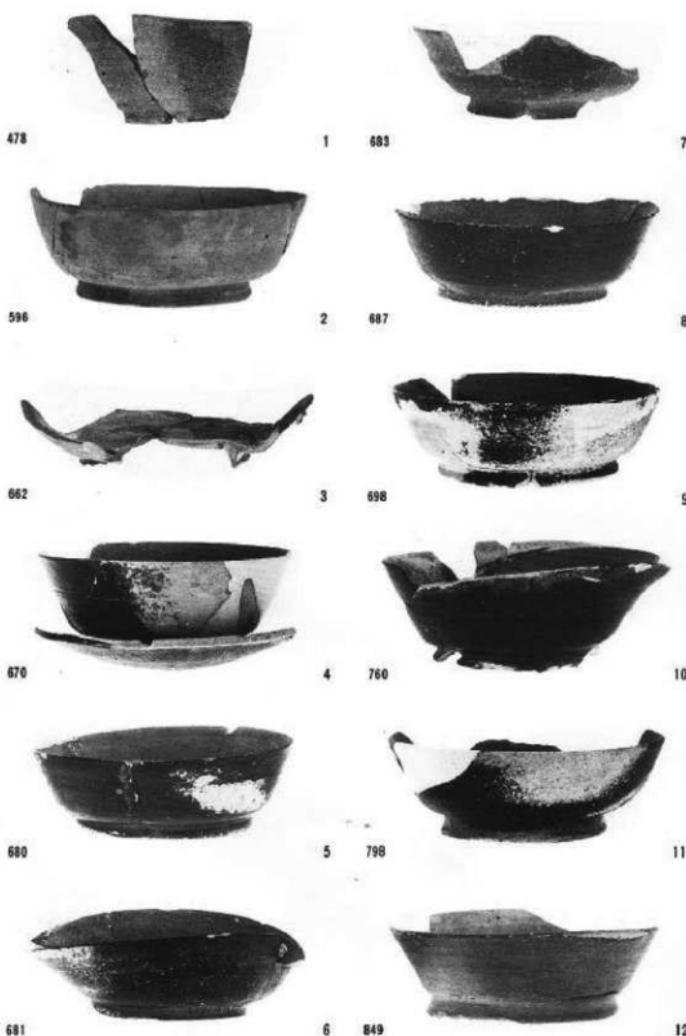
出土遺物(5) 壺蓋



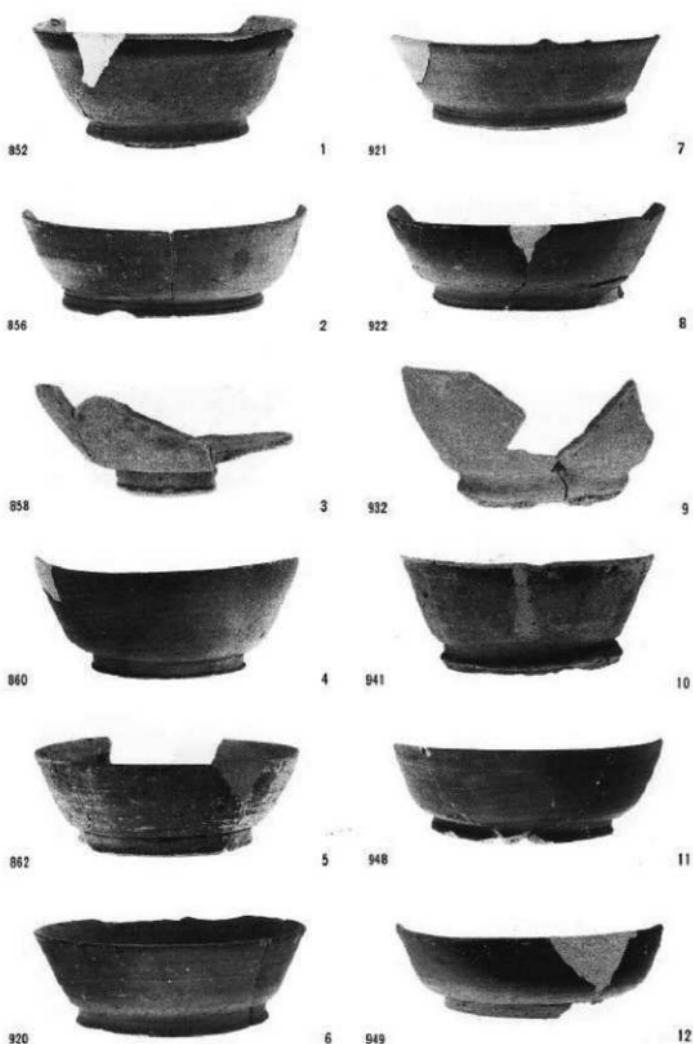
出土遺物(6) 高台付环



出土遺物(7) 高台付杯



出土遺物(8) 高台付环



出土遺物(9) 高台付杯



1157



1 1164

7

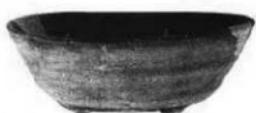


1157



2 1165

8



1159

3 1173

9



1160

4 1176

10



1161

5 1407

11



1163

6 1429

12

出土遺物(10) 高台付杯



20



153

7



41



2 165

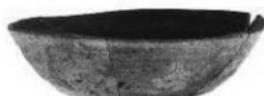
8



135

3 171

9



144

4 178

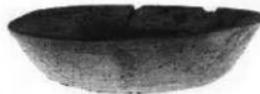
10



145

5 180

11

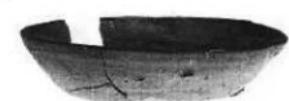


152

6 181

12

出土遺物(11) 簋



182

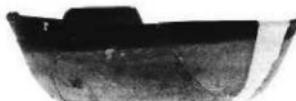


1 322

7



188



2 483

8



193

3 487

9



196

4 488

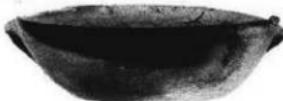
10



296

5 492

11



320

6 501

12

出土遺物(12) 杯



505



1 714

7



508



2 717

8



515



3 802

9



711



4 803

10



712



5 807

11



713



6 878

12

出土遺物(13) 壺



861



1 1002

7



958

2 1005

8



964

3 1062

9



972

4 1063

10



979

5 1190

11



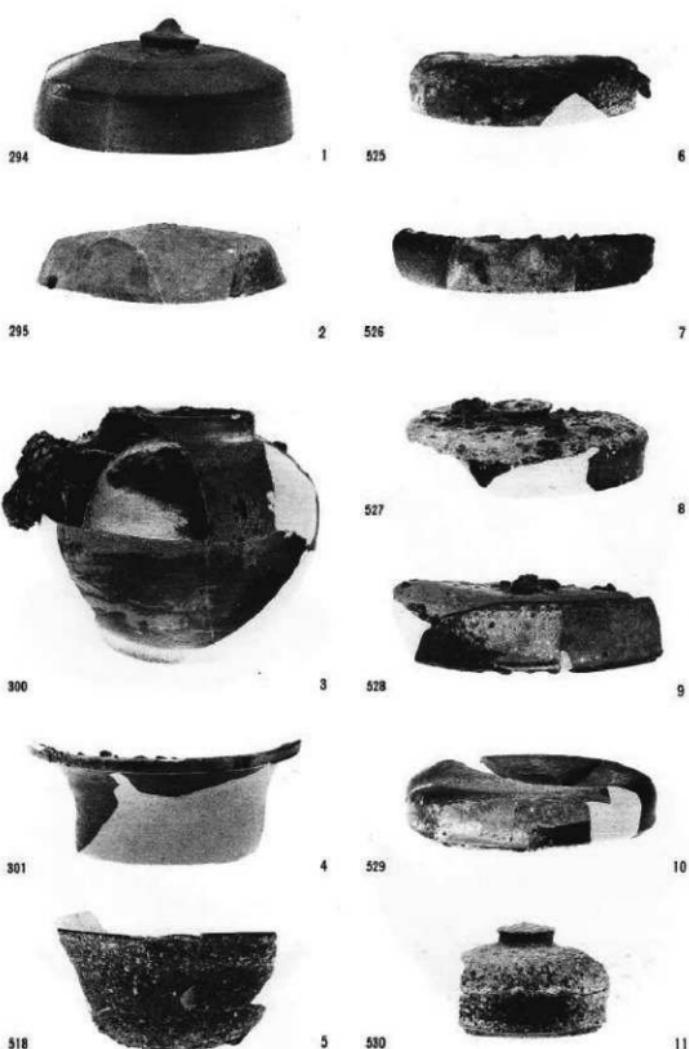
981

6 1198

12



出土遺物(14) 环



出土遺物(15) 壺など



532



5



533

1 721



6



541

723



7

3 724



8



543

4 976

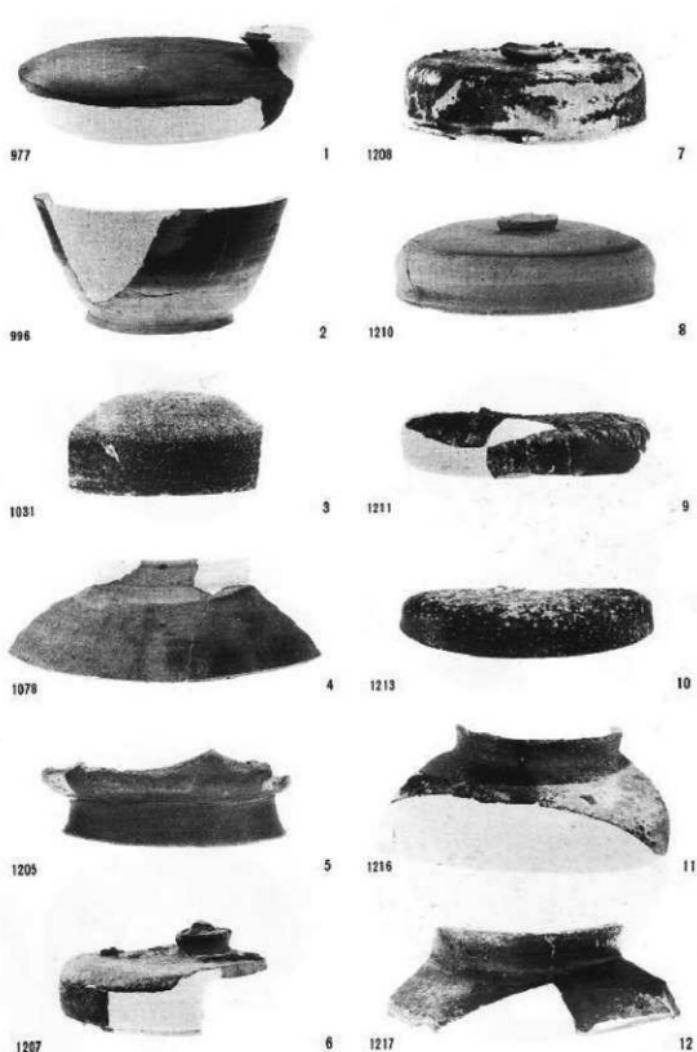


9

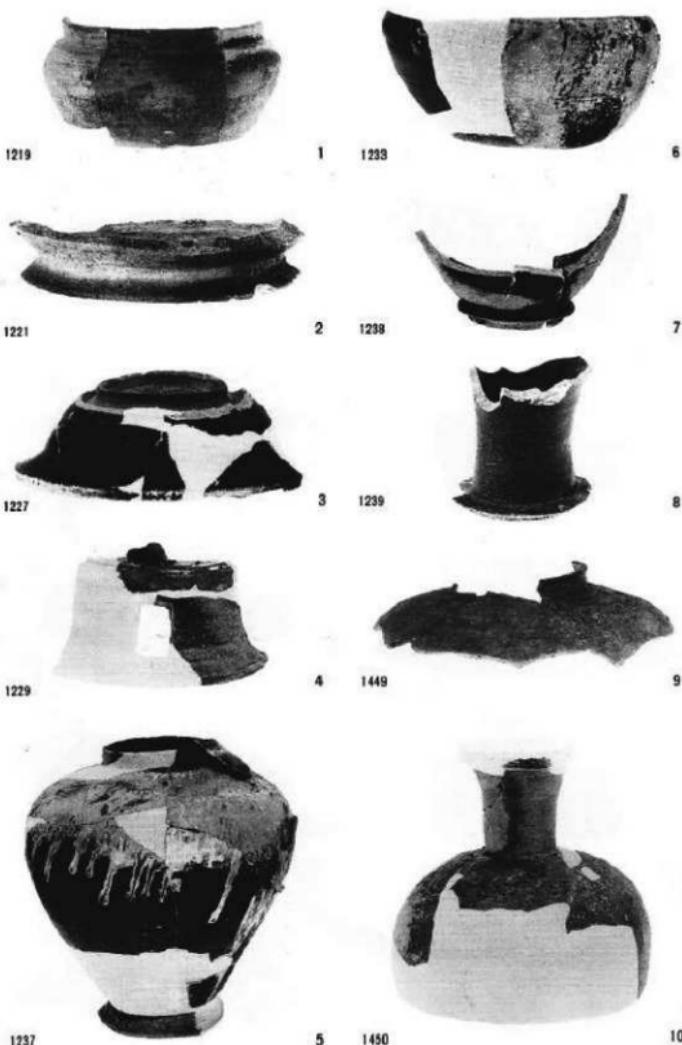


10

出土遺物(16) 壺など



出土遺物(17) 壺など



出土遺物(18) 壺など



108



1 1243

4



538



1241



1242

5



2 1410

6



539

3 1460



7

出土遺物(19) 橫瓶・提瓶



122



1 225

4



219



2 542

5



224

3 551



6

出土遺物(20) 壺



553



1 566



554



2 566



555

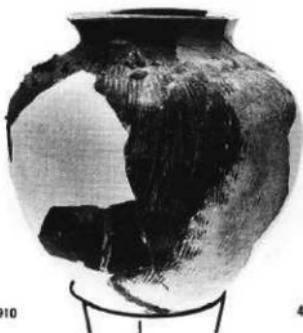


3 626

出土遺物(21) 壺



627



1 910

4

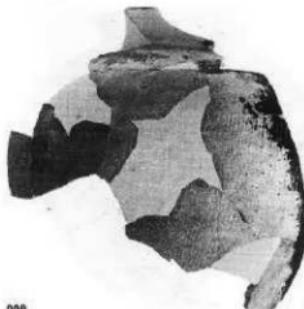


628



2 911

5



909

3



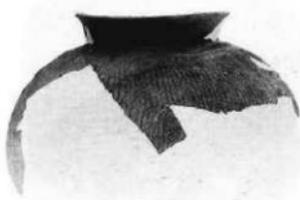
912

6

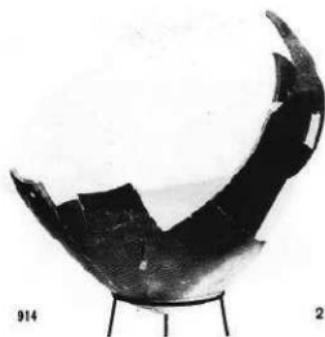
出土遺物(22) 瓷



913



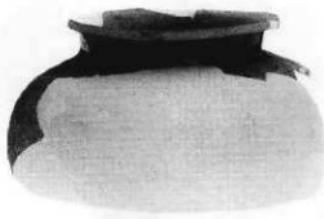
1 985



914



2 986

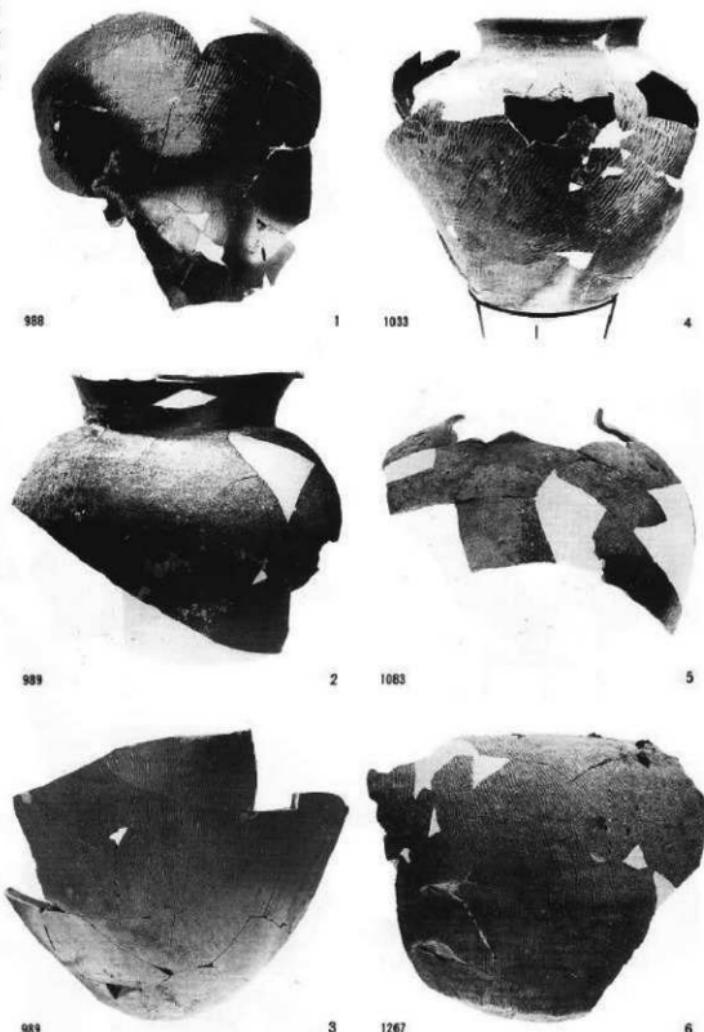


983



3 987

出土遺物(23) 壺



出土遺物(24) 瓷



1412



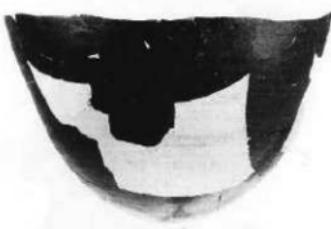
1462



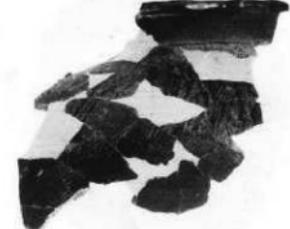
1414



1463

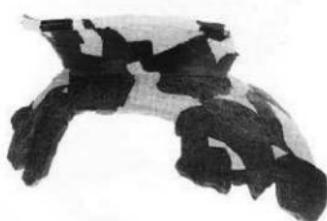


1414



1467

出土遗物(25) 瓷



1470



1 1008

4



1473

2 1240



5



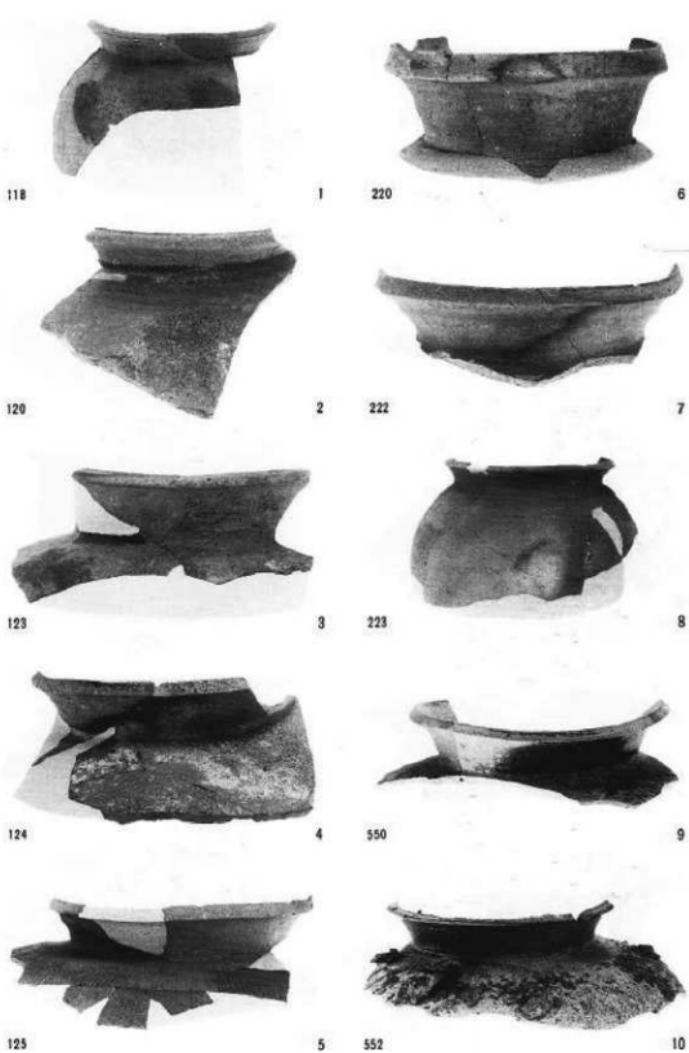
1494

3 1246



6

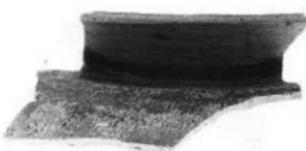
出土遺物(26) 壺・壺・橫瓶



出土遺物(27) 瓷



563



1 1012

6



565



2 1014

7



725



3 1048

8



982



4 1245

9



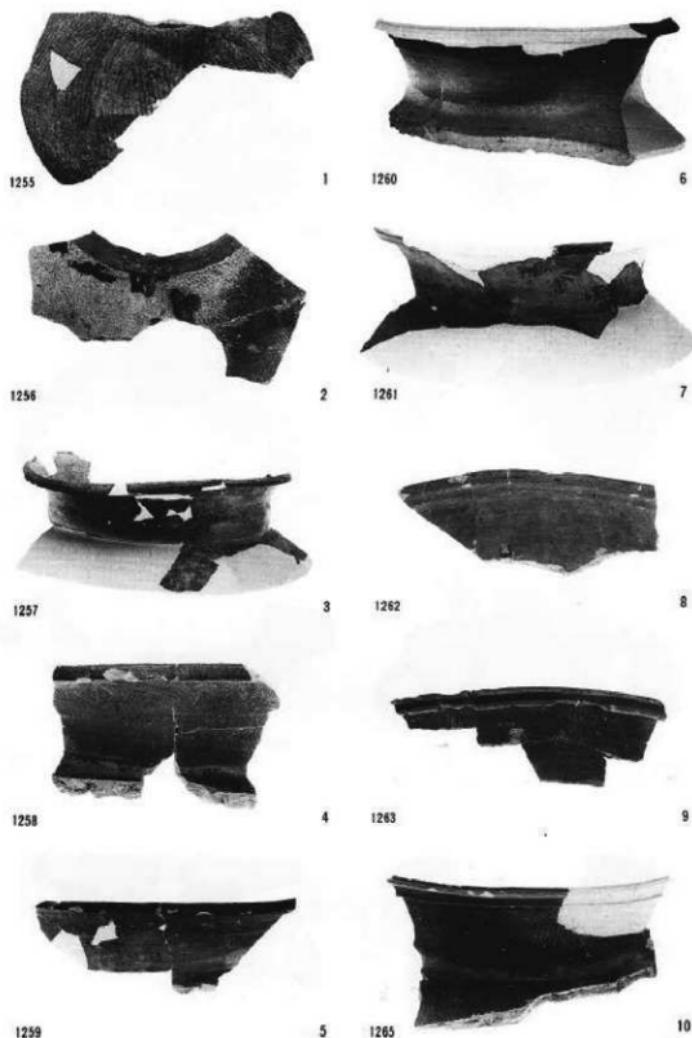
1010



5 1253

10

出土遺物(28) 壺



出土遺物(29) 瓦



1266



1468

5



1397



1469



6



1411



1471

7



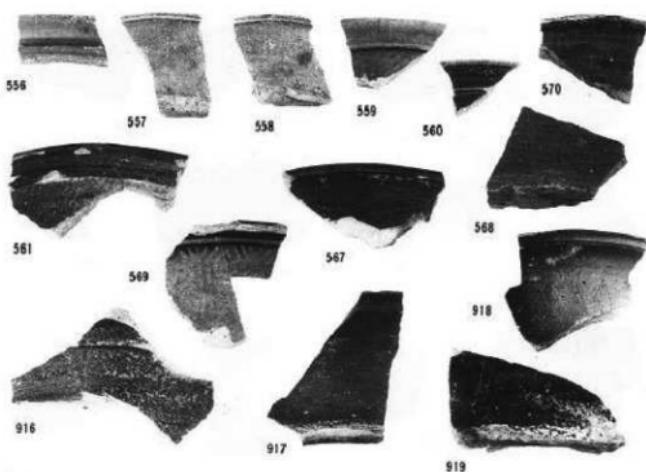
1464



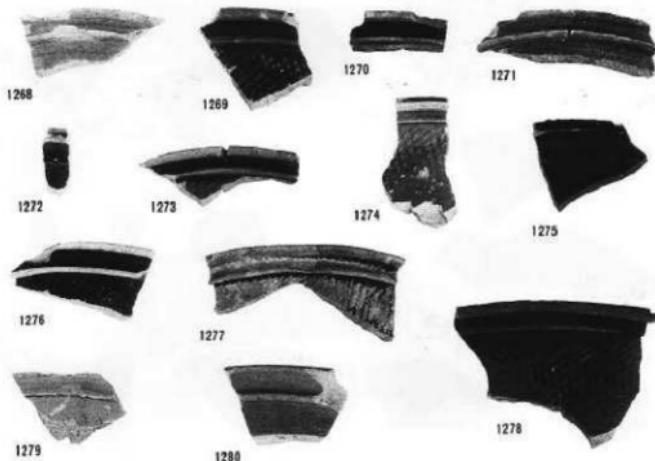
1472

8

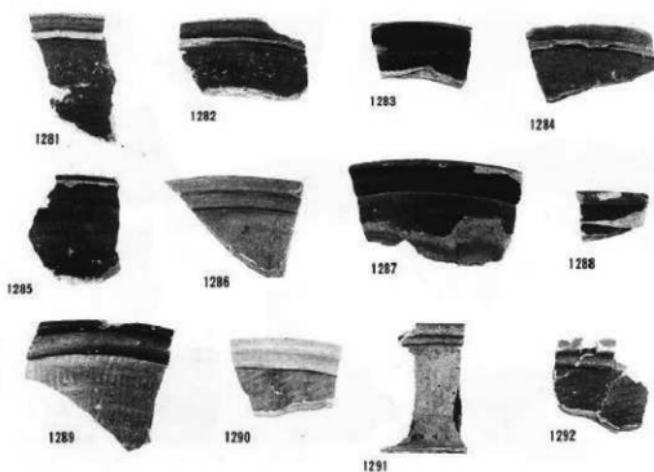
出土遺物(30) 瓦



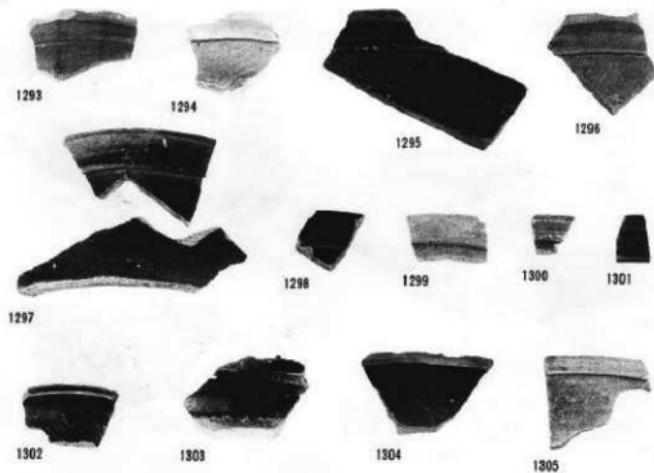
1 出土遺物(31) 壺



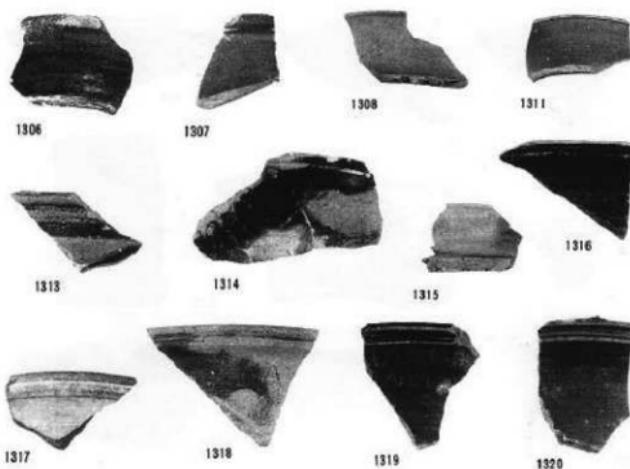
2 出土遺物(32) 壺



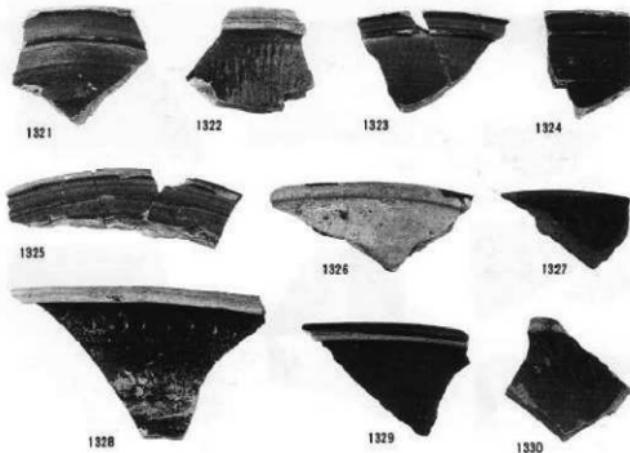
1 出土遺物(33) 瓢



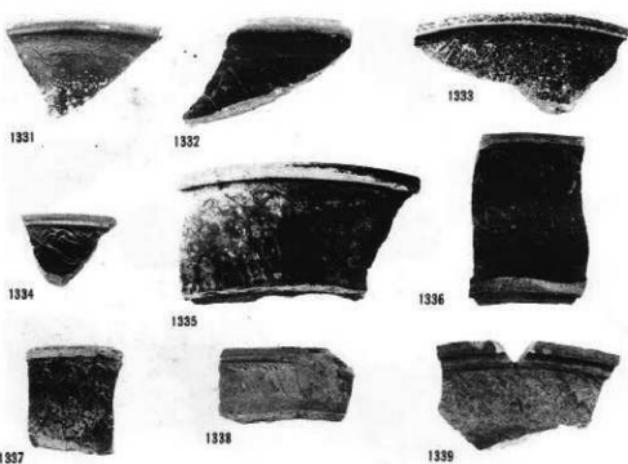
2 出土遺物(34) 瓢



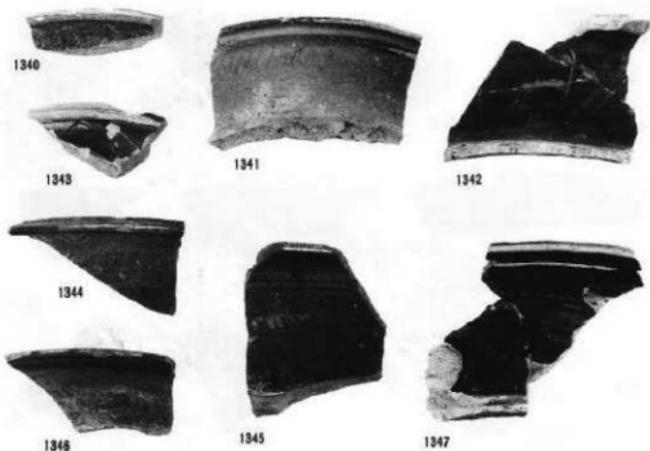
1 出土遺物(35) 瓷



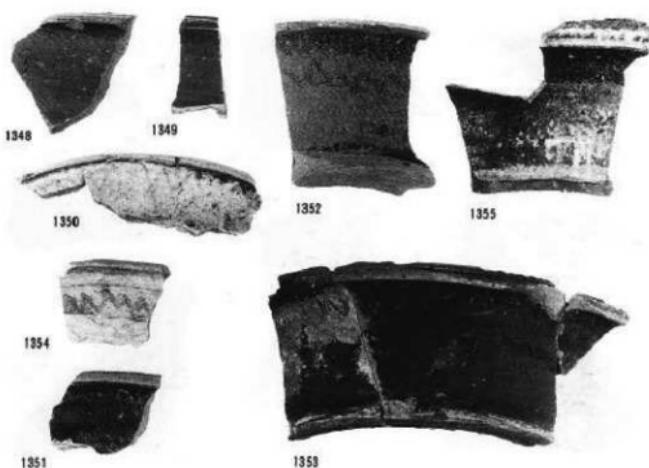
2 出土遺物(36) 瓷



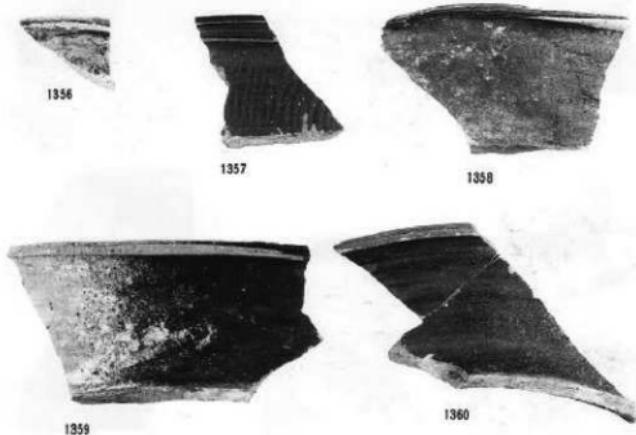
1 出土遺物(37) 壺



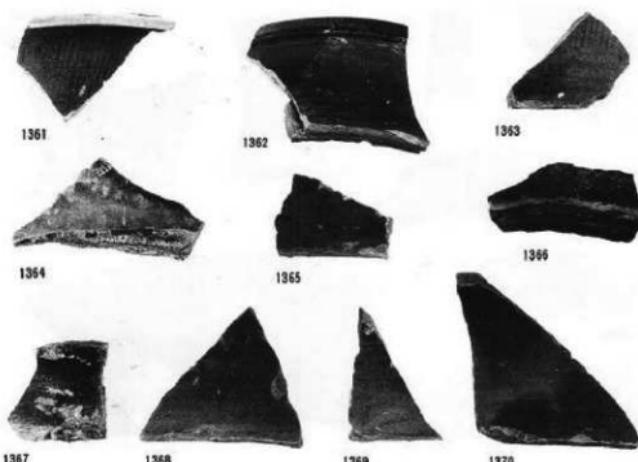
2 出土遺物(38) 壺



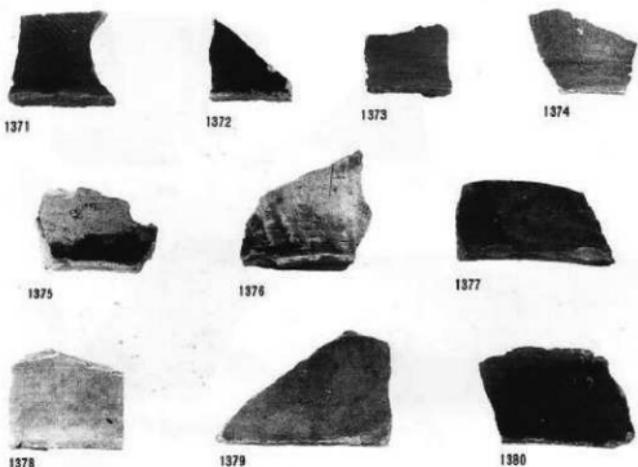
1 出土遺物(39) 瓷



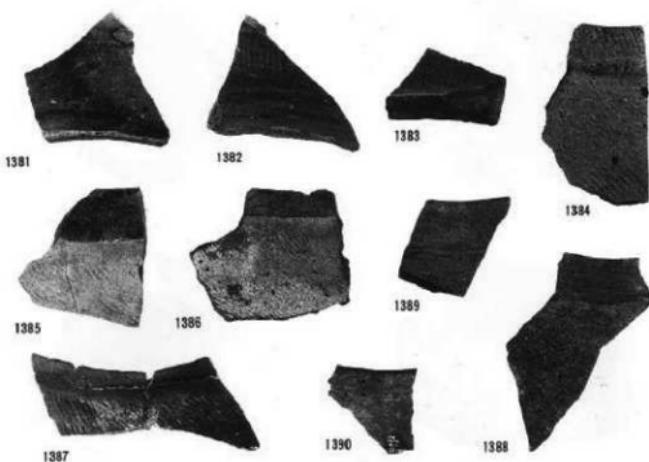
2 出土遺物(40) 瓷



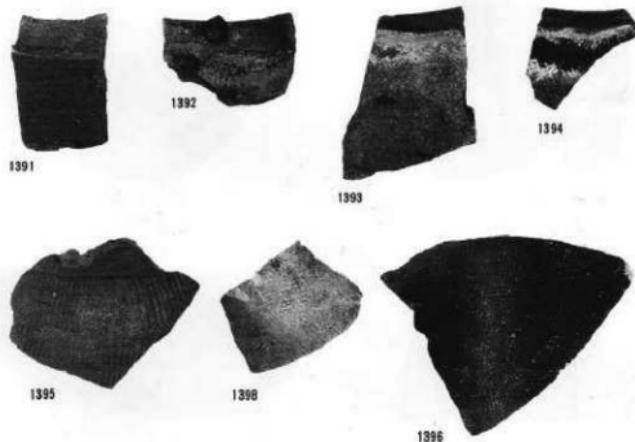
1 出土遺物(41) 瓷頸部



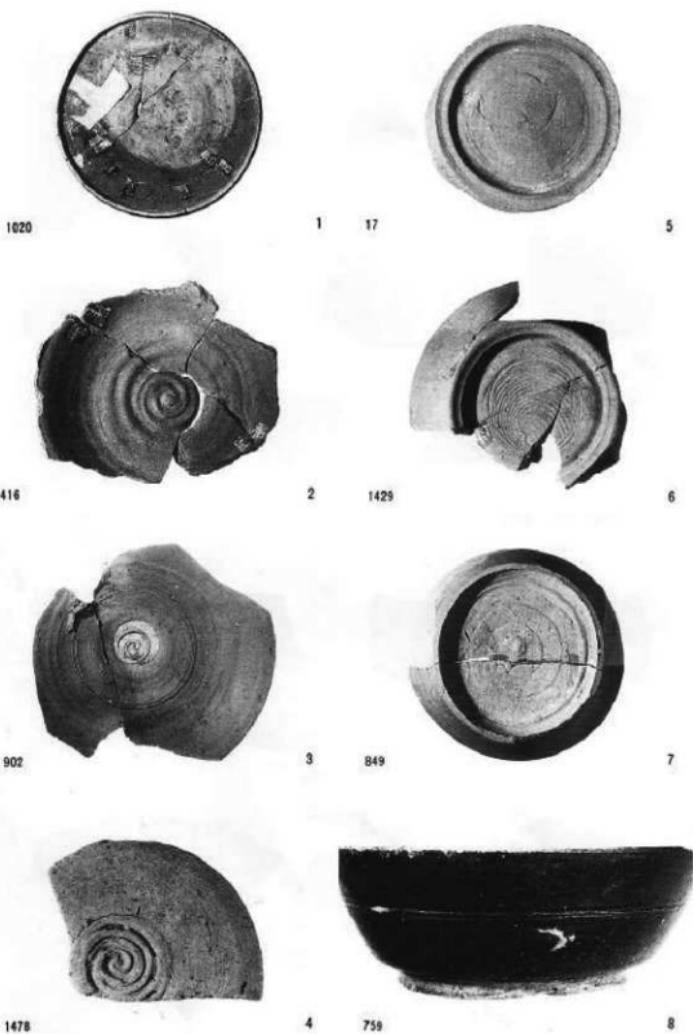
2 出土遺物(42) 瓷頸部



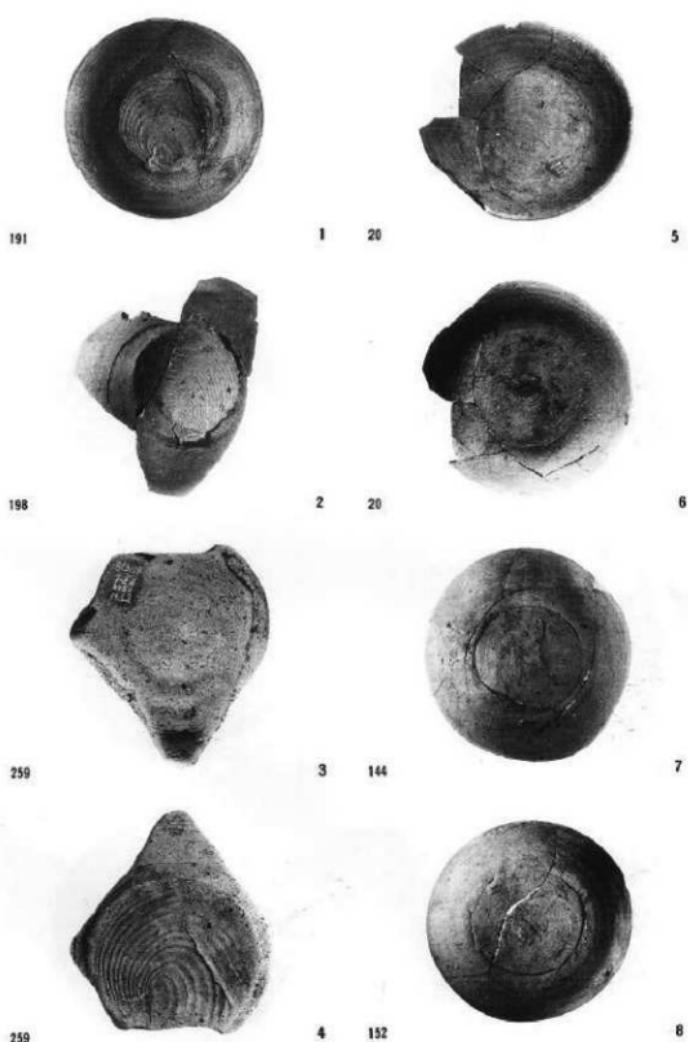
1 出土遺物(43) 壺頸部



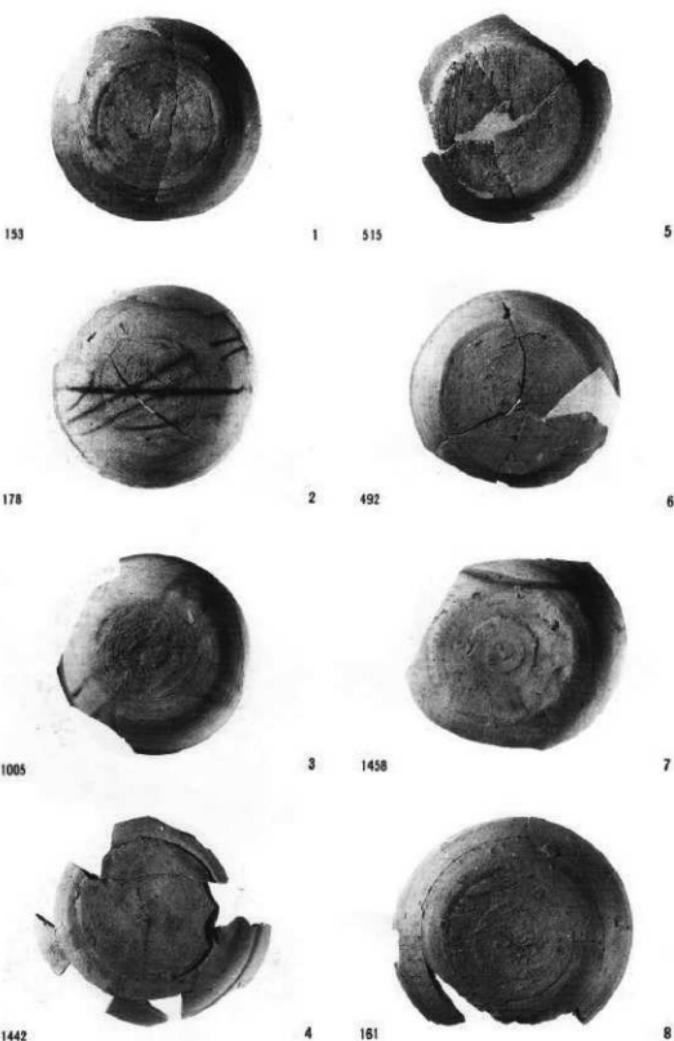
2 出土遺物(44) 壺頸部・体部・底部



出土遺物の技法(1) 壺蓋・高台付壺



出土遺物の技法(2) 壱



出土遺物の技法(3) 壱



978



1 1203



964



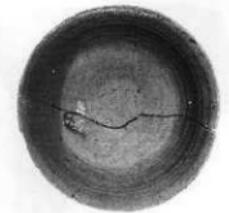
2 1203



964



3 298



802



4 534

出土遺物の技法(4) 壺・壺



1

1336



5



8

1342

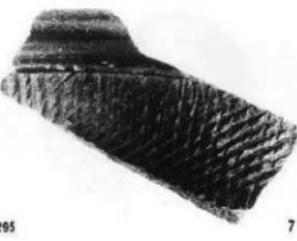


6



3

1353



7



1345

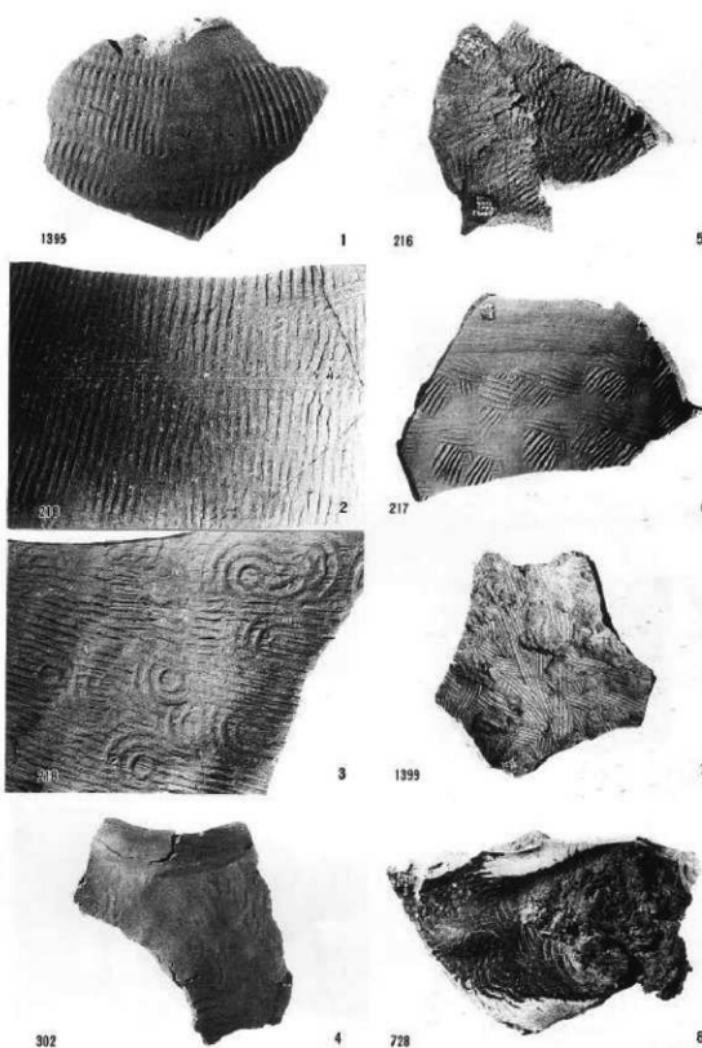
4

1289



8

出土遺物の技法(5) 勾



出土遺物の技法(6) 穴



1387



1 302

5

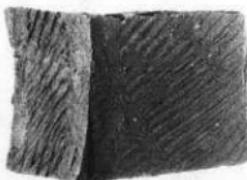


1384



2 302

6



1391



3 1353

7



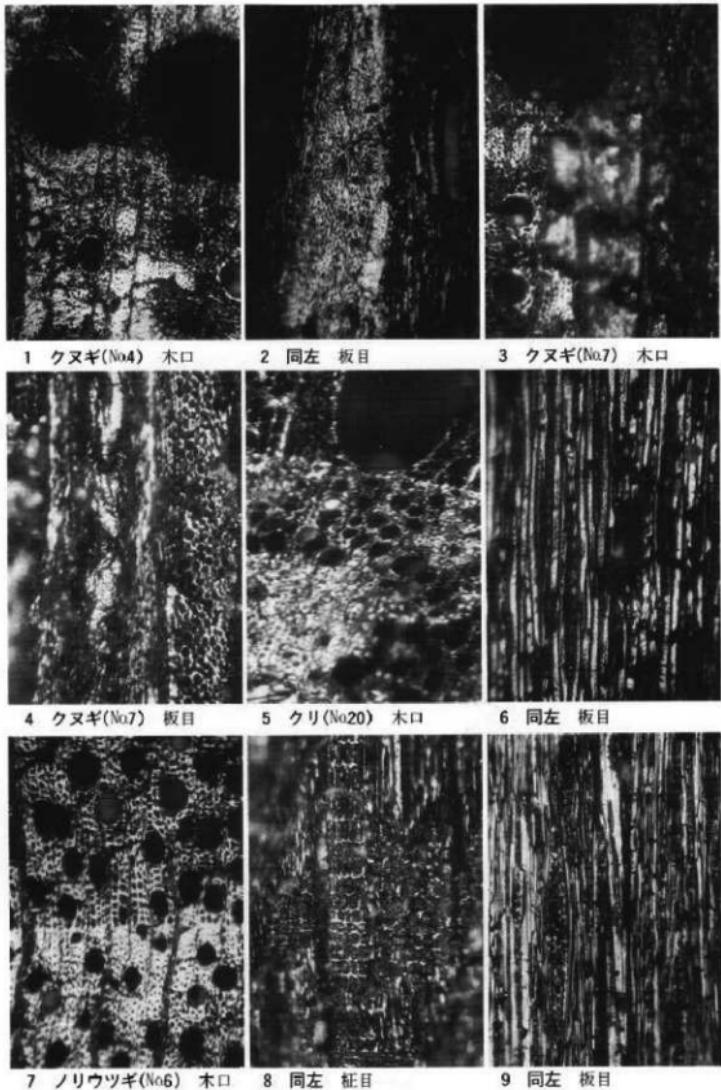
1241



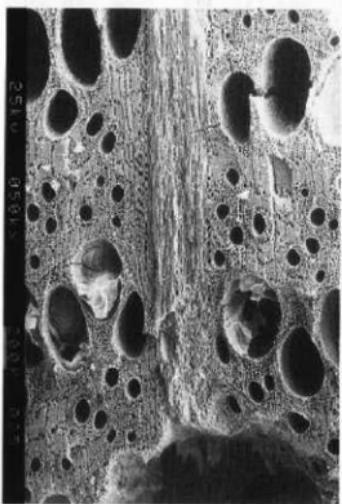
4 1450

8

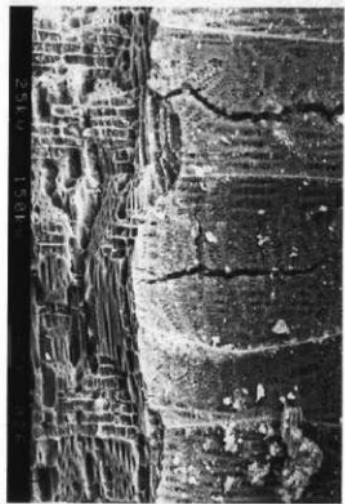
出土遺物の技法(7) 瓢・横瓶・壺



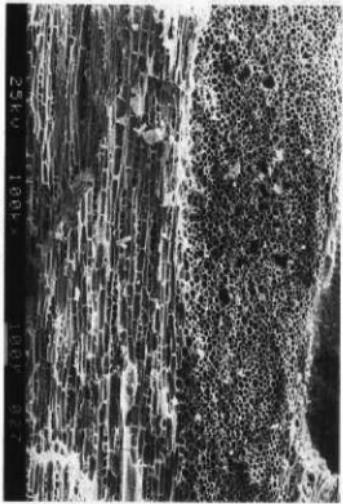
竹原窯跡出土の炭化材



1 木口

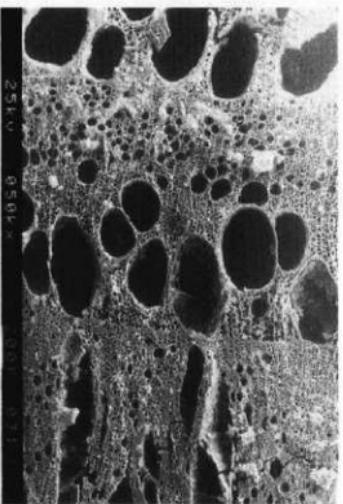


2 板目



3 板目

前種の拡大(1)



1 木口

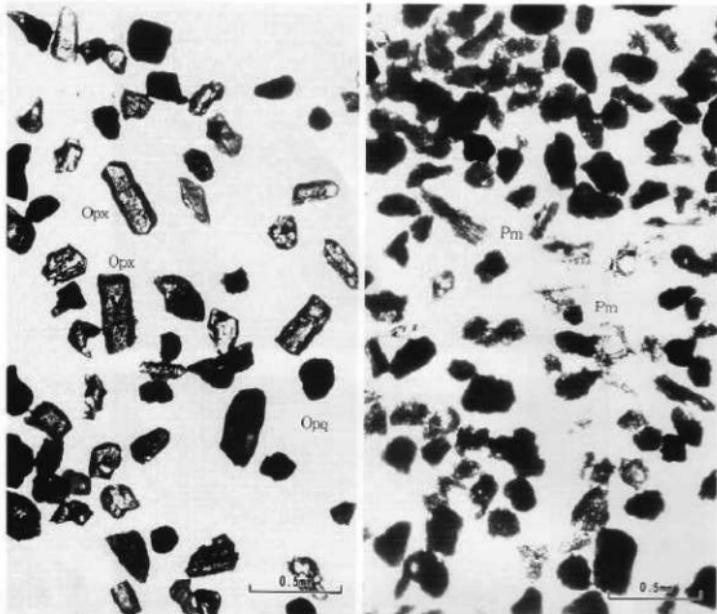


2 桟目

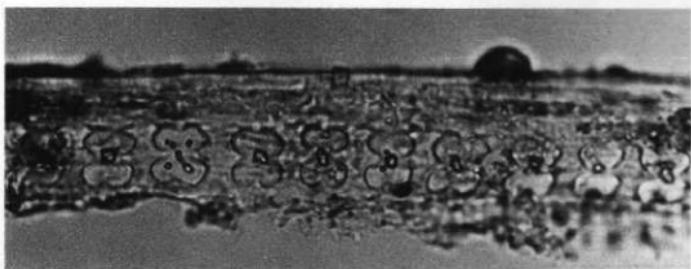


3 板目

樹種の拡大(2)



1 竹原窯跡検出火山灰の鉱物組成



2 S J05f 右壁の砂(No8) マコモ属

あとがき

竹原廃跡は、斜面の調査であったため、困難な面も多くありましたが、労苦を厭わなかつた方々のおかげで、無事調査を終えることができました。春、汗をかいた後の一陣の微風は、良い思い出です。また、整理作業に従事していただいた方々からは、たくさんの遺物の中、辛抱づよく報告書完了まで頑張っていただきました。ここに、多くの方々の協力をもって報告でりますことを、共に喜びたいと思います。

発掘作業従事者

泉田清治 小原佑平 小原信一 柿崎エミ 柿崎タイ 柿崎祐次
柿崎玲子 加藤チタ 鎌田留以子 神谷勇蔵 川崎イク子 川崎和子
川崎賢治郎 黒沢愛子 公地建司 小松タカ 斎藤俊夫 斎藤儀夫
斎藤鍊藏 佐々木愛子 佐々木幸子 佐々木範子 佐々木彦左エ門 佐々木ヒサ子
佐藤愛子 佐藤栄子 佐藤恭次郎 佐藤金四郎 佐藤沢子 佐藤文雄
佐藤勇太 佐藤吉次 真田正男 柴田篤男 東海林祐一 鈴木恭治
高橋愛子 高橋和子 高橋喜一郎 高橋清子 高橋幸子 高橋真剛
高橋清孝 高橋長一郎 高橋よう子 田島洋子 照井蝶子 中村博太郎
西野孝至 林イデ子 藤井吉之助 藤玉ミツ 藤屋久司 藤屋久太郎
藤屋照子 藤原順三 藤原信一 藤原己栄子 松井勝光 松井尚子
松井ノブ子 松井のり子 松井富士子 村岡撰子 福田一 山本信
吉岡圭吾

整理作業従事者

栗津ひろみ 泉谷昭子 伊藤昭彦 鎌田栄子 小松郁子 佐々木 薫
佐渡均 進藤始子 高橋光子 高柳良子 高柳亨子 竹村純子
新田理坪子 藤田悦子 藤本弘子 本間美知子 町田京子

(数省略、五十音順)